

第2章 京都大学熊野構内 Z Z 18区の発掘調査

富井 眞 内記 理

1 調査の概要

本調査区は、白川と高野川の複合扇状地に立地する。熊野神社の南南西100m、鴨川の東500mに位置し、白河街区跡に含まれる（図版1-435）。西は平安時代後期の白河北殿の推定地で、本調査区付近には、中世には粟田宮など、幕末には阿波国徳島藩などの屋敷があったとされる。ここに、京都大学熊野職員宿舍の改築工事が計画されたため、2014年5月に試掘をし、2015年9月28日～2016年2月12日に予定地全面の1876㎡を発掘した。

周辺での既往の調査では、京都大学構内遺跡としては、西隣の49地点で平安後期の溝とともに多量の瓦類が出土し、約300m北西の19地点では、平安後期の池や溝、中世の回廊と思われる遺構も検出されている。また、西辺での京都市埋蔵文化財研究所による発掘では、平安後期の基壇や池が確認されている〔上村1983, 吉崎1995, 伊藤・網2011〕。

発掘調査の結果、中世から近代の遺構を検出し、整理箱275箱の遺物が出土した。中世の遺構は、井戸・土器溜・集石・溝などで、西南部の土坑からは鬼瓦を含め平安後期から中世にかけての瓦が多数出土した。近世の遺構は、溝・井戸・野壺・路面・段差・集石などである。幕末頃の遺構には、大溝・井戸・段差・瓦溜・集石・土師器埋納遺構などがあるが、特筆すべきは、東北部で大溝の埋土中に構築されていた瓦積み遺構で、類例をみない遺構であることから2015年12月6日に現地説明会をおこなった。

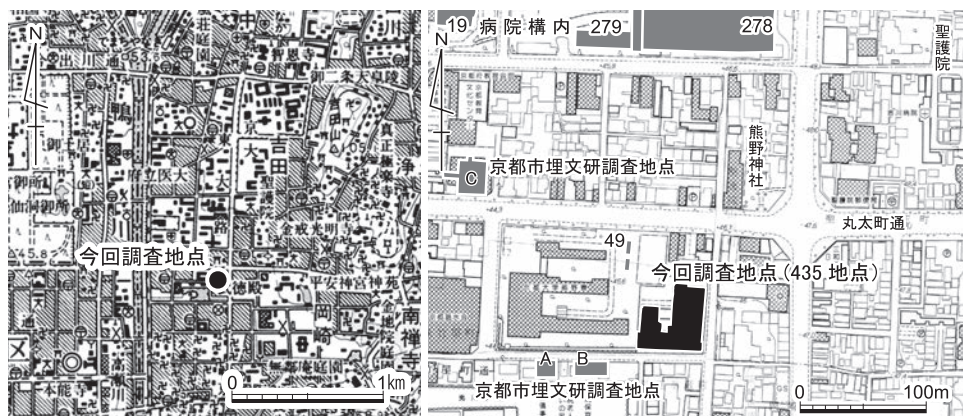


図2 調査地点の位置（左：1/5万，右：1/6000）

2 層 位

本調査区の現地形はおよそ平坦で、標高は46.5~46.8mをはかる。地層の断面観察はおもに調査区南部の東西トレンチと西壁でおこなった(図版5, 図3・4)。第1層の表土・攪乱は、厚さ1m以上に及ぶ。東部では、その直下に堆積岩粒の目立つ自然堆積層に達する部分がひろがるので、調査区全体で安定した遺物包含層を形成している面積は全体の半分に満たない。第1層には、近代の陶磁器・レンガなどとともに、整形加工した花崗岩の石造物が、とくに調査区東半に多量に含まれる。その中には、一抱え以上の大きさで直方体を呈するものが数多く認められたほか、平坦面に半径5cm前後で半球状の凹みを有する唐居敷のような個体もあった。東半の北縁では、近現代の建物の東端と思われる、一辺50cm程度の方板状に整形された花崗岩の礎石が据えられた建物基礎坑列があったので、そ

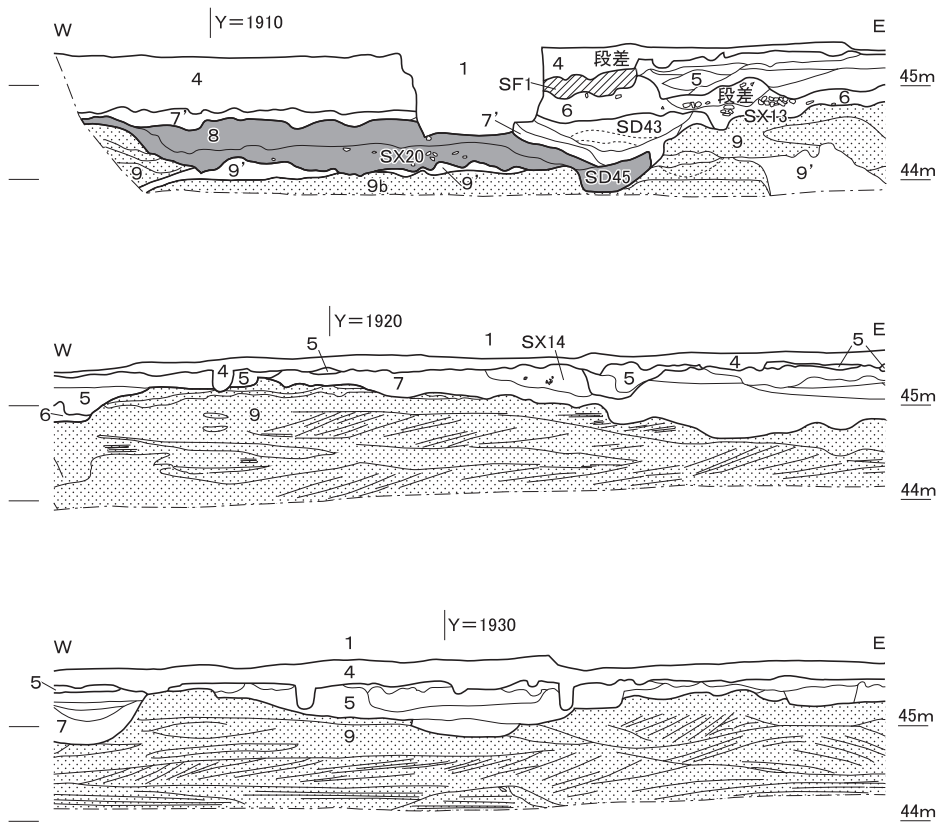


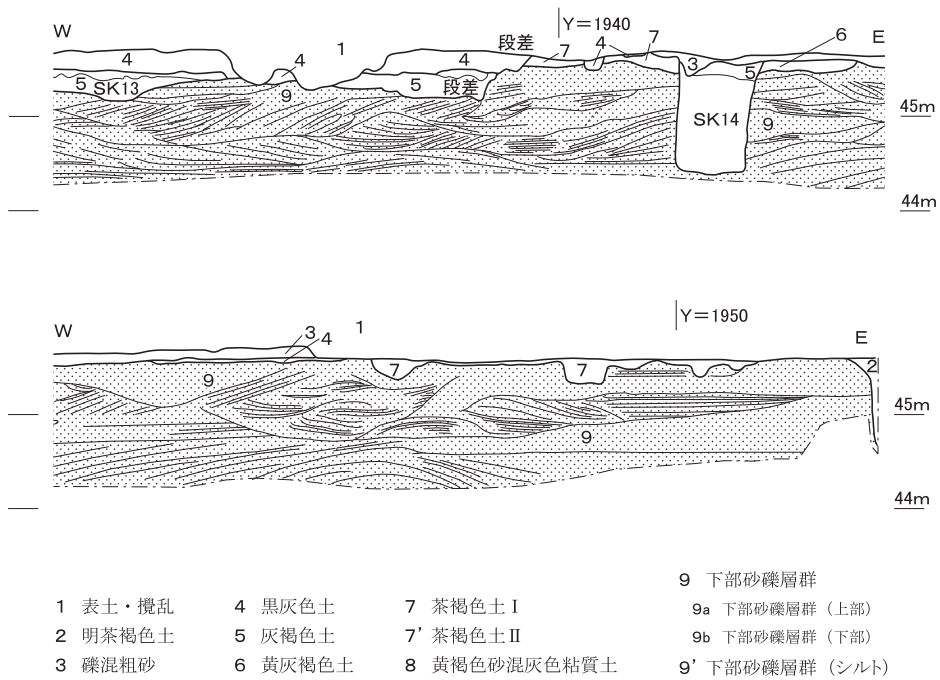
図3 東西トレンチの層位 縮尺1/80

層 位

の建造部材の可能性もあるが、詳細はわからない。また、東半の中央付近にある大きな方形の攪乱からは、明治期のものを含む大量の陶磁器類が出土している。

東壁際には、南北方向の溝の埋土として、漆喰や近世近代の陶磁器、さらには吸着炭素分が被熱で失われたと思われる褐色がかかった椀瓦などを多量に包含する明茶褐色土が堆積する（第2層）。東南隅の2014年の試掘では近代の遺物はなかったが、今回の発掘で近代陶磁器を包含することを確認したため、攪乱として掘り進めた。ただし第2層は、溝の埋土として堆積範囲が限定されるので、念のために包含遺物の回収に努めた。そして、整理作業で近代陶磁器をほとんど含まないことが判明し、南北溝は近代より前から機能していた可能性が高いと判断したので、第6章で幕末の遺構として説明する。

調査区の東南部には、粒径5mm程度の粗砂を主体として拳大までの堆積岩などを含む淘汰の悪い砂礫層が堆積する（第3層）。砂礫は詰まった状態ではなく空隙が目立ち、崩壊



東西トレンチの位置は図16を参照



図3 つづき

しやすい。遺物をほとんど含まないが、上下層の時期に照らせば、幕末頃の堆積である。

第4層は黒灰色土で、調査区の中央から西部にかけては第1層の直下に10cm前後の厚さで堆積しており、東南部では第3層の直下に薄く残存している。幕末までの陶磁器や瓦を含み鈍い光沢のガラス片なども散見するが、レンガは認められない。Y = 1915ラインあたりには、高低差が50cmを超える西落ちの段差があり、段差下では黒灰色土の厚さが60cmを超える部分もあった（図版5-2）。

この段差上部には、調査区の中央から東部では第1層の直下に第4層ないし自然堆積の砂礫層（第9層）がひろがるが、西部では第4層の直下に暗灰色～灰褐色を呈し江戸時代の遺物を含む砂質土が堆積している（第5層）。泥面子や灯明皿が出土するが端反りの磁器碗を含まないので19世紀前葉までの地層である。そして、段差上では第5層の下位には、第5層よりも分布域が段差近くまでさらに狭まって、黄灰褐色土が堆積する（第6層）。拳大の礫が多く含まれるが、遺跡基盤層である第9層中のもより大きいので、それらの石は意図的に持ち込まれたと判断できる。

Y = 1915ラインあたりの段差から東では、第4・5層の下位にひろがる第9層に掘り込まれた遺構の埋土のうち、第4・5層とは異なる褐色がかった砂質土を第7層とした。近世の遺物を含まない遺構埋土である。段差の際から段差下位平坦面にかけては、淡い褐色を呈する粘質土が安定的に展開し、当初は第7層と対応させ茶褐色土として一括して掘削していたが、段差上位の茶褐色土よりも色調が明るく粘質で、江戸時代の遺物を少量含む

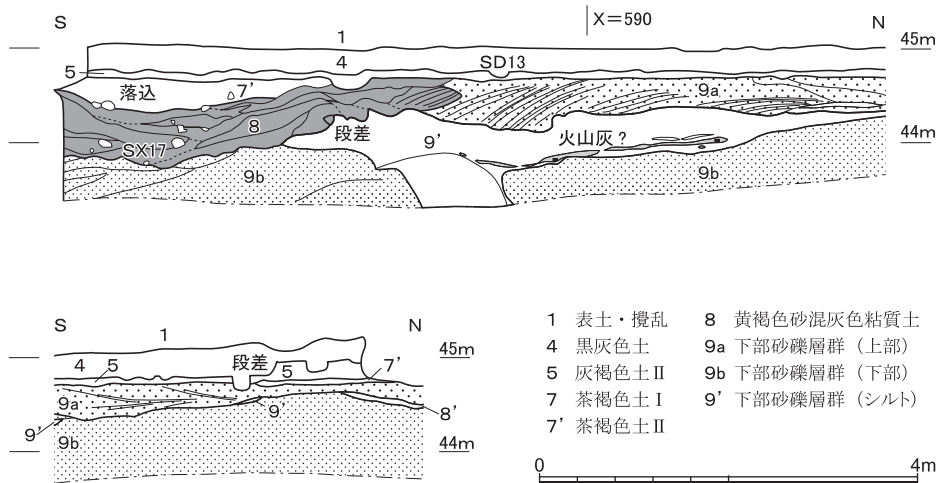


図4 調査区西壁の層位 縮尺1/80

層 位

ことから、第7'層（茶褐色土Ⅱ）として段差上位の第7層（茶褐色土Ⅰ）とは区別する。その段差下位では、第7'層の直下には、黄褐色を呈する粗砂を多く含むおもに灰色を呈する粘質土が堆積する（第8層）。近世の遺物を含まず、1段撫で手法F類の土師器を含むことから15～16世紀の堆積である。

本調査区には古代以前の遺構や包含層は残存していない。第8層までの人間活動の基盤層は自然堆積の下層砂礫層群（第9層）で、上面標高は、東北部で45.8m前後、東南部で45.6前後m、西北部で44.7m前後、西南部で45.0m前後をはかる。上部は、おもに粒径5mm程度の花崗岩と堆積岩の細粒が主体の砂層が分布するが（図版5-3）、西部では50mm大の礫も含まれる層が目立つ。西部には第9層中に層厚10cmを超えるシルトの堆積が比較的安定して認められるので（第9'層）、それを挟んで上位の砂礫層を第9a層とし、下位の砂礫層を第9b層としている。第9b層からは遺物が出土していないが、第9a層には、遺物はあまり含まれないものの、堆積単位の中位で5cm四方程度の中世の播鉢破片が出土した（図版5-4）。第9層は、礫種から高野川系流路の堆積物と判断している。

調査区の北部や中央～東部では、第9'層のような安定的なシルト～粘土の細粒分の堆積は面的にはあまりひろがらないので、第9層は細分できないが、広く厚く分布する上部の粗砂層からは、おもに縄文時代の遺物が多数出土した。それでも、上面から約50cm下位になると、東西トレンチや深い攪乱などの断面でも、遺物を回収できなかった。そして、拳大くらいまでの礫を含む礫層が主体となる。第9層は、自然堆積の砂礫層群として一括りにしているが、東西の壁面や東西トレンチの断面観察で、数多くの堆積単位によって構成されていることを確認している。したがって、遺物が多く出土する上部粗砂層も、面的にはほぼ一様に見えても同時堆積ではなく、およそ西へ移動する河道の連続的な堆積として捉えることができ、同様の堆積環境が継続していたことを示すものである。

西壁では、X=592あたりから南方にかけて、標高44.0m前後で第9'層が層厚40cm程度堆積しており、上半は黄色みがかって下半は青みがかり最下部は紫灰色を呈する部分もある。この第9'層最下部付近で、幾分赤みを帯びたような灰白色を呈して、周辺の紫がかったシルトよりは粒子が粗く感じられる堆積物を確認した（図版5-5・6）。粒子は光をよく反射するので、火山灰と思われる。このあたりの第9'層とその下位の第9b層との層理面は、緩く北上がりに傾斜しており、直上の火山灰様の灰白色堆積物も、その層理と平行するように緩く北上がりで堆積している。

3 先史時代・古代の遺跡

本調査区は平安時代後期の白河街区に含まれ、白河北殿比定地に隣接し、南西100mではその時期の基壇や溝が検出されていることから〔上村1983, 伊藤・網2011〕、白河北殿に関わる遺構の存在も期待されたが、中世より古い時代の遺構は確認し得なかった。しかし、古代以前の遺物の出土量は多い。以下、先史時代と古代に分けてそれらを報告する。

(1) 先史時代の遺物 (図版15, 図5～12)

先史時代の遺物は、後世の遺構埋土や包含層に含まれるものもあるが、ほとんどは、第9層の砂層やシルト層から出土していて、いくぶん磨滅しているのが、高野川系流路の影響で移動して二次的に堆積したと思われる。内訳は、縄文時代前期から弥生時代に至る土器片300点あまりと4点の剥片石器類だが、大半は後期までの縄文土器である。層位的な出土ではないので、口縁部と底部と有文土器、そしておもだった無文土器胴部を抽出し、有文土器については型式学的特徴に照らして記述する。なお、胎土に角閃石が多く含まれるものは、断面を灰色で表示した。

I 1～I 3は前期の土器。I 1はC字爪形文を施す北白川下層Ⅱ式で、I 2・I 3は特殊突帯文の北白川下層Ⅲ式。I 4～I 19は中期。I 4～I 14は、船元Ⅳ式・里木Ⅱ式で、深淺縄文地文のI 4・I 8・I 10・I 11は船元Ⅳ式。燃糸地文のI 12・I 13は里木Ⅱ式。半裁竹管で文様を描くのはI 4～I 9・I 12・I 13で、I 14の弧線は篋書きの沈線による。I 15は神明式に類似する。I 16～I 19は中期末の北白川C式の深鉢。

I 20～I 22・I 24～I 98は後期。I 20～I 22・I 24～I 53は有文土器の口縁部。I 24～I 32は中津式で、I 33は福田KⅡ式新段階。I 20は縁帯文成立期で、I 34～I 36も同時期だろう。外面が磨かれているI 37は、突起状の口縁部の一部と思われ、これも縁帯文成立期と判断する。I 21・I 38～I 42は北白川上層式1期の口縁で、I 21・I 38・I 39・I 42は縁帯文深鉢だがI 40・I 41は屈曲しない鉢形を呈すると思われる。I 22・I 43・I 44は北白川上層式2期の口縁。I 22・I 44はバケツ形を呈する関東系の鉢で、I 44はそれに特徴的な8字状の浮文と鎖状の隆帯を認め得る。I 45～I 48は北白川上層式3期の口縁で、I 45・I 47は縁帯文深鉢だが、I 46は九州系の鉢で、I 48は口縁部が波状を呈する内湾口縁深鉢だろう。I 49～I 52は縁帯部に縄文のみを施すもので、I 49は1期、I 50は2期、I 51・I 52は2期～3期の深鉢と思われる。I 53は3期の皿形土器で、口縁内面の磨消縄文帯には赤色顔料が付着している。

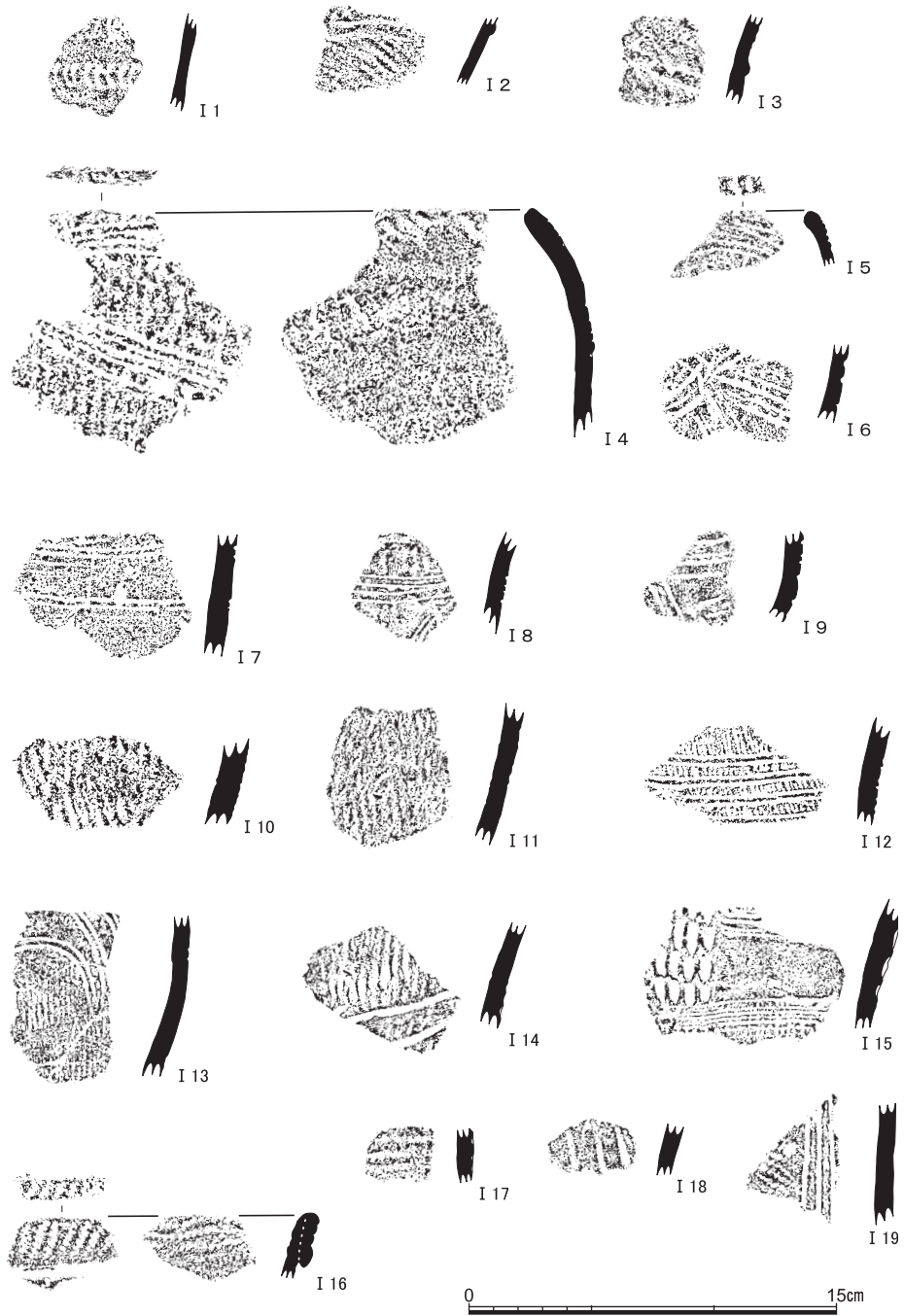


図5 縄文時代の遺物(1) (I 1 ~ I 3 前期, I 4 ~ I 19 中期) 縮尺1/3

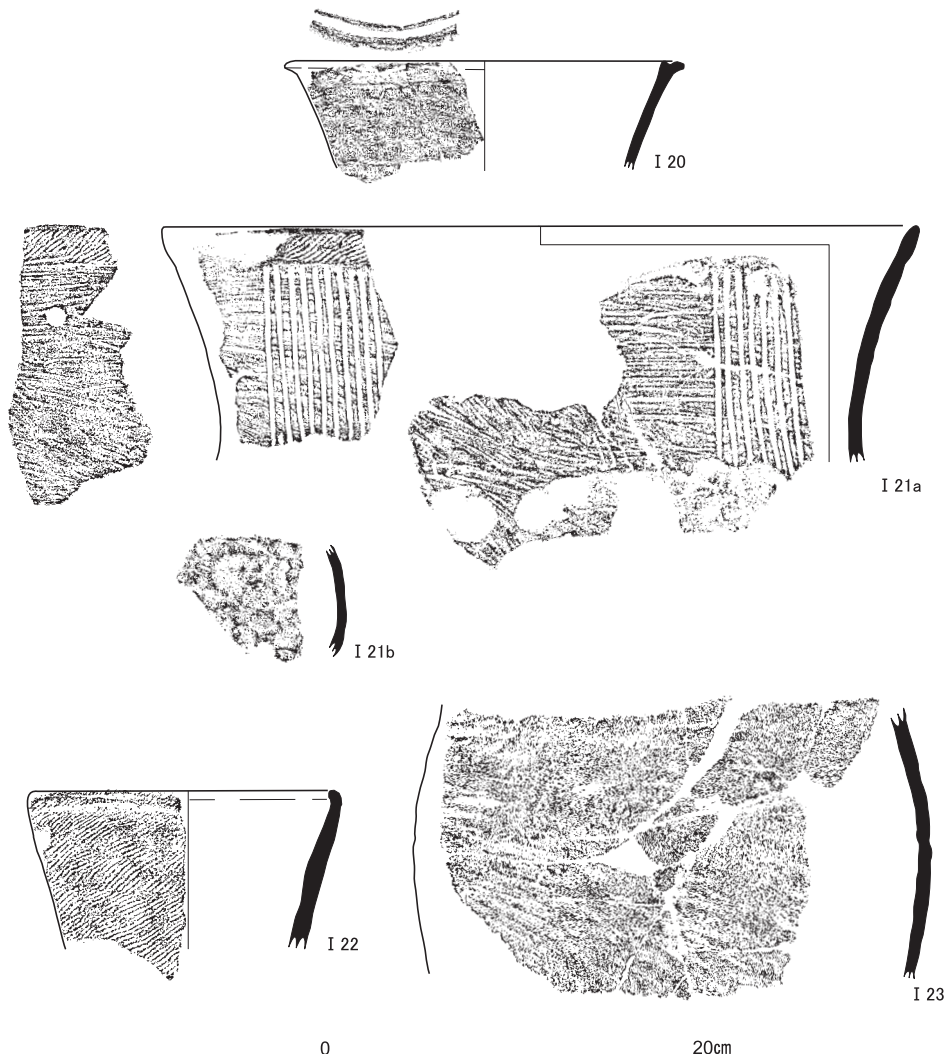


図6 縄文時代の遺物(2) (I 20～I 22後期, I 23中後期)

I 54～I 95は有文土器の胴部。I 54～I 56は中津式。I 57は縁帯文成立期の把手だろうか。I 58～I 91は、いずれも北白川上層式の縁帯文土器の頸部から胴部下半にかけての破片。I 58～I 67は頸部から肩部で、I 58～I 65は1期の深鉢。I 66は2期で、頸胴部の境に沈線が巡り胴部は羽状縄文をもつ。I 67は、頸胴部の境の沈線内に刺突をもつので、3期でも新しい特徴を備えている。I 68～I 91は胴部下半の破片。I 68～I 85は沈線や櫛歯状工具による施文で、I 86～I 91は縄文のみである。



図7 縄文時代の遺物(3) (I 24~ I 48後期) 縮尺1/3

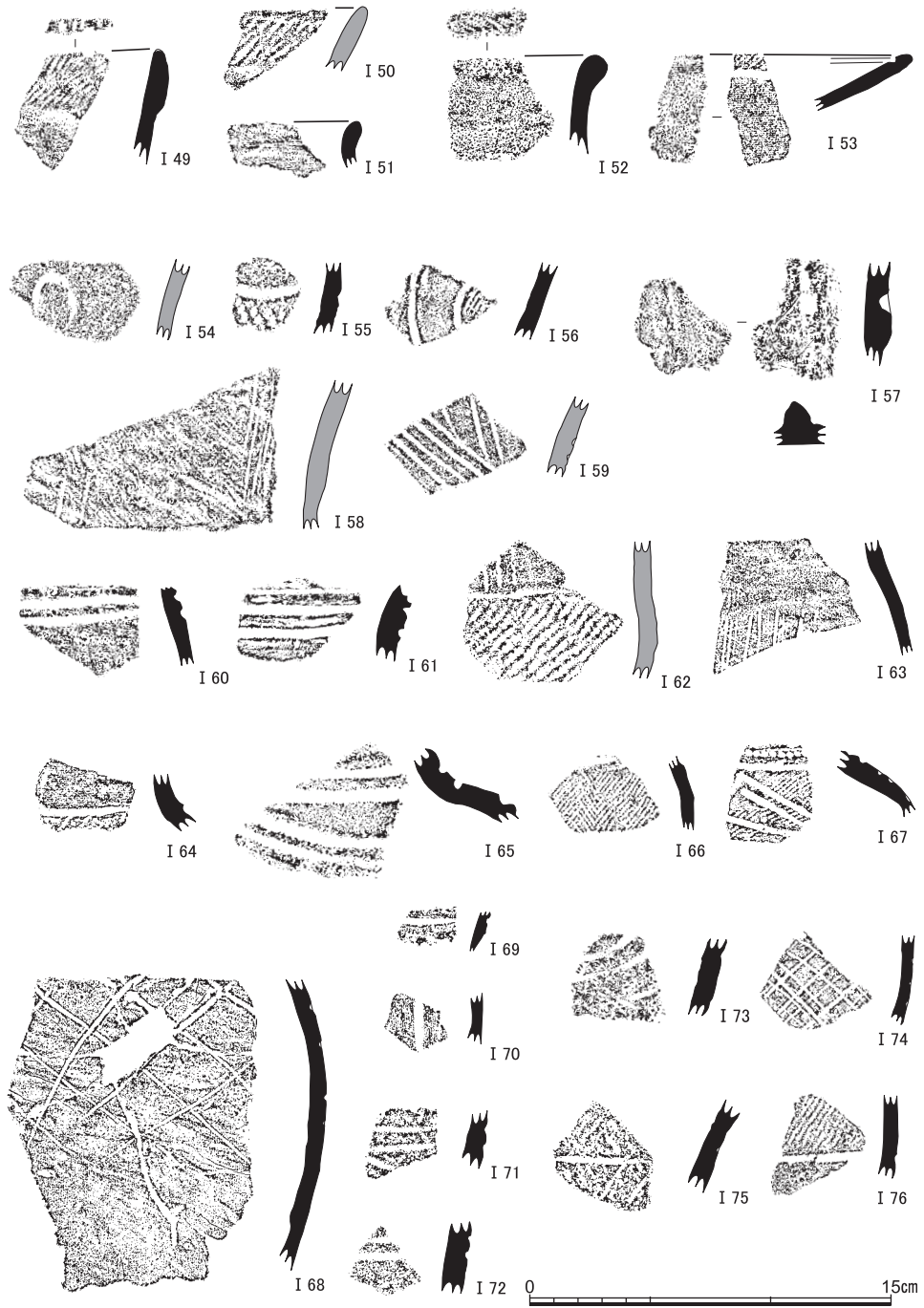


図8 縄文時代の遺物(4) (I 49～I 76後期) 縮尺1/3

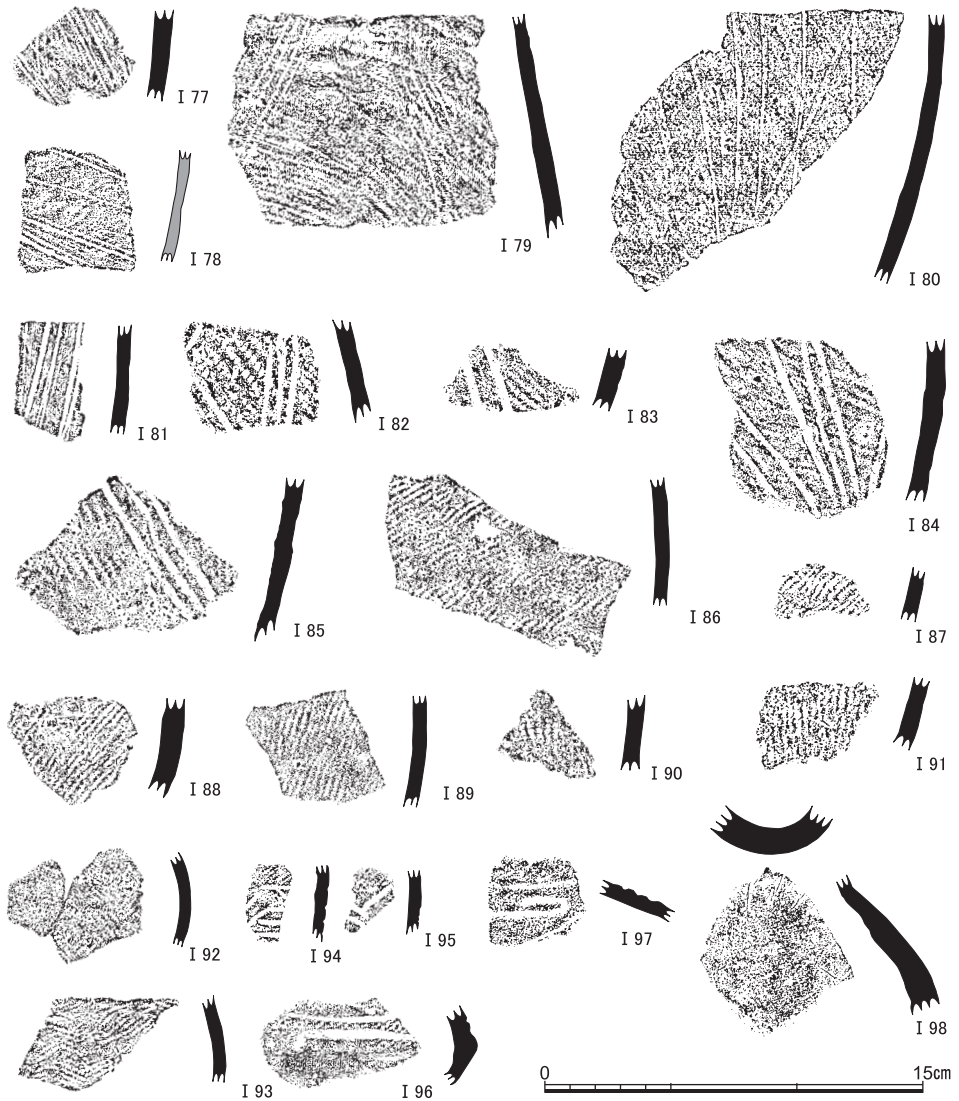


図9 縄文時代の遺物(5) (I 77～I 98後期) 縮尺1/3

I 92・I 93は、胴部に羽状縄文をもつ北白川上層式2期の鉢形土器。I 94・I 95も同時期で、関東系のバケツ形有文土器の胴部上半。I 96・I 97は注口土器の胴部と思われ、I 96の外面には赤色顔料が付着している。I 98は、北白川上層式におさまるとされる注口土器の注口部。

I 23・I 99～I 152は無文土器。I 99～I 132は口縁部で、I 23・I 133～I 152は胴部。

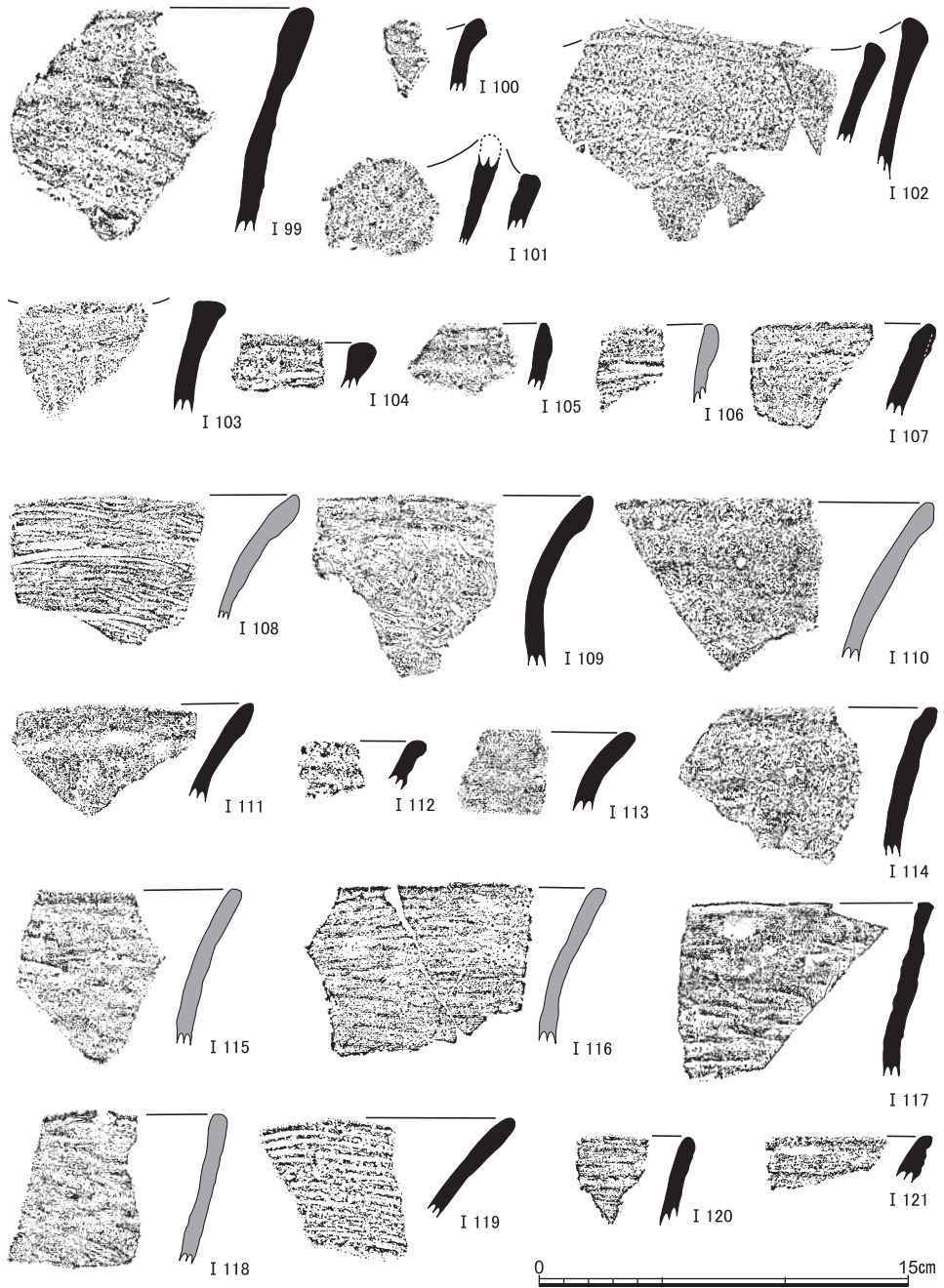


図10 縄文時代の遺物(6) (I 99・I 100中後期, I 101～I 121後期) 縮尺1/3

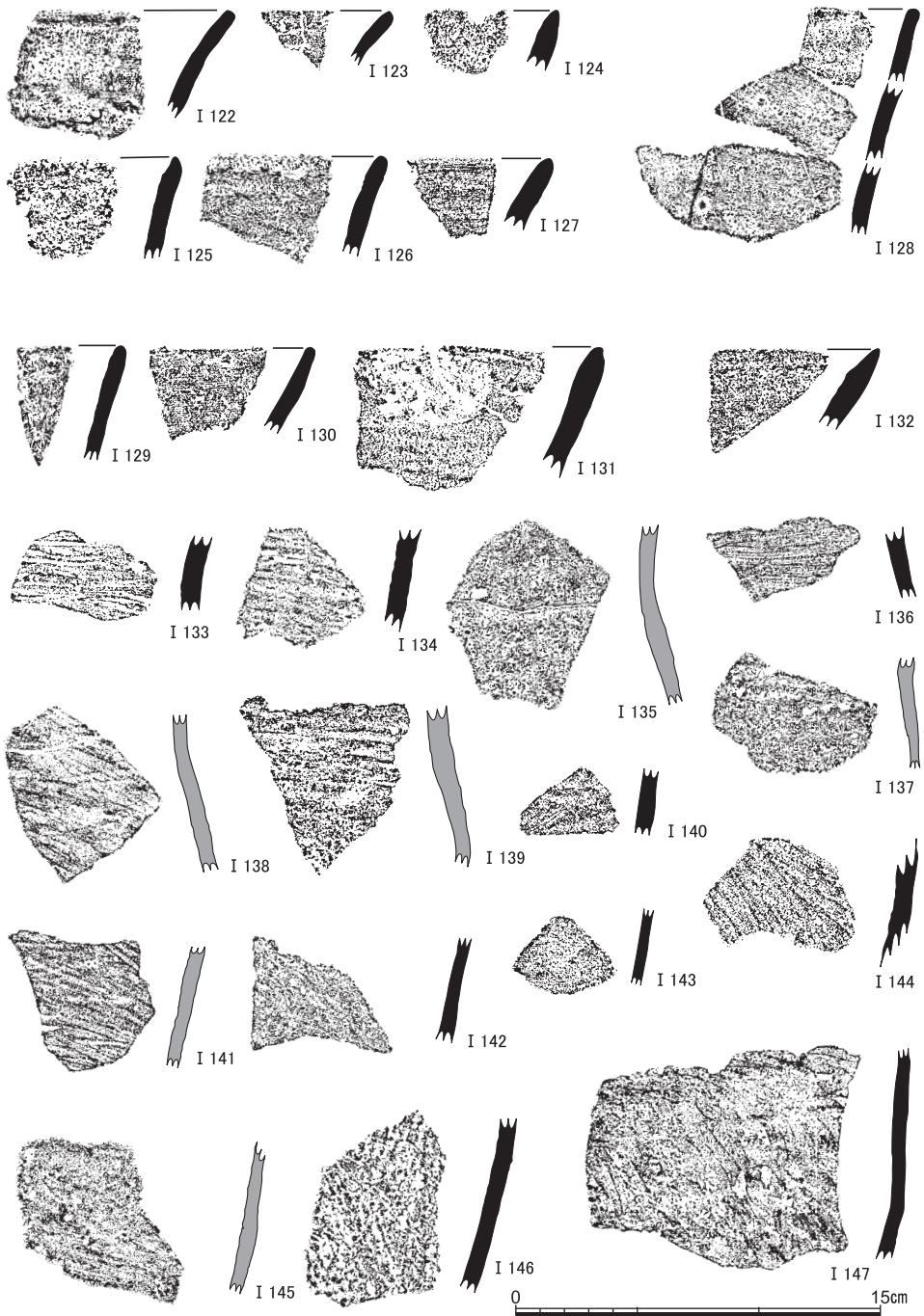


図11 縄文時代の遺物(7) (I 122~ I 132後期, I 133~ I 147中後期) 縮尺1/3

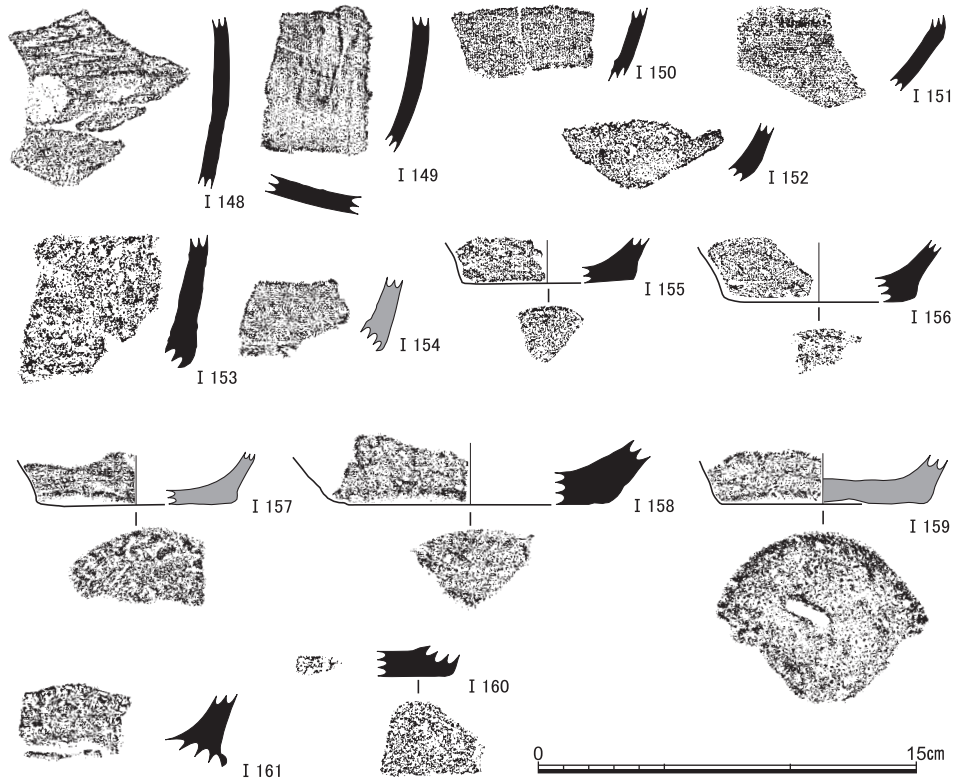


図12 縄文時代の遺物(8) (I 148～I 161中後期) 縮尺1/3

口縁部は、傾きと断面の特徴から、I 99・I 100は中期末に遡る可能性があるが、そのほかはいずれも後期のものと判断する。I 101・I 102は中津式で、I 103・I 104は縁帯文成立期と思われる。I 105～I 111は北白川上層式で、I 105～I 108は1期ないし2期でI 109～I 111は3期だろう。I 112～I 114も北白川上層式におさまるとされる。I 115～I 118は口唇を面取りしており元住吉山式と判断する。I 119～I 132も、その時期の深鉢と思われるが、I 119・I 124・I 131・I 132は鉢になるかも知れない。

I 23・I 133～I 139は頸部から胴部にかけての変曲部で、I 140～I 149は胴部、そしてI 149～I 152は底部付近である。I 133は、晩期の篠原式の口縁部付近の可能性もあるが、本調査区からは晩期の胴部に特徴的な外面を削り調整した破片が見られないことから、後期と判断する。I 153～I 161の底部は、有文土器の底部の可能性はあるが、これら9点には縄文も条痕も沈線も認められない。また、凹底や尖底と判断できるものはない。いずれも中期末から後期中葉におさまるだろう。

このほかに無文の胴部破片には、約150点の縄文土器と、数点の弥生土器と思われる胎土がやや精良な破片が数点ある。大半を占める縄文土器については、外面調整は削りではなく条痕や撫でなので、多くは後期のものと思われる。そして、角閃石を多く含む胎土のものが3割ほどある。また、4点の剥片石器の内訳は、石匙未製品の可能性のある二次加工を有するチャート剥片、凸レンズ状の形状で長さ9cmほどのサヌカイト石核、そしてサヌカイト剥片2点である。

(2) 古代の遺物 (図版16, 図13~15)

今回の調査で、帰属時期が古代以前にさかのぼると明言できる遺構は検出されなかった。ただし、調査区東北隅にあった近代の巨大な攪乱SK1 (図16参照)からは10世紀~11世紀にさかのぼる遺物がまとまった量出土しており、本調査区内に古代の遺構が存在していた可能性を指摘できる。また、調査区全体から、古代の遺物が多数出土している。後述するように、中世の落込などの遺構からは瓦をはじめとする平安時代後期にさかのぼる遺物も出土した。そのため、今回中世のものとした遺構のいくつかは帰属時期が平安時代後期にまでさかのぼる可能性がある。本項では、調査区内で出土した古代の遺物を紹介する。なお、瓦類は中世のものとあわせて第5章で紹介する。

I162~I196は土師器である。I162・I169・I188・I189・I193・I195を除いては、すべて攪乱SK1から出土した。I162は杯Aの口縁部と考えられ、赤褐色を呈する。口縁が内側に屈曲し、内面に暗文が施される。内面には、暗文上を引っ掻いたような傷が残る。I163~I170は口縁が「て」字状になるB類の土師器皿である。I163~I168はB₃類、I169・I170はB₄類に分類され、11世紀頃のものである。I171~I187は2段撫で手法のC類の土師器皿で、I171・I172はC₁類、I173~I180・I187はC₂類、I181~I185はC₃類に分類される。いずれも12世紀頃のものである。I186は外面が2段撫でで調整されるためC類に分類されるが、口縁上面に面取りがなされる点で特殊である。I188~I192は甕の口縁部である。I190~I192の口縁は内湾する。I189とI191の外面には煤が付着する。I193は器種不明の高台部分である。I194は底部と思われるが、器種はわからない。I162と同様、赤褐色を呈し、外面が磨かれる。I195・I196は高杯の脚部である。いずれも外面は面取りされる。

I197~I228・I244~I248は須恵器。I197~I202は杯蓋。I197は内面にかえりを持ち、外面天井部の宝珠形つまみは欠失する。陶邑編年のTK217~TK48型式に比定され、7世紀頃のものである〔平安学園考古学クラブ編1966・大阪府立近つ飛鳥博物館編2006〕。

京都大学熊野構内Z Z18区の発掘調査

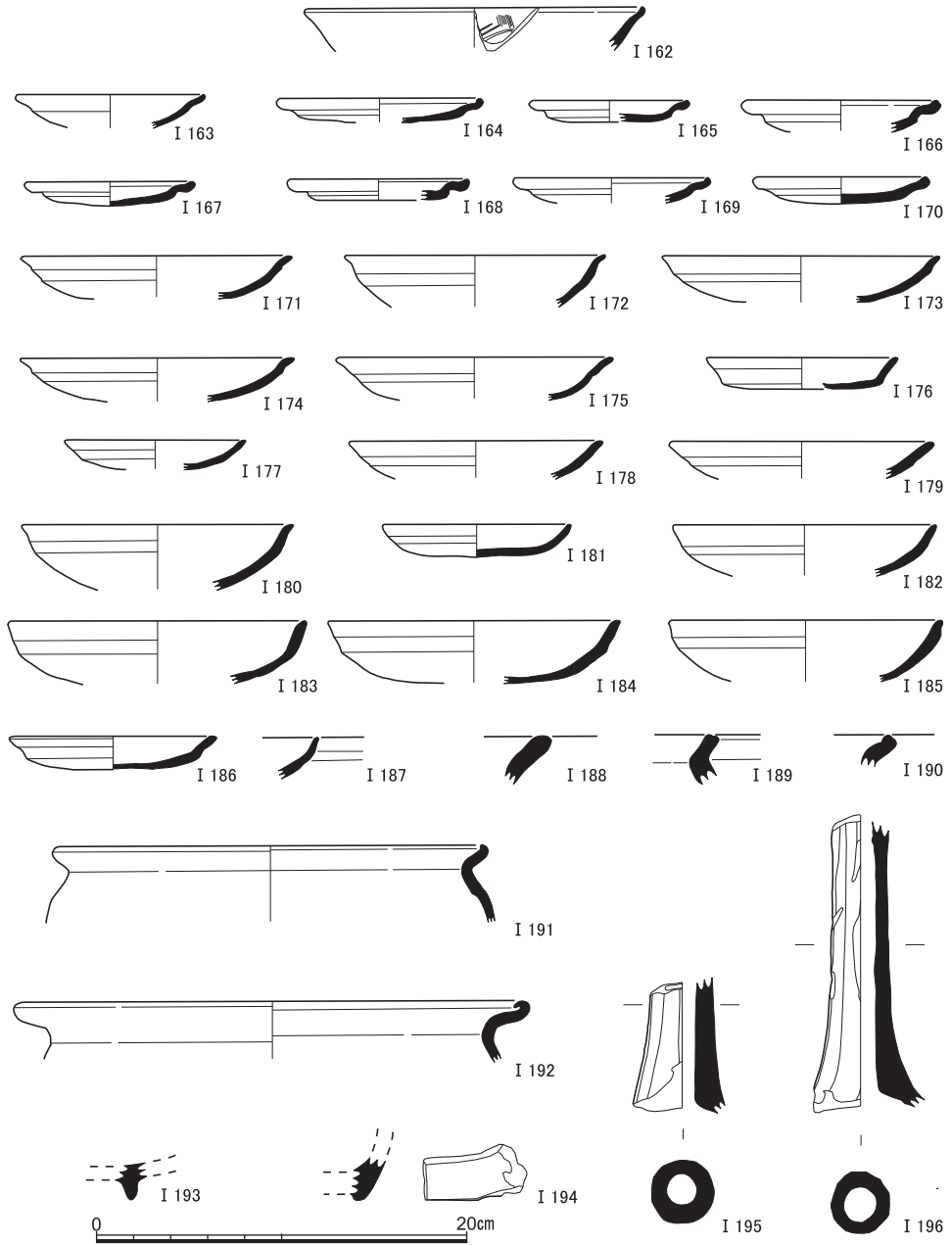


図13 古代の遺物(1) (I 162~ I 196土師器)

先史時代・古代の遺跡

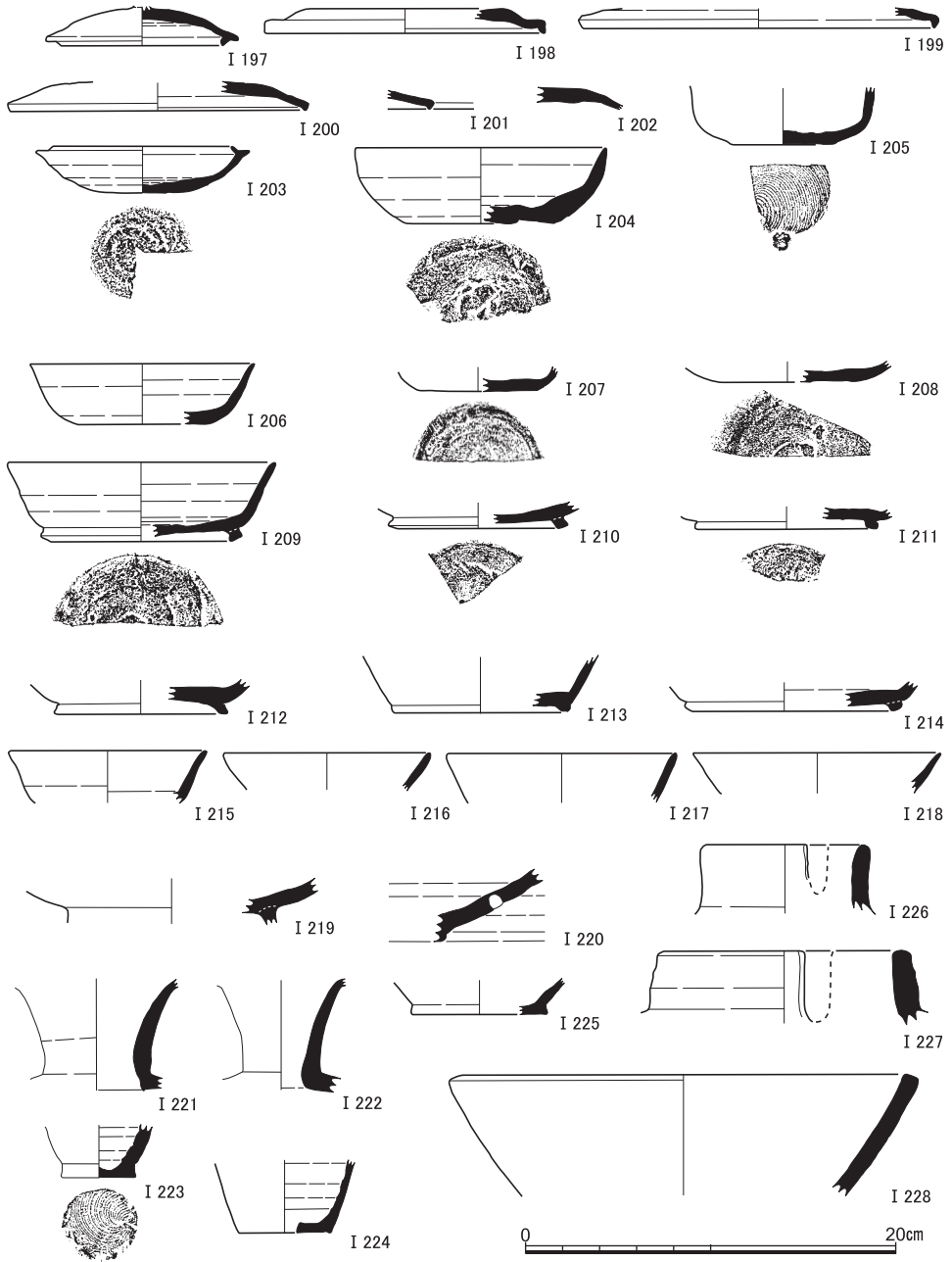


図14 古代の遺物(2) (I 197~ I 228須恵器)

I 198～I 201の蓋は端部が下方に屈曲する。MT21型式とTK7型式に相当し、8世紀頃のもの。I 203～I 218は杯身。I 203～I 208が高台のない杯Aで、I 209～I 214は高台をもつ杯Bである〔奈文研編2010 p.397〕。I 215～I 218は口縁片で、高台の有無は不明。I 203は低い立ちあがりをもつ。TK209やTK217に比定され、7世紀前半頃のものである。ほかの杯身についてもTK217以降に相当し、7～8世紀のものである。I 205の底面には糸切り痕が残る。I 219も杯の脚部と思われるが、ほかより径が大きい。I 220は器種不明の底部。体部外面に直径7mmの円形の小孔がうがたれるが、内面まで貫通しない。I

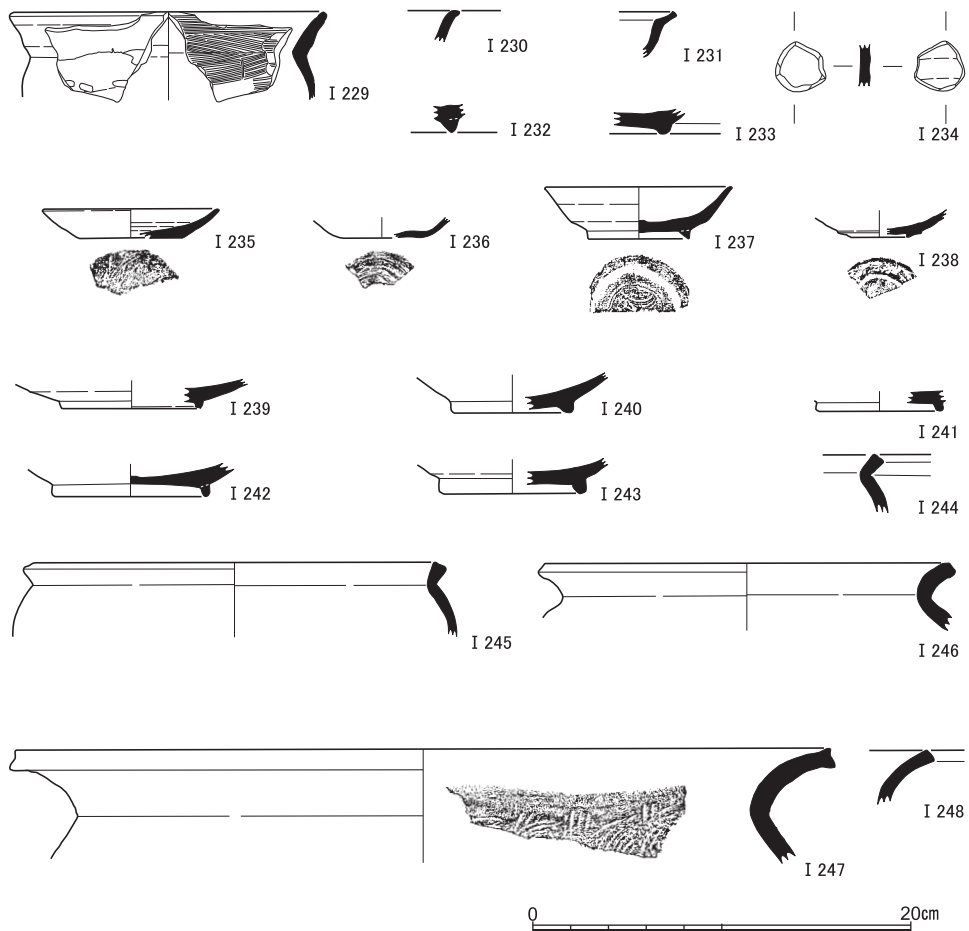


図15 古代の遺物(3) (I 229黒色土器, I 230～I 234緑釉陶器, I 235～I 243灰釉陶器, I 244～I 248須恵器)

中世の遺跡

221・I 222は長頸壺の頸部。I 221の外表面の一部には緑色の自然釉がかかる。I 223は小瓶の底部で、底面に糸切り痕が残る。I 224も小瓶の底部と思われるが、底面の中心には焼成前にうがたれた直径10mmほどの小孔がある。I 226・I 227は短頸壺の口縁部と思われるが、いずれも口縁に切り込みが入る。I 228は鉢の口縁で、縁が面取りされる。I 244～I 248は甕の口縁部。I 247のみ大型の甕で、その内外面には叩き具や叩きあて具の痕跡がわずかながら認められる。

I 229は黒色土器の甕。内面のみ炭素を吸着させて黒化处理されており、A類に分類される〔奈文研編2010 p.406〕。また、内面にのみ撫で調整が施される。外面では口縁部と体部の接着痕も確認される。I 230～I 234は緑釉陶器である。I 230・I 231は鉢の口縁、I 232・I 233は高台である。I 234は円盤に転用されたものである。I 235～I 243は灰釉陶器である。I 235・I 236には高台がないが、ほかにはある。I 235のみ皿で、残りは杯身と考えられる。I 237の内面や口縁端部、I 240の内外面、I 239・I 241・I 242・I 243の内面には緑色の自然釉がかかる。

4 中世の遺跡

本調査区では中世以降、遺構の存在を確認した(図16)。段差としては、Y=1915に東から西へ落ちるものや、その段差の下で、Y=1910付近で西から東へ落ちるものと、X=590付近で北から南へ落ちるものを確認した。遺構は基本的に茶褐色の土を埋土とする。ただし、Y=1915の段差付近では包含層の複雑な堆積状況が確認され、茶褐色の土の下の黄褐色砂混灰色粘質土が中世遺構の埋土であった。中世の遺構は、土師器皿の様相から3期にわけられる。D類主体の中世1期(13世紀前半)、E類主体の中世2期(13世紀後半～14世紀)、F類主体の中世3期(15・16世紀)である。遺物が出土していない遺構の年代は特定できなかった。中世1期の遺構は、調査区の東北部から南部にひろがる。一方、中世2期の遺構は南部に偏る。中世3期の遺構も西部に偏るが、東南部でも井戸が1基みつけた。以下に各時期の遺構を示すが、断りのない限り埋土は茶褐色のものである。

(1) 中世1期の遺構

集石S X 16 調査区の東北部にひろがる茶褐色土落込24(南北長5.0m×東西長4.7m)を掘削すると、集石S X 16が検出された(図版6-1)。南北3.3m、東西4.0m、深さ1.1mである。拳大から人頭大の石が多量に含まれる。出土した土師器皿はD類が主体であった(図18も参照)。また、茶褐色土落込24の東で検出された土坑S K 4(南北長4.0m、深

さ0.7m) についても、出土土師器はD類が主体であった。

井戸SE8 東北部の北壁際、攪乱SK1の底で検出された井戸である(図版6-2)。底の方形の木枠がわずかに検出されたのみである。掘方は直径3.0mほどで、木枠の一边は1.0mほどである。D類を主体とする土師器が出土した。なお、SE8の上部構造を破壊した攪乱SK1内からは、まとまった量のB類やC類の土師器皿がみつかった。この井戸の周辺に平安時代後期にさかのぼる遺構が存在した可能性が高い。

瓦溜SX1 南辺で検出された南北長1.0mの瓦溜である(図版6-3・4)。深さは0.2mほどである。拳大から人頭大の礫を含む。C類からD類の土師器皿が出土した。

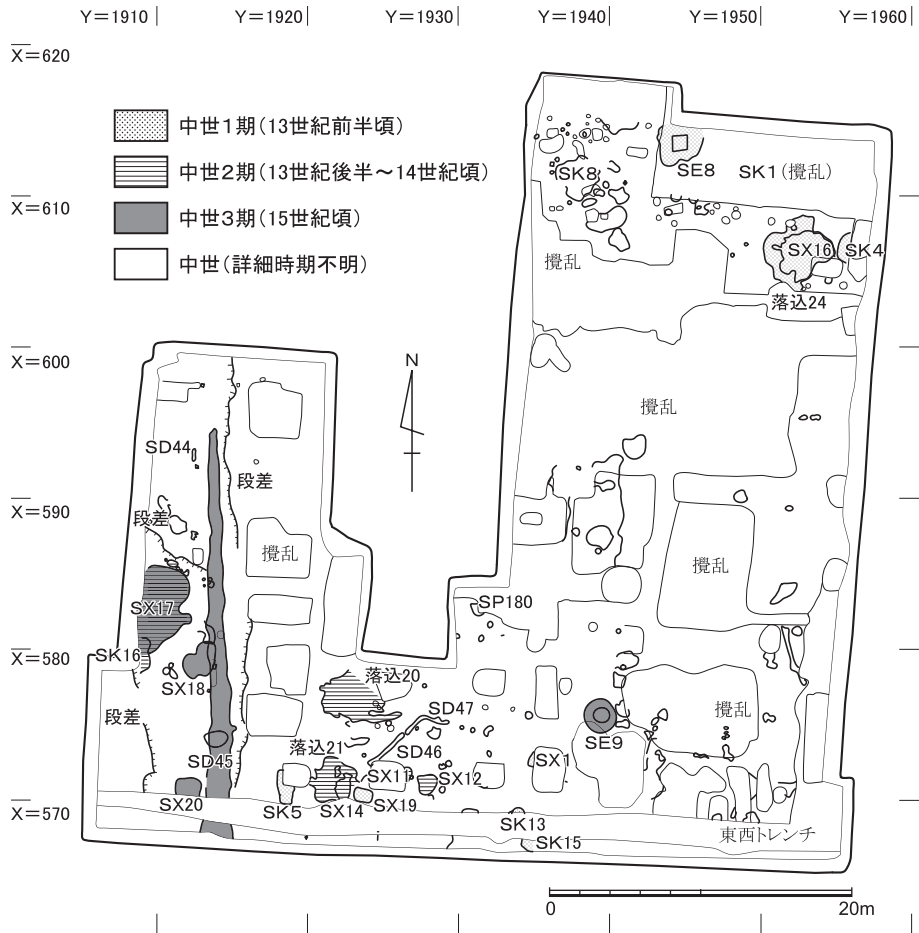


図16 中世の遺構 縮尺1/500

中世の遺跡

円形土坑SK13 同じく南辺で検出された円形の遺構である。東西長は0.8mほどで、深さは0.2mほどである。出土土師器皿はD類を主体とする。

集石SK15 南壁際で検出された集石である（図版6-5・6）。直径は0.8m以上あったようだが、攪乱にかかっているため正確な大きさはわからない。深さは1.0mほどである。出土した土師器皿はD類が主体である。

集石SX19 西南部で検出された、1.0m×1.3m、深さ0.6mほどの集石である（図版7-1・2）。軒丸瓦を含む中世の瓦のほか、D₃類の土師器皿が出土した。

柱穴SK5 調査区西南部でみつかった南北長2.2m、東西長1.3mの遺構である。深さは0.8mある。人頭大ほどの大きさのある石が底に据えられた状態でみつかったため、柱穴と判断した。土師器皿はD類を主体とする。

(2) 中世2期の遺構

茶褐色土落込20 調査区西南部では、茶褐色の埋土をもつ2つの大きな落込が検出された。これはそのうちの1つで、3.5m×5.5mある。深さは0.2mほど。中世の土師器が多数出土した。土師器皿の主体はE類であり、F類は含まれない。

土器溜SX14 もう一方の茶褐色土落込21（3.5m×5.5m）を掘削すると、2.2m×1.2mの範囲で土師器皿の集積遺構が検出された（図版7-3・4）。南東寄りの大きなかたまりと、北西の小さなかたまりの2つに分けられる。茶褐色土落込21およびSX14は全体として白色系椀とE類の土師器皿を主体としており、F類は含まれない（図19も参照）。

集石SX11・SX12 調査区南辺で、2つの集石が確認された（図版7-5・6・8-1・2）。SX11の南北長は1.0mで、SX12は1.4×1.3mである。深さはそれぞれ、0.5mと1.0mである。いずれも拳大から人頭大の礫を含む。土師器皿はE類を主体とする。

不定形土坑SK16 調査区の西隅、後述のSX17下層の掘削後に検出された平面形が瓢箪形の土坑である。黄褐色砂混灰色粘質土を埋土とする。南北長は2.5m、深さは0.5mほどである。出土土師器皿にはE類が含まれ、F類は含まれない。

(3) 中世3期の遺構

不定形土坑SX17 調査区の西壁際で、南北6.0m、東西3.5mの大きな土坑を検出した。遺構の底の一部では人頭大の礫や古代の瓦などが集中して出土した（図版8-3～6）。鬼瓦もここで1点出土した。集石を取り除くと、その周辺に黄褐色砂混灰色粘質土がひろがっていた。この集石下の層を下層として掘削した。すると、遺構の北辺から小穴が数点現れた。検出面から下層底までの深さは0.5mあった。出土土師器は集石内でF類主体だが、

集石下でE類一点のみであり、中世2期から使われた遺構の可能性も残る。

南北溝 S D45 S X17の東を南北方向にはしる溝が検出された(図版9-1)。南北は27m以上伸び、南壁の先につづく。幅は最大で2.3mあり、検出面から底までの深さは0.5mほどであった。F類の土師器皿が出土した。

集石 S X20 調査区西南隅で、黄褐色砂混灰色粘質土の掘削中にあらわれた集石である(図版9-2・3)。

東西長は1.8mあり、底までの深さは0.1mほどである。F類の土師器皿のほか、中世軒丸瓦などが出土した。

不定形土坑 S X18

S X17の南東側で、黄褐色砂混灰色粘質土を埋土とする浅い不定形の遺構が検出された。南北2.5m、東西2.3m、深さ0.1mほどである。遺物は出土しなかったがS X17などと同時期の遺構と判断した。

井戸 S E 9 東南部で検出された堅固な石組をもつ井戸である(図版9-4・5, 図17)。掘方は南北2.3m×東西2.1mで、石組の直径は1.3mある。石組には人頭大以上の礫が多く含まれる。残存する石組の深さ

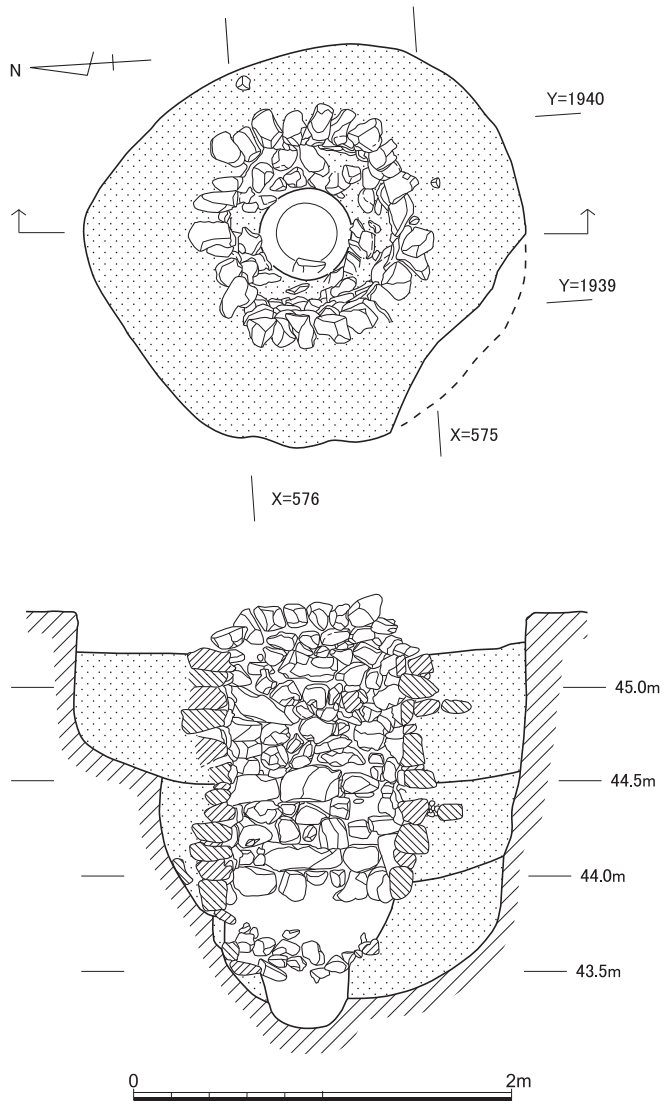


図17 井戸 S E 9 縮尺 1/40

中世の遺跡

は約2.0mである。標高43.8mから下は穴が縮小する。底部には直径0.5mほどの木桶があったと想定される。出土土師器皿はF類が主体である。

(4) 時期不明の遺構

溝S D46・S D47 調査区南辺において、南西から北東に延びる溝S D46(長さ3.1m)と、その延長線上に伸びた後に南東方向へ屈曲する溝S D47(長さ3.3m)、そして、その先に続く小穴群を検出した(図版9-6)。溝の幅は0.3mほどで、深さは0.3mある。一連のものと思われるが、用途は不明である。遺物も出土しなかった。

上記の遺構以外に、土師器皿片が出土した土坑S P180や、S D45と並行にはしる短い溝S D44、複雑なひろがりをもつ土坑S K8などが検出されたため、平面図に位置を示す。

(5) 中世の遺物(図18~27)

前節では中世の遺構を3期にわけたが、その時期の判断に用いたのは土師器皿であった。ここでは、比較的まとまった量の土師器が出土したS X16とS X14およびそれらの上位で検出された茶褐色土落込(21・24)について、口縁部計測法による土師器の割合の計測結果を示す(図18・19)。一見して明らかのように、S X16(および茶褐色土落込24)ではD類の褐色系皿が主体であるのに対し、S X14(および茶褐色土落込21)では白色系碗やE類の褐色系皿が主体となる。

以下では、中世の各遺構から出土した遺物を紹介する。

S X16出土遺物(I 249~I 261) I 249~I 260は土師器である。I 249~I 256は褐色系の皿で、I 249がC₃類であるほかはすべて1段撫で手法のD類に分類される。I 250はD₃類、I 251~I 254はD₄類、I 255はD₅類、I 256はD₆類である。I 257~I 260は白色系の碗。I 261は瓦器盤の口縁部。口縁端部が肥大する。

茶褐色土落込24出土遺物(I 262~I 267) I 262~I 267は土師器。I 262はC₂類、I 263~I 265はD₄類、I 266はD₅類の褐色系皿である。I 266の外表面全体に煤がつく。I 267は褐色系の受け皿である。

S E8出土遺物(I 268・I 269) I 268とI 269は白色系の碗である。

茶褐色土落込20出土遺物(I 270~I 295) I 270~I 291は土師器である。I 270~I 288は白色系の碗。I 270~I 273は凹み底の小碗。I 273のみ、やや褐色を呈する。I 274~I 288は大碗。I 289~I 291は褐色系の皿で、I 289・I 290はE₁類、I 291はE₃類。I 292は陶器の高台。体部の内面と外面のほか、脚部の外面の一部にも釉がかかる。I 293・I 294は砥石。I 293は黄橙色の、I 294は灰オリーブ色の粘板岩である。I 295は須

京都大学熊野構内Z Z18区の発掘調査

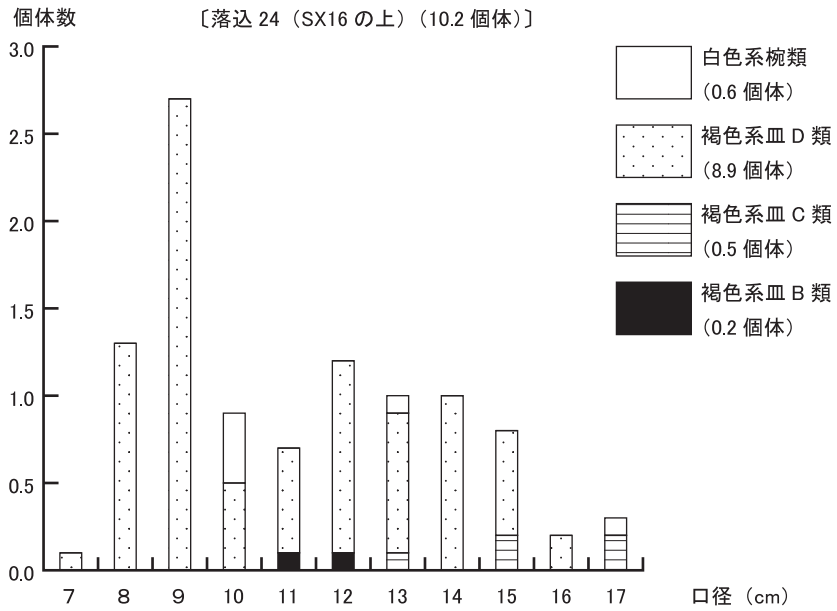
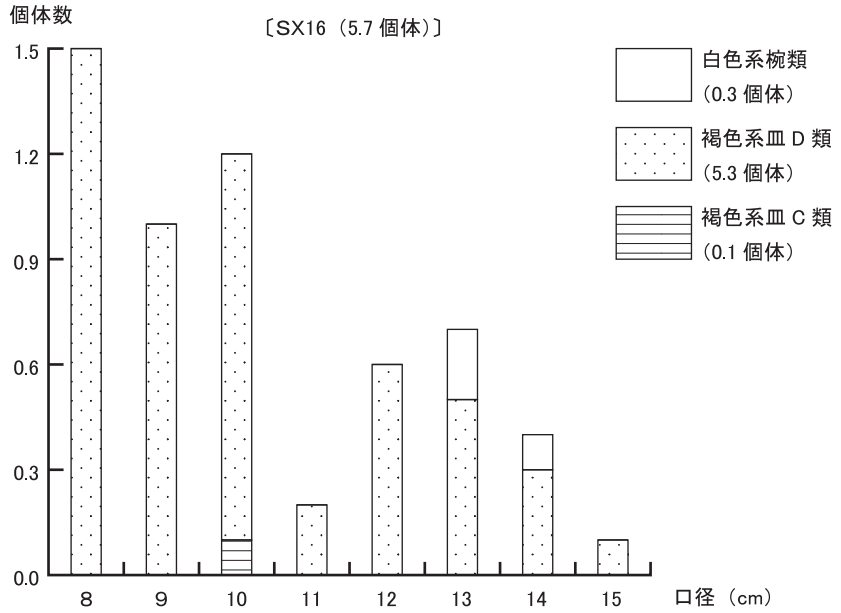


図18 出土土師器の計測結果 (その1)

中世の遺跡

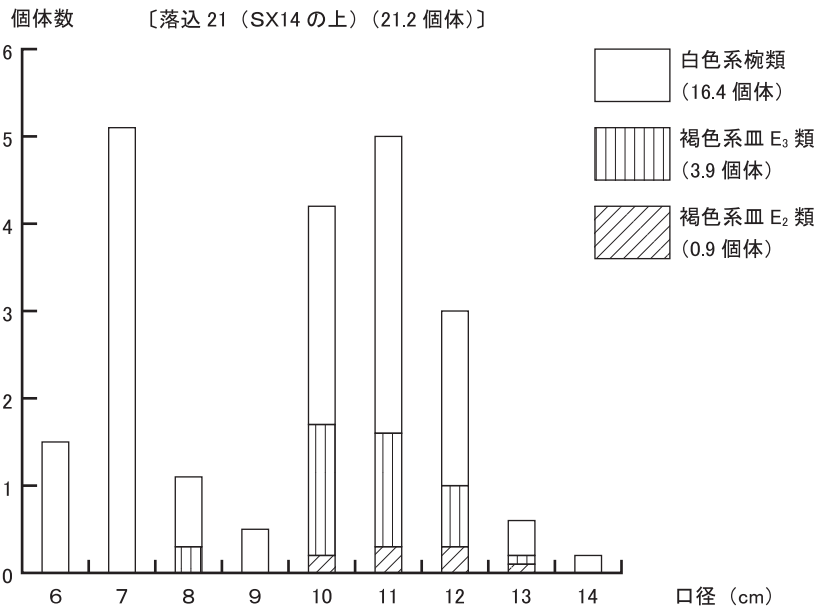
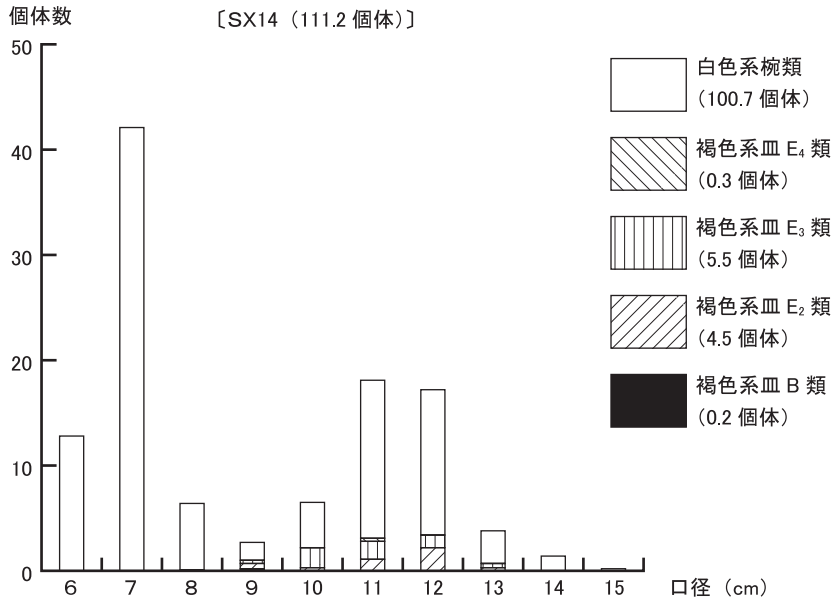


図19 出土土師器の計測結果 (その2)

京都大学熊野構内Z Z18区の発掘調査

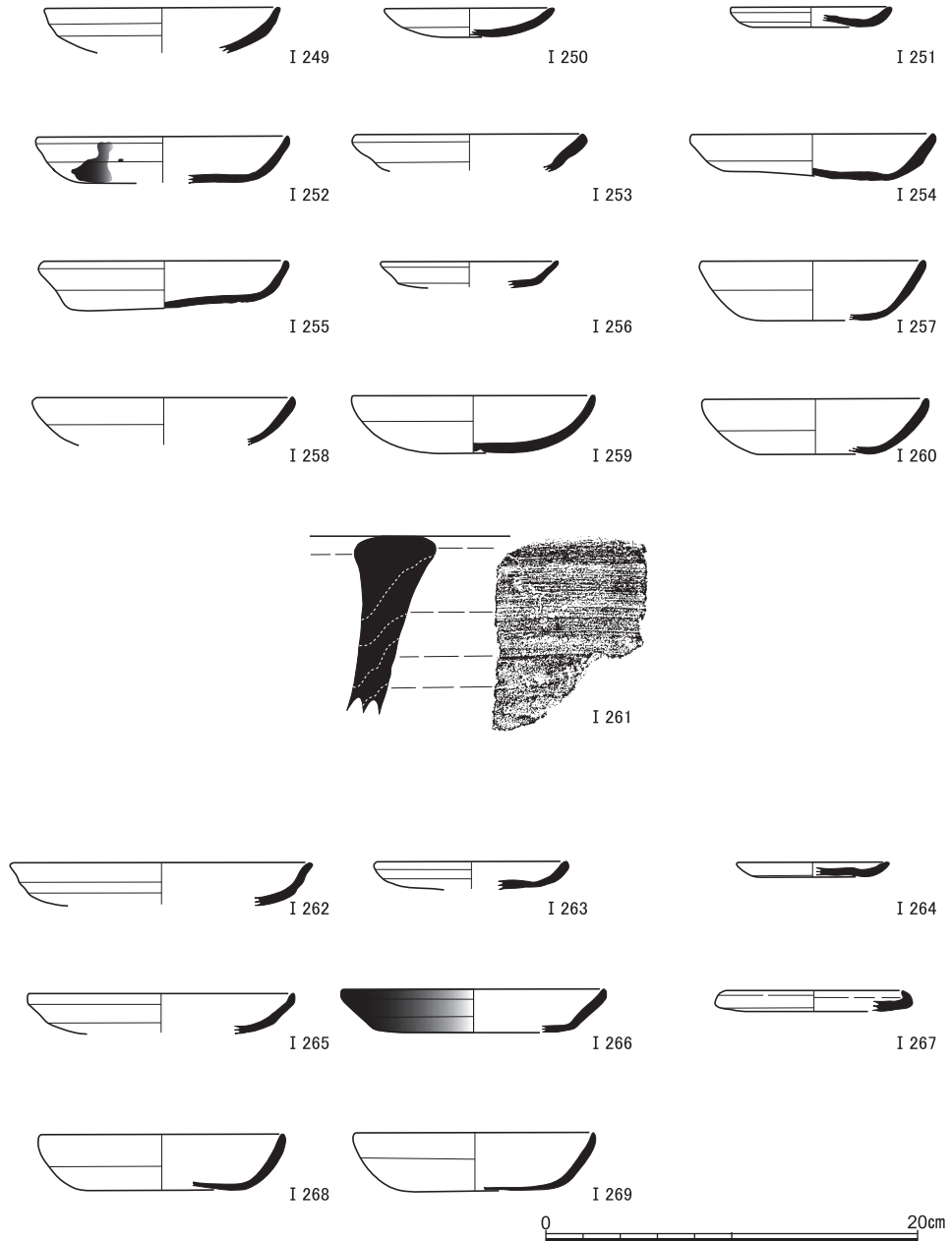


図20 S X16出土遺物 (I 249~ I 260土師器, I 261瓦器), 茶褐色土落込24出土遺物 (I 262~ I 267土師器), S E 8出土遺物 (I 268・I 269土師器)

中世の遺跡

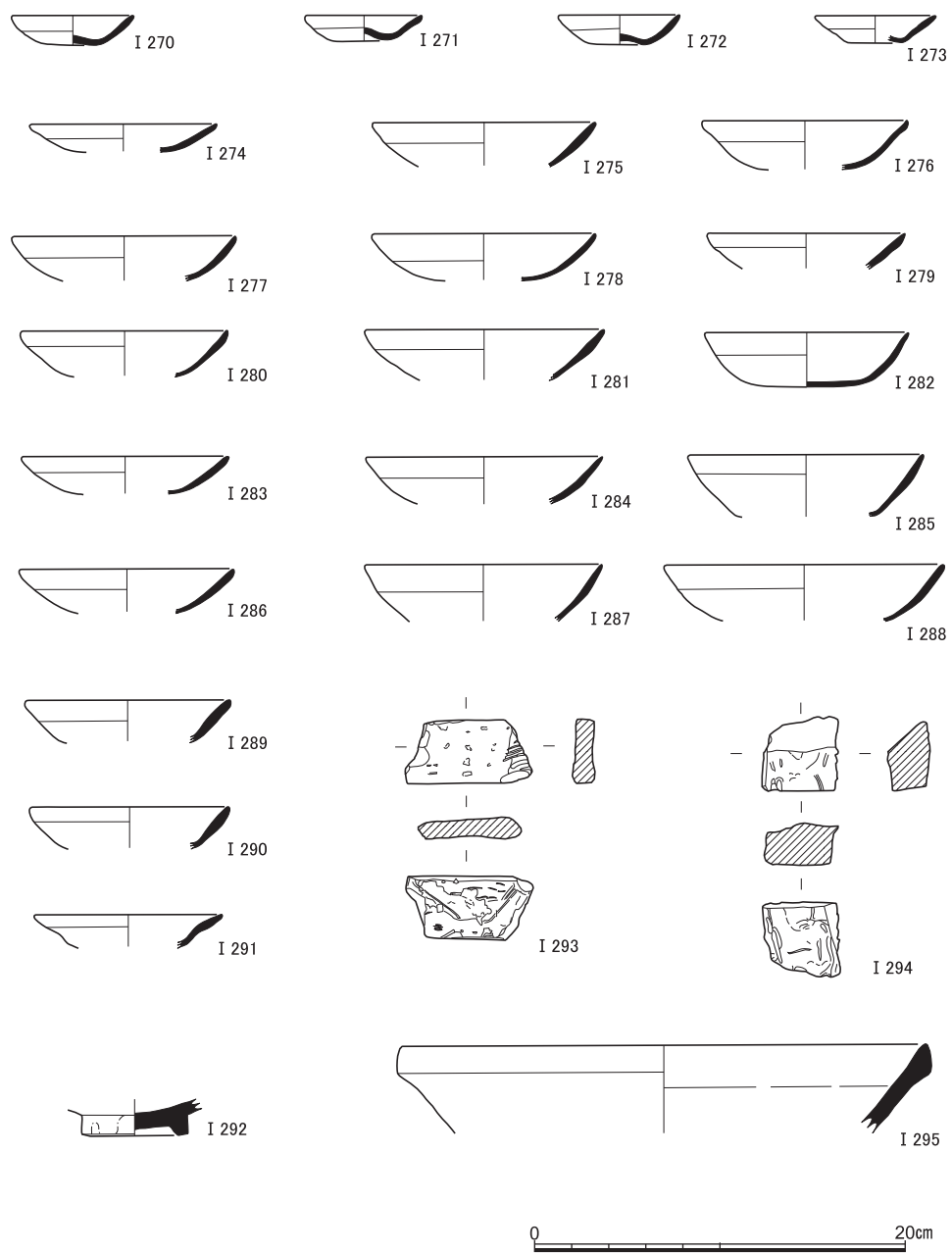


図21 茶褐色土落込20出土遺物 (I 270~ I 291土師器, I 292陶器, I 293・I 294砥石, I 295須恵器)

恵器の挿鉢で、口縁に断面三角形の玉縁がつく。内外面は横撫でにより調整される。

S X14出土遺物 (I 296～I 341) I 296～I 341は土師器である。I 296～I 328は白色系椀。I 296～I 324は凹み底の小椀で、I 299・I 308・I 310・I 320はわずかに褐色を呈する。また、I 308の内面とI 310の外面には煤が付着する。I 325は中椀で、底がわずかに凹む。I 326～I 328は大椀である。I 329～I 341は褐色系の皿。I 329のみB類の土師器であるが、ほかはI段撫でのE類の土師器である。I 330～I 334はE₁類、I 335・I 336はE₂類、I 337・I 338はE₃類、I 339～I 341はE₄類に分類される。

S X12出土遺物 (I 342～I 351) I 342～I 345は土師器で、すべて褐色系皿。I 342がD₄類であるほかは、I 343がE₁類、I 344・I 345がE₂類である。I 345の口縁部には煤が付着する。I 346・I 347は青磁の椀。I 348は陶器挿鉢の底部で、胎土は7mm大以下の砂粒を多数含み、内面におろし目がない。I 349～I 351は瓦器。I 349は羽釜で、口縁端部が面取りされ、内傾する。外面にのみ炭素が付着する。内面に刷毛目が残る。I 350は平面形が方形の火鉢と考えられる。I 351は盤。口縁端部は膨らみ、内傾する。外面に炭素が付着する。体部の外面には指圧痕が水平につづく。外面底部には、焼成前についたものと思われる籾殻の圧痕が残る。

S X17出土遺物 (I 352～I 391) I 352～I 354・I 356・I 357・I 372・I 376・I 379・I 382・I 383・I 385・I 386・I 388～I 390は集石の下から出土し、ほかは集石にもなって出土した。I 352～I 356は白色系の土師器椀。I 352・I 353は中椀、I 354・I 355は大椀、I 356は小椀である。I 357～I 371は褐色系皿。I 357・I 358がE類と考えられ、ほかはF類に分類される。I 357はE₁類、I 358はE₂類、I 359～367はF₂類、I 368～I 370はF₃類、I 371はF₄類である。I 372～I 380は瓦器。I 372・I 373は羽釜である。いずれも口縁の端面が凹むほか、内面に刷毛目が残る。また、I 372外面の口縁下部に凹線がはしる。I 374は火鉢の口縁部と思われ、端部がわずかに内湾する。I 375・I 376は菊花文のスタンプをもつ。花文と凹線の位置関係から、2点は同一個体と考えられる。1998年～1999年に吉田南構内の261地点でおこなわれた調査で出土した焜炉に類似する〔千葉・阪口2005 I 760〕。I 377は鍋の一種であろうか。I 378・I 379は鍋。いずれも外面に煤が付着し、内面に刷毛目が残る。I 380は盤の口縁部。I 381～I 383は須恵器鉢である。I 382の口縁は膨らみ、玉縁状になる。I 384は灰釉系陶器である。体部外面の脚台周辺は篋で削られる。I 385・I 386は青磁、I 387～I 389は白磁で、いずれも口縁部の小片である。I 390・I 391は砥石。I 390は浅黄橙色を、I 391は黄褐色を呈する。上記の遺物のほ

中世の遺跡

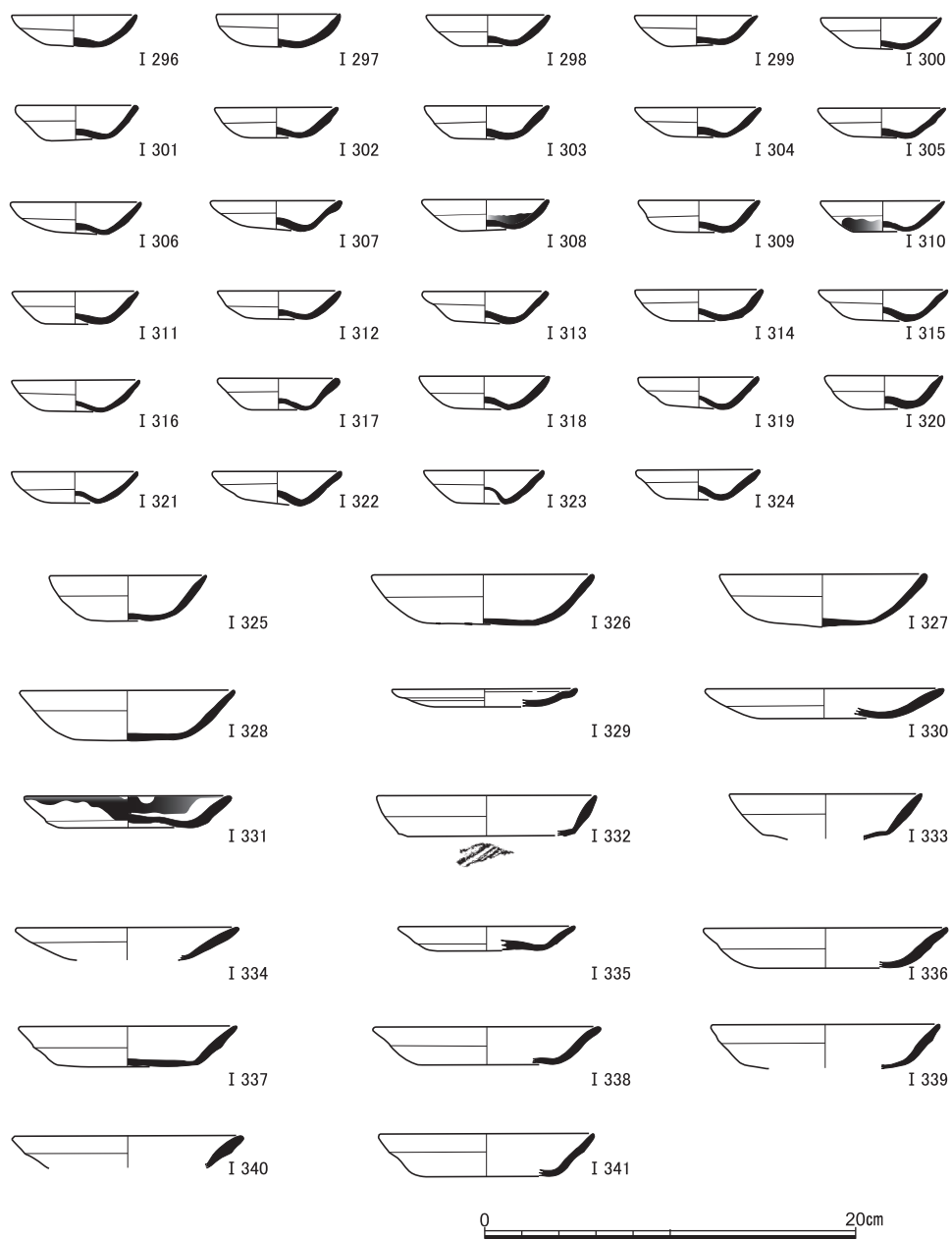


図22 SX14出土遺物（I 296～I 341土師器）

京都大学熊野構内Z Z18区の発掘調査

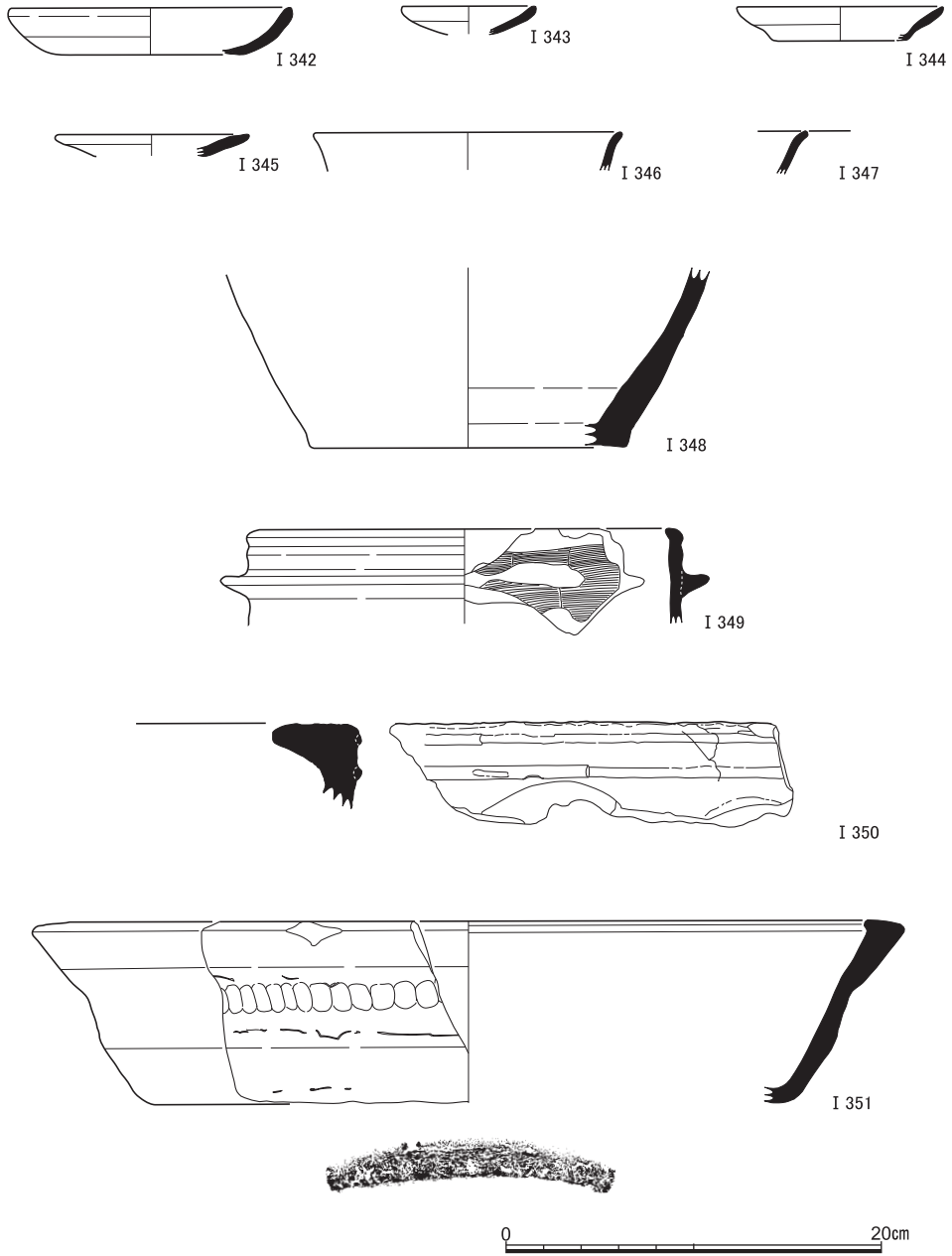


図23 S X12出土遺物 (I 342~ I 345土師器, I 346・I 347青磁, I 348陶器, I 349~ I 351瓦器)

中世の遺跡

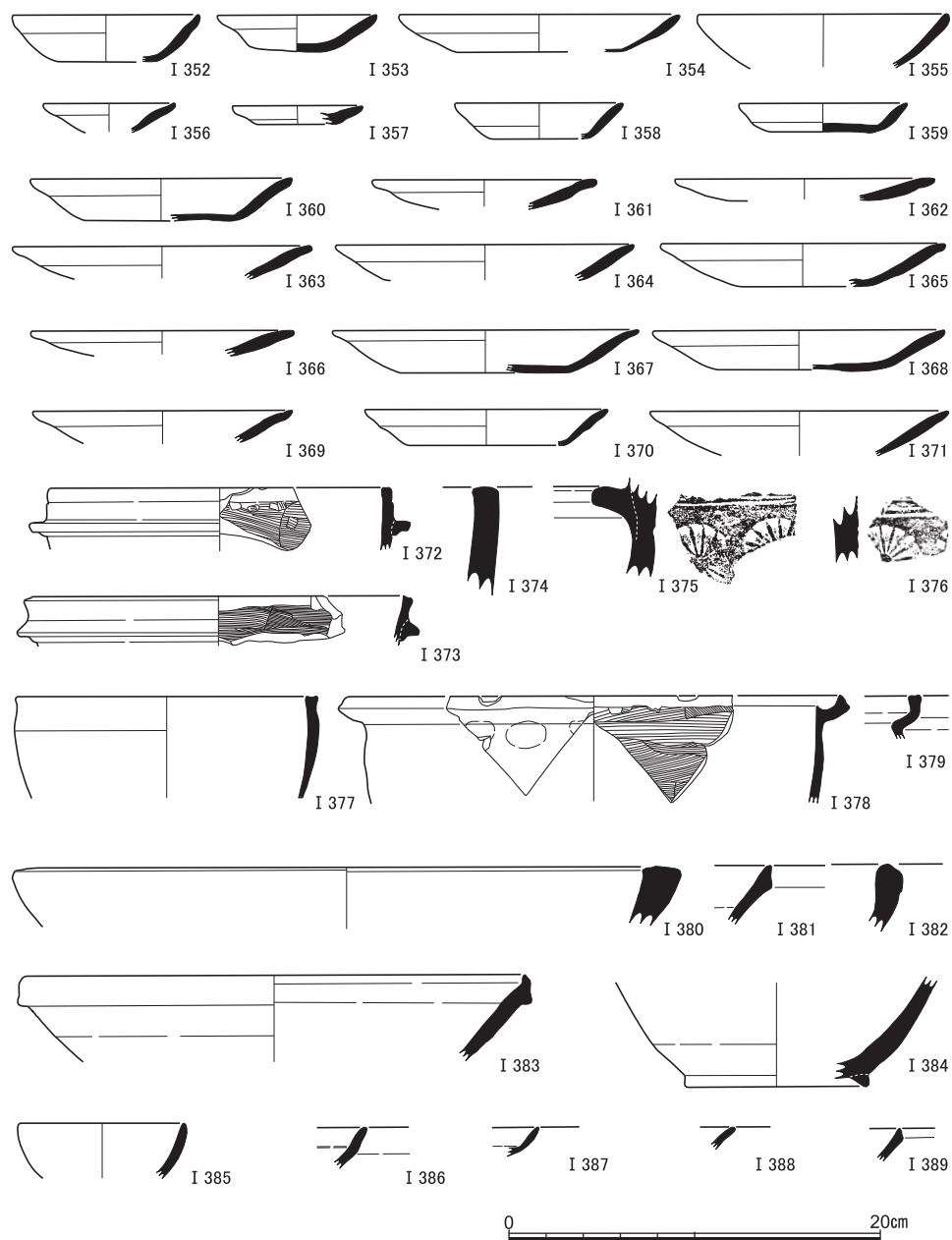


図24 S X17出土遺物(1) (I 352~ I 371土師器, I 372~ I 380瓦器, I 381~ I 383須恵器, I 384灰
釉系陶器, I 385・I 386青磁, I 387~ I 389白磁)

京都大学熊野構内Z Z18区の発掘調査

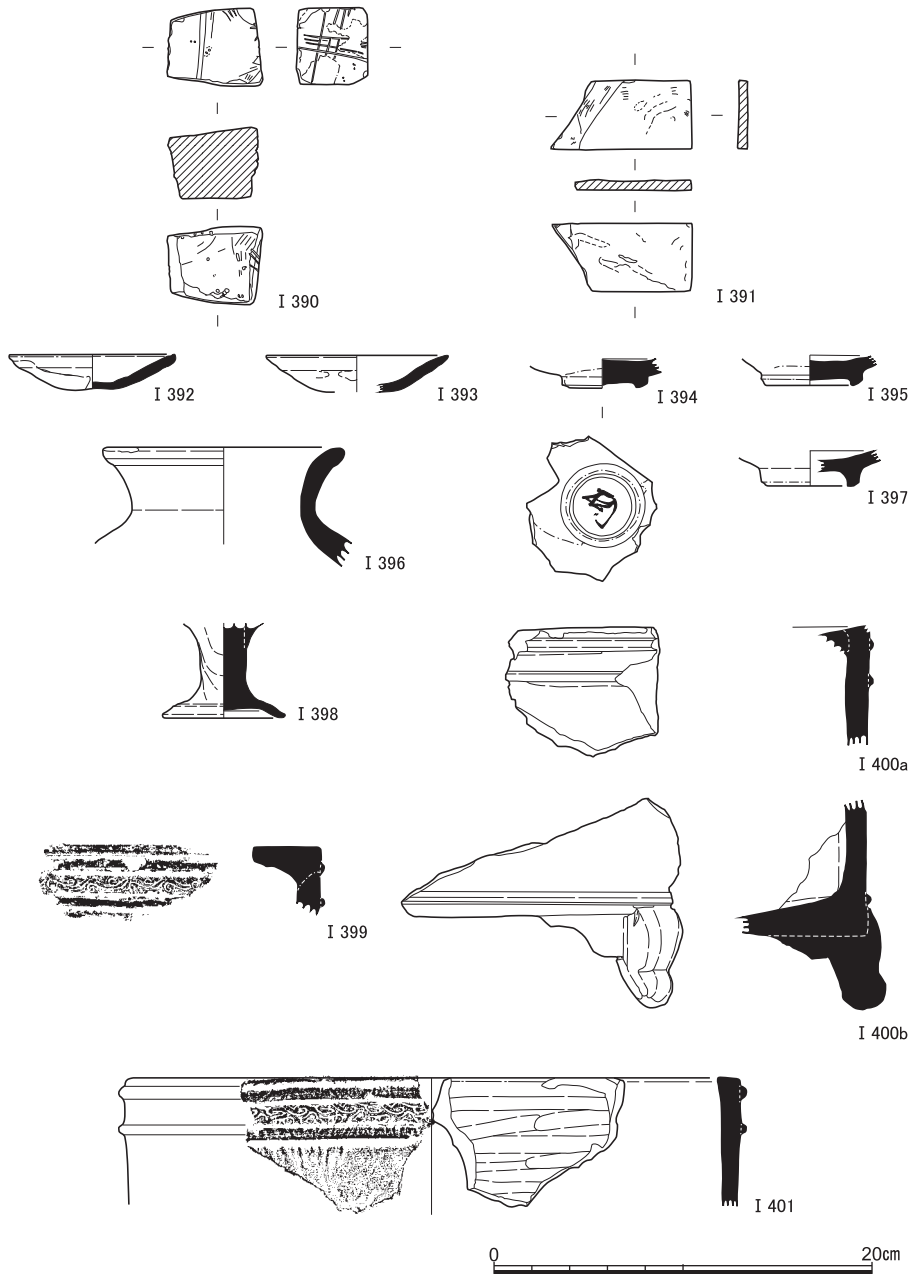


図25 S X17出土遺物(2) (I 390・I 391砥石), SE 9出土遺物 (I 392・I 393土師器, I 394・I 395施釉陶器, I 396陶器, I 397青磁, I 398~I 401瓦器)

かに、集石下の掘削中に漆器の断片が出土した。保存状態は悪く、器種は不明である。

S E 9 出土遺物 (I 392～ I 401) I 392は S E 9 底の木桶内から、 I 393～ I 401は石組内から出土した。 I 392・ I 393は褐色系土師器皿で、 I 392は F₁類、 I 393は F₄類に分類される。 I 394・ I 395は施釉陶器椀で、 I 394は畳付に釉が付着し、高台内には墨書される。 I 396は陶器壺、 I 397は青磁椀である。 I 398～ I 401は瓦器。 I 398は類例が乏しいが、高杯の可能性がある。 I 399～ I 401は奈良火鉢で、 I 399・ I 401の体部外面の凸帯間には唐草文が陰刻される。 I 400は平面方形もしくは長方形の火鉢で、四隅に獣脚がつく。底部には離れ砂が付着する。

S D 45 出土遺物 (I 402～ I 426) I 402～ I 416は褐色系土師器の皿。 I 402～ I 404は小椀で、 I 402と I 403は底が凹む。 I 405は E₄類、 I 406・ I 407は F₁類、 I 408～ I 413は F₂類、 I 414～ I 416は F₃類であり、 F 類が主体を占める。 I 417～ I 422は瓦器。 I 417～ I 419は羽釜で、いずれも内面に刷毛目が残る。 I 420・ I 421は鉢の口縁部。口縁端部は作りつけられる。 I 422は平面円形の火鉢の底部と思われる。 I 423は須恵器の高台。 I 424は青磁の口縁部片で、 I 425は白磁の底部である。 I 426は青銅製品で、一方が巻き返す。 2mmほどの小孔が 2カ所にうがたれる。

S K 16 出土遺物 (I 427～ I 430) I 427・ I 428は土師器。 I 427は白色系の小椀で、 I 428は E₂類の褐色系皿である。 I 429は青磁の底部。 I 430は須恵器播鉢の、端部が玉縁状に肥大する口縁部である。口縁端部外面に釉がかかる。

S X 20 出土遺物 (I 431～ I 434) I 431～ I 433は褐色系の土師器皿。 I 431は D₃類、 I 432は E₄類、 I 433は F₃類に分類される。 I 434は瓦器の羽釜である。内面で横方向の刷毛目がわずかに確認される。

S K 5 出土遺物 (I 435～ I 439) いずれも褐色系の土師器皿。 I 435は B₃類、 I 436は C₃類、 I 437～ I 439は D₅類である。

S X 11 出土遺物 (I 440～ I 442) I 440・ I 441は土師器。 I 440は白色系椀で、 I 441は E₁類の褐色系皿である。 I 442は陶器播鉢。

S X 19 出土遺物 (I 443) I 443は D₃類の褐色系皿である。

S X 1 出土遺物 (I 444～ I 448) I 444～ I 447は褐色系土師器皿。 I 444は B₄類、 I 445は C₃類、 I 446・ I 447は D₃類。 I 448は須恵器の底部。底面に篋切り痕が残る。

S K 13 出土遺物 (I 449～ I 452) I 449～ I 452は土師器。 I 449～ I 451は褐色系皿で、 I 452は白色系椀である。 I 450は D₃類、 I 451は D₅類に分類される。

京都大学熊野構内Z Z18区の発掘調査

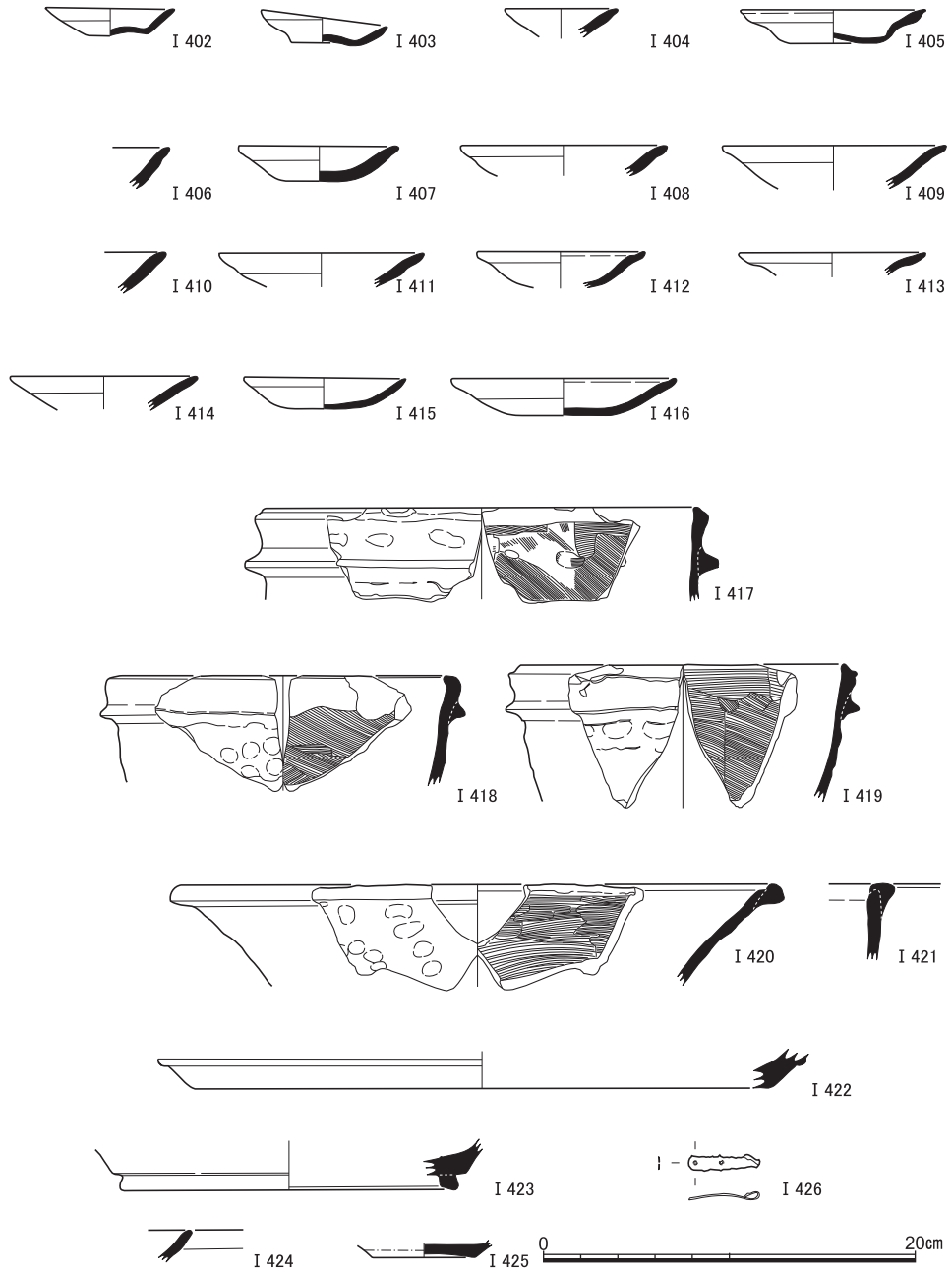


図26 S D45出土遺物 (I 402~ I 416土師器, I 417~ I 422瓦器, I 423須恵器, I 424青磁, I 425白磁, I 426青銅製品)

中世の遺跡

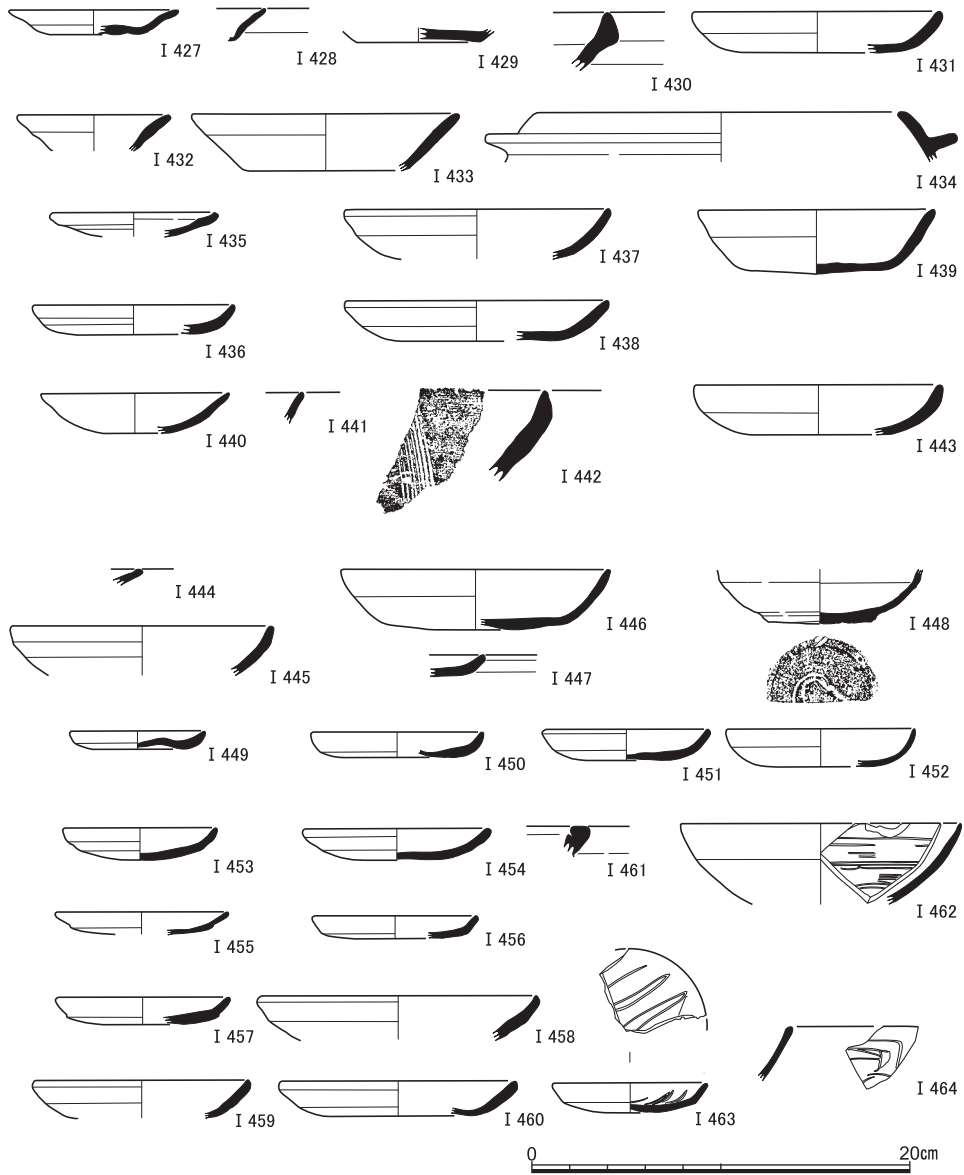


図27 S K16出土遺物 (I 427・I 428土師器, I 429青磁, I 430須恵器), S X20出土遺物 (I 431~I 433土師器, I 434瓦器), S K 5 出土遺物 (I 435~I 439土師器), S X11出土遺物 (I 440・I 441土師器, I 442陶器), S X19出土遺物 (I 443土師器), S X 1 出土遺物 (I 444~I 447土師器, I 448須恵器), S K13出土遺物 (I 449~I 452土師器), S K15出土遺物 (I 453~I 461土師器, I 462・I 463瓦器, I 464青磁)

S K 15出土遺物（I 453～I 464） I 453～I 461は土師器。I 453～I 460は褐色系の皿で、I 461は器種不明である。I 453はC₃類、I 454はC₄類、I 455～I 457はD₂類、I 458はD₄類、I 459・I 460はD₅類のもの。I 462・I 463は瓦器。I 462は椀、I 463は皿である。いずれも内面が磨かれる。I 464は青磁の口縁部片。

5 古代・中世の瓦

本調査区からは、まとまった量の瓦が出土した。それらの中には製作時期が古代にさかのぼると考えられるものも含まれる。本章では、本調査区で出土した古代と中世の瓦を一括して紹介する（図版17～24、図28～図38）。中世の遺構や包含層から出土したものについては出土地点も明記する。

鬼瓦（I 465・I 466） 本調査区からは、古代のものと思われる鬼瓦が2点出土した。I 465は中世3期の不定形土坑S X 17の底に溜まっていた石や瓦に混じって出土し、I 466は西南部の茶褐色土IIの掘削中に出土した。2点ともに同じ意匠の鬼面文である。周縁には珠文帯がめぐり、目・鼻・額が高く盛りあがる。類例として、兵庫県神出窯跡群の堂ノ前支群から出土した3点の鬼瓦〔神戸市教委編2018 pp.225-28〕や、天沼俊一コレクションに含まれる出土地不明の鬼瓦の断片〔14研究会「王権とモニュメント」編2007 図77-562〕があげられる。目・鼻・額が高く盛りあがり、周縁に珠文帯がめぐり、点が共通する。よって、産地は播磨であったと考えられる。ただし、相違点もあり、神出窯のものが額に髪表現を細かく篋書きし、また鼻のつけ根を3段にわけののに対し、本調査区出土のものには細かな描写がない。本調査区出土例に歯の表現が認められない点も大きな相違点としてあげられる。

本例は範を用いて型作りされたようだが、範はへたっており、指紋が目立つ。裏面の上部には縦6cm×横9cm×奥行3cmほどのへこみがあり、そこに縦方向の橋がわたされていた。鬼瓦を固定する際に用いられたものであろう。また、I 465の裏面には藁の圧痕が残り、表面がでこぼこであるのに対し、I 466に藁圧痕は残らず、平滑に調整され、布目がわずかに認められる。焼成についてもI 466の方が良好である。文様は同じであるものの、製作の過程に若干の違いがあったようである。

平安時代後期までは型作りが主流であり、その後手捏ねによる整形が主流になったことから、本例は平安後期の型作りの終末期につくられたものと考えられる。なお、京都大学の医学部構内の74地点でも以前に鬼瓦片が出土した〔京大埋文研1981b I 60〕。

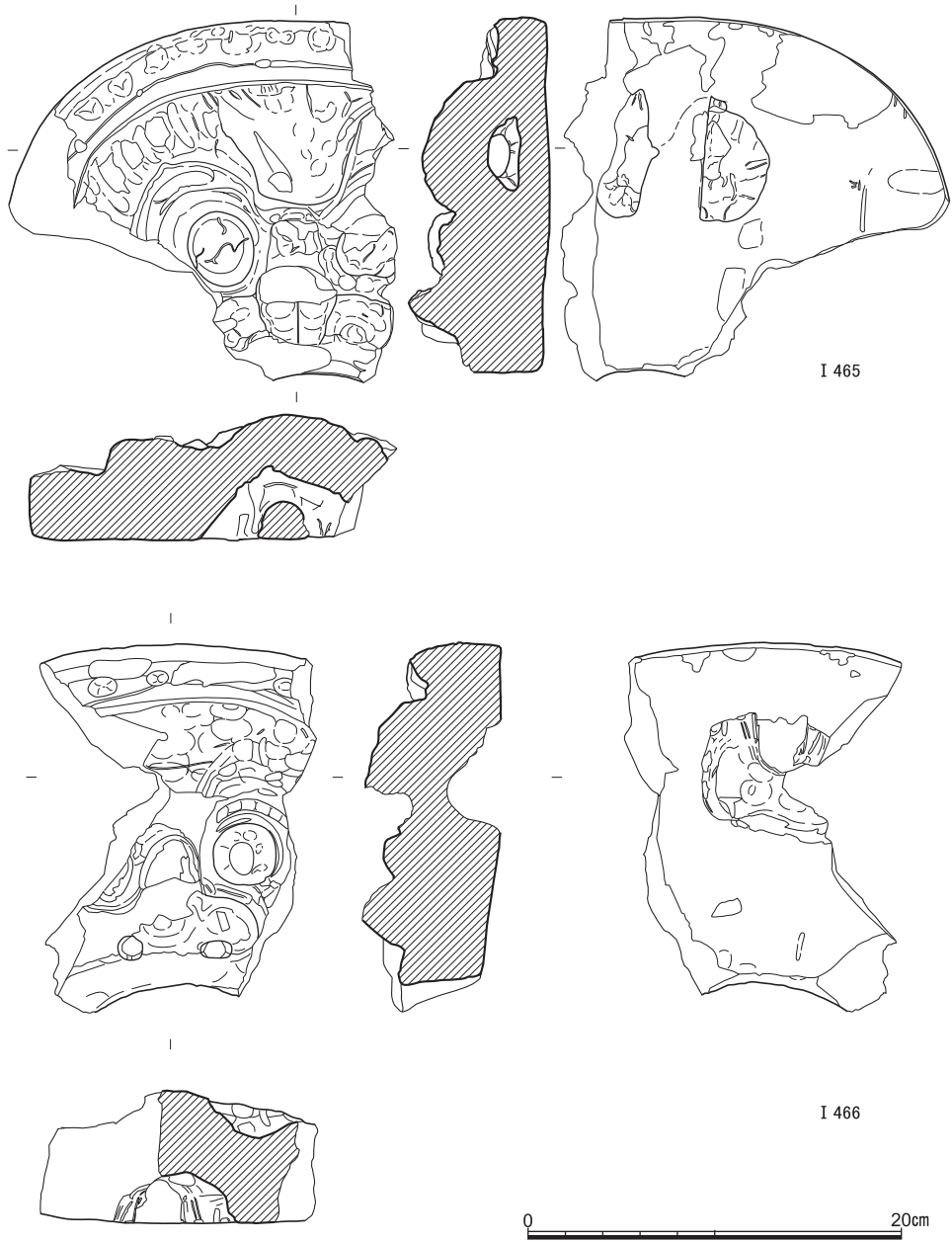


図28 鬼瓦 (I 465 : S X17, I 466 : 近世包含層)

軒丸瓦 (I 467~ I 511) I 467~ I 485は蓮華文軒丸瓦である。I 467は花卉の外形線が突線で描出される。花卉内に子葉などは表現されず、意匠は雑である。瓦当を接合した痕跡が残る。胎土は灰黄色、表面は暗褐色を呈し、焼成は軟質。同文の瓦が、白河南殿から出土している〔上村・堀内1981 図版34-7〕。I 468は花卉の外形線が突線で、子葉が稜をなす。また、花卉の外には圏線も突線で表現される。胎土は灰黄色、表面は暗灰色を呈し、焼成は軟質。I 469は花卉が重弁となる。花卉の外縁の陰刻が間弁の代わりをなす。外区に文様はない。胎土は暗灰色、表面は褐灰色を呈し、焼成は悪い。類似の軒丸

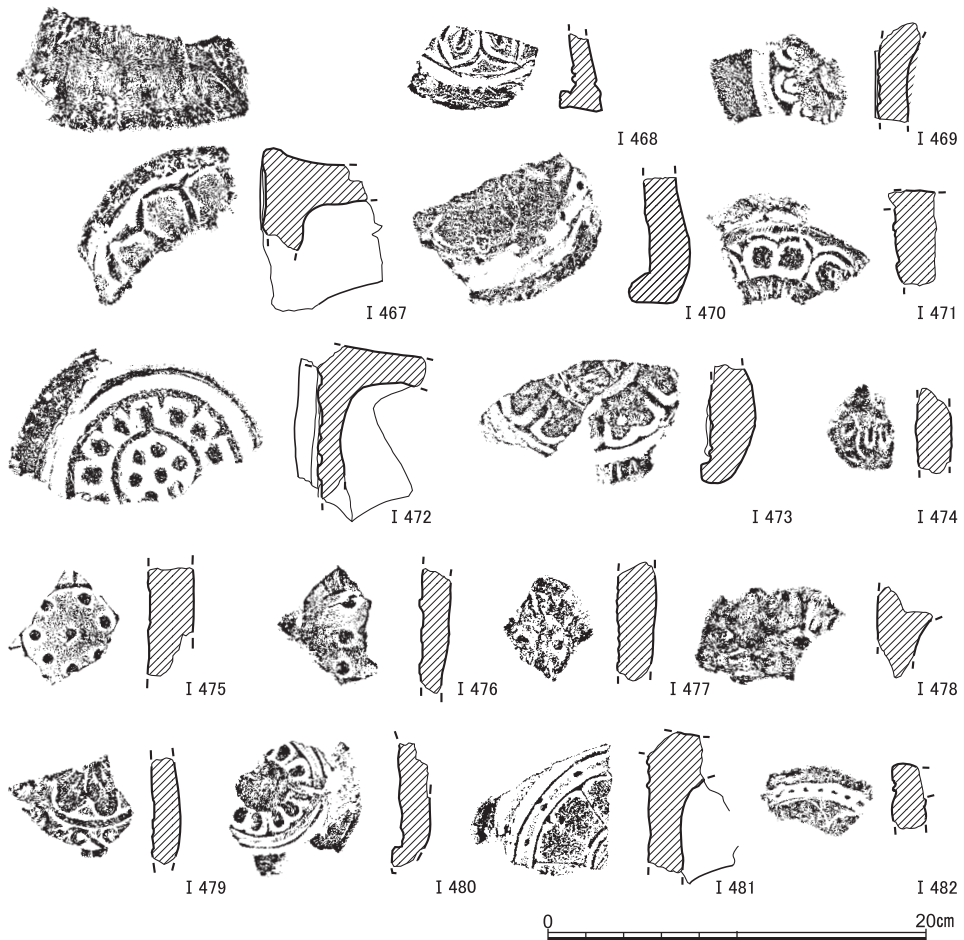


図29 軒丸瓦(1) (I 467・I 472:排土, I 468・I 469・I 470・I 478・I 479・I 480・I 482:近世包含層・遺構, I 471:S X12, I 473・I 475・I 476:黄褐色砂混灰色粘質土, I 477:S K 5, I 481:茶褐色土落込21)

瓦が吉田南構内の288地点で出土しており、それによれば単弁十弁蓮華文瓦となる〔伊藤ほか2006 p.188・II801〕。京都市左京区岩倉の南ノ庄田瓦窯跡出土瓦に同文のものがあり、12世紀前半頃の瓦と考えられる〔平方・高1998 図版3-16, 上原1978 第5図-3〕。I 470は摩滅により文様の詳細は不明であるが、五弁の蓮華文瓦であった可能性がある。外区に珠文が残る。灰黄色を呈し、焼成は悪い。I 471はS X12から出土した複弁蓮華文瓦である。灰色で、焼成は堅緻。播磨産の瓦と考えられる。I 472は単弁蓮華文瓦。花弁は13弁あったと想定され、中房には1+6の蓮子がある。外区に文様はない。瓦当裏面に指押さえの痕跡が残る。焼成は堅緻で、播磨産の瓦と考えられる。I 473はS X20の上面で出土した複弁蓮華文軒丸瓦。複弁は八弁あったと考えられる。胎土は灰色、表面は暗灰色を呈し、焼成は良い。I 474はS X17から出土した複弁蓮華文軒丸瓦片である。灰黄色を呈し、焼成は軟質。I 475~ I 477は中房部である。I 475は1+7の蓮子をもつ。焼成は堅緻で灰色を呈する。I 476には3つの蓮子が残る。胎土は灰色、表面は暗灰色を呈し、焼成は軟質。I 477は1+4の蓮子をもつ。胎土は灰白色、表面は暗灰色。焼成は悪い。

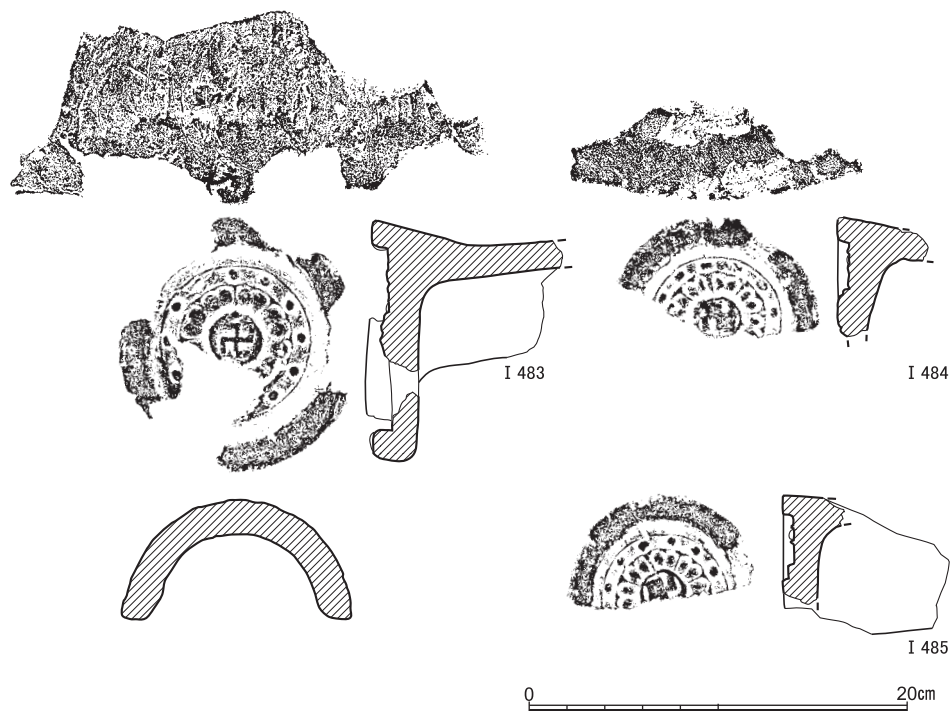


図30 軒丸瓦(2) (I 483:黄褐色砂混灰色粘質土, I 484:茶褐色土落込21層, I 485:近世包含層・遺構)

I 478は中房から花卉にかけての部分と思われるが、摩滅により文様の詳細は不明。灰白色を呈し、焼成は軟質である。

I 479は宝相華文軒丸瓦である。外区には唐草文を施す。黄橙色を呈し、焼成は軟質である。南ノ庄田瓦窯跡で同文の瓦がみつまっている〔平方・高1998 図版3-19〕。本部構内A T21区の調査でみつかった類例は外区文様が一致しないが、やはり南ノ庄田窯で焼かれたものと考えられる〔千葉・阪口2006 I 628・I 629, 平方・高1998 図版3-18〕。I 480は複弁のもので、複弁は6弁あったと考えられる。中房に蓮子は残らず、外区に文様は施されない。胎土は灰黄色、表面は暗灰色を呈し、焼成は悪い。I 481は茶褐色土落込21で出土した複弁のもので、外区には珠文が施され、外面の一部には自然釉がかかる。胎土は灰色を呈し、焼成は堅緻である。I 482の外区には珠文が密に施される。胎土は橙色で、焼成は軟質である。I 483～I 485は中房に「卍」字を置く複弁八弁のもので、外区にはいずれも珠文が施される。I 483のみ大型で直径が125mmあり、I 484・I 485は直径100mmである。いずれも灰色を呈し、焼成は良い。類例が京都市右京区常盤仲ノ町集落跡の瓦溜S X-8から出土している。また、京都大学構内の238地点と428地点でもみつまっている〔伊藤2000 I 438, 伊藤ほか2017 II 507～II 512〕。中房に文字を置く同種の瓦が、南都東大寺東塔跡(「嘉祿三年」(1227) 銘の軒平瓦が共伴。)や京都建仁寺(建仁二年(1202) 造営開始)から出土していることから、13世紀前半頃につくられたものと推定されている〔上原1995 pp.607-09〕。

I 486～I 505は巴文軒丸瓦で、いずれも京都産の瓦と考えられる。I 486～I 499は外区珠文帯をもたないもので、右回りの巴文を施すもの(I 486～I 495)と、左回りの巴文を施すもの(I 496～I 499)にわけられる。I 486はS X17から出土したもので、肉厚な巴文をもつ。胎土は灰色、表面は暗灰色を呈し、焼成は悪い。I 487はS D45から出土した。灰白色を呈し、焼成は軟質である。488はS X20から出土した。胎土は灰黄色、表面は暗灰色を呈し、焼成は悪い。I 489・I 490は文様が浅く平面的である。I 489は灰白色を呈し、焼成は軟質である。I 490は黒色を呈し、焼成は堅緻である。外面に自然釉がかかる。I 491はS X14の近くで出土した。灰色を呈し、焼成は良い。瓦当裏面には指圧痕が残る。I 492はS X19から出土した。胎土は灰色、表面は黒色を呈し、焼成は悪い。I 493は摩滅して文様がわからないが、巴文の可能性があり、灰白色を呈し、焼成は軟質である。I 494はS X12の下で出土した。胎土は灰色、表面は暗灰色を呈し、焼成は悪い。I 495はS X19から出土した。外面には縄叩き痕と篋記号が、内面には指圧痕が残る。灰色を呈し、

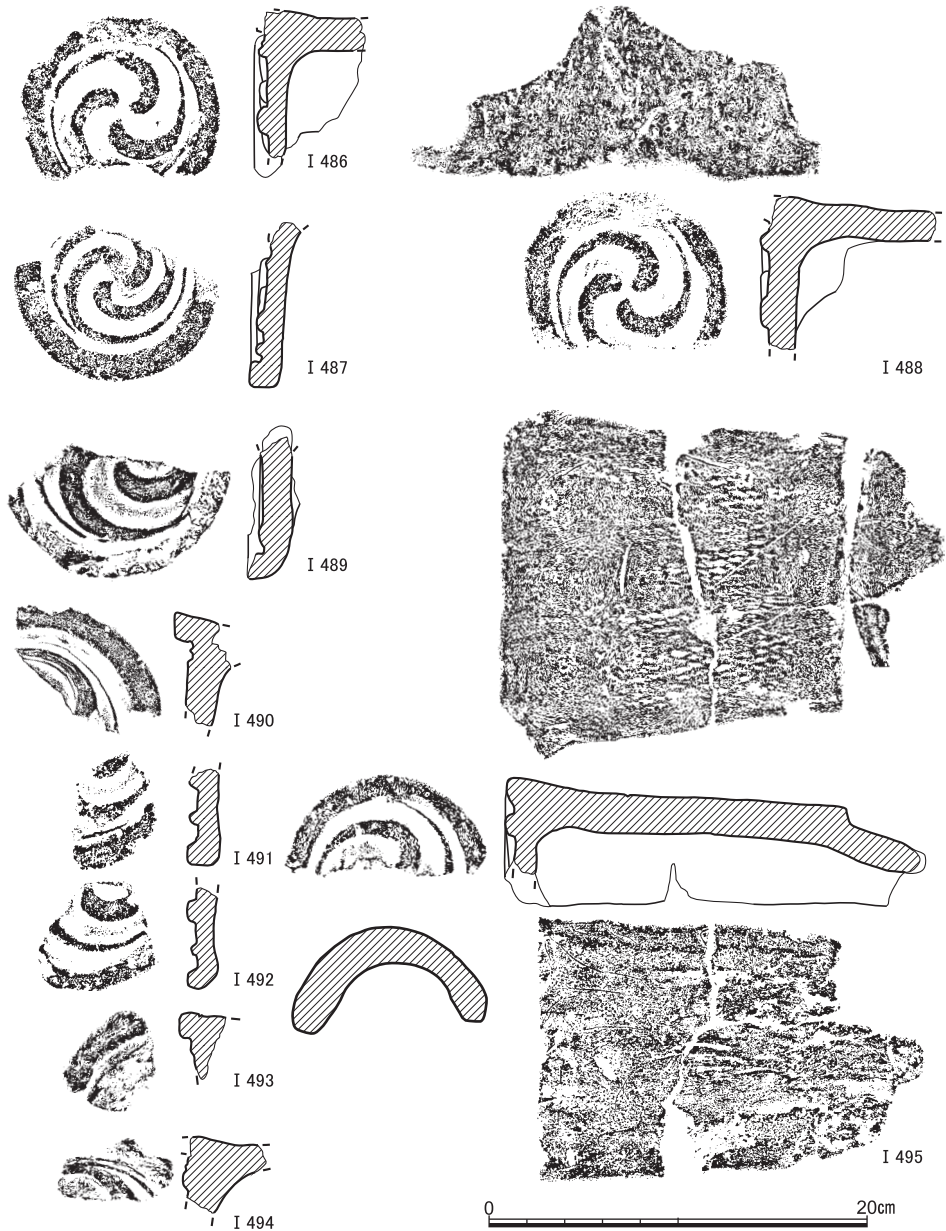


図31 軒丸瓦(3) (I 486 : S X 17, I 487 : S D 45, I 488 : S X 20, I 489・I 490・I 491 : 近世包含層・遺構, I 492・I 495 : S X 19, I 493 : 黄褐色砂混灰色粘質土, I 494 : S X 12)

焼成は良い。I 496は上部が灰色であるが、ほかの部分に橙色となる。瓦当裏面に指圧痕が残る。焼成は良い。I 497は灰色を呈し、焼成は良い。I 498はS X17から出土した。施文は浅く、面的である。瓦当部から丸瓦部が剥がれ、接合の痕跡がみえる。灰色を呈し、焼成は堅緻である。I 499はS D45から出土した。灰白色を呈し、焼成は悪い。瓦当文様も摩滅し、ほとんど残らない。

I 500～I 505は外区珠文帯をもつ巴文軒丸瓦である。I 500～I 503は右回りの巴文を、I 504・I 505は左回りの巴文をもつ。I 500は内区と外区の間には太い圈線があり、外区の珠文も大きく肉厚である。灰色を呈し、焼成は悪い。I 501はS X11から出土した。分厚い外縁をもつ。外縁の外側で範傷によるわずかな突起が確認される。灰色を呈し、焼成は良い。丸瓦部が剥がれ落ちる。I 502は茶褐色土落込21から出土した。巴文の中心には1点の珠文をおく。吉田南構内の288地点出土の軒丸瓦に同じ文様のものがみられる〔伊藤ほか2006 II 835〕。表面が暗灰色、胎土は灰色を呈し、焼成は悪い。瓦当部側面にのみ縄目が、また、丸瓦部裏面には布目が残る。I 503はS E 9石組内から出土した。灰色を呈し、焼成は悪い。「大覚寺御所跡」第Ⅱ期瓦群に、同文で同じサイズの瓦があり、13世紀中葉から14世紀初頭頃の年代が与えられる〔上原1995 第1図DKM14〕。I 504はS D45から出土した。かなり薄手で、瓦当裏面に指圧痕が残る。胎土は灰白色、表面は暗灰色を呈する。焼成は軟質である。I 505はS E 9の石組内から出土した。I 501と同様の厚みを持ち、瓦当文様も共通する。さらには、外縁の外側に範傷による突起が残る。胎土や焼成も同様である。同範の瓦であろう。I 506～I 508は外区の珠文帯のみが残る軒丸瓦である。I 506はS E 9の石組内から出土した。以下の共通点から、I 501とI 505と同じ範でつくられたと思われる。外縁の厚み、外縁外側に残る突起、胎土である。I 507は胎土が灰色を呈し、焼成は悪い。I 508は胎土が灰白色を、表面が暗灰色を呈し、焼成は軟質である。薄手の瓦当部をもつ。

I 509は放射状の文様をもつ軒丸瓦。中房の表現があり、蓮華文の一種であろう。外区には珠文帯がある。同文の瓦が、京都大学北部構内の221地点と采女町から出土している〔千葉1998 I 349, 『平安京古瓦図録』(以下『平古』) 45番〕。I 510は薄手の瓦当部。文様は明確にはわからないが、内区は花卉とパルメット文を連ねたものようだ。外区には文様がない。黄橙色で、焼成は軟質である。I 511は、神出窯跡群宮ノ裏支郡出土品や、国立歴史民俗博物館所蔵品に確認される梵字文の瓦ではないかと想像する〔神戸市教委編2018 NM103・NM104, 国立歴史民俗博物館編2006 548番〕。灰色で、焼成は堅緻である。

古代・中世の瓦



図32 軒丸瓦(4) (I 496・I 497・I 500・I 507・I 509・I 511: 近世包含層・遺構, I 498: S X 17, I 499: S D 45, I 501: S X 1, I 502: 茶褐色土落込21, I 503・I 505・I 506: S E 9, I 504・I 508: 黄褐色砂混灰色粘質土)

軒平瓦 (I 512~I 562) I 512~I 526は唐草文軒平瓦である。I 512はS X17から出土した偏行唐草文軒平瓦である。同文の瓦が栗栖野瓦窯跡や法勝寺、京都大学吉田南構内の288地点から出土している〔西田・梅原1934 図版14-6・21-1・4, 木村ほか1975 図21-18-1, 伊藤ほか2006 II 856〕。平瓦の凸面側に瓦当部用の別粘土を貼り、さらに顎部の粘土を貼りつける。瓦当部裏面には横方向に撫でた痕跡がみられる。また、凹面には布目が残る。表面は灰色、胎土は灰白色を呈し、焼成は軟質である。中央官衙系軒平瓦第Ⅲ期の12世紀前半頃の瓦である〔上原1978 p.9〕。I 513・I 514は栗栖野瓦窯跡や尊勝寺で同文の瓦が知られる〔西田・梅原1934 図版21-3・5, 杉山・岡田1961 171B形式〕。I 513はS X17の周辺から出土した。平瓦部の凹面には布目が残る。また、凸面には2条の篋描き文が残る。表面は暗灰色、胎土は灰白色である。ただし、凸面側が明褐色に変色する。焼成は良い。中央官衙系軒平瓦第Ⅳ期の12世紀中葉頃の瓦である〔上原1978 pp.9-11〕。I 514はS D45から出土した。平瓦部の凹面に布目残り、凸面には指圧痕が残る。瓦当部の接合部から瓦当部裏面にかけては横撫でされる。表面が暗灰色、胎土は灰白色であり、焼成は悪い。I 515は均整唐草文軒平瓦である。朝堂院跡から類似の文様をもつ瓦が出土している〔『平古』479番〕。凹面は摩耗しておりどのような調整がおこなわれたかわからない。顎部下端は横撫でされる。凸面は暗灰色を呈するが、ほかは橙色に変色する。I 516はS E 9の石組内から出土した均整唐草文軒平瓦である。類似の文様をもつものが、『平安京古瓦図録』に掲載され〔『平古』522番〕、また、京都大学でも本部構内の90地点・医学部構内の248地点・吉田南構内の288地点などで出土しているが、文様の細部は異なる〔五十川1983 I 44, 五十川・伊東2000 III 123~III 125, 伊藤ほか2006 II 902〕。平瓦部の凹面にわずかに布目が残る。瓦当部裏面が窪む。凹面台の上で製作されたのであろうか。表面は暗褐色、胎土は外側が灰白色、内側が灰色を呈する。I 517は唐草文軒平瓦と思われる。文様が大きく突き出る。平瓦部の凹面に布目残り、凸面には指圧痕が残る。瓦当部との接合部には横撫でが施される。表面は暗灰色、胎土は灰白色を呈し、焼成は良い。I 518においては、凸面の瓦当との接合部に横撫でが施される。全体が橙色に変色し、瓦当文様面は赤みがかかる。焼成は悪い。I 519においては、表面と中心部が暗灰色を、内部が灰白色を呈する。栗栖野瓦窯跡から同文の瓦が出土している〔吉村ほか編1993 瓦類83~86〕。I 520はS E 9の石組内から出土した。文様の上部に圏線がはしる。平瓦部の凹面には布目残り、凸面には指圧痕が残る。瓦当裏面は横撫でされる。胎土は灰白色、表面は灰色を呈し、焼成は良い。I 521は唐草文軒平瓦と思われるが、文

古代・中世の瓦

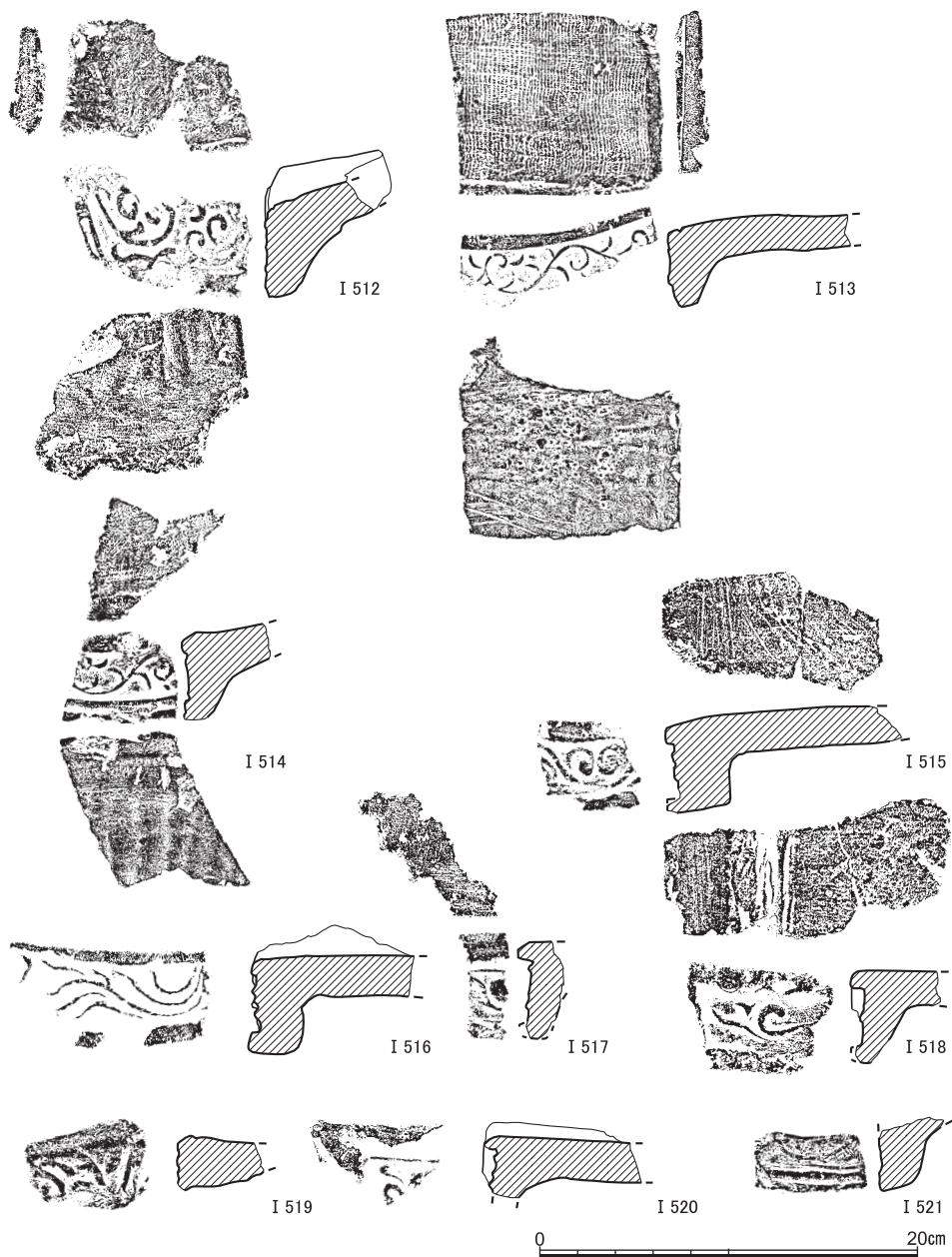


図33 軒平瓦(1) (I 512・I 513: S X 17, I 514: S D 45, I 515・I 517・I 518・I 519・I 521: 近世包含層・遺構, I 516・I 520: S E 9)

様が浅いため不確かである。凸面に指圧痕が残る。また、瓦当裏面は横撫でされる。暗灰色を呈し、焼成は軟質である。

I 522と I 523は同文の均整唐草文軒平瓦である。I 522はS X11から出土した。平瓦部の凹面に指圧痕がみられ、また、凸面は横撫でされる。平瓦部を瓦当部で包み込んだ痕跡が認められ、包み込み式 b 技法による製作であることがわかる〔神戸市教委編2018 p.247〕。青灰色を呈し、焼成は極めて堅緻である。類似する文様の瓦が法金剛院や兵庫県高砂市魚橋瓦窯から出土しており、播磨系の軒平瓦である〔上原1978 第18図-5・6〕。I 523はS X20から出土した。平瓦部の凹面には布目が残り、瓦当部との接合部は横撫でされる。また、凸面の接合部から下顎部にかけて横撫でされる。灰白色を呈し、焼成は軟質である。I 524はS X17から出土した。包み込み b 技法による製作である。灰色を呈し、一部に暗灰色の自然釉が付着する。焼成は堅緻である。I 525は黄褐色砂混灰色粘質土の掘削中に出土した均整唐草文軒平瓦である。包み込み a 技法による製作である。同文と思われる瓦が、兵庫県神戸市神出窯跡群堂ノ前支群から出土している〔神戸市教委編2018 図77-NH308〕。凹面と凸面ともに瓦当部と平瓦部を接合するために横撫でされたようだが、凸面においては、横撫での前段階のものと思われる縦撫でも認められる。凹面側の瓦当頂部には篋で削ったと思われる痕跡も残される。灰色を呈し、平瓦部には黒色の自然釉がかかる。焼成は堅緻で、播磨系の瓦と考えられる。I 526は均整唐草文軒平瓦である。唐草はそれぞれ独立する。胎土は灰色、表面は暗灰色を呈し、焼成は良い。類似の文様を持つ瓦が神戸市神出窯跡群釜ノ口支群から出土しているが、唐草がつながっている点で大きく異なる〔神戸市教委編2018 図55-NH213・214〕。

I 527～I 530は連巴文軒平瓦である。I 527はS D45から出土した。包み込み b 技法による製作である。凹・凸面ともに横撫でされる。青灰色を呈し、焼成は堅緻である。同文の瓦が法金剛院で出土している〔上原1978 図19-14〕。I 528も包み込み b 技法による。平瓦部が残らないため、貼りつけの痕跡がわかりやすい。胎土は灰白色、表面は灰色を呈する。I 529は茶褐色土落込21から出土した。包み込み b 技法による製作である。凹面は瓦当部と平瓦部の接合部が横撫でされる。瓦当裏面も横撫でされる。灰色を呈し、焼成は堅緻である。I 530はS E 9 石組内から出土した。包み込み b 技法による製作である。平瓦部の凹面には斜め方向の撫でや縦方向の撫でが、凹面から瓦当裏面にかけては横方向の撫でが確認される。灰色を呈し、焼成は堅緻である。

I 531～I 557は剣頭文軒平瓦である。I 531～I 533は瓦当面の中央に巴文をもつ。I

古代・中世の瓦

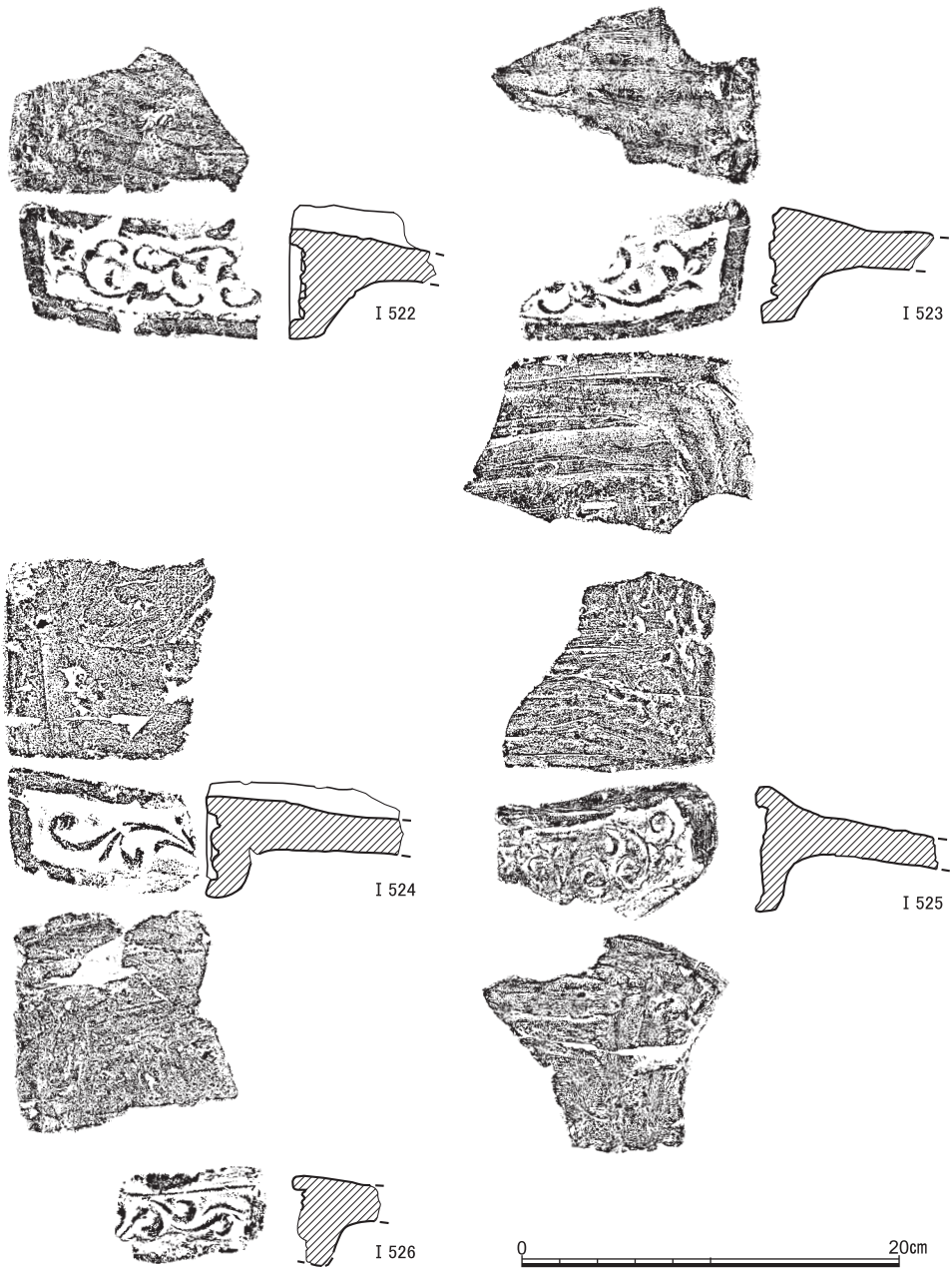


図34 軒平瓦(2) (I 522 : S X11 : I 523 : S X20, I 524 : S X17, I 525 : 黄褐色砂混灰色粘質土, I 526 : 近世包含層・遺構)

531と I 532は同文で、やはり同文と思われるものが京都大学の病院構内の19地点で出土している〔岡田1977 H T45〕。完成した段階の折り曲げ作りによる製作であり、中央官衛系第V期の、12世紀後半から13世紀初頭にかけての瓦である〔上原1978 pp.11-12〕。I 531の平瓦部の凹面には布目が残し、その上に篋描きが施される。瓦当上部には斜めの面が作られる。凸面には指圧痕が残し、頸部は曲げジワを消去するために横撫でされる。胎土は灰色、表面は暗灰色を呈し、焼成は良い。I 532の頸部には曲げジワが残る。胎土は灰色、表面は暗灰色を呈し、焼成は軟質である。I 533は茶褐色土落込21から出土した。上述の2点と同文である。瓦当上部に斜めの面をもつ。瓦当裏面においては、頸部から頸部にかけて横撫でされる。灰白色を呈し、焼成は悪い。

I 534～I 539は、瓦当面の中央に花卉と思われる文様をもつ。I 534～I 537は3枚の花弁をもつ。いずれも完成した段階の折り曲げ作りによる製作である。I 534は平瓦部凹面に布目が残る。胎土は灰色、表面は暗灰色を呈し、焼成は悪い。I 535の瓦当面には布目が認められる。頸部は横撫でされ、曲げジワが消される。胎土は灰色、表面は暗灰色を呈する。I 536の平瓦部の凹面に布目残り、瓦当上部にわずかに斜面が形成される。凸面においては指圧痕が認められ、頸部には曲げジワが残る。胎土は灰色、表面は暗灰色を呈し、焼成は悪い。I 537の平瓦部の凹面には布目がわずかに残る。瓦当上部には斜面は形成されない。凸面には指圧痕が残る。灰色を呈し、焼成は悪い。I 538は6枚の花弁をもつ。完成した段階の折り曲げ作りによる製作である。頸部には曲げジワが残る。灰色を呈し、焼成は良い。瓦当上部には斜面が認められる。I 539は4枚の花弁をもち、残存率が高い。平瓦部の凹面には布目が残る。凸面には指圧痕が残し、頸部は横撫でされる。灰色を呈し、焼成は良い。8枚の花弁をもつものが常磐仲ノ町集落跡の瓦溜SX-8からみつかっており、13世紀前半頃の瓦と考えられる〔上原1995 p.608, 第4図〕。

I 540～I 553は各剣頭文内の筋が1条のもので、I 554は2条のもの、I 555～I 557は3条のものである。1条の筋をもつ剣頭文軒平瓦は中央官衛系軒平瓦第V期から「大覚寺御所跡」第II期の瓦に認められるため、12世紀後半から14世紀初頭にかけてのものと考えられる〔上原1978 第4図, 上原1995 第1図, 第4図〕。I 540は灰色を呈し、焼成は悪い。I 541は瓦当上部に明瞭な斜面をもつ。平瓦部凹面には布目と篋書きが残る。凸面接合部には曲げジワが残される。青灰色を呈し、焼成は堅緻である。I 542も瓦当上部に斜面をもつ。摩滅が激しいが、平瓦部凹面に布目と篋書きが残される。凸面は頸部が横撫でされる。胎土は灰色、表面は暗灰色を呈し、焼成は軟質である。I 543にも瓦当上部に斜

古代・中世の瓦

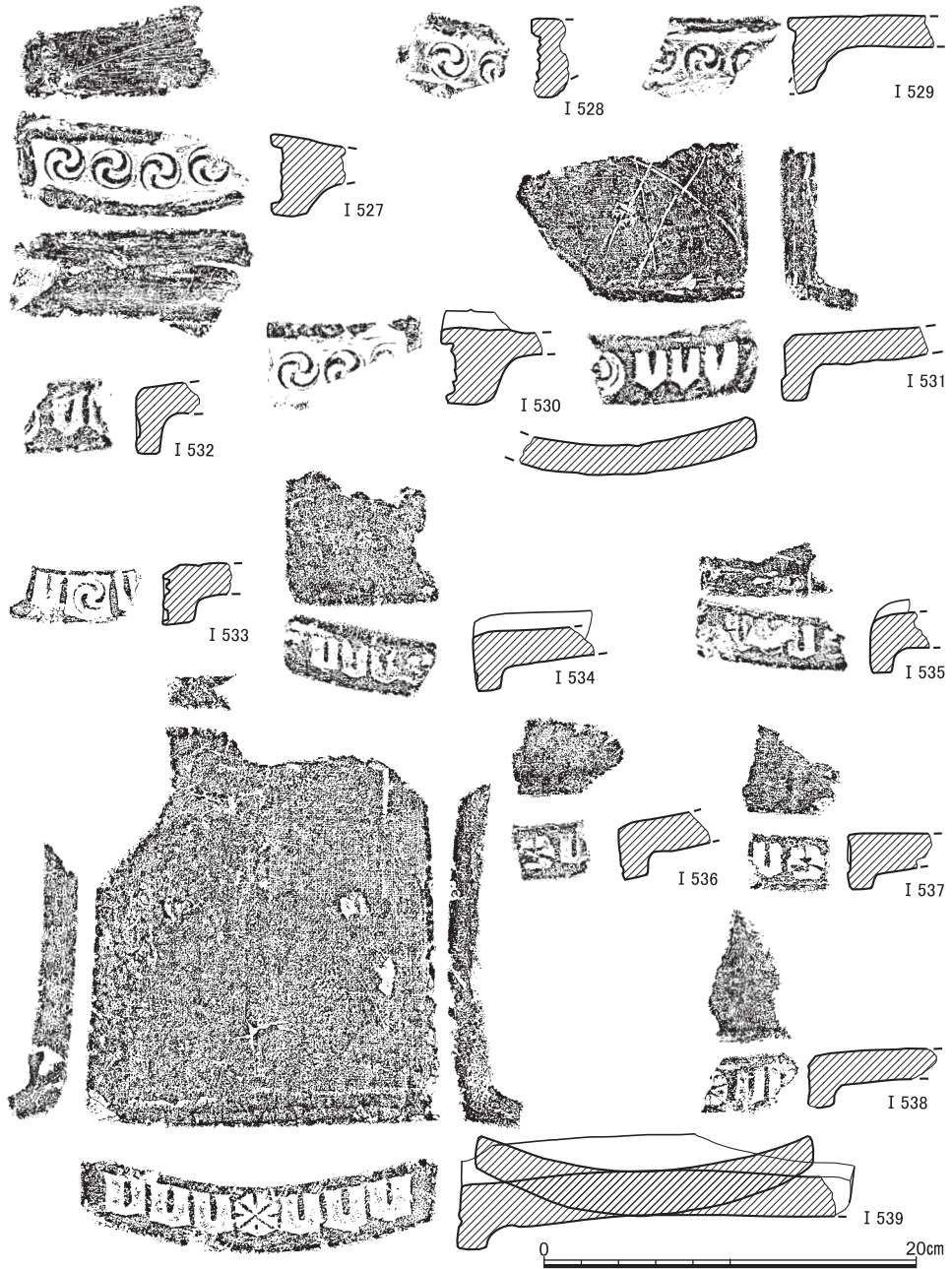


図35 軒平瓦(3) (I 527 : S D 45, I 528・I 531・I 532・I 534~I 539 : 近世包含層・遺構, I 529・I 533 : 茶褐色土落込21, I 530 : S E 9)

面が残る。平瓦部凹面に布目が認められる。折り曲げ作りである。頸部に凹形台の痕跡が残る。胎土は灰色、表面は暗灰色を呈し、焼成は軟質である。I 544は平瓦部凹面のみならず、瓦当上部の斜面や瓦当面にまで布目が残る。胎土は灰色、表面は橙色を呈し、焼成は良い。I 545は橙色を呈し、焼成は良い。I 546は瓦当上部の斜面をもたない。平瓦部凹面には布目が残る。頸部には凹形台の痕跡が残る。橙色を呈し、焼成は良い。I 547は瓦当の上部に斜面をもたない。平瓦部の凹面には布目が残る。折り曲げ作りで頸部に曲げジワが残る。胎土は灰色、表面は暗灰色を呈し、焼成は軟質である。I 548は黄褐色砂混灰色粘質土から出土した。摩滅が激しいが、平瓦部の凹面にわずかに布目が認められる。また、篋書きも残る。胎土は灰色、表面は暗灰色を呈し、焼成は軟質である。I 549はS X 11から出土した。平瓦部の凹面には布目が残る。頸部は横撫でされる。頸部が瓦当側へこむのは凹形台によるものだろうか。胎土は灰白色、表面は暗灰色を呈し、焼成は軟質である。I 550はS X 20から出土した。凹面には布目がみられる。瓦当上部に斜面が形成される。胎土は灰色、表面は黒色を呈する。I 551はS E 9石組内から出土した。胎土は灰色、表面は黄橙色を呈し、焼成は良い。I 552の平瓦部の凹面には布目がみられる。頸部には曲げジワが残される。灰色を呈し、焼成は良い。I 553は瓦当上部の斜面にまで布目が認められる。頸部には曲げジワが残る。灰色を呈し、焼成は良い。I 554はS X 20から出土したもので、剣頭文内に2条の筋が入るものである。折り曲げ作りによるもので、頸部に曲げジワが残る。胎土は灰色を、表面は暗灰色を呈する。焼成は軟質である。

I 555～I 557は剣頭文内に3条の筋が入るものである。I 555は瓦当上部に明瞭な斜面を形成する。平瓦部凹面には布目残り、篋書きが施される。斜面の布目は篋で消されるが、瓦当文様面においては剣頭文内に布目が残される。頸部は横撫でされたようだ。胎土は灰色を、表面は暗灰色を呈する。焼成は悪い。I 556も瓦当上部に斜面が形成される。平瓦部の凹面にはわずかに布目が認められる。頸部には曲げジワが残る。胎土は灰色、表面は暗灰色を呈し、焼成は軟質である。I 557は瓦当面と平瓦部の凹面に布目を残す。篋で成形された斜面には布目は残らない。灰色を呈し、焼成は悪い。

I 558はS X 12から出土した。特殊な平面形をしており、隅棟に接する箇所を用いられた軒平瓦と考えられる。文様は不明だが、唐草文様であったと想定される。凹面の布目は撫でで消されたと思われる。凸面に篋書きが残る。胎土は灰色、表面は暗灰色で、焼成は良い。I 559は文様面がほとんど残らないが、唐草文様であったと想定される。灰色を呈し、焼成は堅緻である。I 560はS E 9の石組内から出土した。瓦当文様面には巴文を連ねるが、

古代・中世の瓦

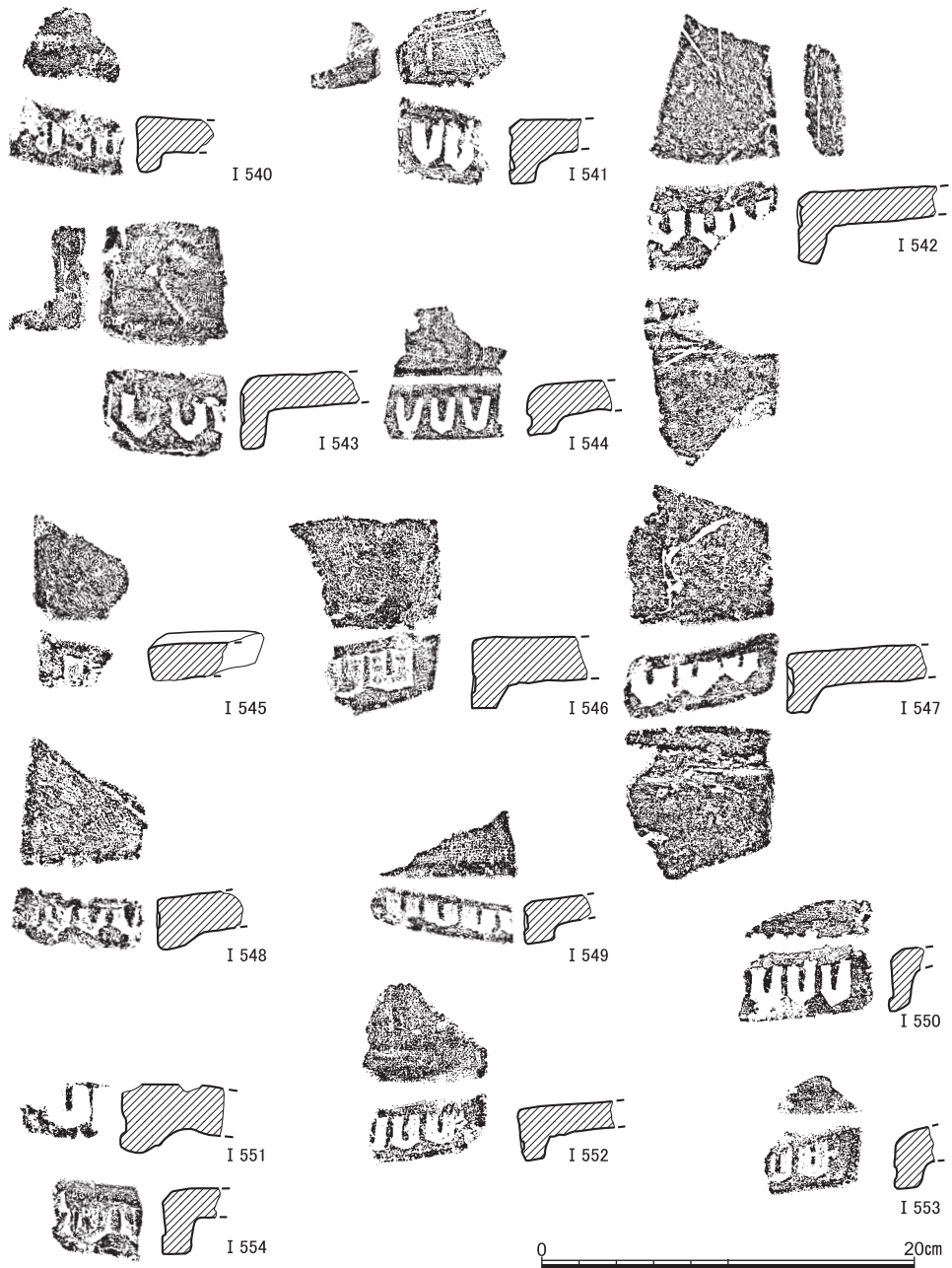


図36 軒平瓦(4) (I 540～I 546・I 552・I 553:近世包含層・遺構, I 547:S X17, I 548:黄褐色砂混灰色粘質土, I 549:S X11, I 550・I 554:S X20, I 551:S E 9)

空白箇所がある。文様は非常に浅い。文様面の上下に圈線をまたいで外区をもつ。平瓦部と瓦当部を別作りし、重厚なつくりである。平瓦部の凹面には布目が残る。凸面は縦方向に篋で削られる。灰色を呈し、焼成は堅緻である。I 561は樹状の中心飾りをもつ厚手の軒平瓦である。讃岐系の軒瓦であり、六勝寺で同文の瓦が確認されている〔上原1978 第11図-4, 梶川ほか1977 S W N55〕。12世紀中葉頃のものと考えられる〔上原1978 p.45〕。平瓦部凹面には布目の上に縄叩き痕が残される。また、平瓦部凸面から瓦当部裏面にかけては縦撫でが、顎部には横撫でが施された。胎土は灰白色、表面は暗灰色で、焼成は軟質である。I 562は文様不明の軒平瓦である。瓦当部の上面に切り込みが入る。瓦当部裏面から顎部にかけて横撫でされる。青灰色を呈し、焼成は軟質である。

刻印・記号文 (図38) 今回出土した古代・中世瓦にみられる刻印や記号文について、ここでまとめて説明する。

平瓦の中には、端部に刻印をもつ瓦が認められた。竹管状の工具で捺したと思われるものをA類、四葉の花文と思われるものをB類とした。A類の刻印をもつものにはS E 9から出土したものがある。B類の刻印をもつものにはS X 17出土のものがある。刻印以外にも、平瓦の端部に篋記号をもつものもみつまっている。

つづいて、篋記号を確認しよう。平瓦に施された篋記号には、

I 類 凹面にX字を描くもの

I' 類 凸面にX字を描くもの

II 類 凹面に細長いX字を描くもの

III 類 凸面に直線と曲線を並べ、D字を描くもの

IV 類 凹面に不規則に線を描くもの

が確認された。I' 類はS E 9で出土したもの、II 類はS X 11で出土したもの、III 類はS X 12で出土したもの、IV 類はS X 17から出土したものにみられた。

一方で、丸瓦に施された篋記号には、

I 類 凸面にX字を描くもの

II 類 凸面に細長いX字を描くもの

III 類 凸面にD字を描くもの

IV 類 凸面に曲線を並べるもの

がみられた。II 類はS X 17から出土した瓦の中に、また、III 類はS X 12やS E 9から出土したものにみられた。

古代・中世の瓦

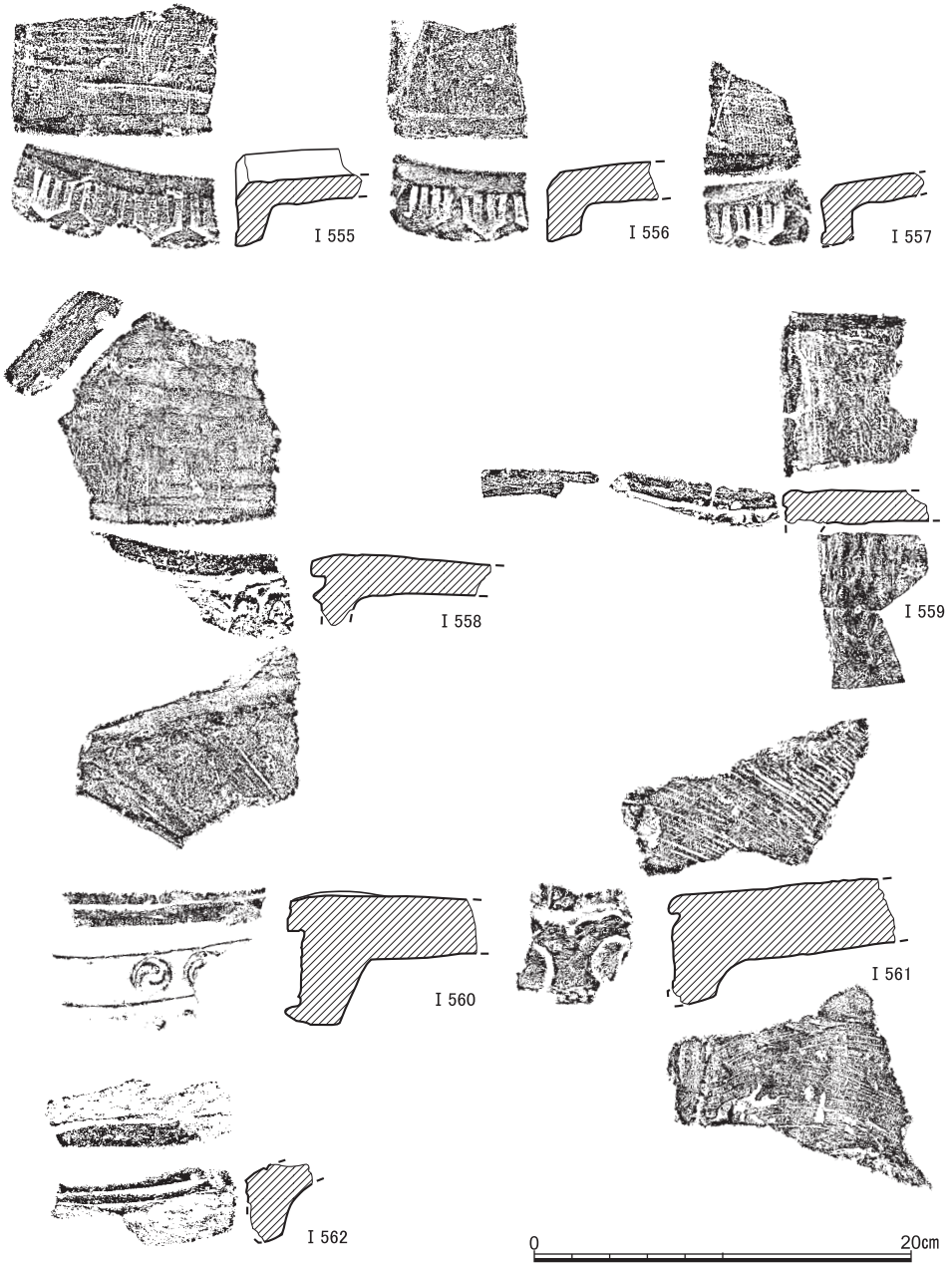


図37 軒平瓦(5) (I 555～I 557・I 559・I 561・I 562: 近世包含層・遺構, I 558: S X12, I 560: S E 9)

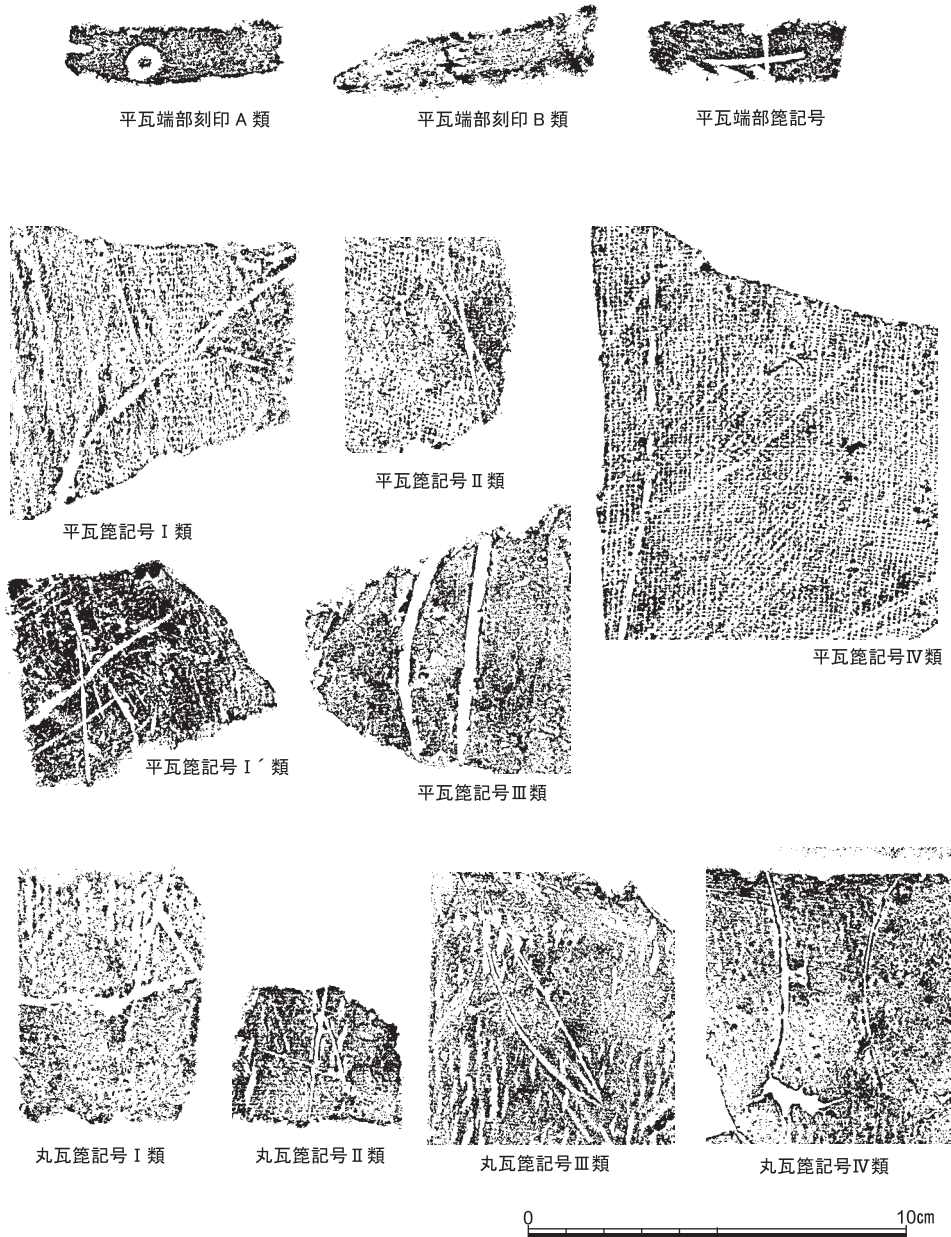


図38 古代・中世瓦の刻印・記号文 縮尺1/2

6 近世の遺跡

近世の遺跡は、おもに第5層（灰褐色土）を埋土として幕末より古い近世1期と、おもに第4層（黒灰色土）を埋土とする幕末頃の近世2期に分けられる。

(1) 近世1期の遺構（図版10・11，図39・40）

近世1期の遺構は基本的に灰褐色土を埋土とするが、段差の存在により複雑な堆積状況を示す調査区西部の一部では黄灰褐色土や、砂の混ざった茶褐色の土などを埋土とするものもある。遺構検出面の標高は東へ行くほど高く、西へ行くほど低い。Y=1940付近やY=1915付近の2箇所では、東から西へ落ちる灰褐色土の段差が認められた。近世1期の遺構としては、溝・井戸・野壺・路面・集石・小穴などがある。

南北溝SD43 中世3期の南北溝SD45の上位に存在した南北溝である。段差付近で南北方向にひろがる黄灰褐色土層の下で検出された。茶褐色の土と淡色の砂の混ざり合った土を埋土とする。東から西に向かって落ちる段差の下にある溝であるため、東肩は西肩より高い。南北長は31.7mあり、調査区北壁や南壁の先につづく。幅は最大で2.6mほどで、深さは0.5mほどある。溝から近世陶磁器の小片が出土している点と、溝の東西肩にあたる茶褐色土IIから近世陶器片が出土したことから、茶褐色の土を埋土に含む溝ではあるものの、近世の遺構と判断した。ただし、遺物の大半は中世のものであり、上記の陶磁器片が混入品である可能性も残る。ひとまずここでは近世の早い時期まで使われた遺構として報告しておく。

集石SX15 黄灰褐色土層の下で、灰色の砂に埋まった状態で検出された、南北1.5m・東西0.8m・深さ0.3mの集石である。播鉢、温石、染付、塩壺などの近世の陶磁器片が出土した。出土遺物から18世紀前葉頃の遺構と考えられる。

井戸SE1 調査区の西南部で表土・攪乱の除去時に検出された井戸である。灰褐色土を埋土とする。掘削中に植物の根が円形を描くようにひろがる状況を確認した。元来の円形木枠の形を反映していると考えられる。底からは大きな石や近世瓦片が見つかった。直径は2.0mで、深さは2.6mであった。瓦のほかには、近世磁器片や伏見人形が出土した。伏見人形の出土から、18世紀中葉頃に使われた井戸であったと考えられる。

集石SX13 黄灰褐色土の掘削中に検出された集石である。断続的に、南北26.8mにわたって伸びる。東西幅は一定でないが、最大で1.4mほどある。近世の陶磁器が出土した。伏見人形が出土したことから、18世紀中葉頃の遺構と判断した。

集石 S K 11 調査区南部の砂層下より、茶褐色土と砂の混ざった土を埋土とする方形（南北1.0m、東西1.1m）の集石が検出された。石だけでなく瓦も含まれる。砂の割合の多い上層と、茶褐色土の割合の多い下層にわけて掘削をおこなった。深さは0.6mあった。出土した遺物の中には中世の土師器（E類）が含まれていたが、集石中に近世陶器などが混じていた点と、下層から伏見人形が出土した点から、この遺構も近世のものと判断した。集石 S X 13と同時期の、18世紀中葉頃のものと考えられる。

南北溝 S D 33 調査区の中央から南方へはしる南北溝が検出された。幅は4.7mあり、検出された長さは15.6mある。深さは0.3mほどである。溝の底からは小穴も検出された。



図39 近世1期の遺構 縮尺1/500

近世の遺跡

陶磁器や土師器のほか、硯や青銅製金具、伏見人形が出土した。灯明皿が含まれることから、18世紀後半頃まで使われたと考えられる。

井戸SE5・野壺SE6 調査区東部の攪乱の底で、井戸と野壺が検出された(図40)。

SE5の掘方の直径は1.7mほどで、井戸の穴の直径は0.7mほどである。深さは検出面より2.5mほどある。底の直径は68cmであった。底では黄色の砂が検出された。その上に、高さ45cm、幅10cm、厚み0.5cmの木板を円形にならべ、円形木枠とする。その上に8cmほどの空隙をあけて、長さ20cmほどの礫を立てて並べる。その上に1.5mほどにわたって、大小の礫を積む。

掘方の埋土は3層にわけられ、上層、中層、下層と呼ぶ。いずれも灰褐色土を埋土とするが、上層と下層は10cm以下の礫を含むのに対し、中層は砂礫が主体であった。

切り合い関係から、野壺SE6は井戸SE5の完成後に作成されたことがわかる。直径1.8m、残存する深さ0.7mの野壺である。興味深い点は、野壺使用の過程で2回にわたって漆喰の貼り直しがおこなわれた点である。最初に、薄い灰褐色土の土層の上に漆喰の野壺が作成された。その後、野壺の中には灰褐色土が10cmほど堆積したが、その上に漆喰の床が貼り直された。その後しばらく使用されたが、より黒みの強い土が18cmほど堆積した段階で、再び漆喰の貼り直しがおこなわれた。この際には底だけでなく、壁面にも漆喰が貼りつけられた。野壺の底を丸底にするために、壁面近くには砂も加えられた。1回目の漆喰貼り直し床面下の埋土を下層、2回目貼り直し床面下の埋土を上層と呼ぶ。

SE5から出土した遺物に燈明皿が含まれることから、井戸と野壺は19世紀前半頃に使用されていたものと考えられる。徳島藩邸の土地となる以前、同地が田畑であった時代に使用されたものであろう。

路面SF1 集石SX13の上位には黄褐色土層が認められた。その上の一部では砂層を挟んで、南北方向に伸びる硬化面が確認された。東から西へ落ちる段差の上場に位置し、路面と判断した。とくに硬化の激しい上層と、大きめの砂礫が混じる下層の2層にわけて掘削した。掘削中に泥メンコが出土したため、19世紀に入ってからのものである。

以上のほかにも、調査区全体で灰褐色土を埋土とする土坑や溝が検出された(SK2・SK6・SK7・SK14・SD30・SD7・SD31・SD49など)。SK2からは近世陶器の挿鉢片が、SK6からは近世の磁器片が、SK7からは近世の磁器片と土師器片が出土しているが、詳細な時期の特定はできなかった。平面図にはそれらの遺構の位置を示す。

京都大学熊野構内Z Z18区の発掘調査

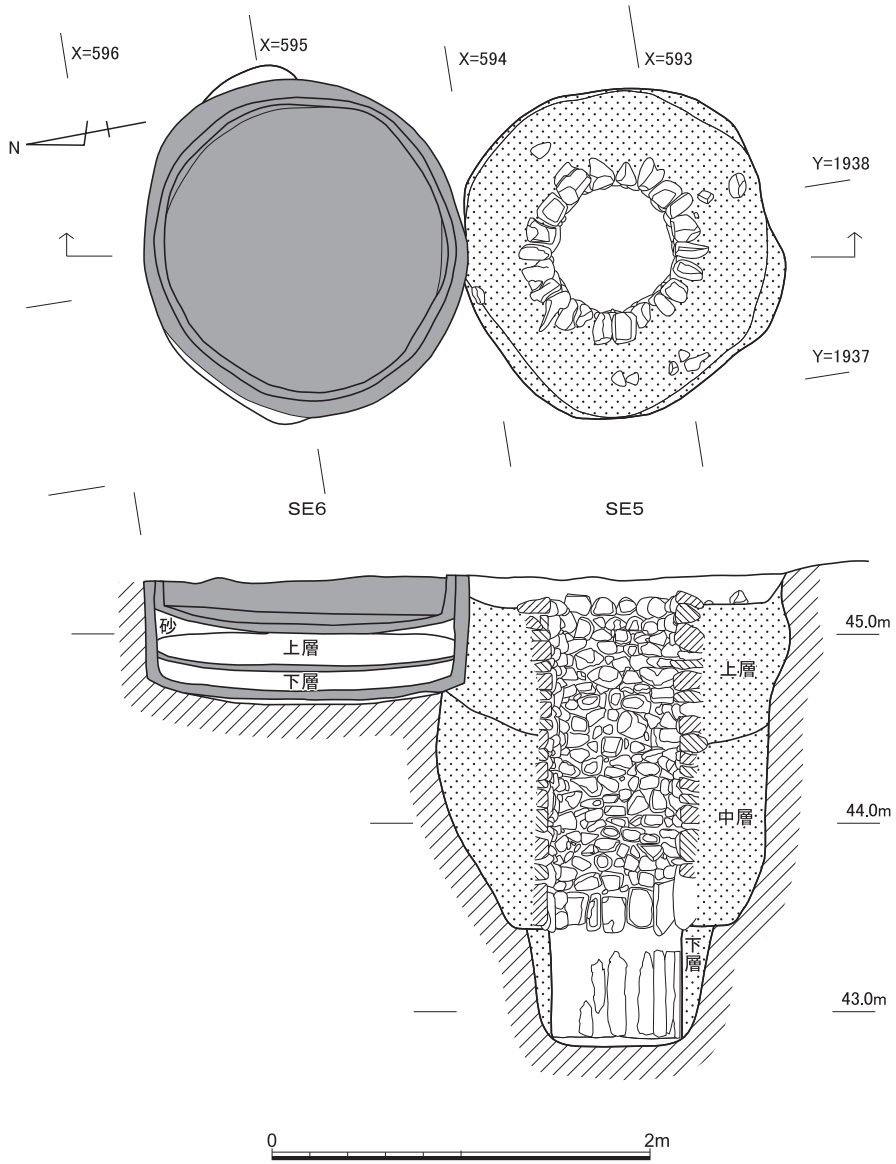


図40 井戸SE5・野壺SE6 縮尺1/40

近世の遺跡

(2) 近世2期の遺構 (図版2~4・12~14, 図41~67, 表1)

第2期の遺構は、黒灰色土(第4層)を埋土とする大溝・段差・土器埋納遺構・井戸・瓦溜・集石・小穴と、明茶褐色土(第2層)を埋土とする東部の南北溝である。

段差 Y=1915ラインあたりとY=1940ラインあたりには、南北方向にはしる西落ちの段差がある(図版3-1)。東側に位置する段差(東段差)は、法肩が削平されているものの、残りのよいところでは30cm前後の高低差を認め得る。法尻には段差ラインに並行して幅30cm前後の浅い溝がはしる部分もある。法肩の標高は、北辺で45.9m、南辺で45.7mをはかる。低位側の平坦面は、標高が北部は45.6m、南部は45.5mで、南部には東

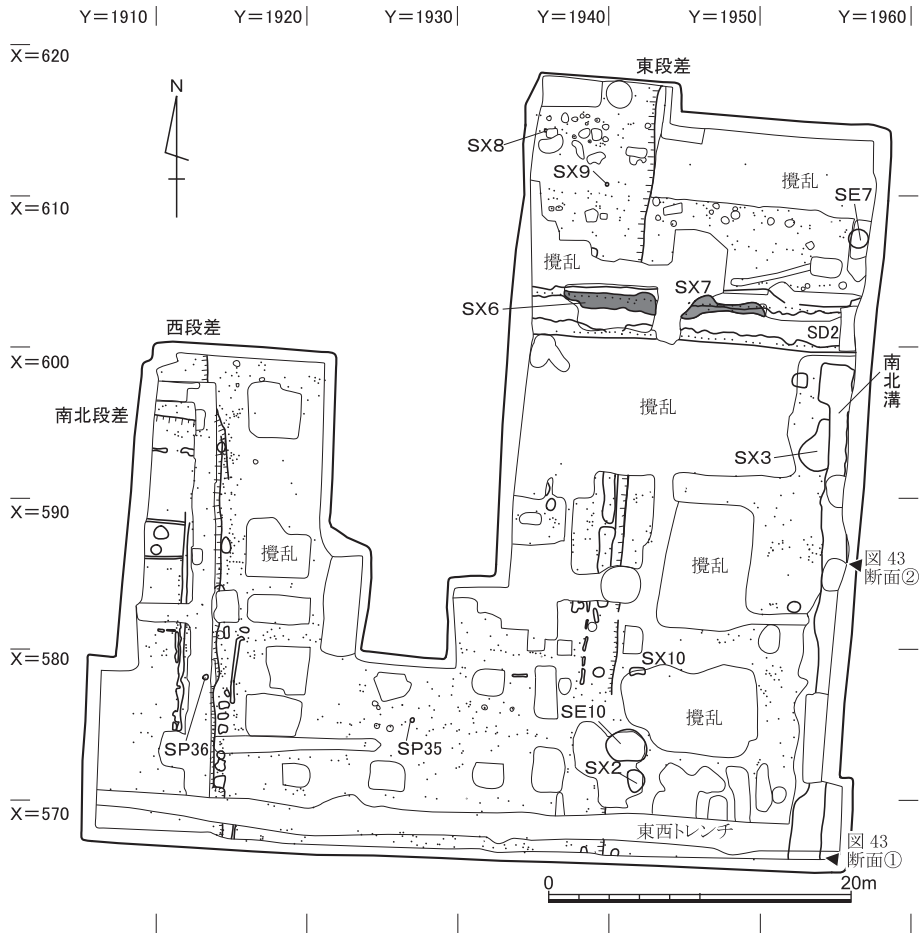


図41 近世2期の遺構 縮尺1/500

西方向の小穴列を 5 m 間隔で認め得る。

西側の段差（西段差）は、段差上位にも黒灰色土が残存しており、その掘削後に検出した（図版 4-2）。東段差よりも軸が西に振れるが、両者は層位的には同時期である。法肩の標高は、調査区の南北でほぼ同様に 45.2m、低位側の平坦面の標高は、南辺で 44.7m をはかる。X=596 ラインあたりでは、おそらく法面に接続する、西方にのびる南落ちの段差（南北段差）もあり、法肩の標高は、44.9m をはかる。南北段差は、南側に約 20cm 落ち、法尻は溝をとまわず西段差の下位の平坦面の北縁を画すことになる。西段差は、南北段差以南では、法肩から法尻までの高低差が 50cm を超えるが、法尻は近現代の配水管路による攪乱があり、東段差のようにそこに並走する溝があったかはわからない。

埋納遺構 東部の北辺で検出した S X 9 は、土師器胞衣壺の埋納遺構（図版 12-1・2）。掘り込みの上部は不明だが、器体を露出しながら周辺の包含層を掘削した後は、掘り込みの下部を確認し得た。第 9 層の砂礫層に達している底面は、標高 45.7m。蓋は割れて器体内に落ち込んでいた。蓋の破片を外すと、底部に墨が収められていた。胞衣壺に墨を収めるのは、出産が男子だった場合とも考えられている〔川口 1989〕。

S X 8 は、東部の北辺で検出した土師器小皿の埋納遺構で、包含層掘削時に遺物の出土によって確認できた（図版 12-3）。この遺構の東部から東南部にかけては、近現代の建物礎石を据えた土坑に切られている。およそ同程度の法量の皿を、サイコロの 5 の目のように配置しており、東南部と中央部は合わせ口の状態だったが、そのほかの西南部・西北部・東北部は一枚のみが正位で出土している。このうち、東北部と東南部の 3 点以外の 4 点は完存していた。また、中央部の 2 枚にはともに墨書が見られ、どちらも器体中央の梵字は上位が北を向いていた。掘り込みの上部は不明だが、土師器群全体を露出しながら周辺の包含層を掘削した後は、掘り込みの下部が第 9 層に達しているのを確認でき、底面の標高は 45.7m をはかる。地鎮に関わる遺構と判断している。

S P 35 は、中央南辺で検出した一辺 20cm ほどの方形小土坑。検出時は、周辺に多数ある畑作にともなう杭穴と同様の形状・埋土だったが、出土した土師器を洗浄・接合すると、完形土器 2 点とともに梵字などの墨書があることがわかった。検出面の標高は 45.4m。底面は、第 9 層に達しており、標高は 45.3m をはかる。長岡宮跡で検出された明治 4 年（1871）の地鎮祭祀にともなうとされる埋納遺構でもよく似た墨書土師器の組合せがあることから〔山口 2003〕、S P 35 も同質の土師器埋納遺構と判断する。

西段差の法尻に近い X=578 付近の段差下では、攪乱除去後に墓石の底部が逆位に収ま

った直径30cmほどの小土坑S P 36を検出した（図版12-4）。意図的な埋納だろう。底面は茶褐色土Ⅱに達し、その標高は44.5m。土坑上部は攪乱を被るが、埋土が黒灰色土で逆位の出土なので、墓石の割れは埋納以前である。割れ面を含め全体に摩滅し、墓碑は一部判読しづらいが「…長十四年／…定門／…十二月十六日」と読める。慶長14年（1609）に死去した男性のものだが、摩滅の進行に照らせば、埋納時期はかなり後だろう。

このほか、東部の北辺、後述する大溝S D 2の埋土中で、S D 2北壁と瓦積み遺構S X 6の西縁部北面との空間で見つかった胞衣壺S X 5は、単独で正位で出土した（図版12-5）。底部の標高は45.2m。現地説明会では埋納遺構と解釈していたが、堀方は検出し得ず、下位の層準まで達していなかった上、S X 6側となる器体の東側を欠損していることから、埋納されていた可能性は低いと思われる。

井戸S E 7 東壁際の北部で検出した井筒が漆喰の井戸。上部が攪乱を受けている。井筒の確認後に壁が崩落し、掘削を断念した。本調査区内には、井筒が漆喰の井戸はこのほかに2基あるが、ともに井筒や裏込めからレンガが出土する近代のものである。

井戸S E 10 南部中央の素掘りの井戸。底面で棧瓦片が10数点出土したがそのほかには遺物がほとんど出土していない。壁面にシルトなどの細粒物の安定した堆積層が認められないことから、掘削をしたものの使用化に至らなかったと思われる。

瓦溜S X 3 東部中央付近にある不整形の土坑で、黒灰色土の埋土中に多量の瓦を含むが、東側は後述する南北溝に切られる（図版12-6）。底面付近ではおもに、東半には拳大の礫が分布し、西半には棧瓦片が分布する。出土遺物は整理箱4箱分で棧瓦片が大半を占める。東接する南北溝の埋土からは炭素分の吸着がみられない瓦が大量に出土したのとは対照的に、S X 3出土の瓦はいずれも燻された状態のものである。瓦以外の遺物は、ほとんどが細片だが、幕末と限定できる時期の遺物はみられなかった。

集石S X 10 南部中央で検出された散漫な集石で、遺物もほとんど出土していない。黒灰色土中にはこのほかに集石はほとんど見られない。

大溝S D 2 東部の北辺を東西方向にはしり、検出面で最大幅3.8m・最深で90cm以上をはかる大溝で（図版13・14、図42・43）、急角度で立ち上がる。検出面の標高は、45.6mをはかる部分もあるが、東段差と交わるあたりでは、攪乱によって、東段差の想定される法尻の標高よりも低い45.3mほどなので、両者の切り合い関係は確認できない。しかし、東段差は近世1期にはさかのぼり得るので、S D 2は、段差より後に掘削されたと判断できる。幕末頃の陶磁器類を多量に含みガラス片も含むが、レンガは含まない。埋土

京都大学熊野構内 Z Z 18区の発掘調査

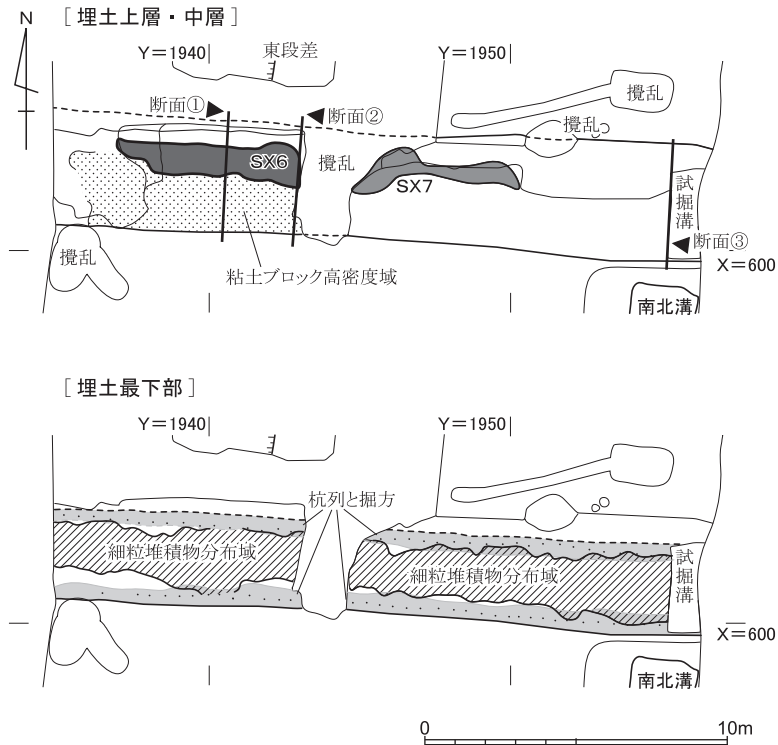


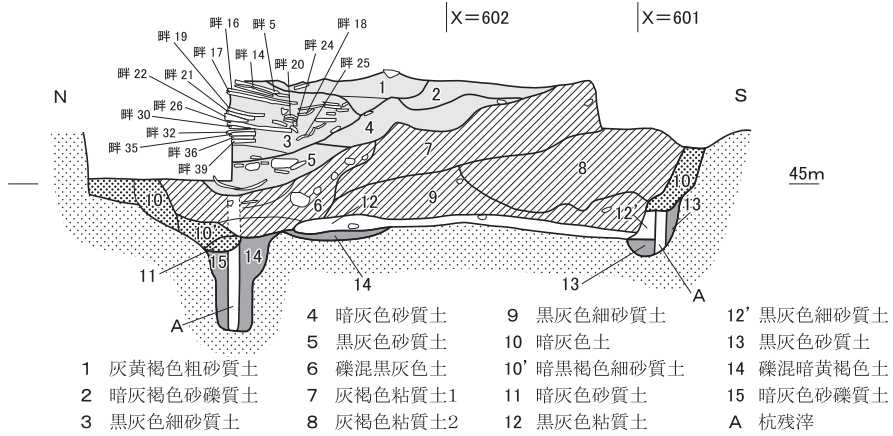
図42 大溝SD 2 縮尺1/250

はおよそ3層に分かれ(図43), 上半は黒灰色~黒褐色の砂質土, 下半は暗灰色~灰褐色の砂質土, そして最下部は, 部分的に粒径3mm程度までの砂層をシート状ないしブロック状に介在する黒褐色粘質土である。しかし, 掘削時には上半と下半の分離が困難だったので, 堆積層のほぼ中央で便宜的に分離して掘り下げた。

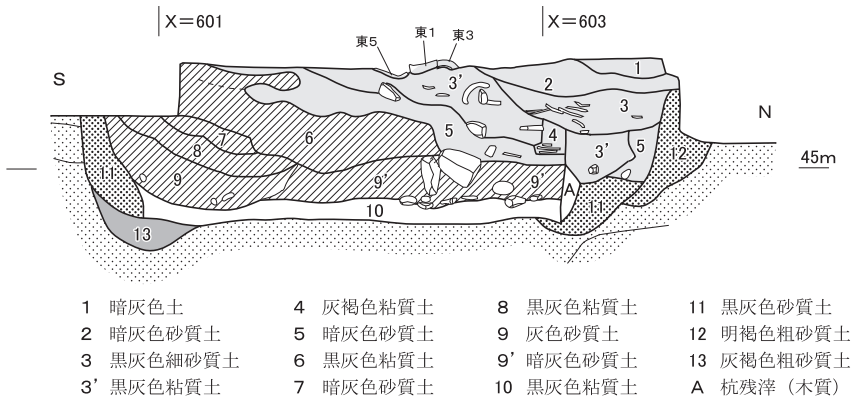
埋土の上半では, 東側に瓦破片集中部SX7を, 西側に瓦積み遺構SX6を, それぞれ北壁側で検出している(図42)。東側は, 溝底から数十cm上位のところまで北壁が北側に40cmほど拡幅されている(図版13-3)。SX6のある西側の北壁は, 底面近くまで攪乱が及んでおり, 壁面の立ち上がりラインからは拡幅があったか捉えられない。埋土上半・下半の砂質土には, 人頭大までの花崗岩を散見できたほか, この遺構周辺には堆積の見られない黄褐色を呈するシルト~粘土の拳大くらいまでのブロックも目立ち, とくに後述するSX6の南側は, 遺物量が少ない反面, その粘土塊の密度が著しく高かった(図版13-1)。埋土最下部の上面では, 腐朽した板材が数点出土したほか, 東半の南壁付近のY=1950ラインあたりで完形の土師器小皿が80cmほどの範囲から3個体出土した(図版13-2)。

近世の遺跡

[SX6中央畔西面](図42の断面①)



[SX6東面](図42の断面②)



[SD2東端東面](図42の断面③)

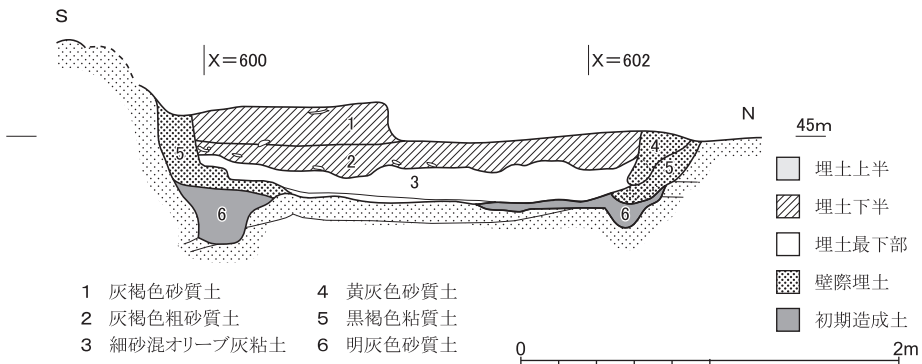


図43 SD2の層位 縮尺1/40

埋土下半の砂質土の掘削中に、南壁の立ち上がり際に腐朽しかけた直径10cm未満の杭を幾本か検出した。そして、最下部の粘質土上面のレベルまで掘り下げると、腐朽したものも含め、杭列として南北の両壁際でもにおよそ50cmでほぼ等間隔に並ぶことが判明した（図版13-2・3, 14-2）。粘質土の除去後には、杭を中心に直径20cmほどの掘り方が、隣り合う杭の掘り方と溝状に連なる状況を確認できた（同13-4）。これらの杭は、基本的に直立しているが、北側の杭列では、SX6の直下に、杭の腐朽ないし抜き取りでできた空隙が北側に傾斜するものがあった（図56の写真「畔下D」）。なお、SX6の北側は、壁が北へ少し張り出しているが、その壁際に杭列はなかった。

SD2埋土はこのようにおよそ3層に分かれるが、最下部はおよそ水平に堆積しているのに対して、下半および上半は、SX6・7の南側では北下がり、北側では南下がりに堆積している。また、下半と上半との間でも、上半と下半にまたがるSX6とSX7の間でも、瓦や陶磁器などかなりの数の接合関係も認められる。こうした状況から、埋土上半・下半の砂質土は短時間のうちにおもに南側から人為的に埋め立てられたものと判断している。

南北溝 東壁際で、急角度で立ち上がり、残存する最大深度が1.5mをはかる深い溝を確認した（図版14-6, 図44）。幅は、確認面で1.5~2.0m、底面で1.3m前後をはかる。南は調査区外へと続くが、北はX=600あたりで、幅をひろげながら、東西両側面よりはやや緩いとはいえ急角度で立ち上がり、SD2の南壁とほとんど接している。埋土は、本調査区では他に堆積の認められない明茶褐色土（第2層）が主体的で、漆喰や陶磁器、さらには被熱したと思われる吸着炭素分が失われたような棧瓦を多量に包含するが、レンガはともなわない。埋土には西下がり単位を認め得るので、おもに東側から短時間に、お

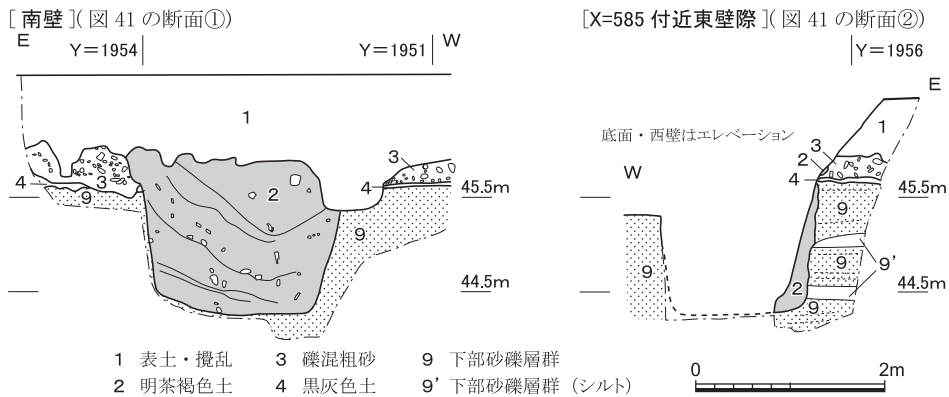


図44 南北溝の層位 縮尺1/80

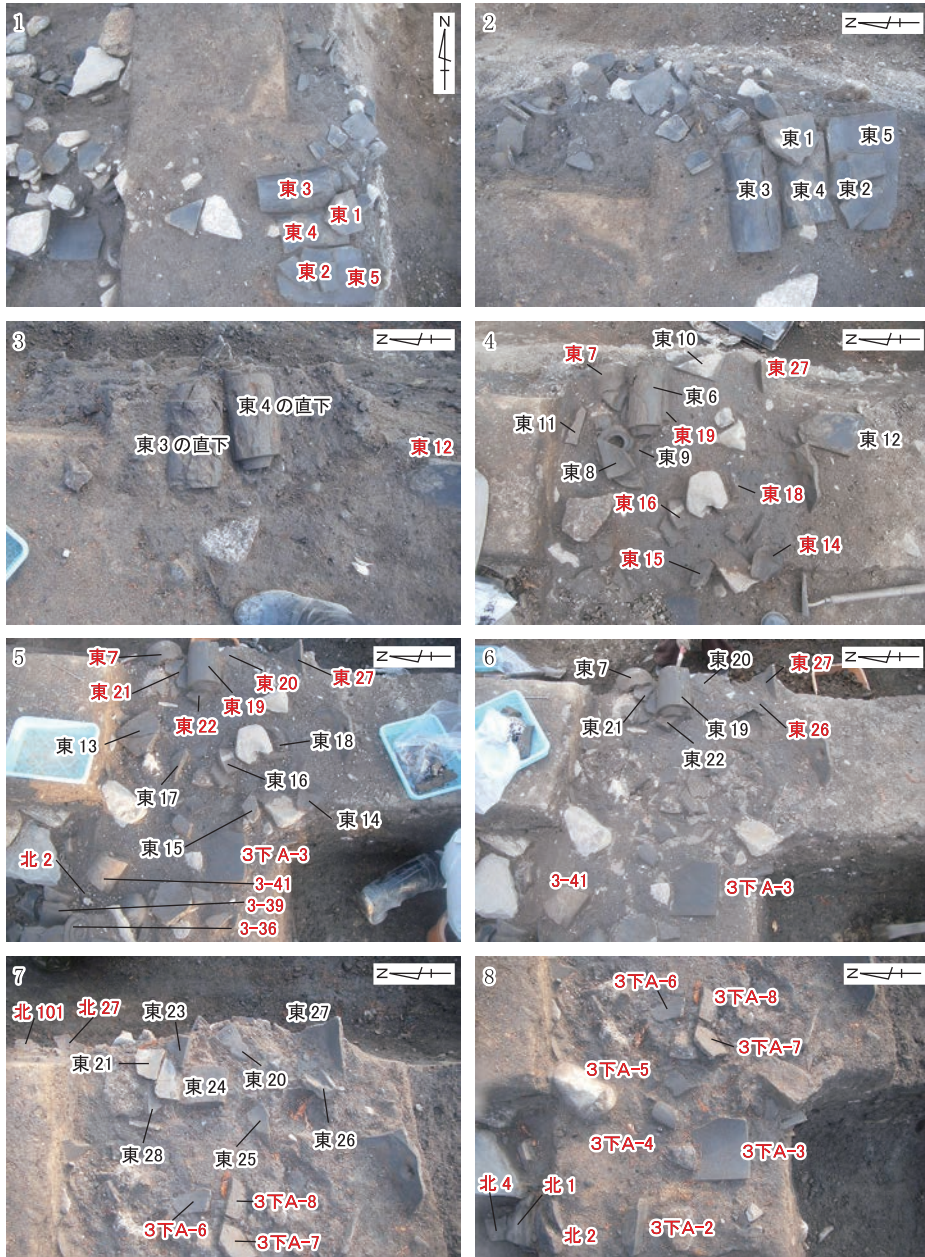
そらく人為的に埋積されたと思われる。陶磁器には近代のものがわずかにしか見られないことから、掘削は近世2期に遡り得る遺構として捉えている。

瓦積み遺構S X 6 大溝SD2の埋土下半から上半にかけて構築された瓦積み遺構で、検出面はSD2のもっとも残りのよい上面標高よりも下位なので、旧地表下に構築されていたことは明らかである。SD2の上面検出前は、後に瓦積みと判明する部分の上部の瓦が東西方向に列状にわずかに顔を出す程度だったが(図版4-1)、溝の埋土を瓦の集中部を残しながら掘り下げていくと、残存幅5.6m、奥行0.7~1.1m、残存高0.4~0.5mの瓦の密集部が露見した(巻首図版・図版2)。このうち、西端から約4m程度は、瓦1枚分に相当する0.3~0.4mの奥行きで北向きに面をそろえ意匠を意識して、瓦を隙間なく積み上げており(図版13-5)、その上面の標高は45.6mをはかる。整然と積まれた瓦には多様な形態のものが含まれるが、北面は個々の瓦も全体の立ち上がりもわずかに上向きになっている(図43の中央畔)。その南側は、おもに棧瓦の破片が陶磁器の破片とともに裏込めのように充満され、その充満部よりも南側は、遺物の密度が急激に低くなるとともに粘土塊を高密度に含むようになる(図版13-1・6, 14-3)。

検出した瓦積み上面が構築当初の状況そのままをとどめていたとは思えないが、裏込め状の瓦がまとまって出土し始めたのは、SD2の埋土を10cmほど掘り下げた後だったので、上部もほとんど削平されていないだろう。また、北向きの面を正面とすれば左側面に相当する東端では、深い攪乱のわずかに西側で(図45)、東を向く軒平瓦(東1)と軒丸瓦(東7)に上下を挟まれるように完形の丸瓦が東西方向に長軸をとって揃えて重ねられていたことから、それらの軒瓦の瓦当面が東面だったと判断できる。ただし、東面の上面の標高は北面の上面の標高と同程度だが、東面で整然と積まれている瓦は、北面ほどの重なりはなく、丸瓦の2列3~4段分であり、また、東面と北面とは接続していない。

西端については、瓦積みの西縁が攪乱を被っており、東面と同様に西面を意識した作りがあったかはわからないが(図版12-5, 13-6)、Y=1940付近、軒丸瓦当を中心にし、両側に鱗瓦を配置し花卉断面を意識したような部分を(図版14-4)、瓦積みの中央に見立てるならば、瓦積み本体の残存部西縁が当初からほぼ西端だったと思われる。

掘削の際には、畔を目安に東から順に、東面、北、エリア3、中央畔、エリア2、エリア1とブロック分けし(図版2)、それぞれのまとまりで記録写真を撮りながら瓦を取り上げた(図45~67)。とくに、各ブロックのうちで整然と積み上げられた部分では、据え置かれた瓦やその周辺の瓦、さらには介在する大型の陶磁器片に個別の出土記録番号を与



黒字は当該写真撮影後に取り上げたもので、赤字は撮影後も残置しているもの。(以下同)

図45 S X 6「東面」の瓦積み遺物取り上げ

近世の遺跡

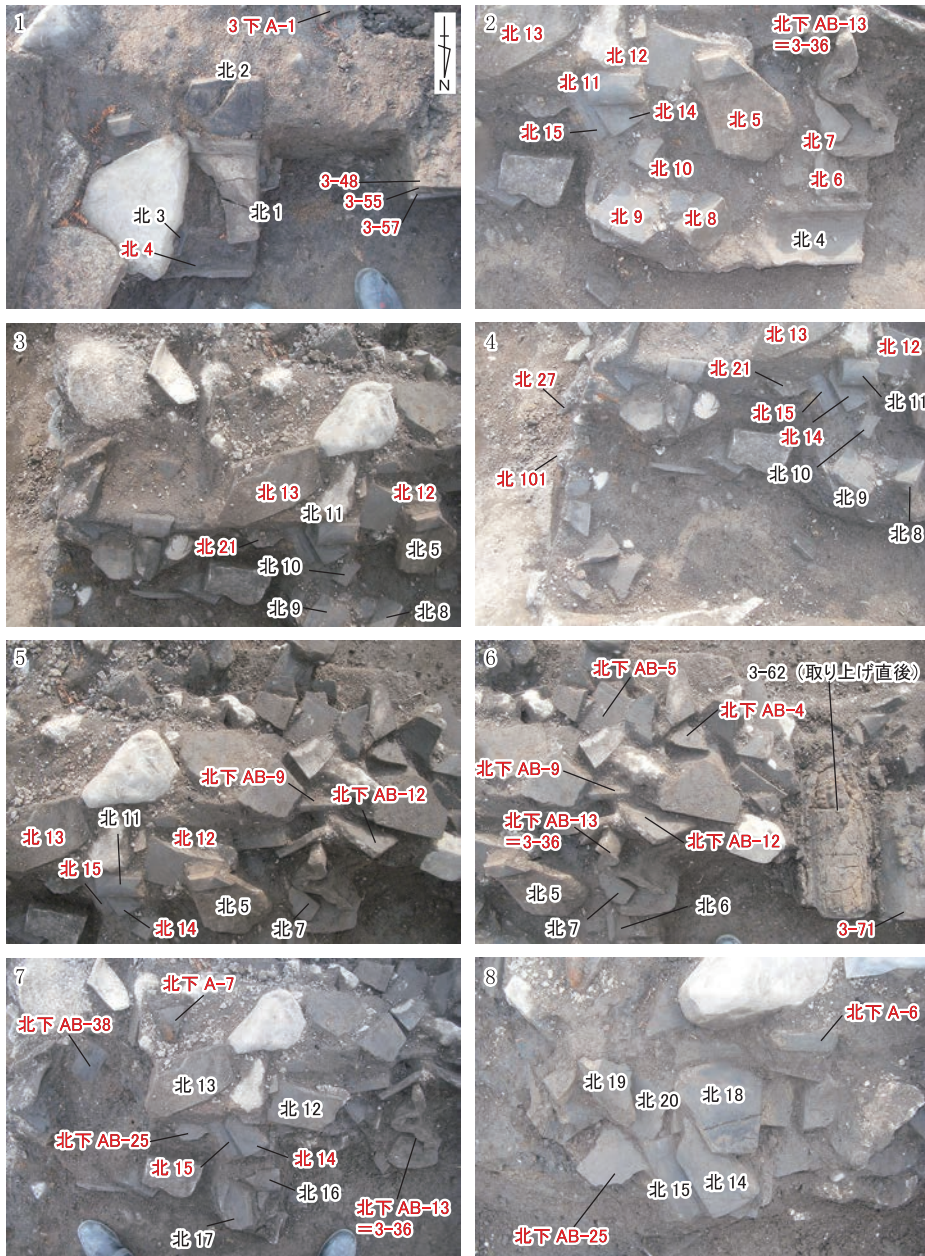


図46 SX 6 「北」の瓦積み遺物取り上げ(1)

京都大学熊野構内Z Z18区の発掘調査

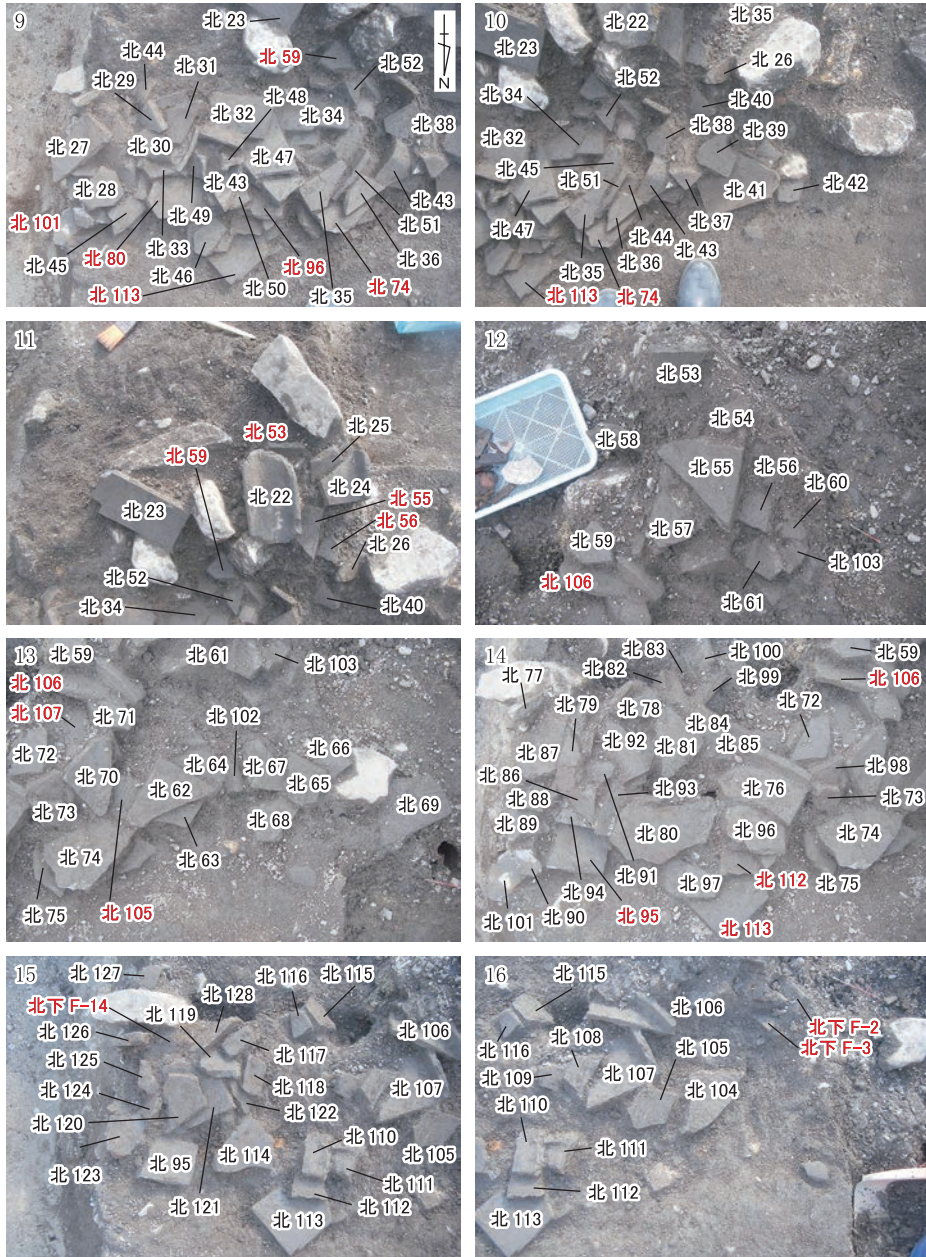


図47 S X 6 「北」の瓦積み遺物取り上げ(2)

近世の遺跡

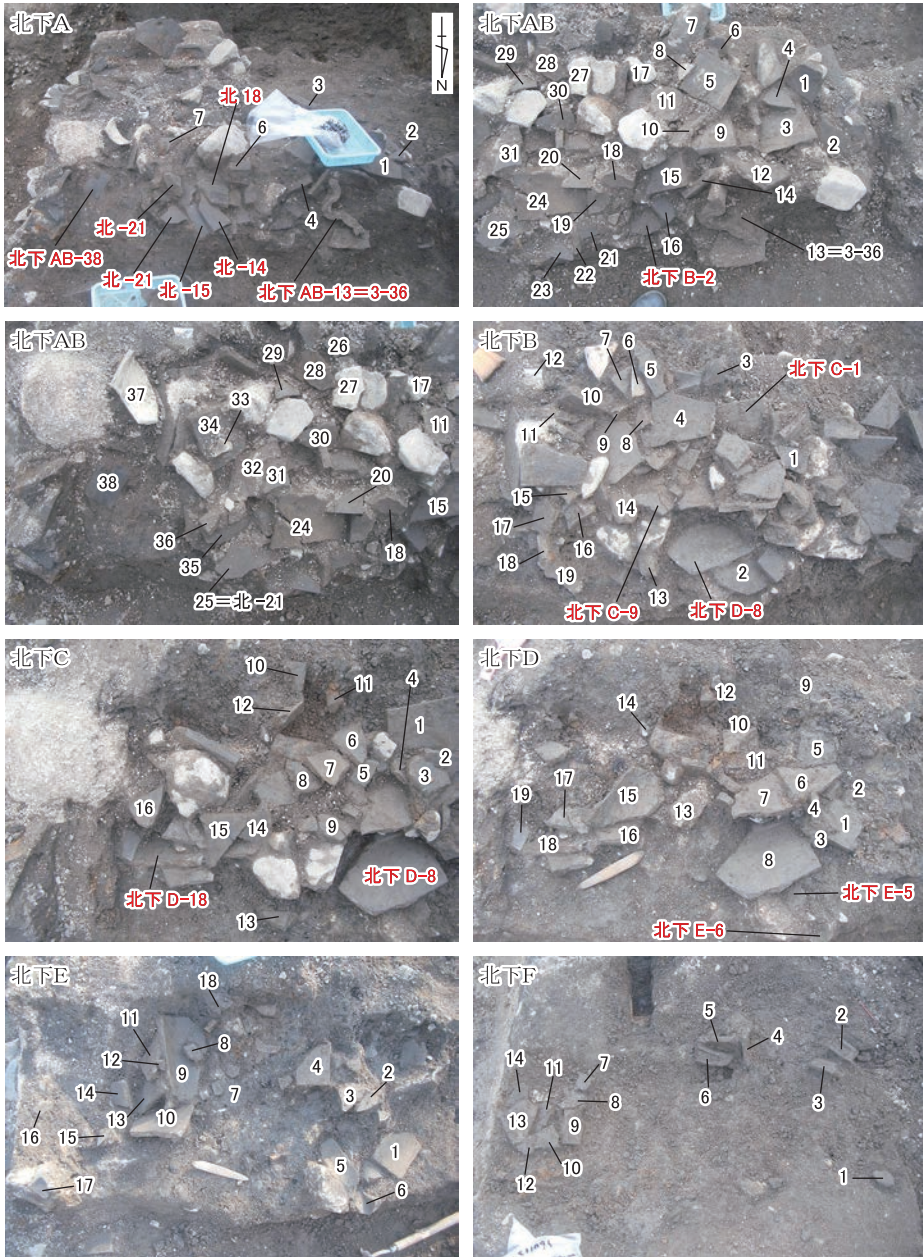


図48 S X 6 「北」の瓦積み下層の遺物取り上げ

京都大学熊野構内Z Z18区の発掘調査



図49 SX6「エリア3」の瓦積み遺物取り上げ(1)

近世の遺跡



図50 SX6「エリア3」の瓦積み遺物取り上げ(2)

京都大学熊野構内 Z Z18区の発掘調査



図51 SX6「エリア3」の瓦積み遺物取り上げ(3)

近世の遺跡

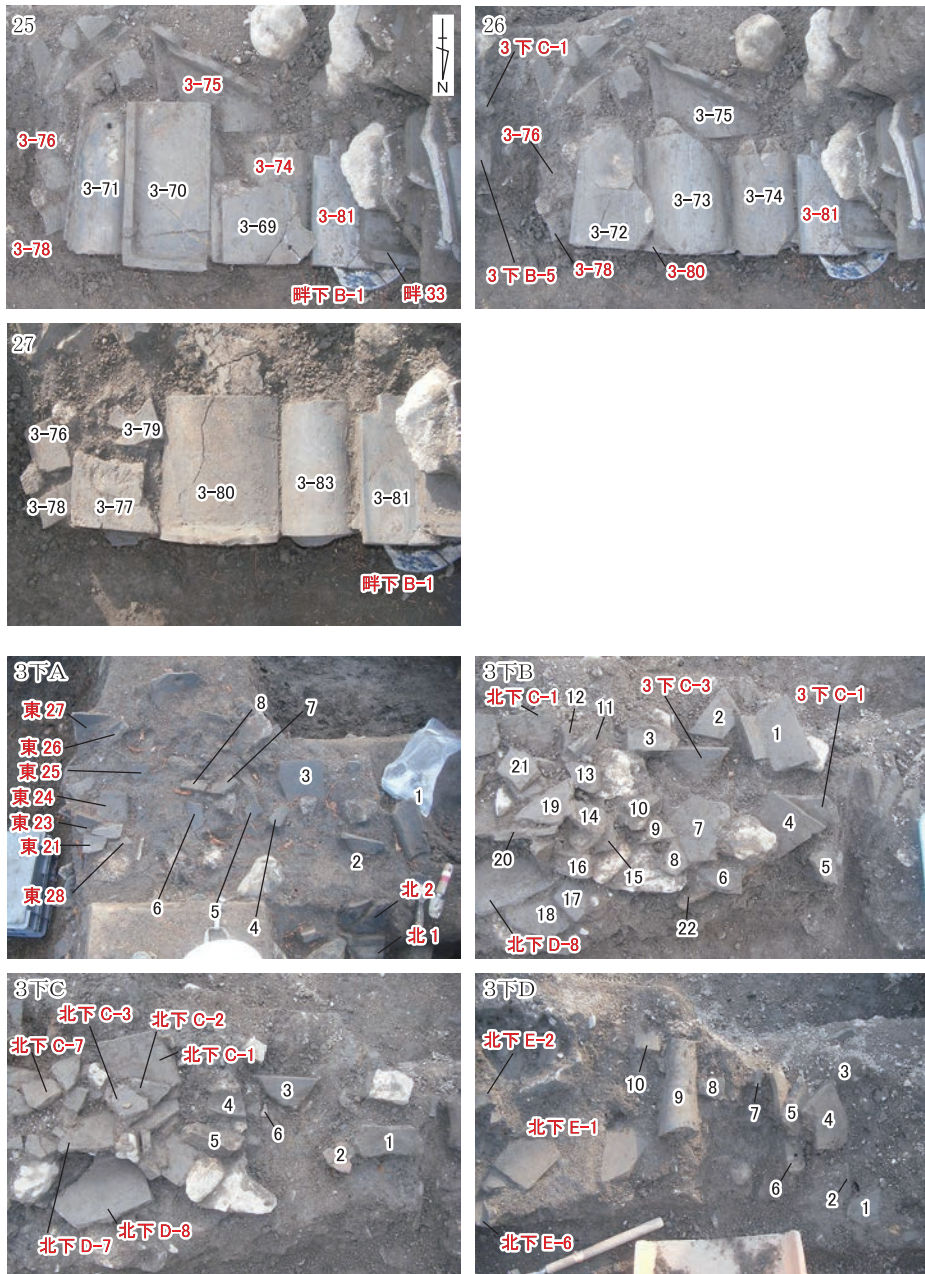


図52 SX6「エリア3」の瓦積みとその下層の遺物取り上げ

京都大学熊野構内Z Z18区の発掘調査

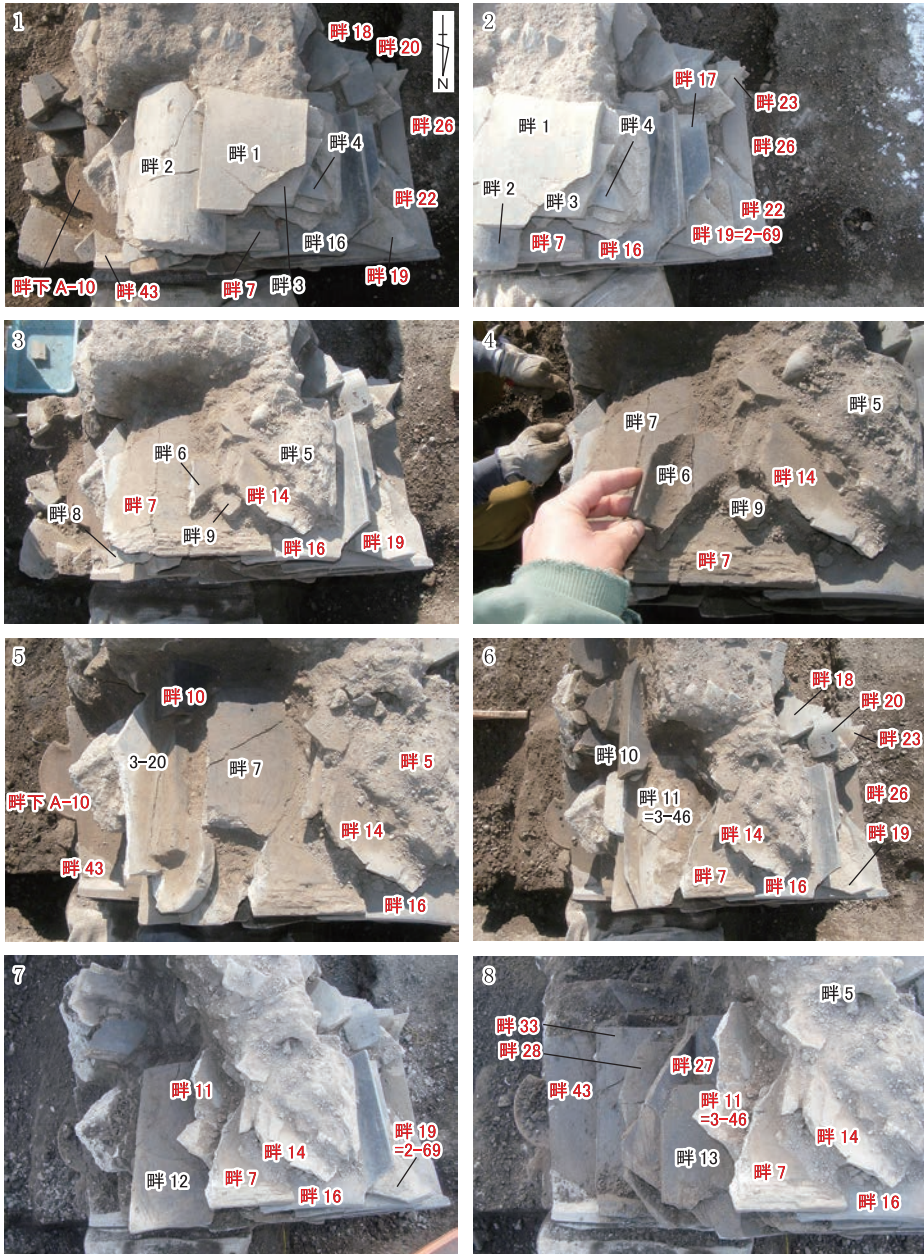


図53 S X 6 「畔」の瓦積み遺物取り上げ(1)

近世の遺跡

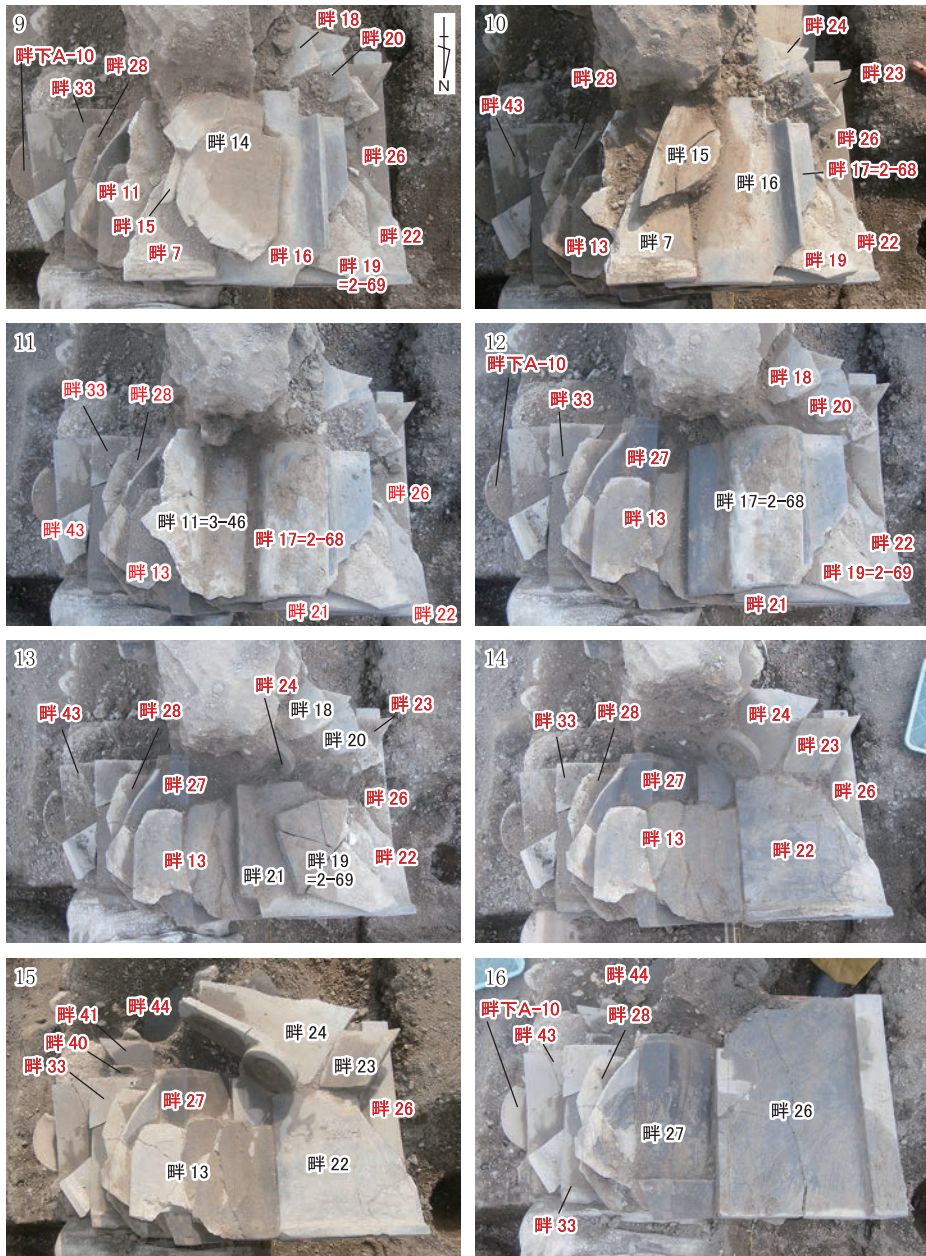


図54 S X 6 「畔」の瓦積み遺物取り上げ(2)

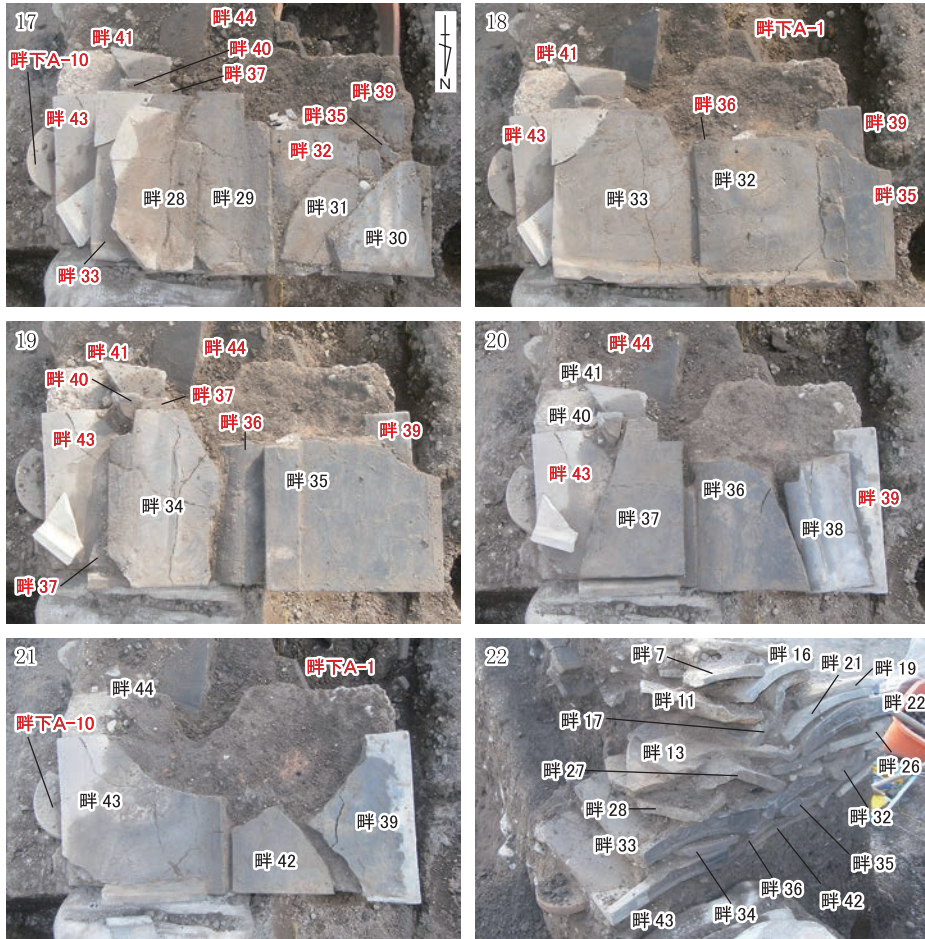


図55 S X 6「畔」の瓦積み遺物取り上げ(3)

えている。これによって、意図的に積まれた瓦一つ一つについて、出土した位置や向き、ほかの瓦との位置関係を、発掘後にも検討できる。これらの出土瓦のうち、特徴的な接合関係のあるものや遺存度の高いものの多くを、表1に示した。

瓦は、裏込めも含めて、南北溝に多く見られたような褐色を呈し被熱したと思われるものはほとんどない。種別を見ると、裏込めには棧瓦の破片が多いが、意図的に並べ置かれた瓦積みの瓦には、多種多様な瓦があり、屋根に葺かれていたままとと思われる完形品も多い。全体的には、棧瓦片が主体なものの丸瓦の比率は低くない。また、丸瓦や棧瓦でも法量は均一ではなく、棟瓦の形態も一様でない上、鬼瓦も多様で一對になるものはない。

北面を意識したエリア1～3の瓦の積み上げは、いずれのブロックも、棧瓦や丸瓦の一

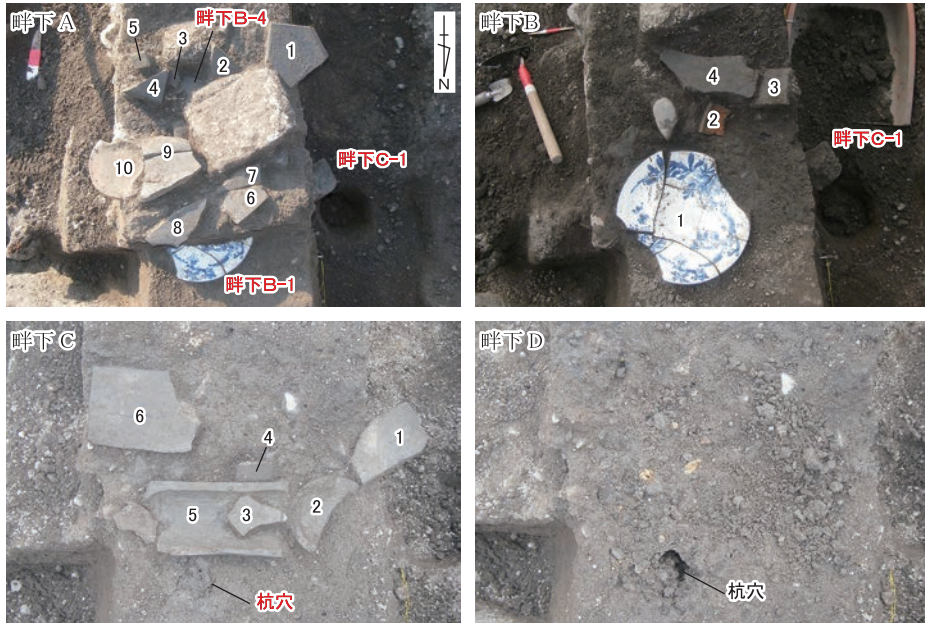


図56 SX6「畔」の瓦積み下層の遺物取り上げ

枚分を奥行きの基本とし、瓦の凸面が天を向くように案配している。しかし、瓦の組成は東西で異なる。東側のエリア3から畔にかけては、棟端瓦がほとんどなく、基盤の埋め戻し土（図43の中央畔第5層）の上に丸瓦や軒棧瓦などを最下から重ねていき上部には棟瓦を多用するのに対し、西側のエリア2からエリア1にかけては、埋め戻し土に瓦片を高密度に混ぜた基盤に大型の棟端瓦を配置してからその上に丸瓦や棧瓦を重ねていく（図版2、13-5）。瓦積みの基底のレベルは、エリア1・2が畔・エリア3よりわずかに高い。

瓦の一連の積み上げを見ると、瓦と瓦の間は、砂質土が入ることが多いが、空洞の場合もある。様々な形態の瓦どうしの空隙には、適切な形状の破片をあてがったり（例えば、エリア1-94）、丸瓦や棧瓦の間でもしばしば小石を噛ませたりして、安定を図っている。ただし、おもに標高45.4m前後から下位では、瓦を取り上げたときに、直下の瓦との隙間に、砂粒をほとんど含まない泥土が乾いた状態で詰まっていることがたびたびあり（例えば、図46の写真6）、泥土は乾燥による収縮でひび割れていることが多かった。

積み上げた瓦には、鬼瓦や鱗瓦のような棟端瓦、軒瓦など、屋瓦として機能するときの正面観を反映する装飾部・瓦当をもつものも多く配置されるが、2点の完形の鱗瓦は瓦正面が南を向き、5点ある鬼瓦の瓦正面は土中で天ないし南を向くので（図版14-1・4）、

京都大学熊野構内Z Z18区の発掘調査



図57 S X 6 「エリア2」の瓦積み遺物取り上げ(1)

近世の遺跡



図58 S X 6 「エリア2」の瓦積み遺物取り上げ(2)



図60 SX6「エリア2」の瓦積み裏込めの遺物取り上げ(1)

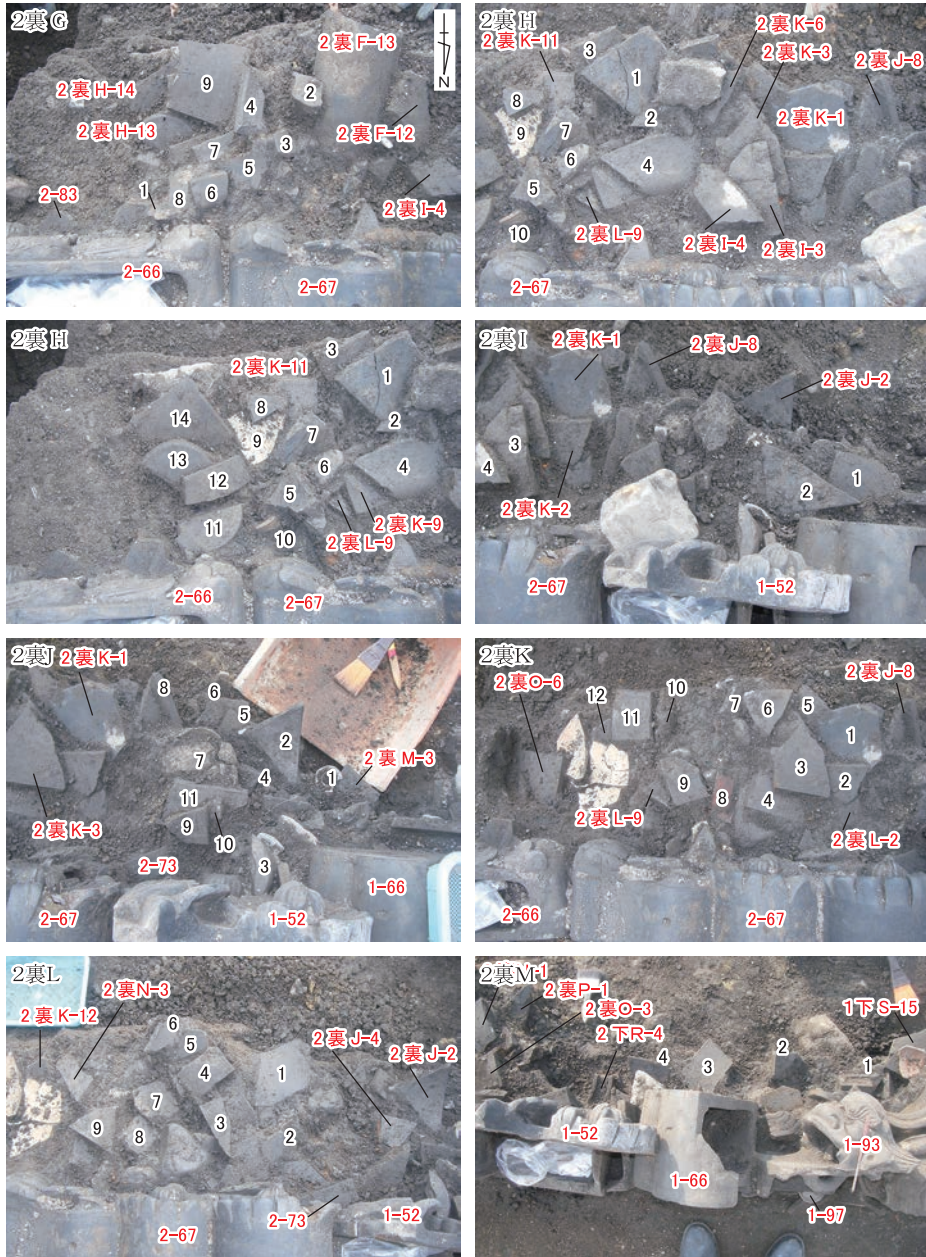


図61 SX6「エリア2」の瓦積み裏込めの遺物取り上げ(2)

近世の遺跡

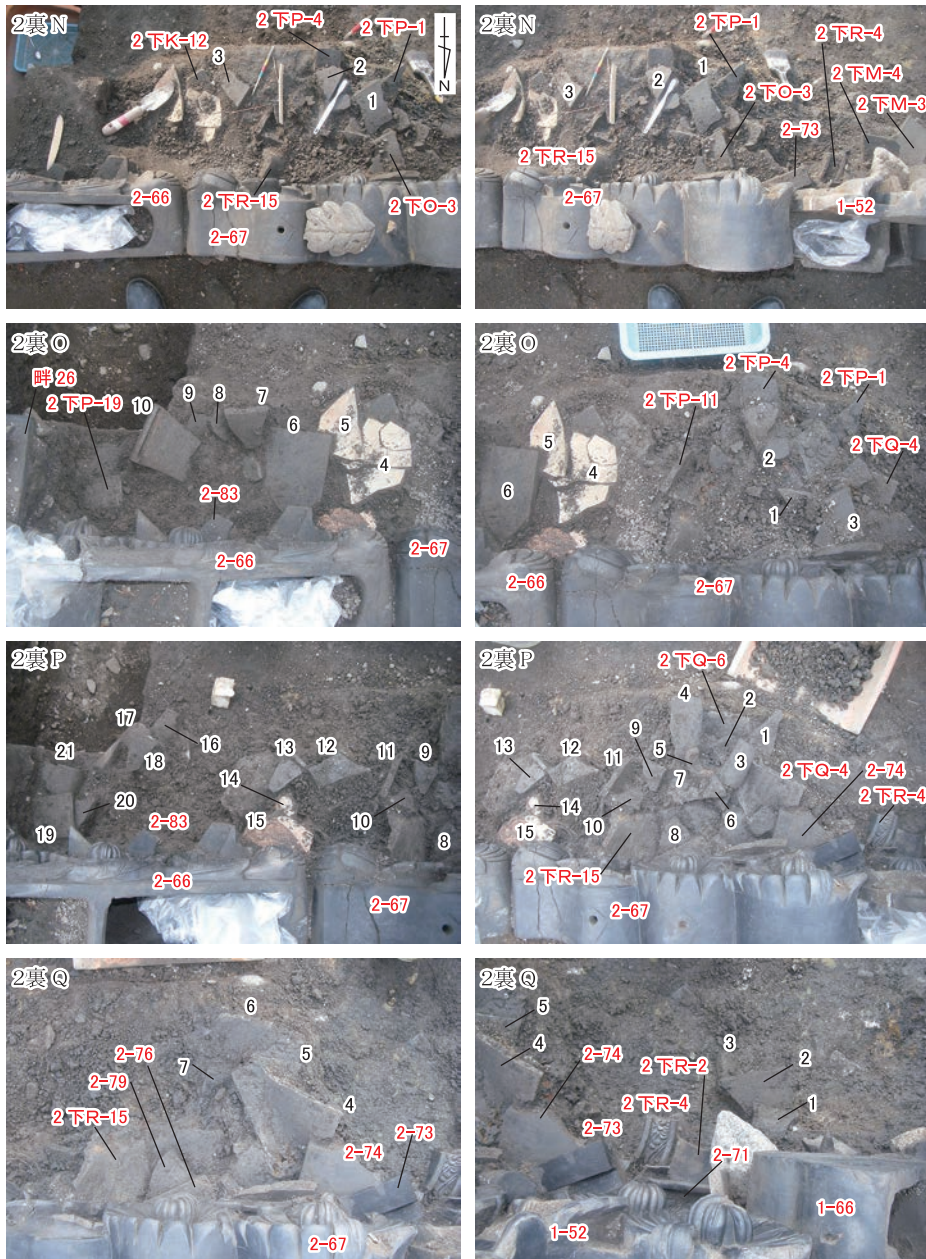


図62 SX 6 「エリア2」の瓦積み裏込めの遺物取り上げ(3)



図63 S X 6 「エリア2」の瓦積み下層の遺物取り上げ

近世の遺跡



図64 SX6「エリア1」の瓦積み遺物取り上げ(1)

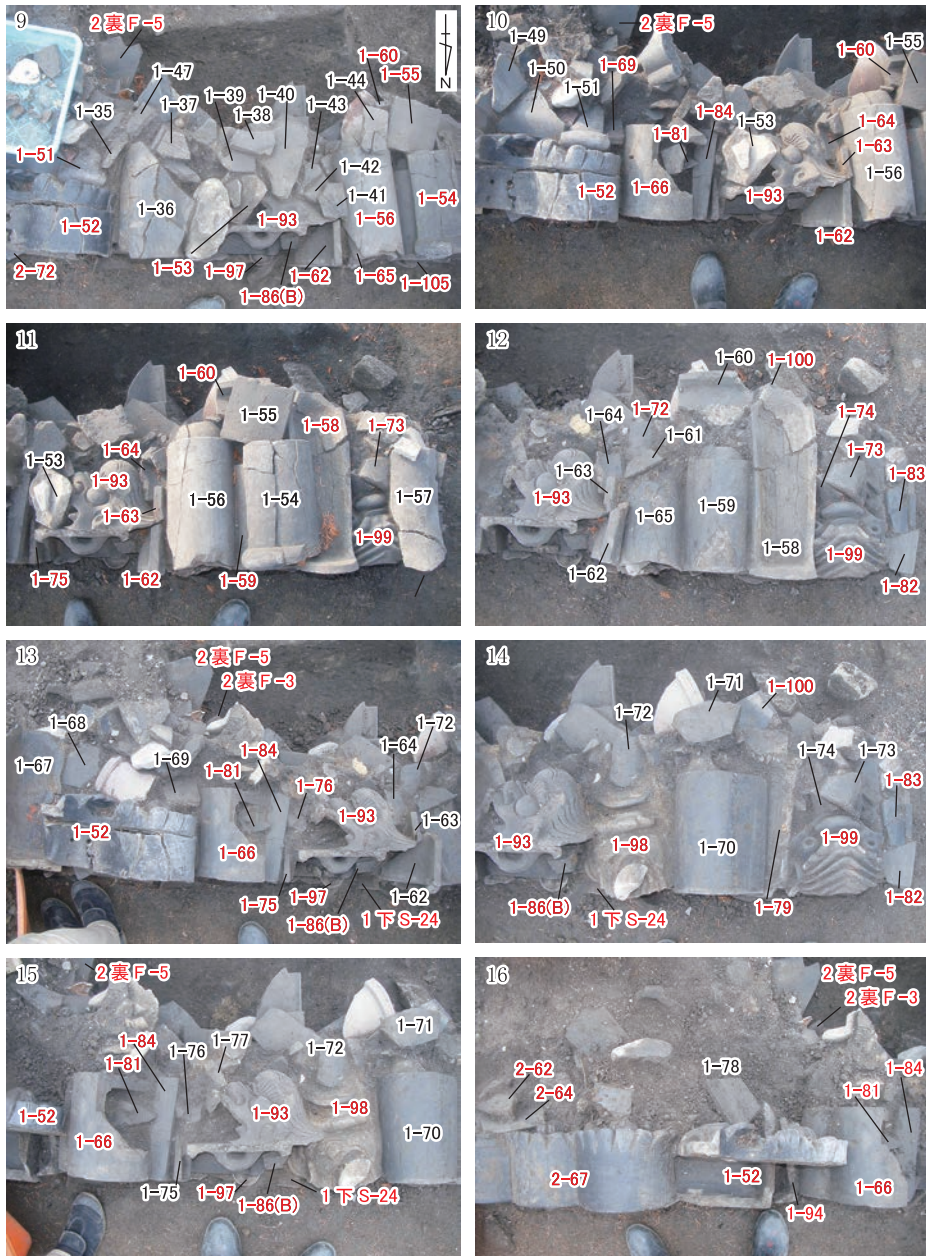


図65 S X 6 「エリア1」の瓦積み遺物取り上げ(2)

近世の遺跡

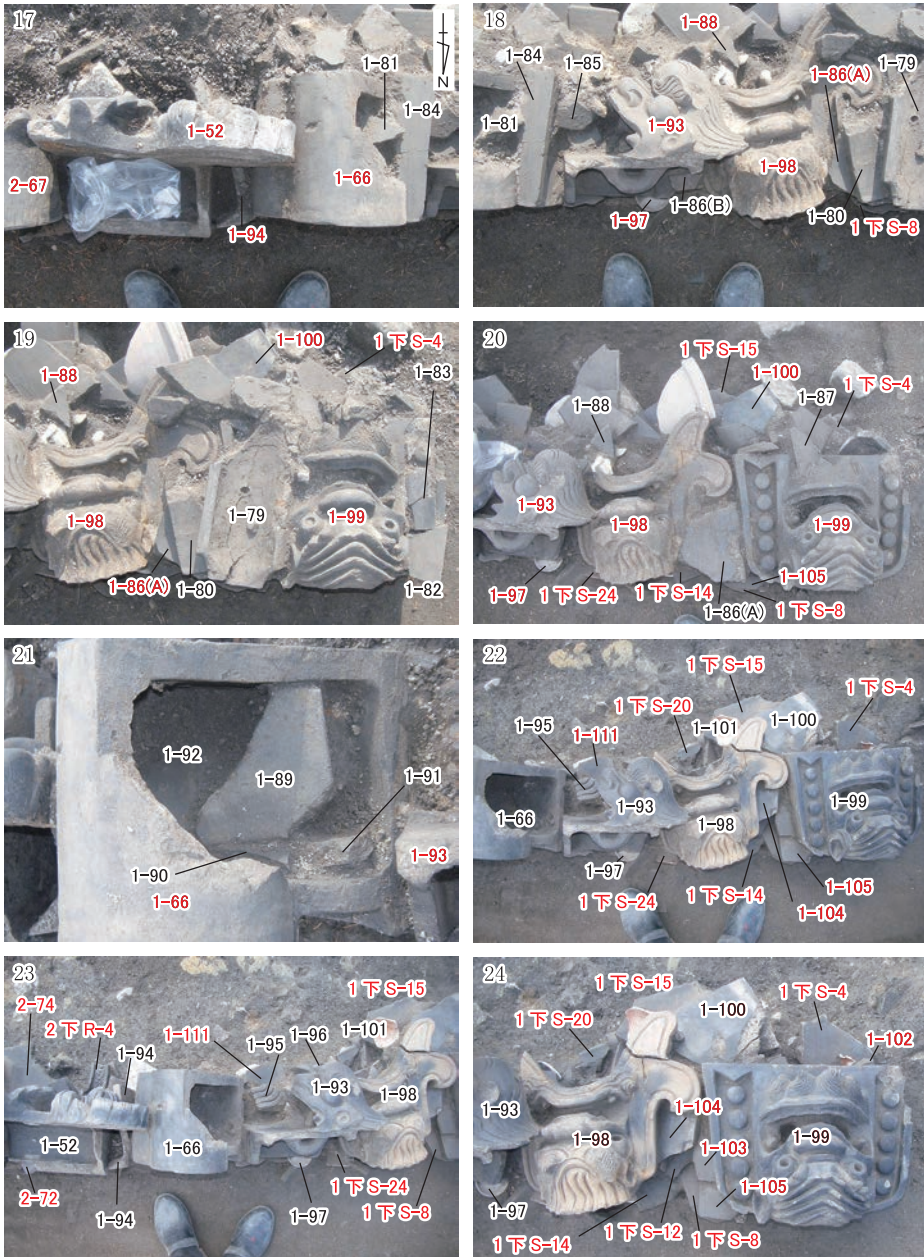


図66 SX6「エリア1」の瓦積み遺物取り上げ(3)

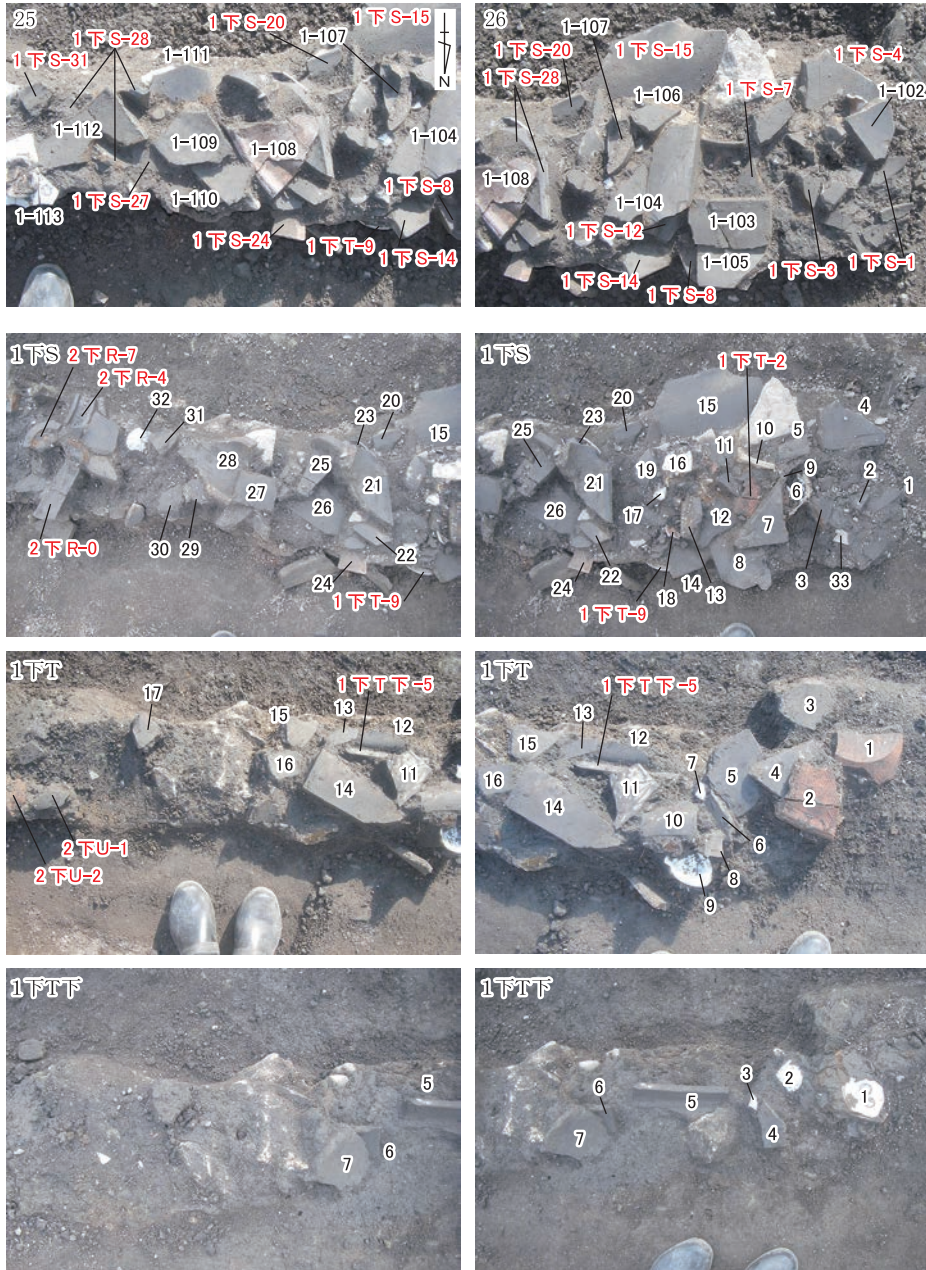


図67 SX6「エリア1」の瓦積みとその下層の遺物取り上げ

近世の遺跡

表1 SX6出土瓦の種類と出土位置

番号 ¹⁾	種別	接合する破片の出土記録番号と取り上げエリアの単位 ^{2) 3)}
SX6-1	軒棧瓦	北110, 北111, 北119, 東畔裏, 北下
SX6-2	軒棧瓦	北62, 東畔裏, 北下
SX6-3	軒棧瓦又は軒平瓦	北77, 北51, 東畔裏
SX6-4	軒棧瓦	北48, 北52, 北93, 北105, 北108, 北下
SX6-5	軒棧瓦	北55, 2598, 2599東畔裏, 北下
SX6-6	軒棧瓦	北47, 北99, 3下, 北下
SX6-7	軒棧瓦	北67, 北74, 北104, エリア3下B-13, 北下F-6, 北下, 東畔裏
SX6-8	軒棧瓦又は軒平瓦	北80, 北86, 北75, 北107, 北124, エリア3下B, エリア3下B-10
SX6-9	軒棧瓦又は軒平瓦	北31, 北42
SX6-10	軒棧瓦又は軒平瓦	北103, 北下F-2, エリア3下B-16
SX6-11	軒棧瓦	北25, 北38, 北88, 北81, 北50, 北76, 北40, 北126, 北下C-13
SX6-12	棧瓦	北27, 北41, 北下D-18, 北下D, 3下
SX6-13	軒棧瓦	北32, 北34, 北下F-5, 3下
SX6-14	軒棧瓦	北58, 北84, 北85, 北100, エリア3下D-5, 北下E-5, 3下, 2裏
SX6-15	棧瓦又は平瓦	北69, 3下, 北下
SX6-16	棧瓦又は平瓦	北96, 北下
SX6-17	棧瓦又は平瓦	北61, 3下, 東
SX6-18a	軒棧瓦	北24, 北39, 3下, 北下, 東畔裏, 東
SX6-18b	棧瓦	北59, 北79, 北下F-4, 北下
SX6-19	棧瓦	北9, 北18, 北下B-19, 北下
SX6-20	棧瓦	北66, 北70, 北73, 北98, 北125, 北下
SX6-21	棧瓦	北7, 東11, 東畔裏
SX6-22	棧瓦又は平瓦	北89, 北95, 東畔裏
SX6-23	平瓦	北13, 北下AB-25, 北下B-18, 東裏
SX6-24	丸瓦	北16, 北下
SX6-25	三角冠瓦	北1, 北5
SX6-26	角棧伏間瓦	北2, 北下
SX6-27	軒棧瓦	北94, 北121, 北下A-1
SX6-28	丸瓦	北15, 北下
SX6-29	軒平瓦	北下, 東畔裏
SX6-30	軒棧瓦	東畔裏, 東
SX6-31	棧瓦	エリア3-29, エリア3-52
SX6-32	棧瓦	エリア3-76, 畔下A-9
SX6-33	車袖瓦(左)	エリア3-20
SX6-34	棧瓦	エリア3-31
SX6-35	棧瓦	エリア3-32
SX6-36	棧瓦	エリア3-61, エリア3下B, 3下, 3裏
SX6-37	棧瓦	エリア3-81, 畔38
SX6-38	棧瓦又は平瓦	エリア3-6, 3
SX6-39	棧瓦	エリア3-47, 3
SX6-40	棧瓦	エリア3-44, エリア3-50, 3裏
SX6-41	棧瓦	エリア3-65
SX6-42	棧瓦	畔28, 畔31, 3裏
SX6-43	平瓦	エリア3-72, エリア3-77, エリア3-79
SX6-44	片切平瓦	エリア3-2, エリア3-3
SX6-45	袖瓦(右)	エリア3-60, 2669
SX6-46	鬘斗付丸瓦	エリア3-38
SX6-47	鬘斗付丸瓦	エリア3-24
SX6-48	平瓦	エリア3-82, 畔39, 畔42
SX6-49	角瓦(右)	エリア3-42, 3
SX6-50	切落入隅堀瓦	エリア3-49, 3裏
SX6-51	角棧切落堀瓦	エリア3-37
SX6-52	鬘斗付丸瓦	エリア3-46, 畔11
SX6-53	谷筋違(右)か	エリア3-56, 畔23

京都大学熊野構内Z Z18区の発掘調査

表1 つづき

番号 ¹⁾	種別	接合する破片の出土記録番号と取り上げエリアの単位 ^{2) 3)}
SX6-54	隅瓦の切隅(右)	エリア3-33, 3, 3裏
SX6-55	角棧切落塀瓦	エリア3-69, 畔35
SX6-56	角棧伏間瓦	エリア3-57
SX6-57	角棧伏間瓦	エリア3-22, エリア3-23
SX6-58	軒丸瓦	エリア3-11
SX6-59	丸瓦	エリア3-9, 3裏
SX6-60	丸瓦	エリア3-15
SX6-61	丸瓦	エリア3-73
SX6-62	丸瓦	エリア3-68
SX6-63	軒丸瓦	エリア3-25, エリア3下A-1, 3裏
SX6-64	袖丸瓦(右)	エリア3-59
SX6-65	軒丸瓦	エリア3-62
SX6-66	丸瓦	エリア3-14, 北外
SX6-67	丸瓦	エリア3-16, エリア3-17
SX6-68	丸瓦(玉縁なし)	エリア3-71
SX6-69	丸瓦	エリア3-1
SX6-70	丸瓦	エリア3-4
SX6-71	丸瓦	エリア3-12
SX6-72	丸瓦	エリア3-19
SX6-73	丸瓦	エリア3-21
SX6-74	丸瓦	エリア3-74
SX6-75	丸瓦	エリア3-83
SX6-76	鬩斗瓦	エリア3-51, 2裏
SX6-77	軒丸瓦(玉縁なし)	エリア3-67, 3裏
SX6-78	小巴軒棧瓦	3裏
SX6-79	丸瓦	エリア3-10, エリア3-28, 3裏
SX6-80	角瓦(右)	エリア3-70
SX6-81	谷口(右)	エリア3-75
SX6-82	切落出隅塀瓦	エリア3-45
SX6-83	軒平瓦	エリア3-80
SX6-84	棧瓦	エリア3-43, 3
SX6-85	棟込瓦(松皮菱)	エリア3-41
SX6-86	棧瓦	畔36, 畔37
SX6-87	棧瓦	畔12
SX6-88	棧瓦	畔13
SX6-89	棧瓦	畔16
SX6-90	棧瓦	畔29
SX6-91	棧瓦	畔34
SX6-92	棧瓦	畔21
SX6-93	棧瓦	エリア2-69=畔19
SX6-94	棧瓦	畔6, 畔9, 畔14, 2, 畔
SX6-95	丸瓦	畔2
SX6-96	丸瓦	エリア2-0, エリア2-5, 畔4
SX6-97	丸瓦	畔5
SX6-98	軒平瓦	畔7
SX6-99	車袖瓦(右)	畔24
SX6-100	小巴軒棧瓦	エリア2-48, 畔15, 畔18, 2裏, 畔裏
SX6-101	軒棧瓦	畔33
SX6-102	軒平瓦	畔22
SX6-103	軒棧瓦	畔43
SX6-104	小巴軒棧瓦	畔32
SX6-105	切落出隅塀瓦	畔44, エリア2裏O-6, 畔下A-1, 畔下A-2, 畔下A-4, エリア2下U下-6, 北外
SX6-106	角棧切落塀瓦	畔26
SX6-107	小巴軒棧瓦	3裏

近世の遺跡

表1 つづき

番号 ¹⁾	種別	接合する破片の出土記録番号と取り上げエリアの単位 ^{2) 3)}
SX6-108	鬘斗付丸瓦	エリア2-68=畔17
SX6-109	丸棧二重箱冠瓦	畔27
SX6-110	棧瓦	エリア2-17
SX6-111	棧瓦	エリア2-74, 西端
SX6-112	棧瓦	エリア2-21, 畔裏
SX6-113	棧瓦	エリア2-13, エリア2-14, 北
SX6-114	平瓦	エリア2-82, エリア2裏G-1, 2裏, SX7
SX6-115	棧瓦又は平瓦	エリア1-110, エリア2-38, 1裏
SX6-116	棧瓦又は平瓦	エリア2-20, エリア2-46
SX6-117	棧瓦又は平瓦	エリア2-64, エリア2裏E-1, 2裏
SX6-118	棧瓦又は平瓦	エリア2-56, エリア2-57
SX6-119	棧瓦	エリア2-60, 2裏, 畔裏
SX6-120	棧瓦	エリア2-6, エリア2-10
SX6-121	棧瓦又は平瓦	エリア2-15, 2
SX6-122	棧瓦又は平瓦	エリア2-23, エリア2-28
SX6-123	小巴軒棧瓦	エリア2-49, エリア1下S-8, エリア1下S-12, 北外
SX6-124	棧瓦又は平瓦	エリア2-65, 2, 2裏
SX6-125	棧瓦	エリア1-78, エリア2-24, 1裏
SX6-126	小巴軒棧瓦	2裏
SX6-127	小巴軒棧瓦	エリア1-73, エリア2下R-7, 2下
SX6-128	棧瓦又は平瓦	エリア2-83, エリア2裏P-9, エリア2裏P-17, SX7, 2裏, 1・2下
SX6-129	切隅(右) 巴	2裏
SX6-130	角瓦(左) か	エリア2-75, エリア2-79, エリア2裏K-6
SX6-131	袖瓦(左)	エリア2-11, 2, 2裏
SX6-132	平瓦	エリア2-76, エリア2裏J, エリア2裏J-11
SX6-133	平瓦	エリア2-16
SX6-134	平瓦	エリア2-43, エリア2裏A-1
SX6-135	平瓦	エリア2-84, 2
SX6-136	割鬘斗瓦	エリア2-2
SX6-137	平瓦	エリア2-72, エリア2裏Q-7, 2裏, 1裏
SX6-138	平瓦	エリア2-59, エリア2-80, エリア2裏D-15, 2, 2裏, 畔裏, SX7
SX6-139	角棧伏間瓦	エリア2-40, エリア2-73
SX6-140	軒平瓦	エリア2-0(w), 2
SX6-141	袖瓦(右)	エリア2-58, エリア2-63
SX6-142	鬘斗付丸瓦	エリア2-47
SX6-143	軒平瓦	エリア2-45, エリア2-52, 2
SX6-144	丸瓦	エリア2-41
SX6-145	丸瓦	エリア2-7, 北外
SX6-146	丸瓦	エリア2-44
SX6-147	丸瓦	エリア2-42
SX6-148	丸瓦	エリア2-9
SX6-149	丸瓦	エリア2-30
SX6-150	軒丸瓦	エリア2-51
SX6-151	丸瓦(玉縁なし)	2裏, 1裏
SX6-152	軒丸瓦	2裏, 1裏
SX6-153	軒丸瓦	2裏, 1裏, 西端
SX6-154	袖丸瓦(左)	エリア2-25
SX6-155	丸瓦	エリア2-50
SX6-156	袖丸瓦(左)	エリア2-22
SX6-157	棧瓦	エリア2-81, エリア2下R-10, 北下C-9, 2, SX7
SX6-158	古巴軒棧瓦	2裏, 3裏
SX6-159	棧瓦	エリア2-4, 2
SX6-160	棧瓦	エリア2-12
SX6-161	棧瓦	エリア2-29

京都大学熊野構内Z Z18区の発掘調査

表1 つづき

番号 ¹⁾	種別	接合する破片の出土記録番号と取り上げエリアの単位 ^{2) 3)}
SX6-162	棧瓦	エリア2-26
SX6-163	棧瓦	エリア2-1
SX6-164	棧瓦	エリア1-75, 2裏
SX6-165	棧瓦	エリア1-71, 2裏
SX6-166	棧瓦	エリア1-102, 1下, 西端
SX6-167	平瓦	エリア1-100, エリア1-104, 2下, 1裏
SX6-168	平瓦	エリア1-48
SX6-169	平瓦	エリア1-1, エリア1-3, エリア1-7, 1裏
SX6-170	棧瓦	エリア1-62, エリア1-63, エリア1-74
SX6-171	棧瓦又は平瓦	エリア1-16, 2裏
SX6-172	棧瓦又は平瓦	エリア1-112, 1, 2裏
SX6-173	棧瓦又は平瓦	エリア1-85, エリア1-86(B), 1裏
SX6-174	棧瓦	エリア1-20, エリア1-41
SX6-175	棧瓦	エリア1-9, エリア1-29, 2裏, 1裏
SX6-176	隅瓦(右)	エリア1-36, 2裏
SX6-177	棧瓦	エリア1-83, エリア2裏K-1, エリア2裏K-7, エリア2裏O-9, 2下
SX6-178	棧瓦	エリア1-47, 1裏
SX6-179	棧瓦	エリア1-61, エリア1-76, 1裏
SX6-180	棧瓦又は平瓦	エリア1-42, 1裏
SX6-181	棧瓦又は平瓦	エリア1-19, 1裏
SX6-182	棧瓦又は平瓦	エリア1-92, 1裏
SX6-183	棧瓦	エリア1-5, エリア1-11
SX6-184	棧瓦	エリア1-38, 1裏
SX6-185	棧瓦	エリア1-91, 2裏
SX6-186	棧瓦	エリア1-25
SX6-187	平瓦	エリア1-45, エリア1-46
SX6-188	割鬨斗瓦	エリア1-49, 1裏
SX6-189	割鬨斗瓦	エリア1-103, エリア1-105
SX6-190	軒棧瓦	エリア1-4
SX6-191	軒棧瓦	エリア1-94
SX6-192	袖瓦(左)	エリア1-84
SX6-193	丸棧二重箱冠瓦	エリア1-13, エリア1-31
SX6-194	軒棧瓦	2裏, 1裏
SX6-195	軒棧瓦	西端
SX6-196	鬨斗付丸瓦(玉縁なし)	エリア1-34
SX6-197	棟込瓦(菊丸)	1裏
SX6-198	丸瓦	エリア1-59
SX6-199	丸瓦	エリア1-56
SX6-200	軒丸瓦	エリア1-79
SX6-201	丸瓦	エリア1-65
SX6-202	袖丸瓦(右)	エリア1-70
SX6-203	丸瓦	エリア1-3, 2, 1裏
SX6-204	丸瓦	エリア1-33
SX6-205	丸棧冠瓦	エリア1-54
SX6-206	冠瓦	エリア1-24
SX6-207	丸瓦(玉縁なし)	エリア1-32, 2裏
SX6-208	軒丸瓦	エリア1-58
SX6-209	半月巴	エリア1-8
SX6-210	丸棧冠瓦	エリア1-14, エリア1-35, エリア1-37, エリア1-51
SX6-211	軒丸瓦	エリア1-67
SX6-212	軒丸瓦	エリア1-107, エリア2FR-18
SX6-213	軒丸瓦	1, 1下, 西端
SX6-214	隅巴か	エリア1-57
SX6-215	棧瓦又は平瓦	3裏, SX7

近世の遺跡

表1 つづき

番号 ¹⁾	種別	接合する破片の出土記録番号と取り上げエリアの単位 ^{2) 3)}
SX6-216	棧瓦	3裏, SX7
SX6-217	棧瓦	3裏, SX7
SX6-218	棧瓦	2裏, SX7
SX6-219	棧瓦	東畔裏, SX7
SX6-220	棧瓦	2裏, 西端, SX7
SX6-221	棧瓦	3裏, SX7
SX6-222	棧瓦	エリア2裏I-3, エリア2裏I-4, 1裏, SX7
SX6-223	棧瓦	2裏, SX7
SX6-224	角棧塀瓦	2裏, SX7
SX6-225	軒棧瓦	エリア2裏E, エリア2裏E-3, SX7
SX6-226	鷗尾か	3下, SX7
SX6-227	棧瓦	北下E-9, SX7
SX6-228	棧瓦	エリア2裏B-4, エリア2裏B-5, SX7
SX6-229	棧瓦又は平瓦	2裏, SX7
SX6-230	平瓦	エリア2-85, SX7
SX6-231	棧瓦	北下A, SX7
SX6-232	伏間瓦	北下AB-7, SX7
SX6-233	軒丸瓦	エリア3-5
SX6-234	軒丸瓦	エリア3-26
SX6-235	丸瓦	東3
SX6-236	丸瓦	東3の下
SX6-237	丸瓦	東4
SX6-238	丸瓦	東4の下
SX6-239	丸瓦	東6
SX6-240	袖瓦(右)	東12, 東27, 東畔裏
SX6-241	棧瓦又は平瓦	エリア2-55, エリア2裏B-6, エリア2裏D-6
SX6-242	棧瓦又は平瓦	エリア3-13
SX6-243	棧瓦又は平瓦	エリア3-48
SX6-244	棧瓦	エリア3-30
SX6-245	棧瓦	エリア3-18
SX6-246	丸瓦	エリア3-27
SX6-247	丸瓦	エリア3-8
SX6-248	半月巴	エリア3-58
SX6-249	棧瓦	エリア3-53
SX6-250	棧瓦	エリア3-54
SX6-251	破風塀瓦か	エリア3-55
SX6-252	棧瓦	エリア3-66
SX6-253	棧瓦	エリア3-34
SX6-254	棧瓦又は平瓦	エリア3-35
SX6-255	右切隅瓦	エリア1-23
SX6-256	軒棧瓦又は軒平瓦	エリア1-86(A)
SX6-257	丸瓦	エリア2-30
SX6-258	棧瓦又は平瓦	エリア2-31
SX6-259	敷平か	畔1
SX6-260	塀瓦	畔30
SX6-261	軒棧瓦又は軒平瓦	東1
SX6-262	棧瓦	東5
SX6-263	軒丸瓦	東7
SX6-264	丸瓦	東19

1) 個体番号のゴチック表示は図91～102に掲げた個体。

2) 「裏」は裏込め, 「下」は基盤。ともに, 出土記録番号は図45～67の表記に対応する。

3) 出土記録番号のある瓦でも個体番号が与えられていないものがある。

いずれもこの瓦積みの遺構正面を向いていない。瓦正面が遺構正面を向くように置かれた瓦は、軒棧瓦と軒平瓦・軒丸瓦に限られる。ただし、これらの軒瓦も、凸面が天を向くように置かれることが多く、おもに軒丸瓦は正位だが軒平瓦・軒棧瓦は逆位に据えられる。なお、それらの軒丸瓦の大半は、瓦当が剥落しているか瓦当の下半を欠いているが、遺構正面の面はその状態で揃っており、瓦当の欠損部分の破片は瓦積みの北側からも確認できていないので、瓦積みとしての配置以前に瓦当を剥落・欠落していたと思われる。

瓦の接合関係を見ると、東面と北のブロックでは、南側から出土した破片のほうが北側から出土した接合破片より高い位置にある、また東側から出土した破片のほうが西側から出土した接合破片より高い位置にある、という組み合わせが複数ある。さらに、エリア3の東辺に瓦正面が上向きで天地は南向きに据え置かれた鬼瓦（エリア3-36）は、瓦の側面のうち東側に位置する部分が剥離し、その大きな破片（北下A B-13）も北下がりの立位に近い状態で落ち込んだように出土した。なお、上面出土の丸瓦（エリア2-7）が、北面より北側で瓦積みの基底付近の深さから出土した大破片と接合している（図版14-5）。

(3) 近世の遺物（図版25～29、図68～110、表1）

近世の遺構から出土した遺物を下に示す。

S D43出土遺物（I 563～I 588） 遺構の説明でも述べたように、S D43については、出土遺物に近世の陶磁器片が含まれていたことと、溝の肩にあたる茶褐色土Ⅱから近世陶器片が出土したことから、中世の遺構ではないと判断した。ただし、出土遺物の大半が中世の時期のものと考えられる点から、遺構の時期の判定についてはなお不安が残る。本報告では近世の早い時期の遺構として報告するが、念のため、近世の陶磁器片だけでなく、中世の遺物も含めて出土遺物を提示する。

I 563～I 568はS D43から出土したものでなく、溝の東西肩の茶褐色土Ⅱから出土したものである。つまり、S D43が形成される以前の時代の遺物である。I 563・I 564は土師器碗の口縁部片。いずれも褐色を呈する。I 565は陶器の碗で、口縁部の内面には釉がかからない。I 566は陶器の甕である。内外面が横撫でされる。I 567は青磁の合子蓋。外面にのみ釉がかけられる。I 568は磁器染付碗である。この染付碗が出土したことから、S D43だけでなくその下にひろがる包含層の茶褐色土Ⅱも近世のものと判断した。

I 569～I 588はS D43から出土した。I 569～I 579は土師器である。I 574のみ白色で、ほかは褐色を呈する。I 569～I 571は小皿で、I 572～578は中皿である。I 575～I 578はF類の皿で、中世に遡る時期の土師器である。I 579は焙烙と思われるが、底が分厚い点

近世の遺跡

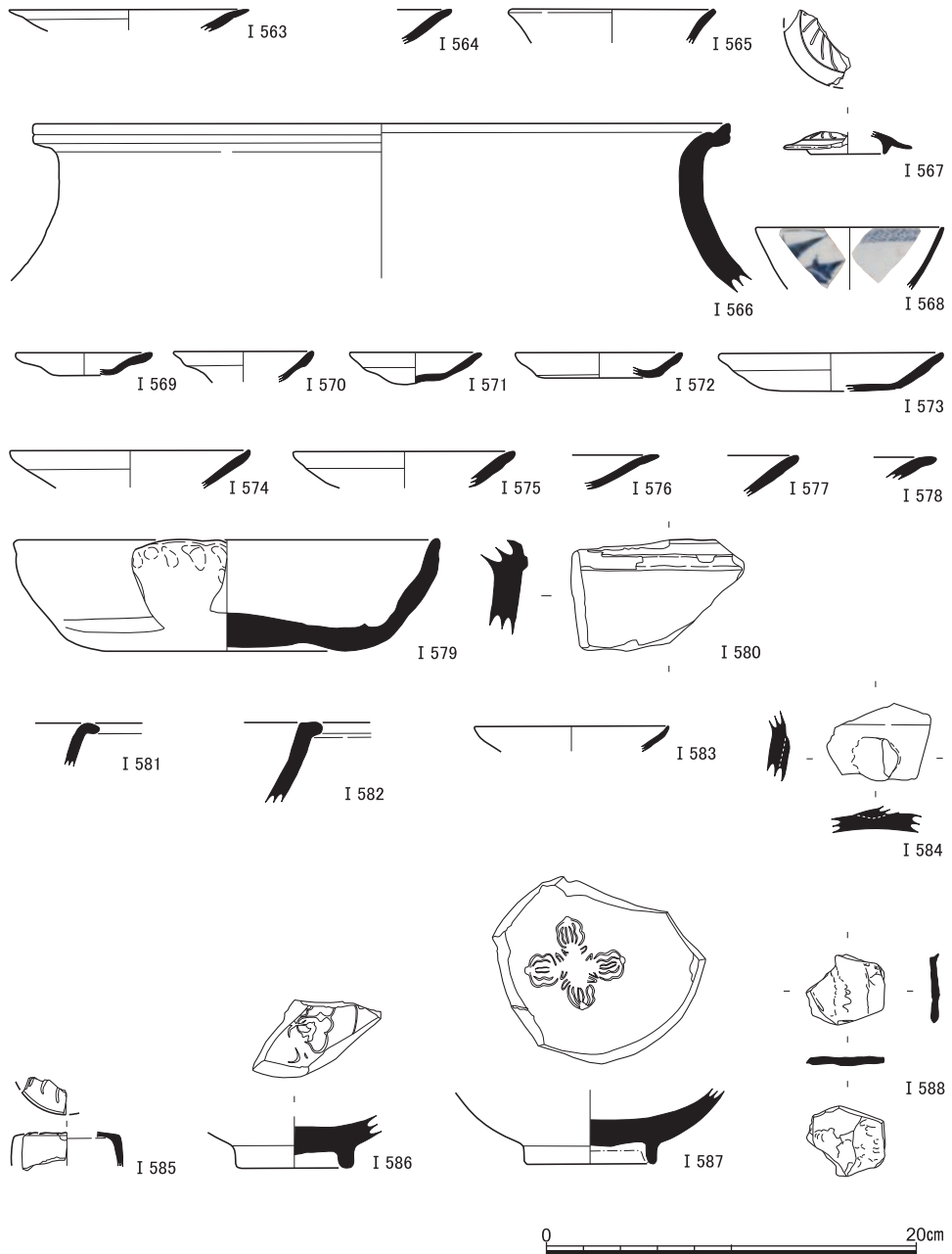


図68 S D43東西肩茶褐色土Ⅱ出土遺物 (I 563・I 564土師器, I 565・I 566陶器, I 567青磁, I 568磁器), S D43出土遺物 (I 569~I 579土師器, I 580瓦器, I 581~I 584陶器, I 585~I 587青磁, I 588砥石)

から、特大の皿と考えるべきかもしれない。I 580は瓦器の火鉢である。I 581～I 584は陶器である。I 581の器種は不明である。I 582は播鉢と思われる。5 mm大以下の砂粒を多く含み、胎土は粗い。I 583は皿である。I 584は壺の耳と考えられる。I 585～I 587は青磁である。I 585は合子の蓋の破片で、外面にのみ釉がかかる。I 586・I 587は大型碗の高台である。いずれも、見込みに植物文をかたどった透かし文様が入られる。I 588は砥石の破片である。

S X15出土遺物 (I 589～I 593) I 589は土師器の焼塩壺である。I 590・I 591は陶器である。I 590は碗で、I 591は播鉢である。I 592・I 593は磁器である。I 592は染付の碗で、I 593は皿である。I 593のような見込みに朱色の蛇の目の入る皿は、平安京左京北辺四坊のB区土坑B776でも出土している。土坑B776に1730年頃の年代が与えられていることから、S X15も18世紀前葉頃の遺構であると考えられる〔京都市埋文研編2004 図版4 - B776〕。

S X13出土遺物 (I 594～I 647) I 594～I 606は土師器である。I 594～I 597は小皿。I 598～602は中皿。I 600～I 602の見込みにには圈線が入る。I 597・I 598・I 600の口縁部には煤が付着する。灯明皿として用いられたようだ。I 603は蓋のつまみ、I 604は蓋、I 605は鉢と考えられる。I 606は炮烙の口縁部である。I 607は伏見人形で、狐をかたどったものと思われる。

I 608～I 633は陶器である。I 608～I 618は碗、I 619・I 620は鉢、I 621～624は播鉢、I 625・I 626は蓋、I 627は器種不明、I 628・I 629は土鍋、I 630・I 631は花瓶である。I 632は植木鉢の底部と考えられ、I 633は器種不明である。

I 634～I 647は磁器である。I 634は皿、I 635～I 646は碗である。I 635のようなまっすぐに立ちあがる器形は、18世紀中葉頃の遺構で認められる〔京都市埋文研編2004 H166-14・H271-65・66〕。I 647は仏飯である。

S K11出土遺物 (I 648～I 659) I 648～I 652は土師器である。I 648～I 651は皿である。I 651のみ褐色で、ほかは白色である。I 652は鉢と思われる。I 653～I 655は陶器である。I 653は皿、I 654は播鉢、I 655は碗である。I 656は磁器染付碗である。I 657は瓦器火鉢である。I 658は伏見人形である。I 659は石製品で、硯かもしれない。

S D33出土遺物 (I 660～I 669) I 660・I 661は土師器である。I 660は見込みに圈線をもつ白色の皿である。I 661は口縁部が波打つ。I 662は軟質施釉陶器の皿である。見込みに圈線がはしり、口縁部につまみがつく。I 663・I 664は陶器である。I 663は碗、

近世の遺跡

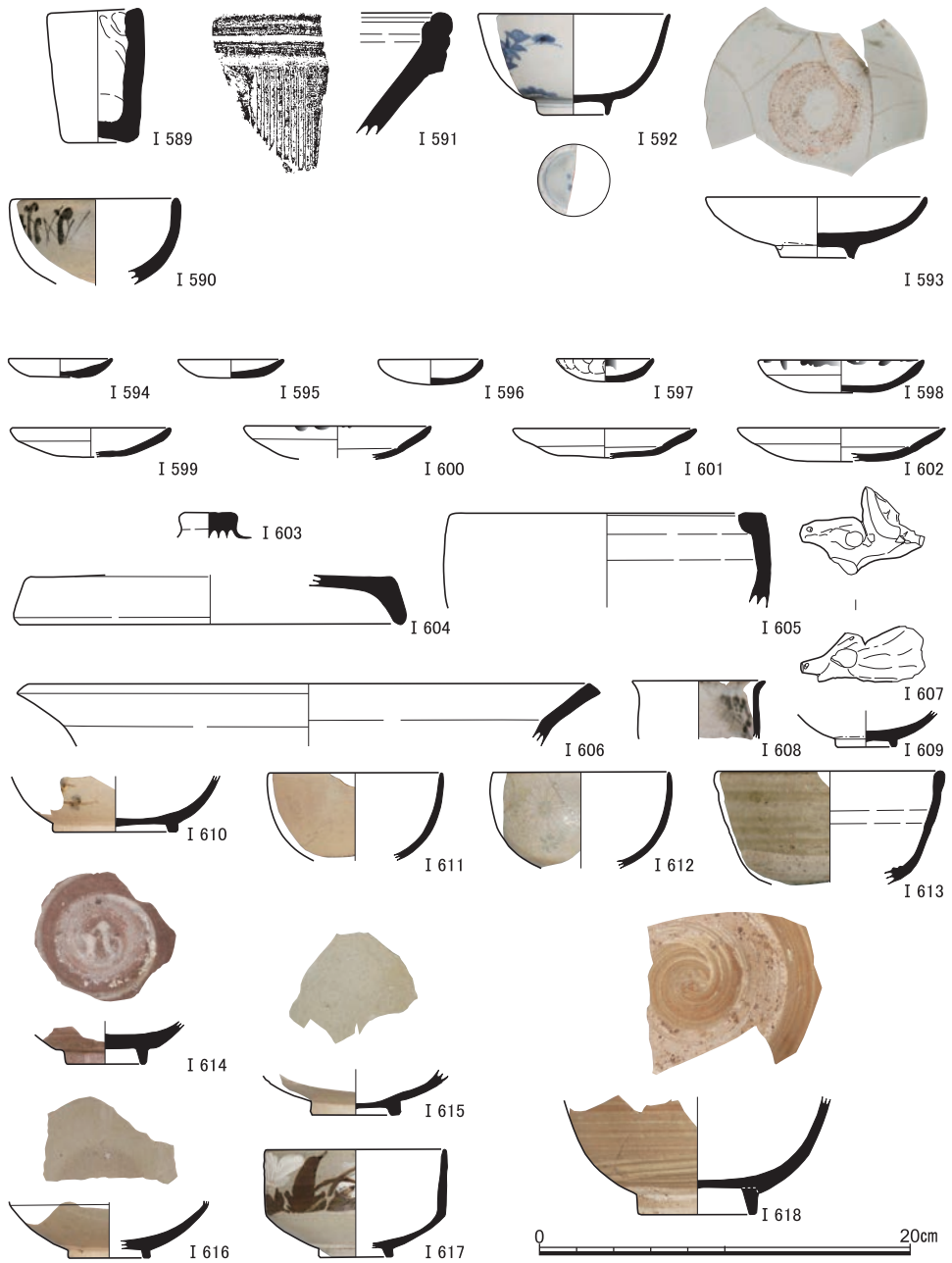


図69 S X15出土遺物 (I 589土師器, I 590・I 591陶器, I 592・I 593磁器), S X13出土遺物(1) (I 594~I 606土師器, I 607伏見人形, I 608~I 618陶器)

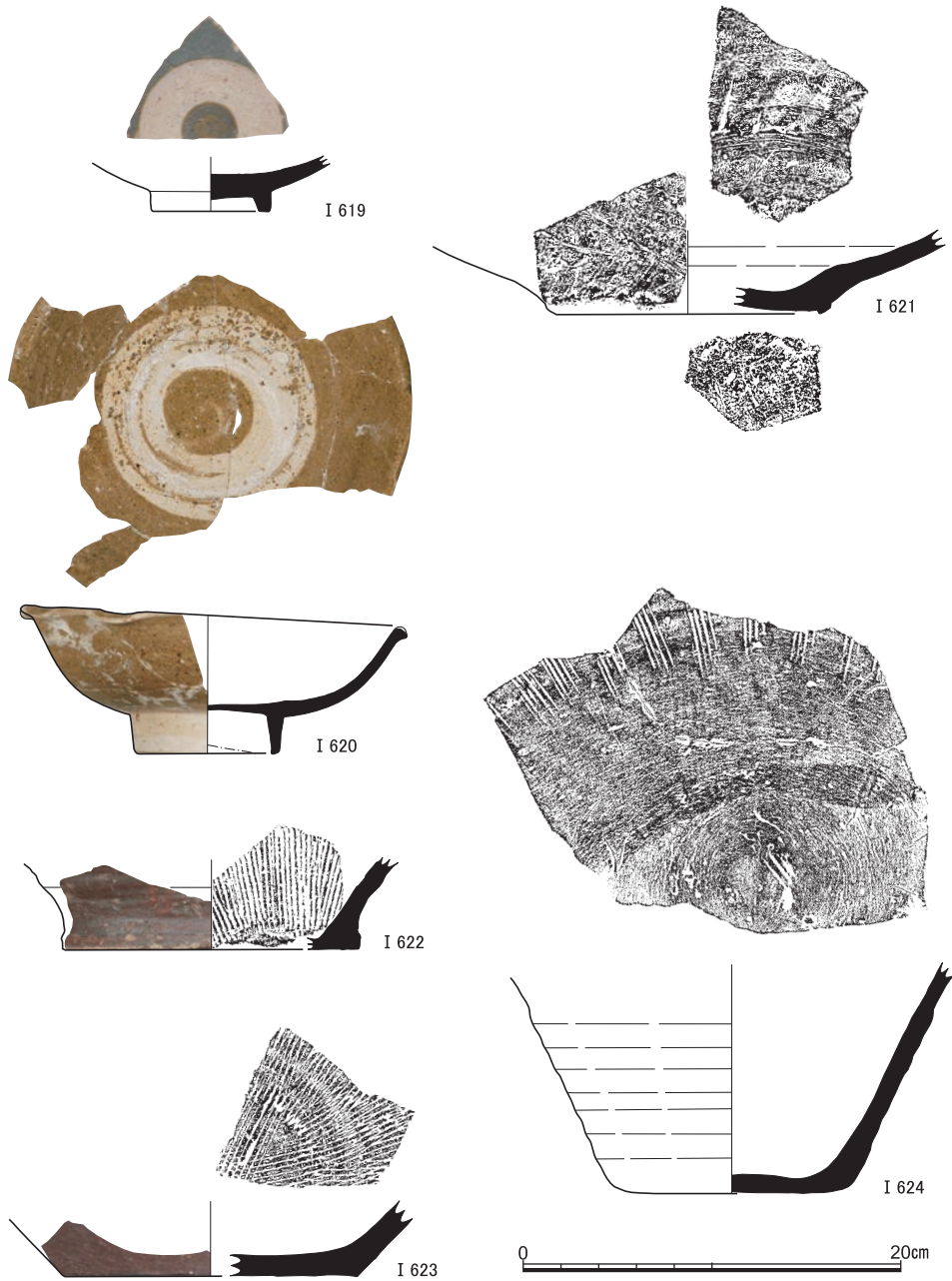


図70 S X13出土遺物(2) (I 619~624陶器)

近世の遺跡

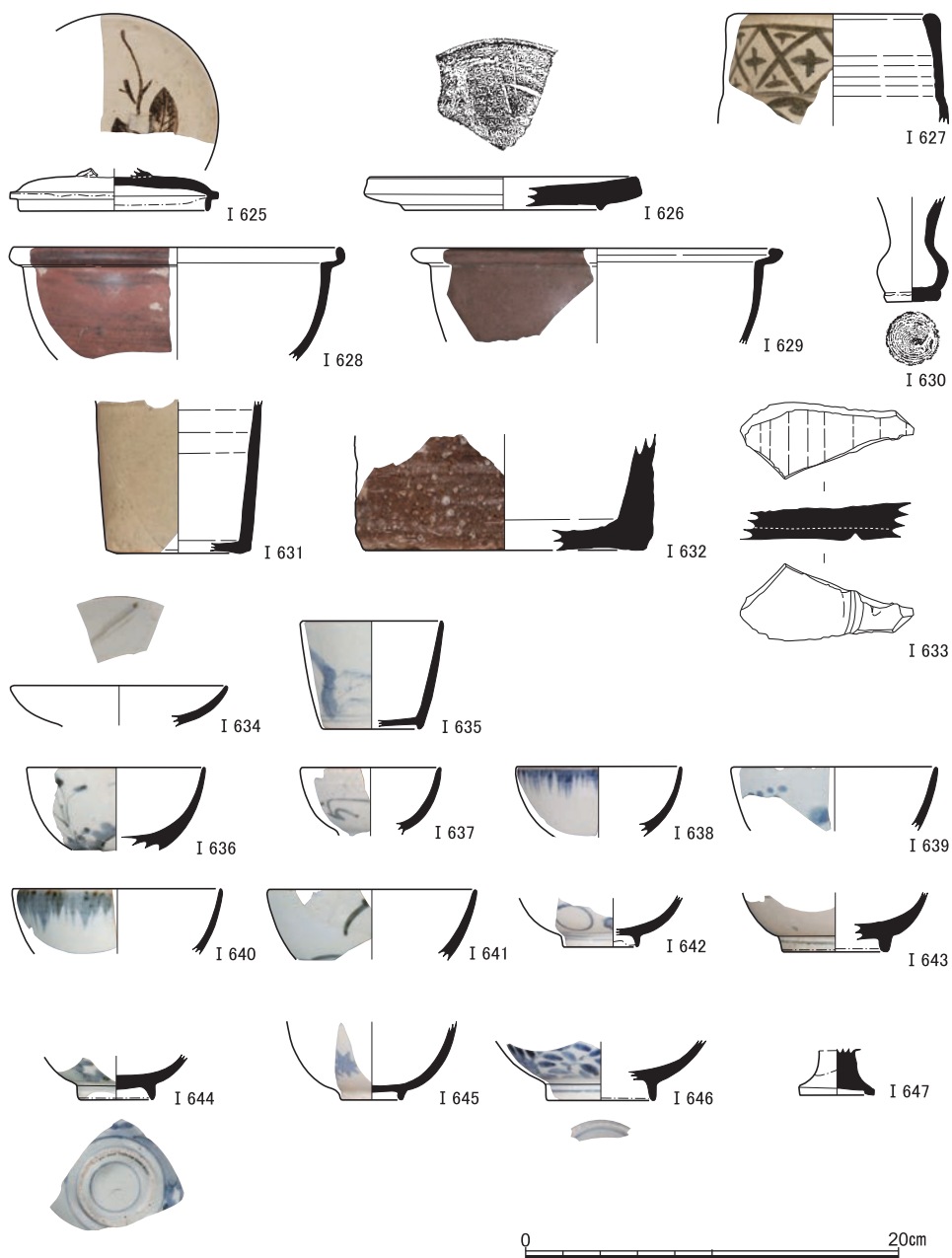


図71 S X 13出土遺物(3) (I 625~633陶器, I 634~ I 647磁器)

京都大学熊野構内Z Z18区の発掘調査

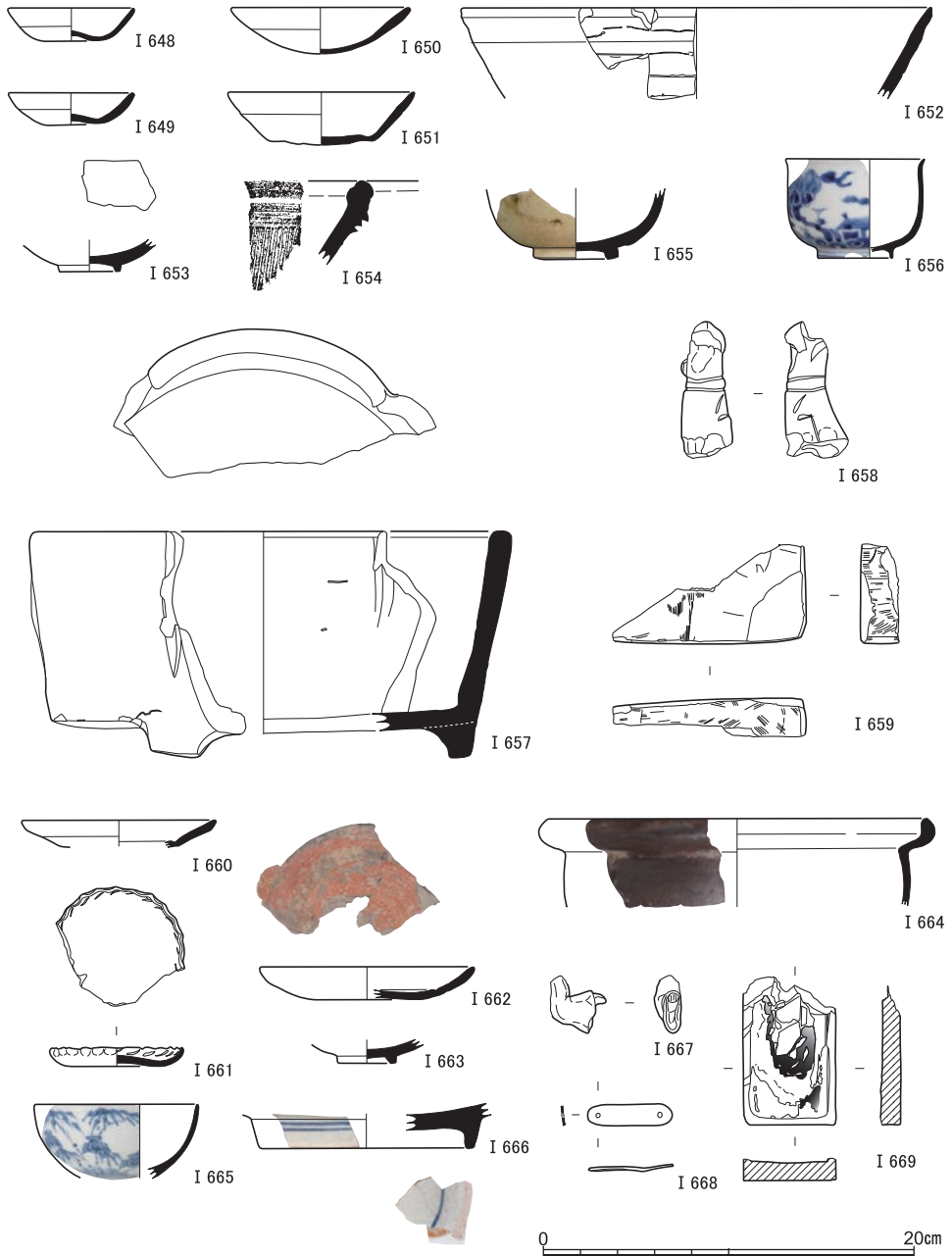


図72 S K11出土遺物 (I 648～I 652土師器, I 653～I 655陶器, I 656磁器, I 657伏見人形, I 658石製品, I 659瓦器), S D33出土遺物 (I 660・I 661土師器, I 662軟質施釉陶器, I 663・I 664陶器, I 665・I 666磁器, I 667伏見人形, I 668青銅製品, I 669硯)

近世の遺跡

I 664は土鍋である。I 665・I 666は磁器染付椀で、I 666は高い高台をもつ。くらわんか椀の一種であろう。I 667は伏見人形で、袖口から手が出る。I 668は青銅製品である。鋳を打ち込むための小孔が2点みられる。I 669は硯である。

SE 5 出土遺物 (I 670～I 705) I 670～I 675は土師器である。I 670・I 671は小皿で、I 672～I 674は煤が付着するため、灯明皿として使われた中皿である。I 673・I 674の見込みには圈線がはしる。I 675は炮烙の口縁部と思われる、煤が付着する。

I 676～I 693は陶器である。I 676～I 680は椀、I 681～I 688は灯明皿である。I 689・I 690は徳利の底部で、19世紀前半頃にみられるものである〔京都市埋文研編2004 G 348-3-30・B 687-10-18〕。I 691は植木鉢の底部と考えられ、19世紀前半頃のものである〔京都市埋文研編2004 B 687-10-12〕。I 692は蓋で、18世紀後半から19世紀前半の遺構で認められる〔京都市埋文研編2004 E 45-2-33；B 716-6-14～16；G 348-3-4；B 687-8-11～14〕。I 693は播鉢で、19世紀前半の堺・明石系のものである〔京都市埋文研編2004 B 687-11-6〕。

I 694～I 703は磁器である。I 694～I 700は椀、I 701は水滴、I 702は合子の蓋、I 703は皿の底部である。I 704は砥石で、I 705は伏見人形である。

SE 6 出土遺物 (I 706～I 716) 野壺SE 6から出土した遺物は、出土層位から2つにわけて報告する。I 706～I 711は下層出土遺物で、1度目の漆喰床貼り直しの際に、床の下に埋められたものである。一方、I 712～I 716は上層出土遺物で、2度目の漆喰床の貼り直しの際に床下に埋められたものである。下層出土遺物のうち、I 706は土師器の皿である。白色で、見込みに圈線がはしる。I 707は陶器の椀である。I 708～I 711は磁器である。I 708・I 709は椀、I 710は皿、I 711は合子の蓋である。上層出土遺物のうち、I 712は陶器の蓋である。I 713～I 715は磁器である。I 713・I 714は椀、I 715は磁器を打ち欠いて円盤に転用したものである。I 716は砥石である。

SF 1 出土遺物 (I 717～I 748) 路面SF 1から出土した遺物は、下層出土遺物 (I 717～I 745) と上層出土遺物 (I 746～I 748) にわけられる。下層出土遺物のうち、I 717～I 723は土師器である。I 717・I 718は褐色の小皿、I 719～I 722は褐色の中皿である。中皿の見込みに圈線がはしる。I 723は器種不明で、外面には斜め方向の刻みが入る。I 724・I 725は軟質施釉陶器である。I 724は把手で緑色の釉がかかる。I 725は皿で、乳白色の釉がかかり、内面が格子目様に刻まれる。I 726～I 734は陶器である。I 726は合子の身、I 727～I 730は椀である。I 731は急須の口縁部片、I 732は花瓶と思われる。I

京都大学熊野構内Z Z18区の発掘調査

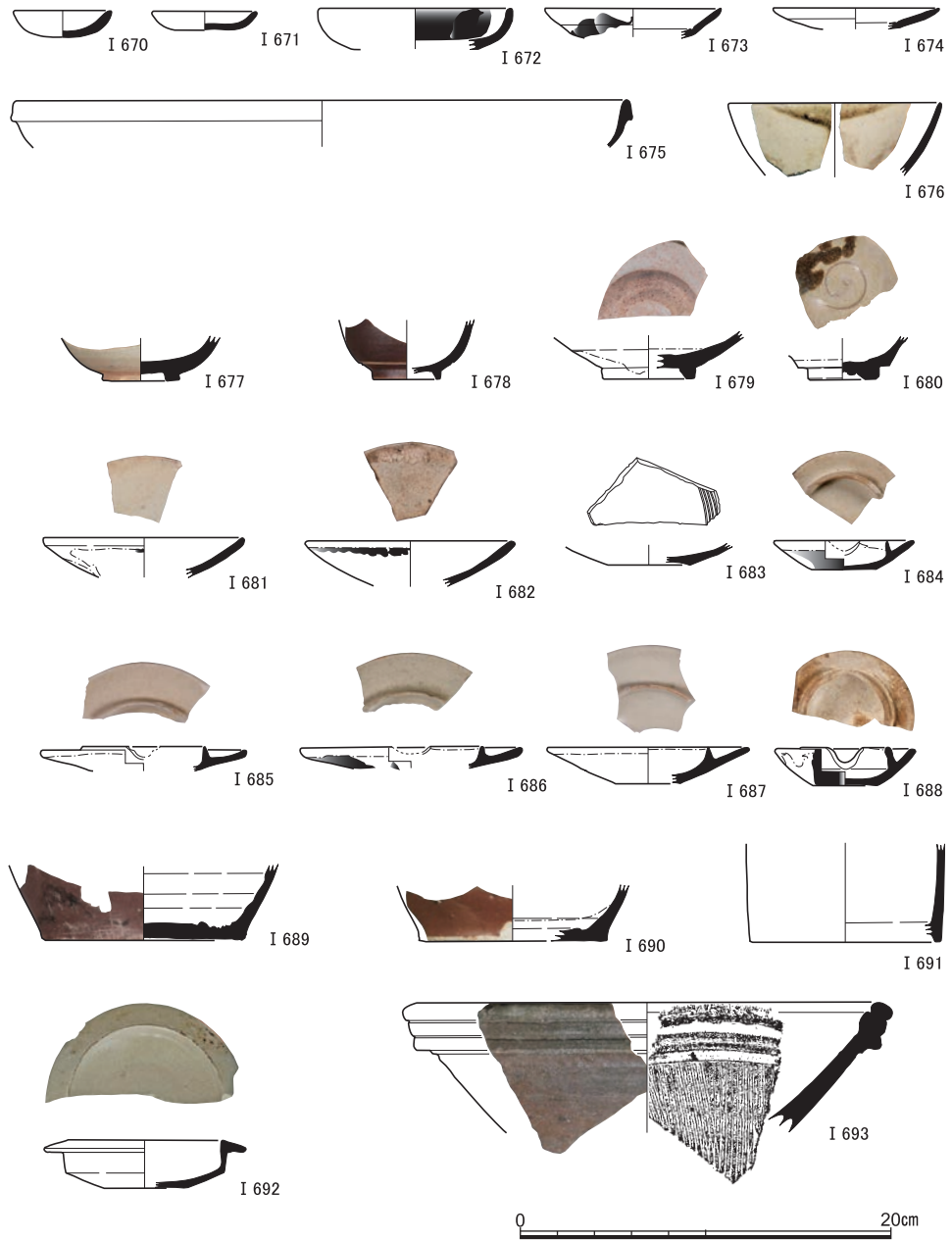


図73 SE5出土遺物(1) (I 670~I 675土師器, I 676~I 693陶器)

近世の遺跡



図74 SE 5 出土遺物(2) (I 694～I 703磁器, I 704砥石, I 705伏見人形), SE 6 下層出土遺物 (I 706土師器, I 707陶器, I 708～I 711磁器), SE 6 上層出土遺物 (I 712陶器, I 713～I 715磁器, I 716砥石)

京都大学熊野構内Z Z18区の発掘調査

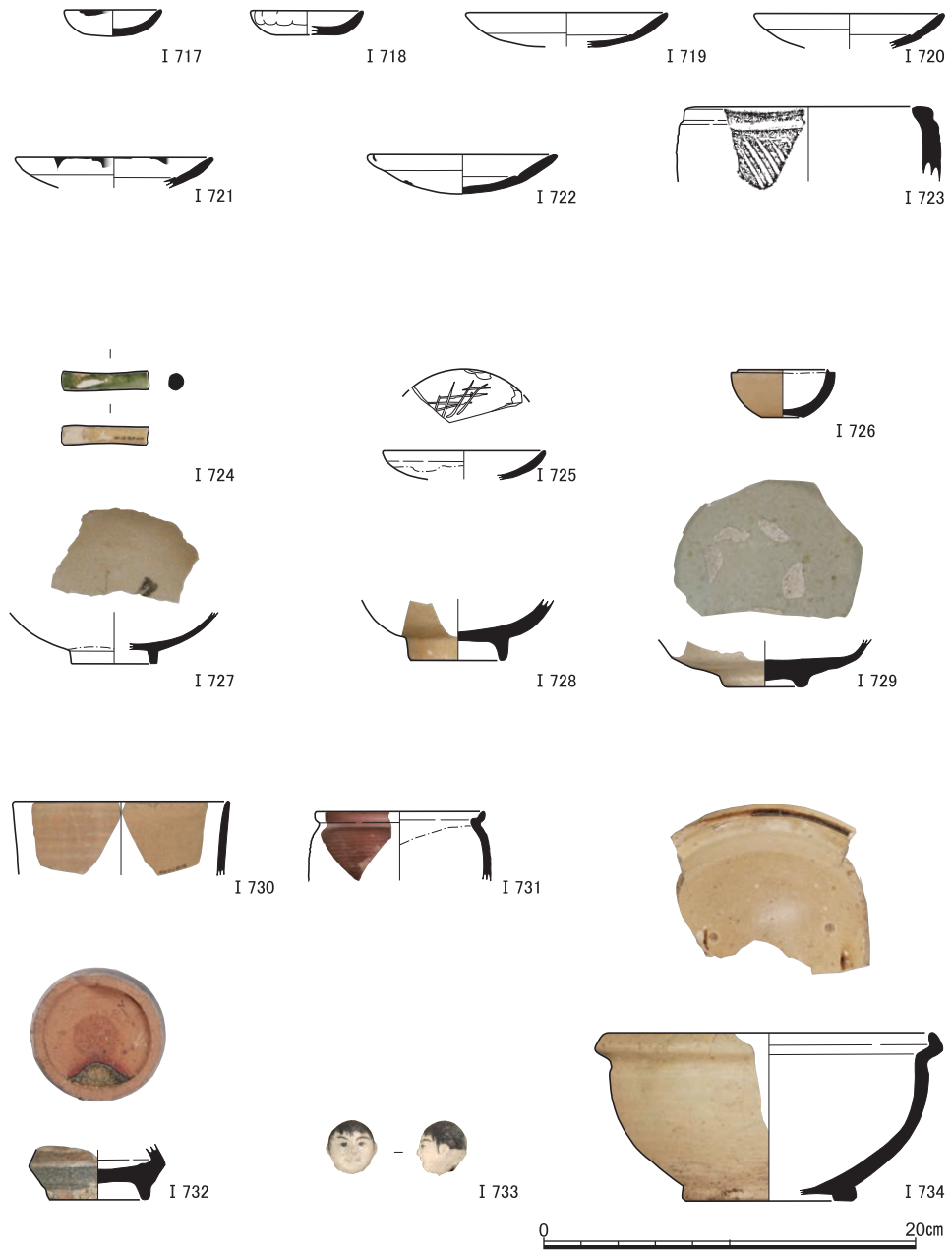


図75 SF1下層出土遺物(1) (I 717~ I 723土師器, I 724・I 725軟質施釉陶器, I 726~ I 734陶器)

近世の遺跡

733は人形の頭部， I 734は鉢である。 I 735～ I 745は磁器である。 I 735は合子の蓋， I 736～ I 743は椀， I 744・ I 745は皿である。上層出土遺物のうち， I 746・ I 747は陶器である。 I 746は皿， I 747は挿鉢である。 I 748は磁器の椀である。

S X 8 出土遺物 (I 749～ I 755) いずれも土師器の皿。 I 749～ I 753は，口径 8 cm・器高1.2cm前後をはかり扁平で，見込みに圈線はなく，器面の撫で痕跡が明瞭で，硬質な印象を与える。 I 749・ I 750は，東南部で I 750を下にして合わせ口で出土したが，建物基礎坑の掘削により半分程度を欠損する。 I 751は西南部， I 752は西北部， I 753は東北部から，それぞれ出土し，前二者は完形。 I 750の内面には焼成後に鋭利な刃物によると

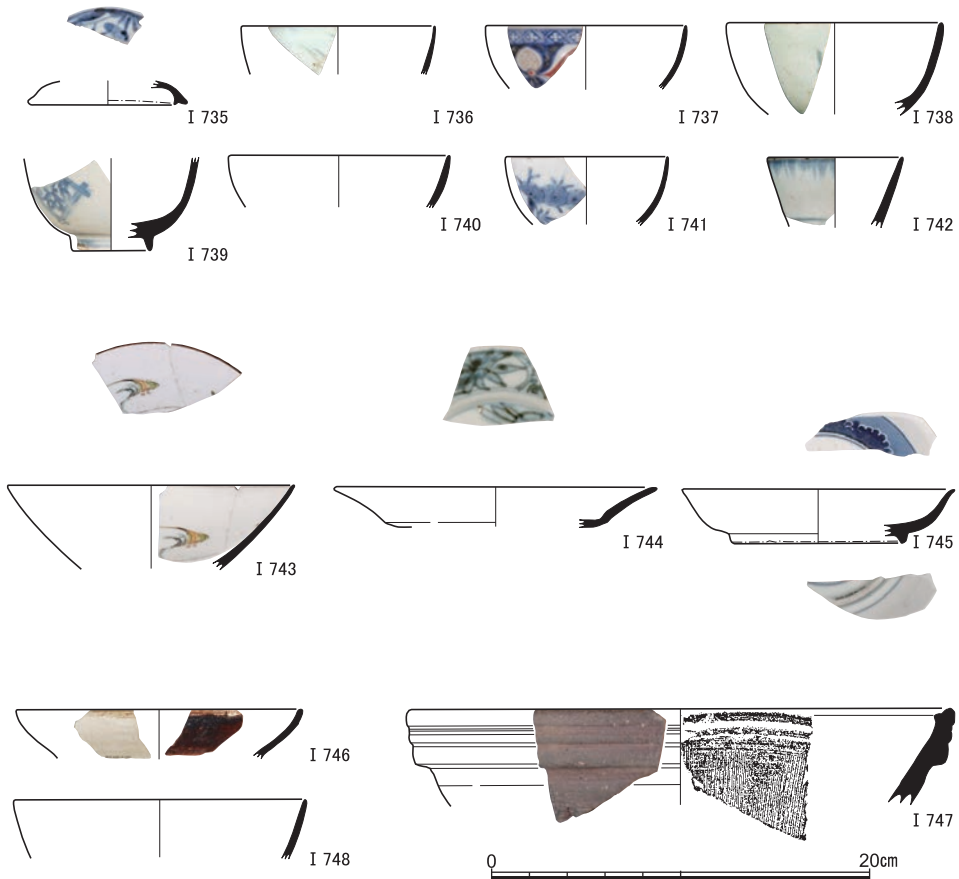


図76 S F 1 下層出土遺物(2) (I 735～ I 745磁器)， S F 1 上層出土遺物 (I 746・ I 747陶器， I 748磁器)

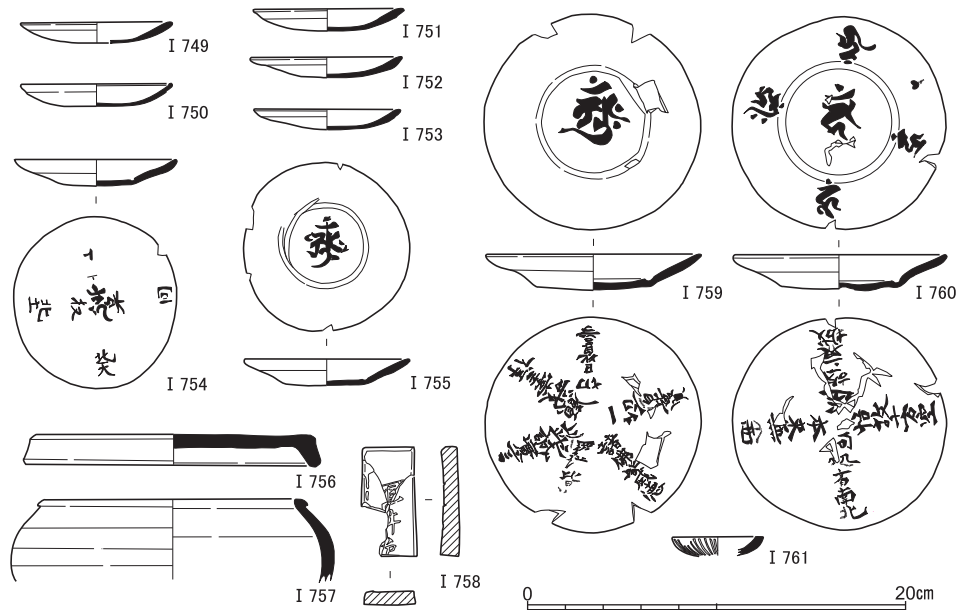


図77 S X 8出土遺物 (I 749～I 755土師器), S X 9出土遺物 (I 756・I 757土師器, I 758墨), S P 35出土遺物 (I 759・I 760土師器, I 761磁器)

思われる多数の擦痕を, I 753の口縁には部分的に煤の付着を, それぞれ認め得る。

中央部で出土した墨書のある I 754・I 755は, 口径9cm弱・器高1.4cmで, ほかの5点よりも一回り大きく, 見込みに圏線をもち, 器表面が砂質で軟質な印象を与える。扁平で, 口縁は底部に比して大きく, 直線的に立ち上がる。I 755を下にして合わせ口で出土した。I 754の外面には, 中央には金剛界の中央に位置する不動明王を意味する梵字(カーン)が書かれ, 梵字を正位にその直下から90度ごとに4つの文言(偈頌:げじゅ)が中心から放射状に記されている。墨がかすれて判読が困難だが, 直下のものは「□□北天」, その左に「□□北土」とあるようで, 五言絶句ではないのかもしれない。I 755は, 見込みに胎藏界・金剛界で主尊である大日如来を意味する梵字(アーンク)が書かれる。I 754・I 755とも器体中央の梵字は上位が北を向いて出土している。

これら7点の土師器皿は, 1850年代の安政年間におさまる可能性の高い278地点S K 15のもの〔千葉2018〕と比べると扁平で, 1868年の東京遷都後に埋まった公家町土坑G 45のもの〔小松2004〕に近い。

S X 9出土遺物 (I 756～I 758) 土師器胞衣壺の蓋と身と, その内容物の墨で, I 757の身と I 758の墨は, 墨の現状保持のために実測を全うできず, I 757は折損した口縁

部のみを実測した。I 756の蓋は、内面と側面を丁寧に撫でているが、上部外面の縁には型から剥がす際の皸状の裂け目が目立つ。I 758の墨は、3文字目の途中まで使用されており、およそ長さ60mm、幅25mm、厚さ10mmになる。3丁型だろうか。

S P 35出土遺物 (I 759～I 761) I 759・I 760は完形の土師器皿で、ともに口径11.5cm弱・器高1.9cmで、見込みに圈線が巡り、内外面に墨書をもつ。この2点は意図的に埋納されたと判断するが、型押し成形と思われる紅皿のI 761は、口径の残存が10%程度の細片なので、埋納時の覆土に含まれていたのだろう。I 759の墨書は、内面は中央に大日如来を意味する梵字（アーク）、外面は中心から放射状に書かれた6つの五言の偈頌である。これらの五言は、長岡宮跡の明治初期の例〔山口2003〕を手掛かりにして、外面の梵字の天と同じ向きに置いて正位になるものから時計回りで読めば、「一切日皆善」、「一切宿皆賢」、「諸佛皆威徳」、「羅漢皆□□」、「以此誠實言」、「願我常吉祥」である。

I 760の墨書は、内面は、不動明王を意味する梵字（カーン）を中央にし、そこから放射状に4つの梵字が書かれており、中央の梵字の天地に合わせると正位になるものがウーン、以下、時計回りで、大威徳明王を意味するキリーク、軍荼利明王を意味するウーン、そしてウーンであろう。正位のウーンとその右のウーンは、違いを見出しがたいが、判別しやすいキリークが曼荼羅では西方に配置されることを踏まえれば、右のウーンが東に配置される降三世明王を意味し正位のウーンが金剛夜叉明王を意味するのかもしれない。いずれにしても、判別可能なカーンとキリークの関係を基準にすれば、ウーンの配置は方位に合致しない。I 760の外面の墨書は、放射状に中心から書かれた4つの五言の偈頌で、内面のカーンの天と同じ向きに置いて正位になるものから時計回りに、長岡宮跡の類例などを手掛かりにして読めば、「迷故三界城」、「悟故十□空」（□は万か）、「何故□南北」（□は有か）、「本来無東西」である。

これら2点の土師器皿は、法量や形状は278地点S K 15のもの〔千葉2018〕と遜色ない。また、墨書の文言から、仏式祭祀に供したことが想定される〔山口2003〕。

S D 2出土遺物 (I 762～I 850) I 762～I 770は土師器で、I 762は型作りの小皿。I 763～I 765は、南壁際の埋土最下部直上で出土した完形の小皿で、いずれも口径8cm・器高1.2cm前後で扁平で見込みに圈線が巡らず、S X 8の5点の小皿と特徴を共有する。I 763は東側で正位で出土し、I 764・I 765は西で近接して逆位で出土した。I 767は手捏ねの塩壺蓋、I 768は焙烙、I 769は火入。I 770の胞衣壺は残存率が1割弱の破片。

I 771～I 806は陶器。I 771は京・信楽系の丸椀。I 772は軟質施釉で、湾曲がないので

京都大学熊野構内Z Z18区の発掘調査

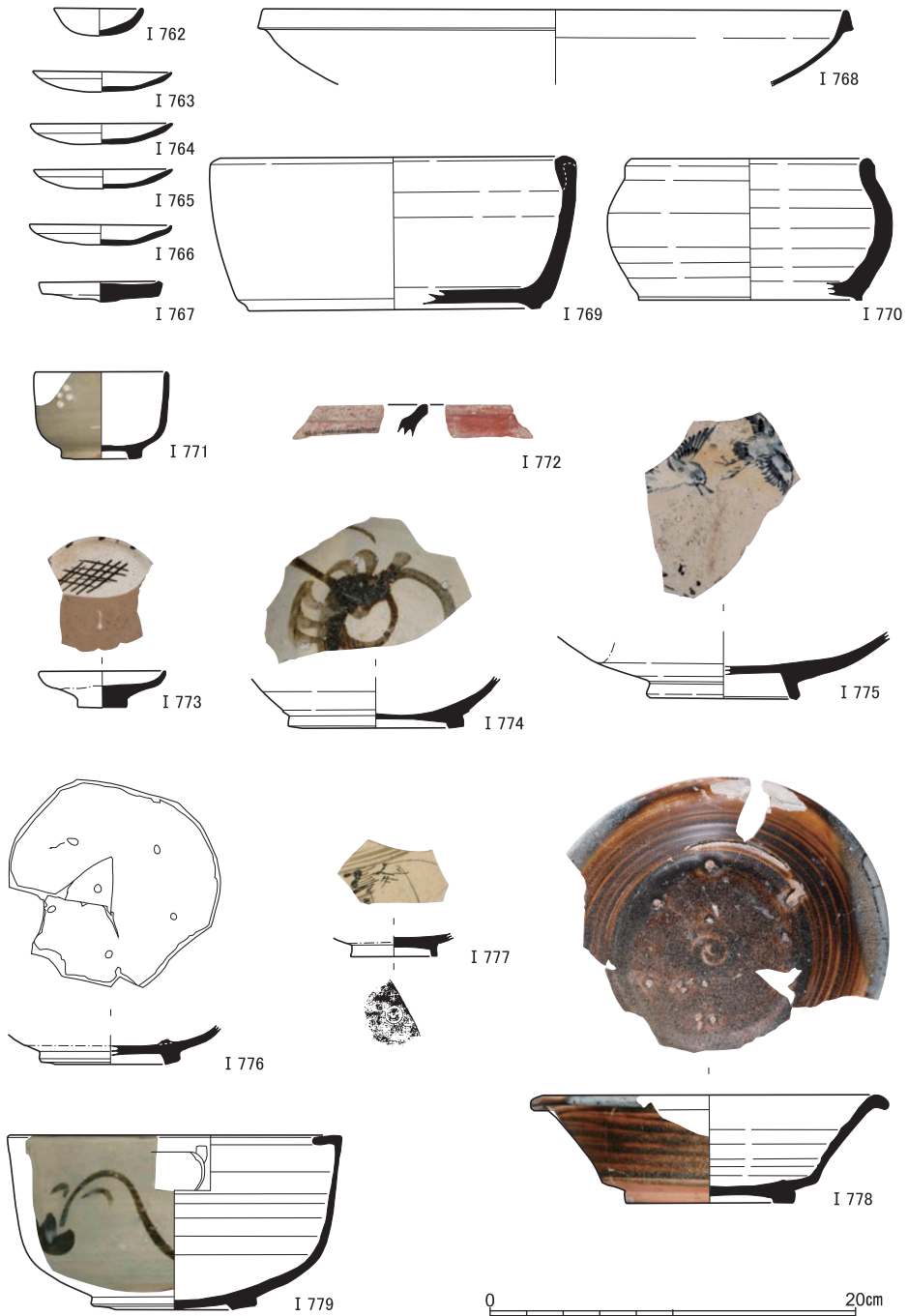


図78 SD 2 出土遺物(1) (I 762~ I 770土師器, I 771~ I 779陶器)

角皿かもしれない。I 773は底部が糸底の小皿。I 774～I 776は皿で、I 776は瀬戸・美濃系と思われる深みのある黒い鉄釉。I 777は京焼の小皿で、底裏面中央の刻印は浅くて判読できないが、その脇に「柴」と読める篋描きがある。重ね焼きで焼け歪みのあるI 778の鉢は瀬戸・美濃系だろう。I 779は京・信楽系の輪高台の片口。I 780・I 781は京・信楽系と思われる大ぶりの鉢で組物だろう。埋土下半から出土したI 781の底裏に墨書が3行あり、「子正月出来」、「五之内」、「□料理」（□は大か犬）と読める。

I 782～I 785は徳利で、京・信楽系と思われるI 782には、鉄釉で「…京白□…」(□は川か)や円囲みで屋号の「万」が書かれている。I 784は白色釉が底部立ち上がりの基端までかかる。I 786は、器種が不明だが蓋受け状の鏝を有し、それ以下と内面全面に施釉。I 787は色絵の急須で、I 788の急須の把手には「信□」の刻印がある。I 789はイチチン描きの土瓶。I 790～I 792は蓋で、I 790は残存部が無釉。I 791のつまみは犬を模している。I 792は内面に煤が付着する。

I 793～I 800は灯火具で、いずれも京・信楽系。I 793～I 798はほぼ完形で、ほかの2点も8割以上が遺存する。I 801は、無釉の完形品。火入だろうか。I 802は鉄釉の壺。I 803・I 804は銅緑釉の一輪挿しとともに完形。I 805は鉢と思われる焼締めで、備前か。I 806は角皿で、底裏に線描きされた文言は、「堂の戸□次め／見ゑし…」だろうか。

I 807～I 831は磁器。I 807・I 808は盃で、I 807の見込みには清水寺の舞台と満開の桜が描かれる。I 809～I 812は小杯。複数回の焼き継ぎを経ているI 809は、内面が白色だが外面は青磁の趣がある。I 811は端反り。I 813～I 819は椀。I 814は破断面に焼き継ぎの跡がある。I 815はくらわんか。I 820は鉢。I 821～I 824は皿で、口縁上端に鉄釉がめぐり破損後も焼き継ぎされているI 822以外は、蛇の目凹形高台の底部で、I 821は蛇の目釉剥ぎで外面は文様がない。I 825～I 828は蓋。I 829・I 830は瓶・徳利で、I 829の鶴首瓶は底裏中央方向から2度破損している。I 831は白磁の合子の身。ほぼ完形だが蓋受けの立ち上がりは10箇所近く小さく欠けている。

I 832～I 834はガラス製品。I 832は茶色のビール瓶底部で、I 833は青色のかんざし、I 834は白色の小玉。I 835は軟質施釉陶器のミニチュアで、I 836～I 842は伏見人形や芥子面などの玩具。図示していないが泥面子も10点ほど出土した。I 843～I 845は、窯道具ないし焔炉に用いる目皿。I 846～I 850は石製品。I 846は堆積岩製の硯で、湖西の高島地方のものだろうか。I 847～I 850は砥石で、I 848以外はきめの細かい堆積岩製。

以上のうち、埋土最下部の出土は、I 776・I 778・I 799、そしてI 809・I 813の一部

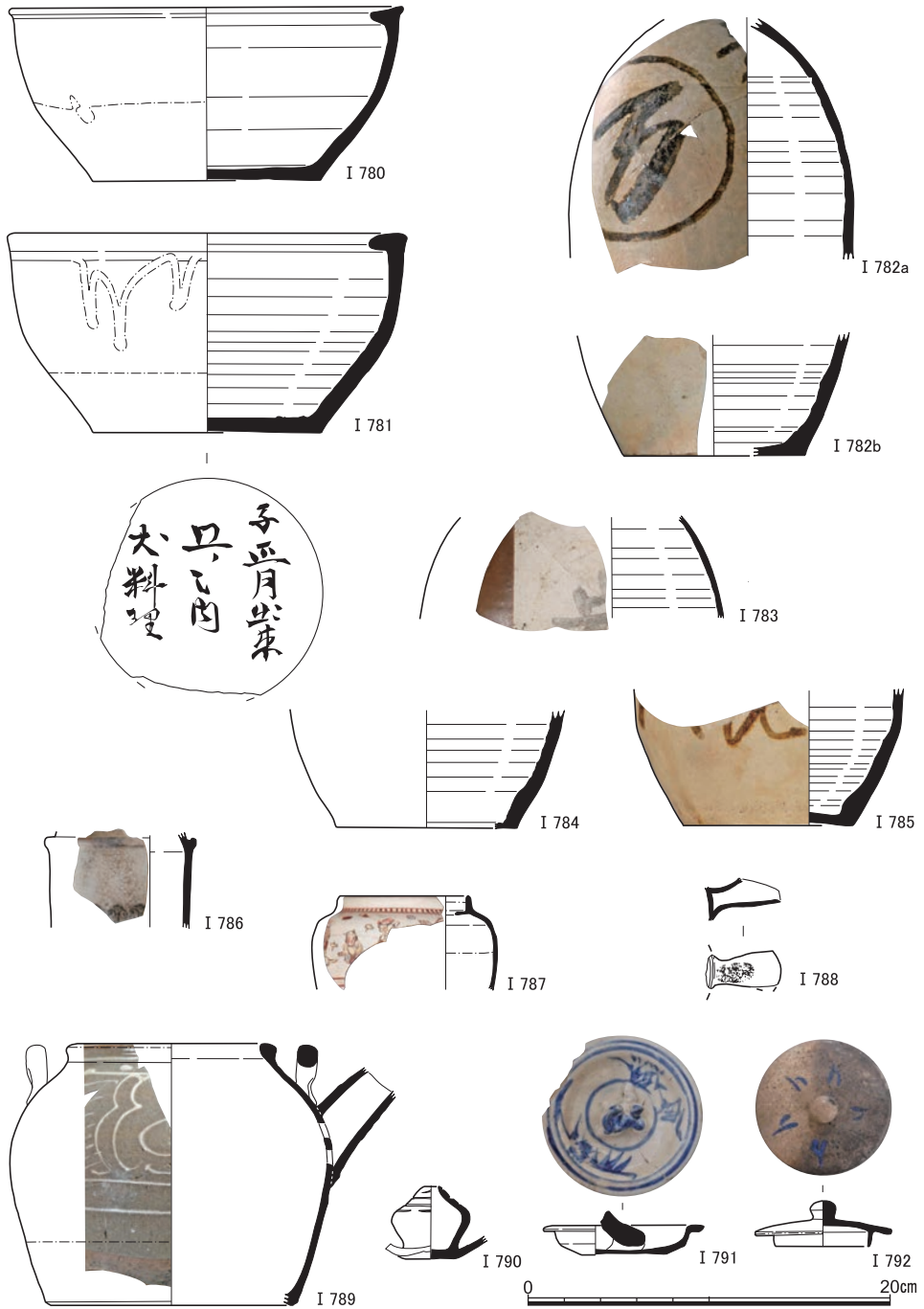


図79 S D 2 出土遺物(2) (I 780~ I 792陶器)

近世の遺跡



図80 S D 2 出土遺物(3) (I 793~ I 806陶器, I 807~ I 820磁器)

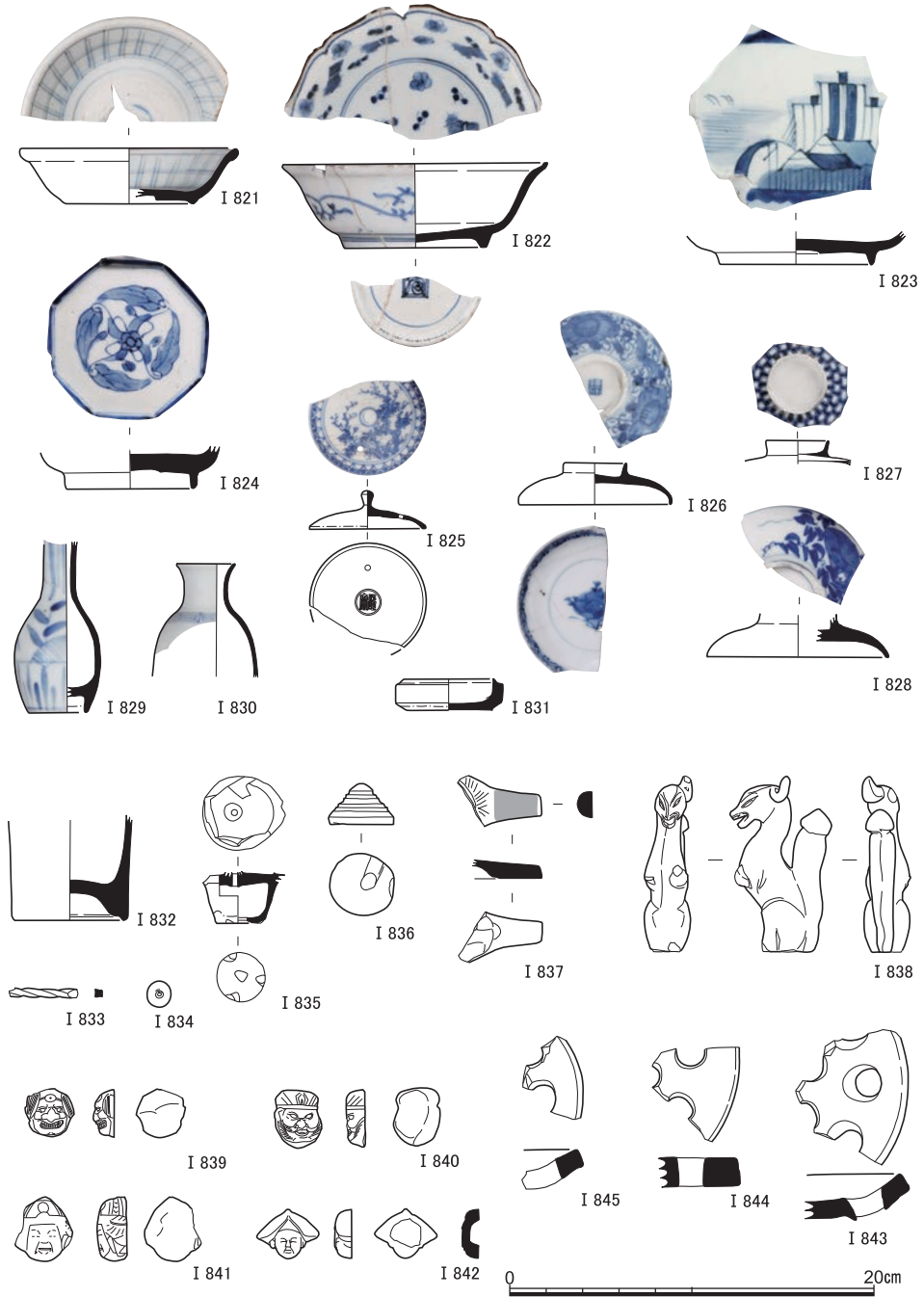


図81 SD 2 出土遺物(4) (I 821~I 831磁器, I 832~I 834ガラス製品, I 835軟質施釉陶器, I 836~I 842玩具, I 843~I 845窯道具か)

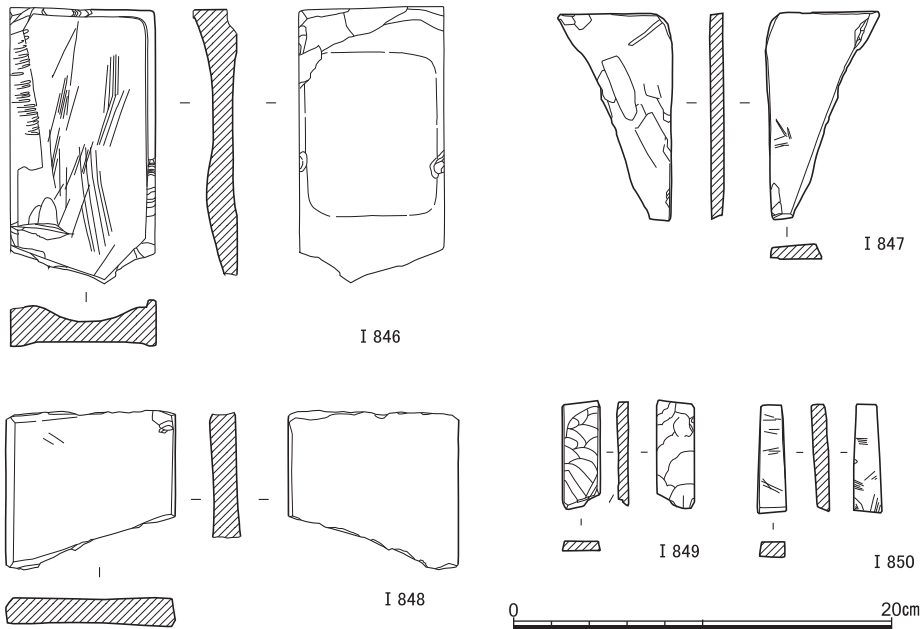


図82 SD 2 出土遺物(5) (I 846~ I 850石製品)

破片である。埋没時期の特定の手がかりとなるのは、最下部直上から出土の I 763~ I 765 の土師器小皿と、「子正月」銘の墨書をもつ I 781の鉢で、ねずみ(子)年である嘉永5年(1852)年ないし文久4年(1864)より後で明治初期までの埋没と推定できる。

S X 7 出土遺物 (I 851~ I 861) S X 7は、SD 2の埋土中で瓦片が高密度で分布した範囲であり、整理箱7杯分が出土している瓦には、S X 6と接合するものがかなり含まれる。ここでは土師器・陶磁器類を取り上げる。I 851・I 852は、土師器のひな皿と火消し壺。I 853~ I 859は陶器。I 853の皿には高台外側の無袖部に「赤ハタ」の刻印がある。奈良の赤膚焼。I 854は薄手の筒状容器で徳利だろうか。袖下に四角囲みで書かれた文字は「子ぢや」だろうか。I 855・I 856は鉢。ほぼ完形で輪高台のI 855は、瀬戸・美濃系だろう。I 857とI 858は同様の薄い鉄釉がかかる、セットと思われる鍋と蓋。I 859は白化粧に緑釉・鉄釉で上絵をつける土瓶。I 860・I 861の磁器は、手描きの文様がコバルト釉の染付碗と、見込みが蛇の目釉剥ぎの染付皿。このほかに図化していないが、金属製品、泥面子や玩具も出土している。S X 7出土遺物は、SD 2と同様に製作時期幅はあるものの、廃棄された年代は幕末~明治初期だろう。

S X 6 出土遺物 (I 862~ I 1002) 瓦積みとその基盤や裏込めから出土した遺物は、



図83 SX7出土遺物（I 851・I 852土師器，I 853～I 859陶器，I 860～I 861磁器）

S D 2 埋土の遺物とは分離したが、両者の間で接合するものは多い。I 862～I 873は土師器。I 862～I 868は花塩壺の蓋と身で、I 869・I 870は焙烙。いずれもエリア1・2の基盤および裏込めから出土。I 871は火消し壺の蓋で、エリア3の基盤から出土した破片とS D 2 埋土上半の破片が接合した。I 872は、畔の裏込め（図43の中央畔第3層）から出土した焜炉。I 873は焜炉に用いる目皿で、エリア2の基盤・裏込めから出土した。

I 874～I 937は陶器。I 874は底裏も含め全面施釉の盃で、エリア1・2の基盤から出土。I 875・I 876は小椀。I 875は京・信楽系で、瓦積み上面で出土したI 876は京焼。I 875はエリア1より西で出土した破片とエリア2の裏込め出土の破片が接合した。I 877～I 880は体部下半が八稜になる小椀・椀で、胎土や文様から同一系統と考えられる。おもにエリア2や畔の裏込めから出土。I 878・I 879はともに無釉の底裏に丸囲みに「青雲山」の刻印をもつので、これらは明治初年前後のものかもしれない〔加藤編1972〕。I 881～I 884は鉢で、焼け歪んでいるI 881は、「仁清」の刻印をもつ。I 881・I 882は、エリア2の裏込めから出土した破片がS X 7出土のものと接合した。丸囲みに「青雲山」の刻印をもつI 883は、エリア1・2の基盤から出土。銅緑釉のI 884は、エリア1～3までの基盤や裏込めから出土した破片が接合している。I 885～I 890は皿で、瀬戸・美濃系と思われるI 885の小皿は東面・北からの出土。I 881と似た胎土・釉調で「仁清」の刻印をもつI 886の大皿は、畔の基盤から出土した（図56の「畔下B-1」）。I 887は体部下半が八稜になる蛇の目釉剥ぎの皿で、胎土や釉調は「青雲山」のものに似る。エリア1の基盤から出土した（図67の「1下S-16」）。エリア3の基盤から出土したI 888は、梅形の型作りの手塩皿で、底部は露胎。エリア3の裏込めから出土したI 889は、内外面が白化粧で内面に鉄絵をもつ角皿。乾山焼だろう。I 890の把手付手塩皿は、胎土や釉調がI 886の大皿に似る。エリア3・畔の裏込めから出土。

I 891・I 892は京・信楽系の段重で、ともにエリア2の裏込め・基盤から出土し、銅緑釉の蓋物のI 893はエリア1の基盤から出土した。I 894は京・信楽系の蓋物の身で、刻印は丸囲みに「清山」。エリア1・2の基盤・裏込めから出土したが、同一個体の破片はS X 7からも出土している。I 895・I 896は京・信楽系の大鉢で、前者はエリア3・畔の裏込めから、後者はエリア1・2の基盤・裏込めからの出土。I 897～I 902は徳利。京・信楽系のI 897には、屋号の「ひし伊」、菱形に「イ」の商標、所在を示す「御幸町」などが描かれた通徳利で、エリア3の基盤やそれ以東の裏込めおよび基盤相当層からの出土。京・信楽系のI 898はエリア2の裏込めから出土し、その底部かもしれないI 899はエリア2の

京都大学熊野構内Z Z18区の発掘調査

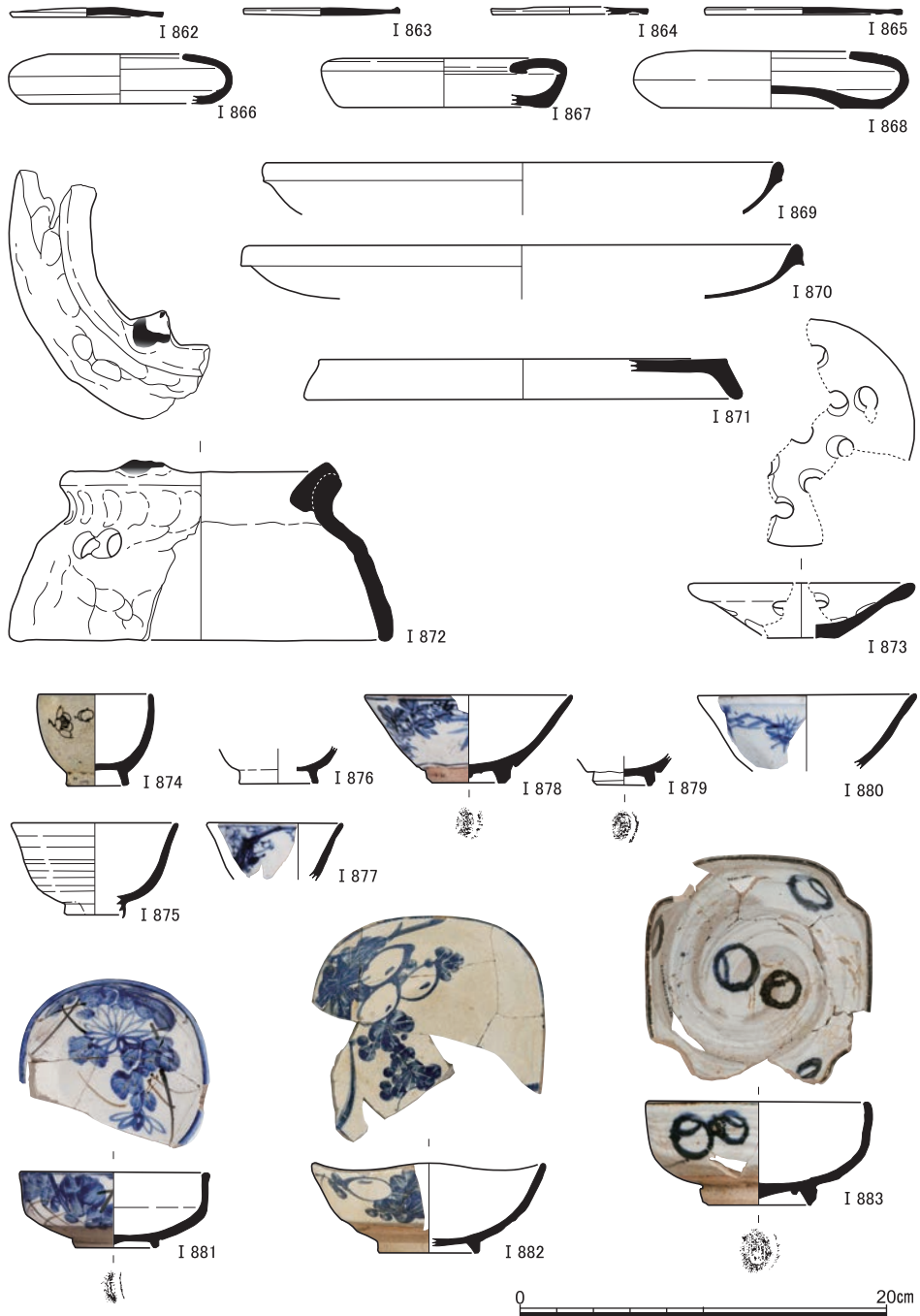


図84 S X 6 出土遺物(1) (I 862~ I 873土師器, I 874~ I 883陶器)



図85 S X 6 出土遺物(2) (I 884~ I 897陶器)

裏込めとS X 7から出土した。「迎」の字がある通徳利のI 900は、丹波焼と思われる。エリア1・2の基盤・裏込めから出土。I 901・I 902は京・信楽系の通徳利の底部。前者はエリア1・2の裏込めからの出土で、後者は、エリア1の基盤から出土した破片（図66の1-101）にエリア2の裏込めとS X 7から出土したものが接合した。「百八十九番」と読める底裏の墨書は、酒屋の発行した消費者登録番号だろうか。エリア1・2の基盤から出土した瀬戸・美濃系と思われるI 903は汁次で、底部外面以外は鉄釉。

I 904～I 908は鍋類。黄白色のI 905は京焼で、飛び鉋に鉄釉の片口のI 907は京・信楽系だろう。I 904はエリア1・2の基盤・裏込めから、I 905はエリア2・3の基盤・裏込めから、I 906はエリア3の裏込め・東面・S X 7から、I 907はエリア1～3・北の基盤や東面とその裏込めなど広範囲から、I 908はエリア1・2の基盤や裏込めから、それぞれ出土。I 909～I 914は土瓶・急須で、I 911の急須以外は京・信楽系。イッチン描きのI 909はエリア2～東面にかけての裏込めとS X 7からの出土で、I 910はエリア1～3の基盤や裏込めから出土。I 911の急須はエリア1・2の裏込めから出土した。白化粧に鉄釉・緑釉で同様の意匠を描くI 912の土瓶とI 913の急須は、前者がエリア1・2の基盤から、後者は東面から、それぞれ出土。I 914は東面の裏込めから出土した急須底部で、底裏を除く外面と内面に明黄色の釉がかかる。I 915・I 916の土瓶の蓋は、白化粧に鉄絵の前者がエリア1・2の基盤から出土し、イッチン描きの後者はエリア2の基盤から完形で出土した。I 917・I 918は急須の蓋で、完形の前者はエリア1の鬼瓦の直下から出土し（図66の1-97）、後者はエリア2の裏込めから出土した。I 919は鍋類の蓋で、大きい破片はエリア1の棟端瓦の直下から出土したが（図67の1-113）、細片は分散してエリア1・2の基盤・裏込めから出土した。I 920・I 921は蓋物の蓋で、ともにエリア1の西端で基盤相当の地層から出土した。I 922の蓋は北壁と瓦積み前面の間から出土した。I 923は信楽焼と思われる黒釉流しの小ぶりの甕で、北の裏込めとS X 7から出土した。

I 924・I 925は堺系の播鉢で、前者はエリア1の鬼瓦の直下（図67の1-108）や基盤・裏込めから出土し、後者では、エリア1の基盤（同図の1下T-1）とエリア2の裏込め（図60の2裏B-9）から出土した破片が、S X 7から出土した破片を介して接合した。I 926は体部に穿孔があり暗赤褐色を呈する無釉の小皿。灯火具の一種だろうか。東面の裏込めから出土した。I 927～932はいずれも京・信楽系の灯火具で、出土したのは、I 927がエリア3の基盤、I 928・I 931が東面の裏込め、I 929・I 930・I 932がエリア2の裏込め。I 933・I 934は銅緑釉の一輪挿しで、前者は北の裏込めから出土し、後者はエリ

近世の遺跡

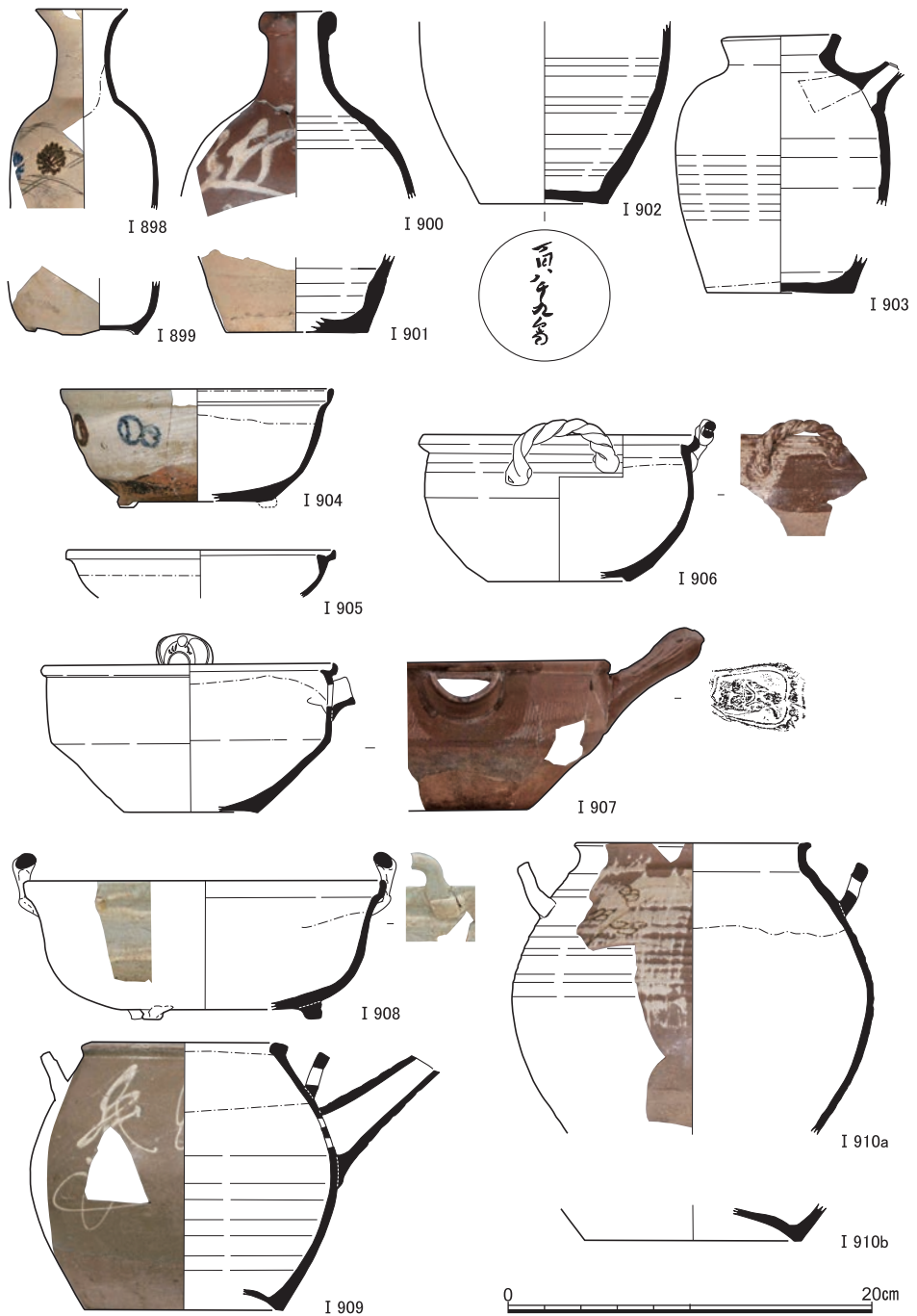


図86 S X 6 出土遺物(3) (I 898~ I 910陶器)

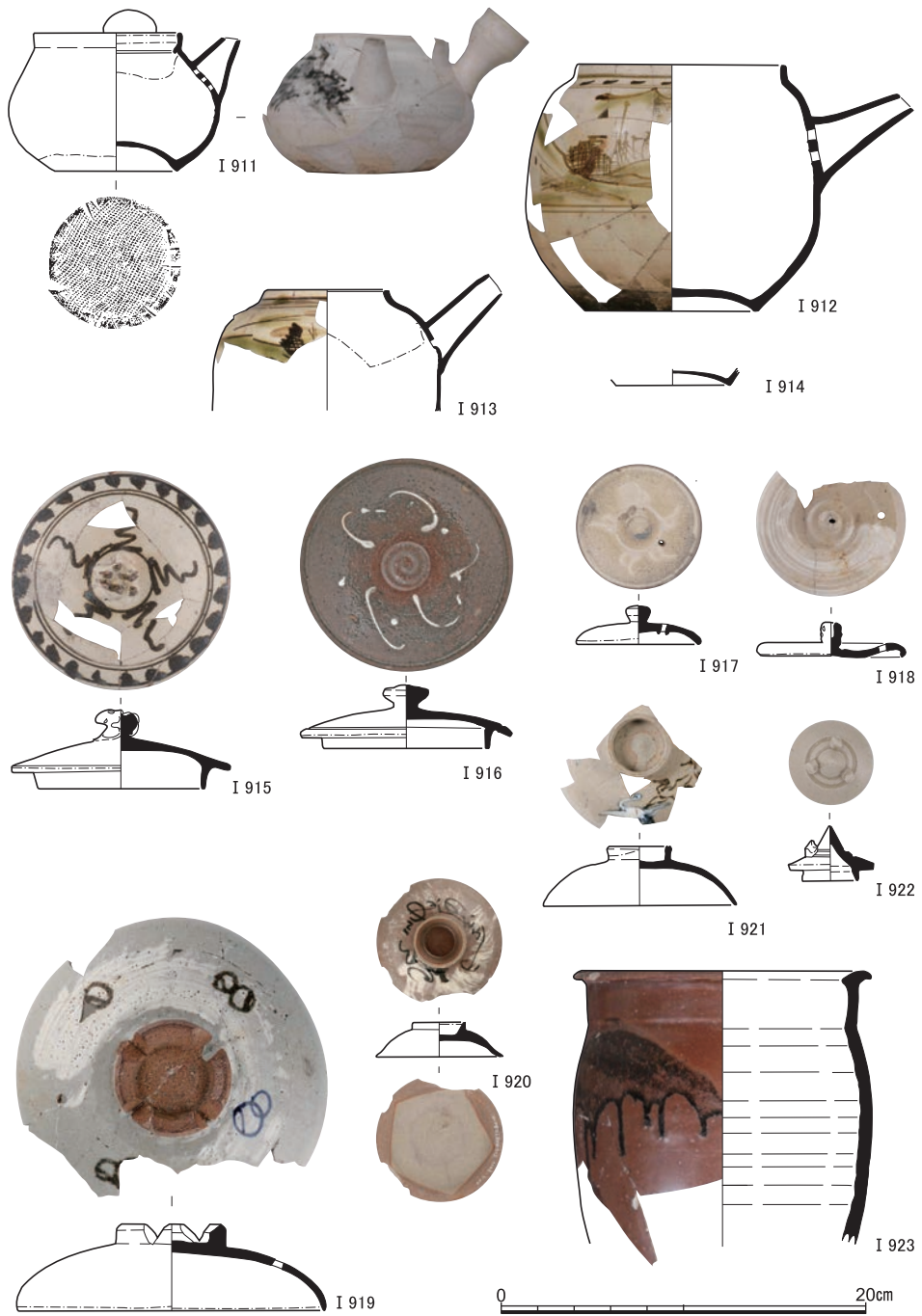


図87 S X 6 出土遺物(4) (I 911~ I 923陶器)

近世の遺跡

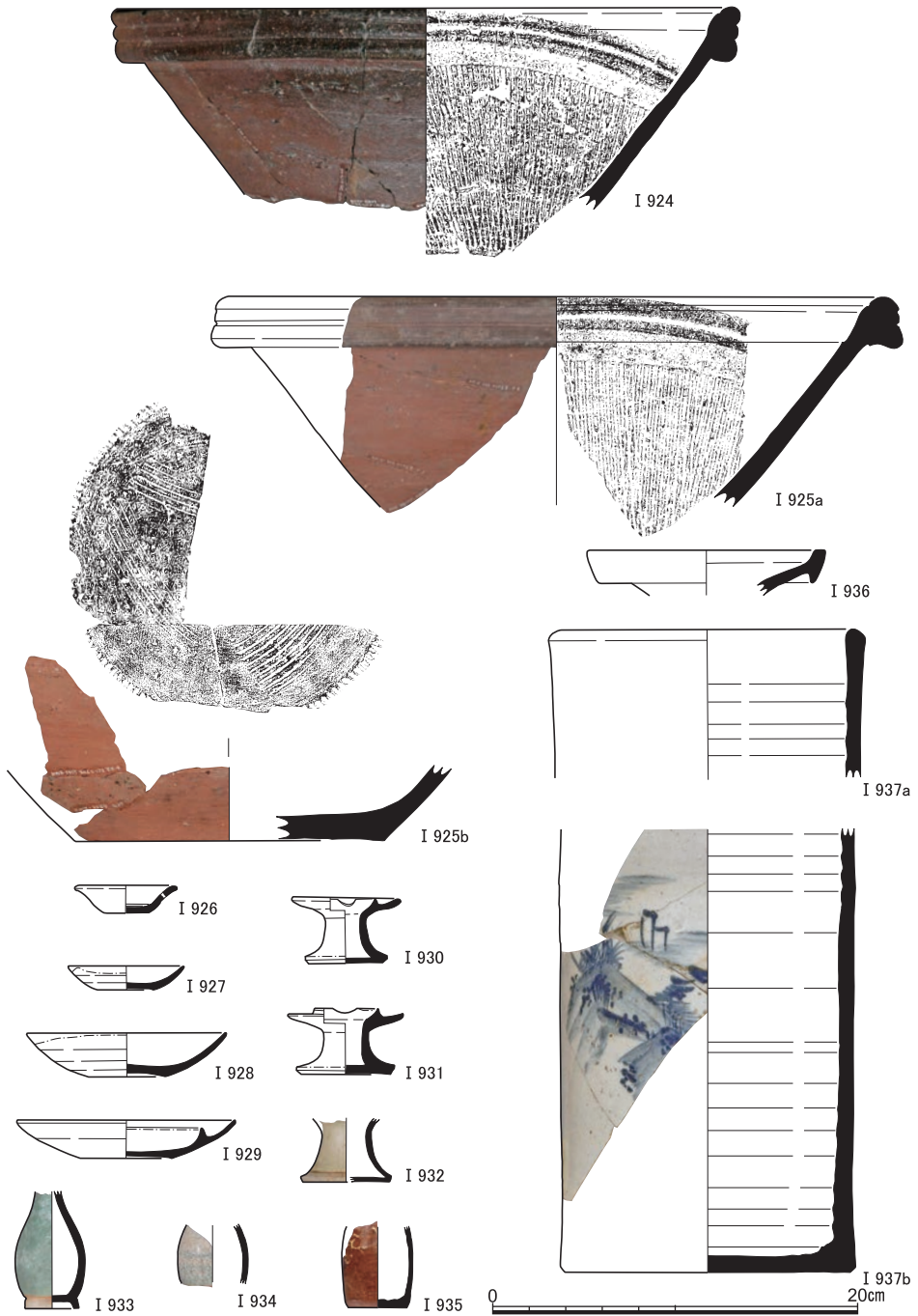


図88 SX 6 出土遺物(5) (I 924~ I 937陶器)

京都大学熊野構内Z Z18区の発掘調査

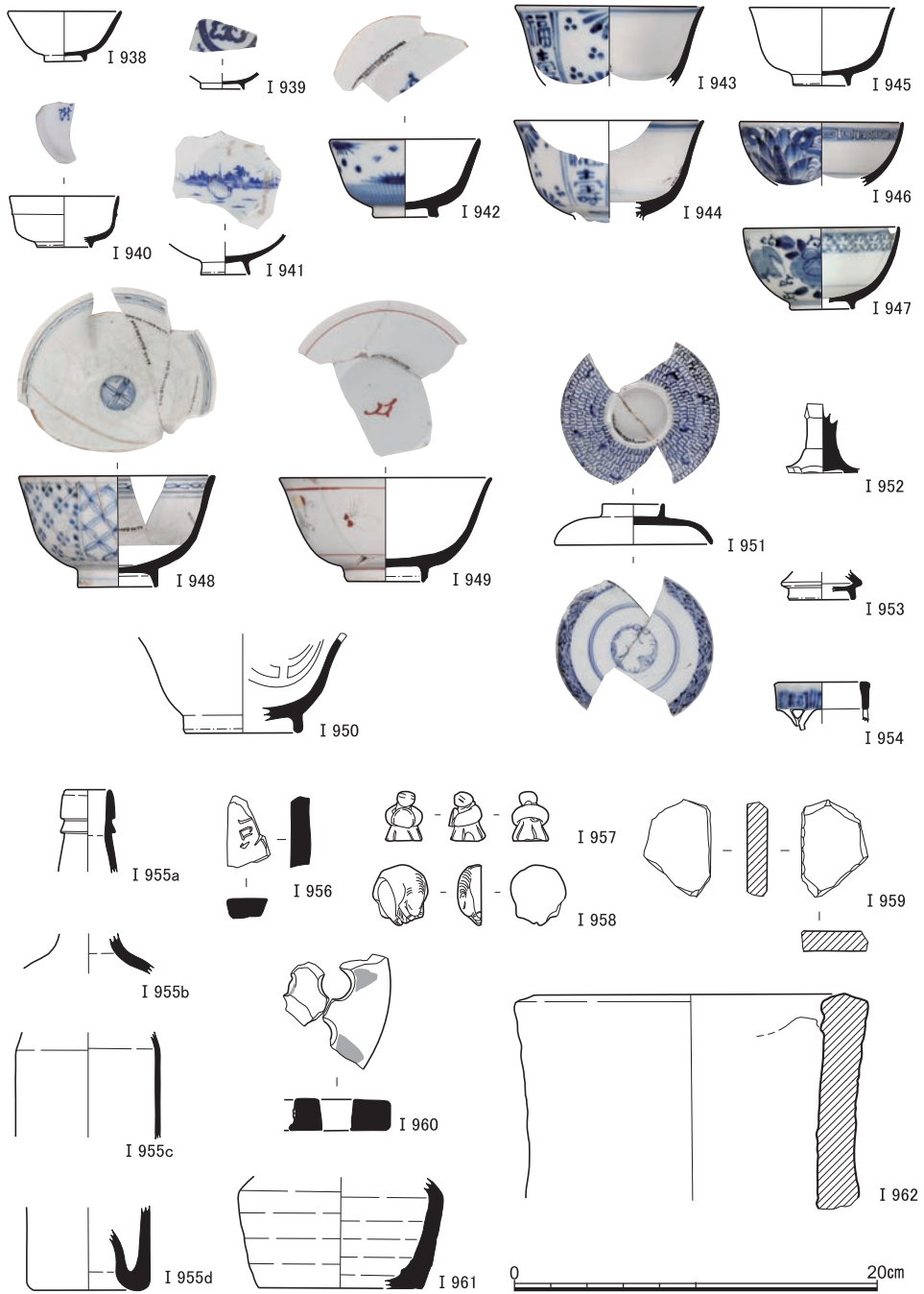


図89 S X 6 出土遺物(6) (I 938~I 954磁器, I 955ガラス製品, I 956~I 958玩具, I 959砥石転用陶器, I 960・I 961窯道具か, I 962埴塼)

ア2の基盤と裏込めから出土した。I 935の一輪挿しは、東面の裏込めから出土。I 936の鉄釉の壺はエリア1の裏込めから出土。信楽系と思われる長胴のI 937は水指か。上面、エリア1・北の裏込めから出土（図48の北下AB-27・37）。

I 938～I 954は磁器。I 938～I 941は盃で、I 938以外はいずれも上絵付。絵付のないI 938はエリア1ないし2の上面から、見込みに呉須で書かれた文言の末字「附」が読めるI 940はエリア2の裏込めから、丸囲みの家紋が描かれていると思われるI 939と色絵のI 941は東面の裏込めから、それぞれ出土。I 942～I 950は椀。I 942は畔～エリア1の裏込めから出土し、組物ないし同一個体のI 943・I 944はエリア1の裏込めから出土した。絵付のないI 945はエリア1・2の基盤と裏込めから、I 946は北の基盤・裏込めから、I 947は北の基盤とエリア3の裏込めから、それぞれ出土した。焼き継ぎのあるI 948はエリア1の基盤から出土し（図67の1下T-9）、色絵のI 949は北の基盤とエリア1の裏込めから出土している。青磁の輪花椀のI 950は、エリア3の瓦積み内部から出土した底部に、東面・SX7から出土した口縁部とエリア3裏込めから出土した体部が接合した。I 951は焼き継ぎのある蓋物の蓋で、エリア1～3の基盤からの出土。東面の裏込めから出土のI 952は、底部が蛇の目凹形高台になる仏飯。I 953は御神酒徳利の底部で、エリア3の基盤からの出土。畔・エリア2の基盤から出土のI 954は透かしがある。筆入か。

I 955は同一個体と思われる深緑色のガラス瓶。ワインボトルだろう。畔の裏込めとエリア3の基盤・裏込めから出土。I 956～I 958は玩具。I 959は陶器片だが砥石として破断面を使用している。I 960は窯道具ないし焔炉に用いる目皿で、畔の裏込めから出土。焼締め陶器のI 961は、内面にガラス化した溶着がある。冶金ないし窯業生産に関わるものだろう。I 962は埴塙の口縁部で、エリア1の鬼瓦の口を塞ぐように出土した（図65の1-53）。石製品のI 963・I 964は堆積岩製の硯で、I 963は湖西の高島地方のものだろう

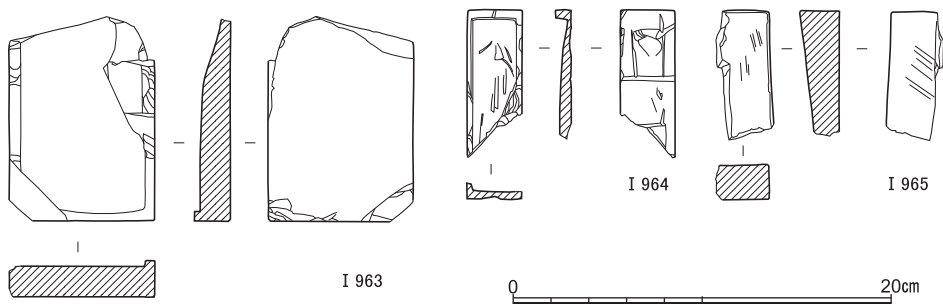


図90 SX6出土遺物(7) (I 963～I 965石製品)

か。I 965は砥石。

I 966～I 1002は瓦。S X 6から出土した瓦は、整理箱90箱を数える。そのうち、出土地が写真に記録されたものの中から、用いられた瓦の多様性を反映するように、遺存状態の良いものや特徴的なものを抽出した。遺物番号の下には出土記録番号を付し、表1に掲げた個体は、その間にS X 6個体番号も付した。なお、前項および以下の近世瓦の同定と表記では、『日本の瓦屋根』〔坪井1976〕を参考にしている。

I 966～I 975は棟端瓦。鬼瓦をはじめとして棟端に用いる瓦には、しばしば人名や年号が篋や墨で書き留められることがあるので、取り上げ後の洗浄には注意を払ったが、10個体のいずれにも線刻も墨書も認められなかった。I 966～I 968は、下部に棟瓦の背に合う抉り込みをもつので、大棟用ないし隅棟用の鬼瓦と思われる。鬼面のI 966は、左右の角、板部の上端と裏面下部を欠くが、ほぼ完形で、S X 6の中央とみなせる花卉断面状の中心に、正面が上向き、上方が北向きで置かれていた（図版14-4）。I 967も鬼面で、角と上顎の牙を左右とも欠き、板部の右辺と上端、裏面の下部も欠損するが、完形に近い。エリア1の基底で、正面が上向き、上方が北向きで出土した（図66）。I 968は、覆輪が付いたような雲形で、中央が宝珠になる。裏面の上部を欠くが、ほぼ完形である。本体は、エリア3の上半で、正面が上向き、上方が南向きで出土したが、宝珠は、それより南東の裏込めから、本体と同じ向きで出土した（図50）。また、左側面部（=裏面の右側）は、前項で述べたように、本体が据え置かれた後に本体から剥離したと思われる、立位に近い北下がり状態で本体直下から出土した（図46）。

I 969・I 970は、下部が直線的で抉りがないので、降棟用の鬼瓦だろう。ともに周縁に珠文を配する。ほぼ完形のI 969は、角をもたないので雌鬼だろうか。また、棟瓦に固定するための裏面の紐かけ部が、龍頭ではなく繰り込まれている。エリア1の基底で、正面が上向き、上方が南向きで出土した（図66）。I 970は、左右の角と上部左側を欠損するが、ほぼ完形。下顎がなく、口の開きが大きく見える。エリア1の基底で、正面は南向きで、上方が西向きに出土した（図66）。

I 971～I 975は鱗瓦（足元瓦）で、大棟の棟端で獅子口のような瓦に取り付き、刀根丸の背に載る。雲形のI 971は、裏面が平坦で紐かけ部がないので、左足の破片と判断したが、二つの小さな穿孔を固定用のつり穴とすれば、塀など勾配が緩く棟が低い屋根の棟端瓦の可能性もある。東面の裏込めから出土した（図45）。同じ雲形のI 972も、同様の根拠から左足の破片と考えたが、欠損部は左側面の右下側だけであり、全体形状をイメージしづら

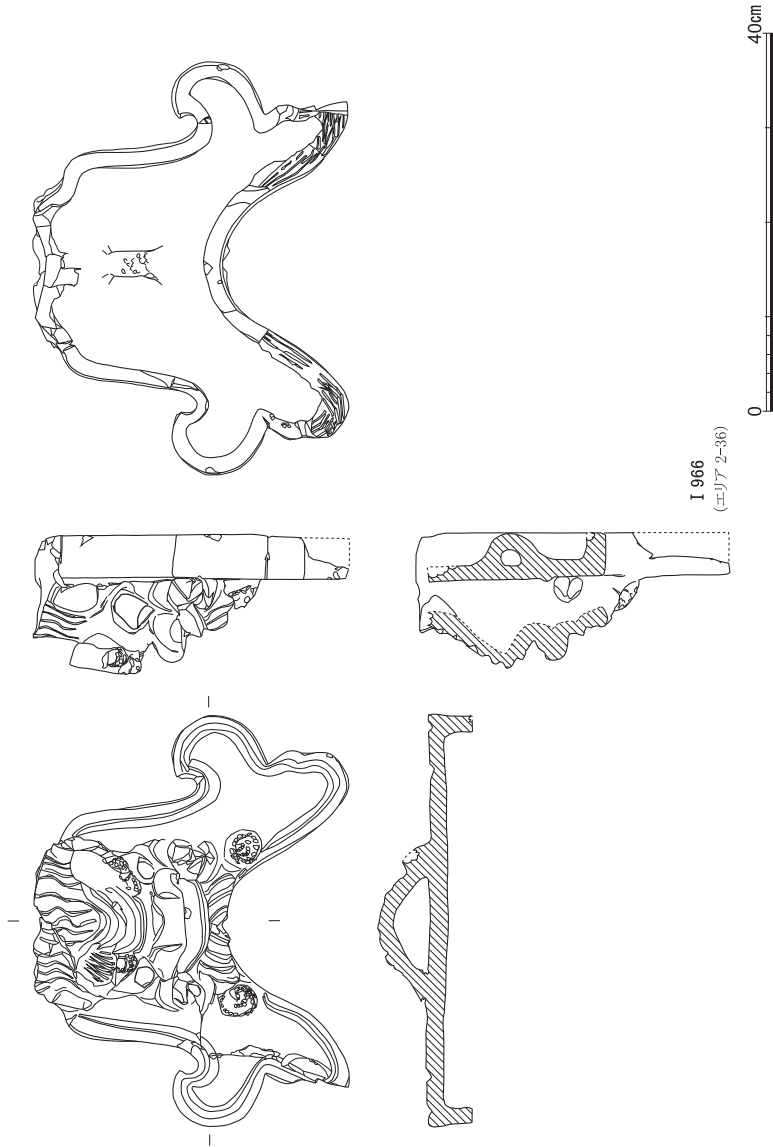


図91 S X 6 出土遺物(8) (I 966瓦) 縮尺1/8

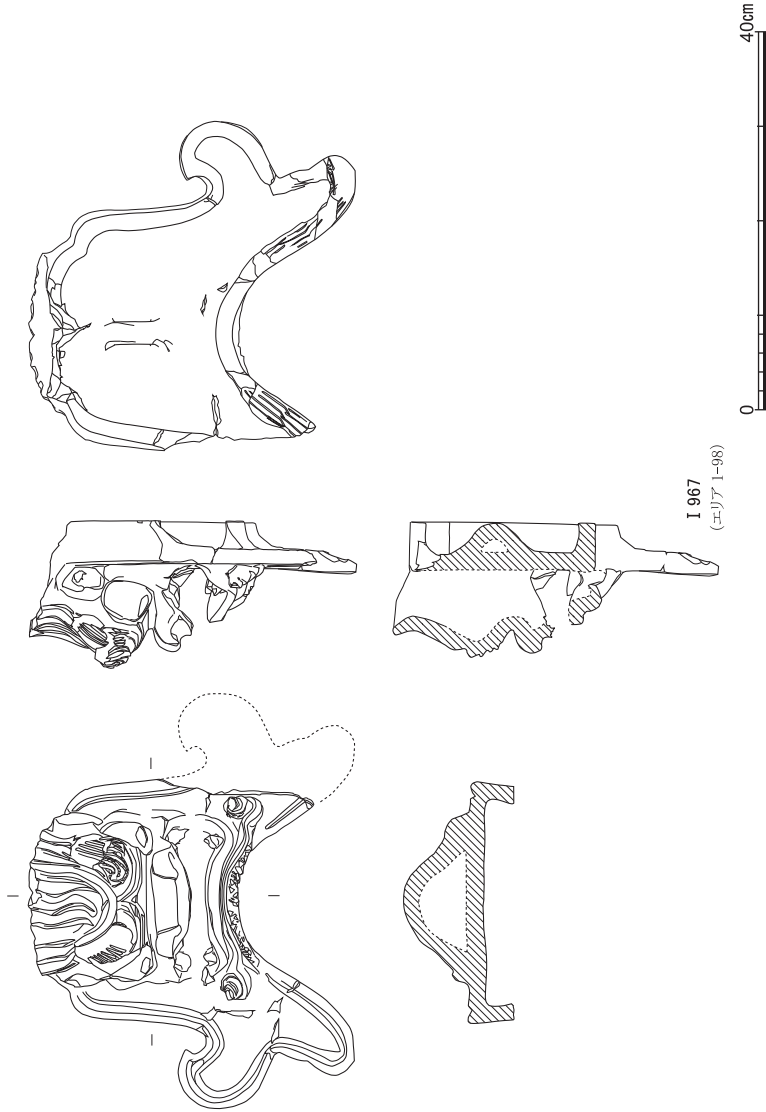


図92 S X 6 出土遺物(9) (I 967瓦) 縮尺1/8

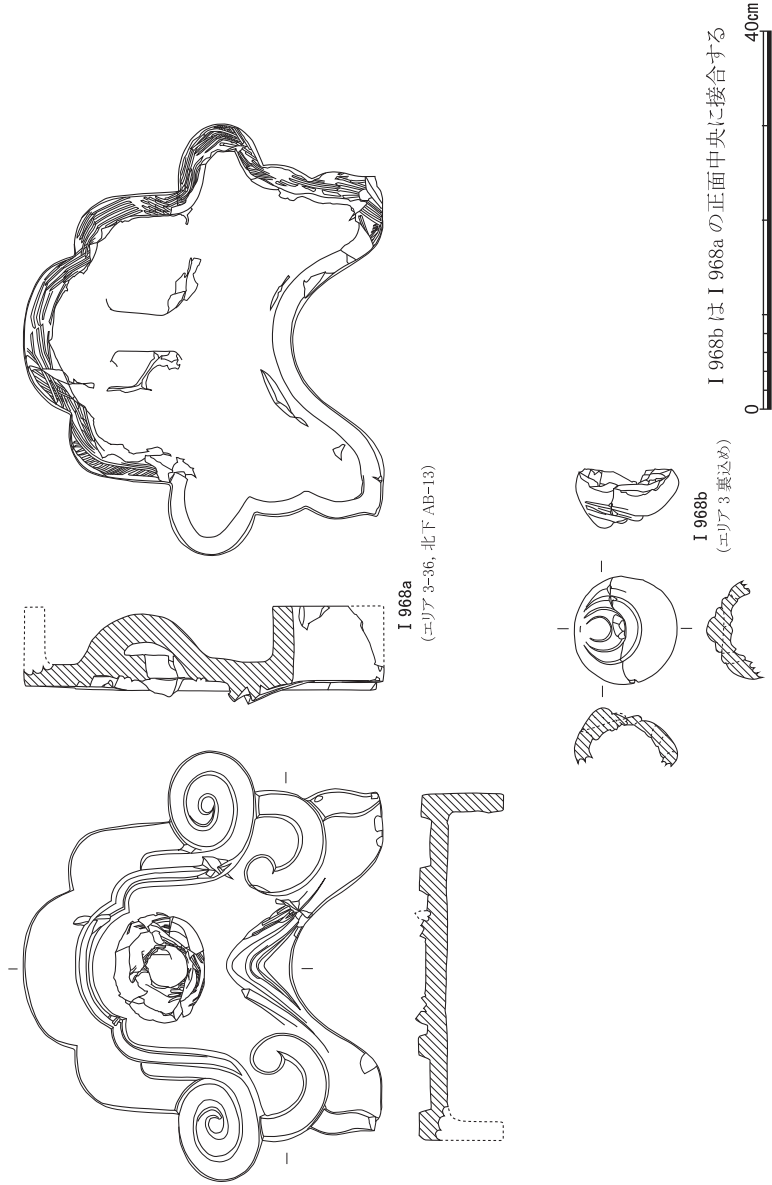


図93 S X 6 出土遺物(0) (I 968瓦) 縮尺1/8

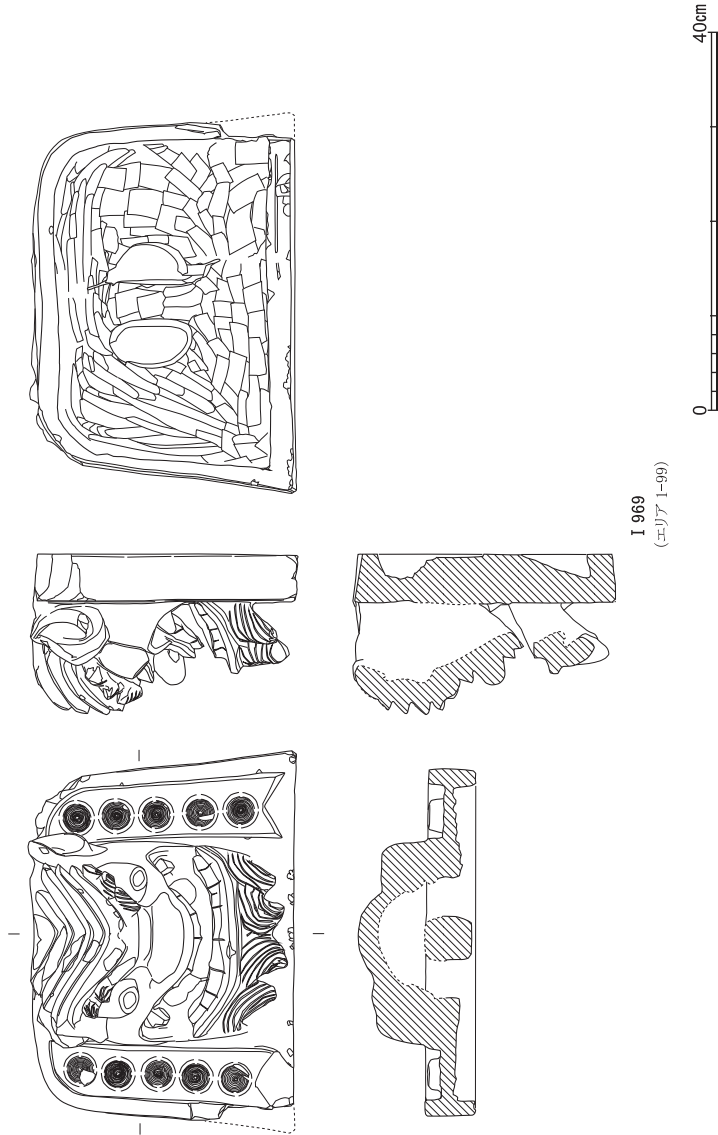


図94 S X 6 出土遺物(1) (I 969瓦) 縮尺1/8

近世の遺跡

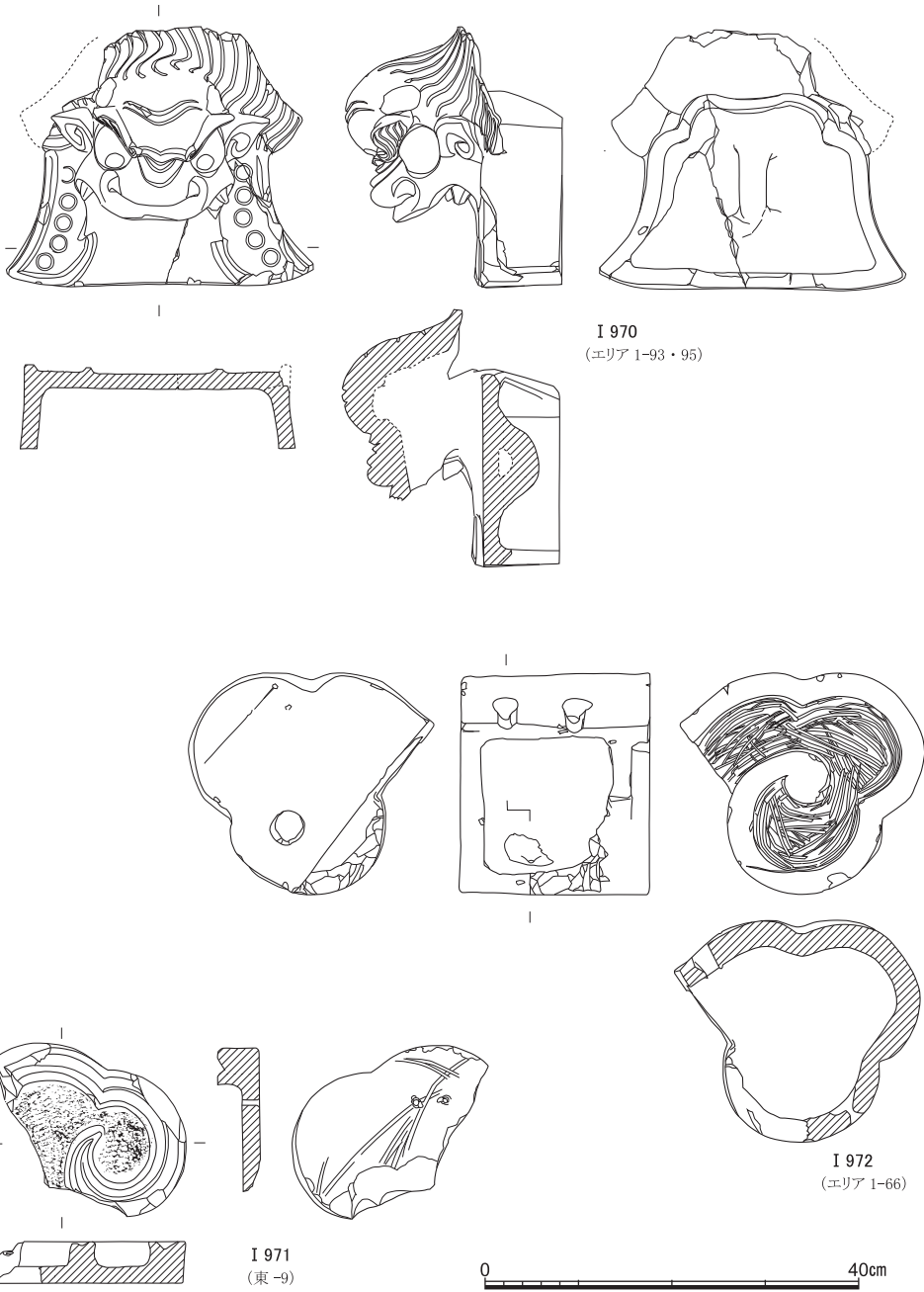


図95 S X 6 出土遺物(12) (I 970~ I 972瓦) 縮尺1/8

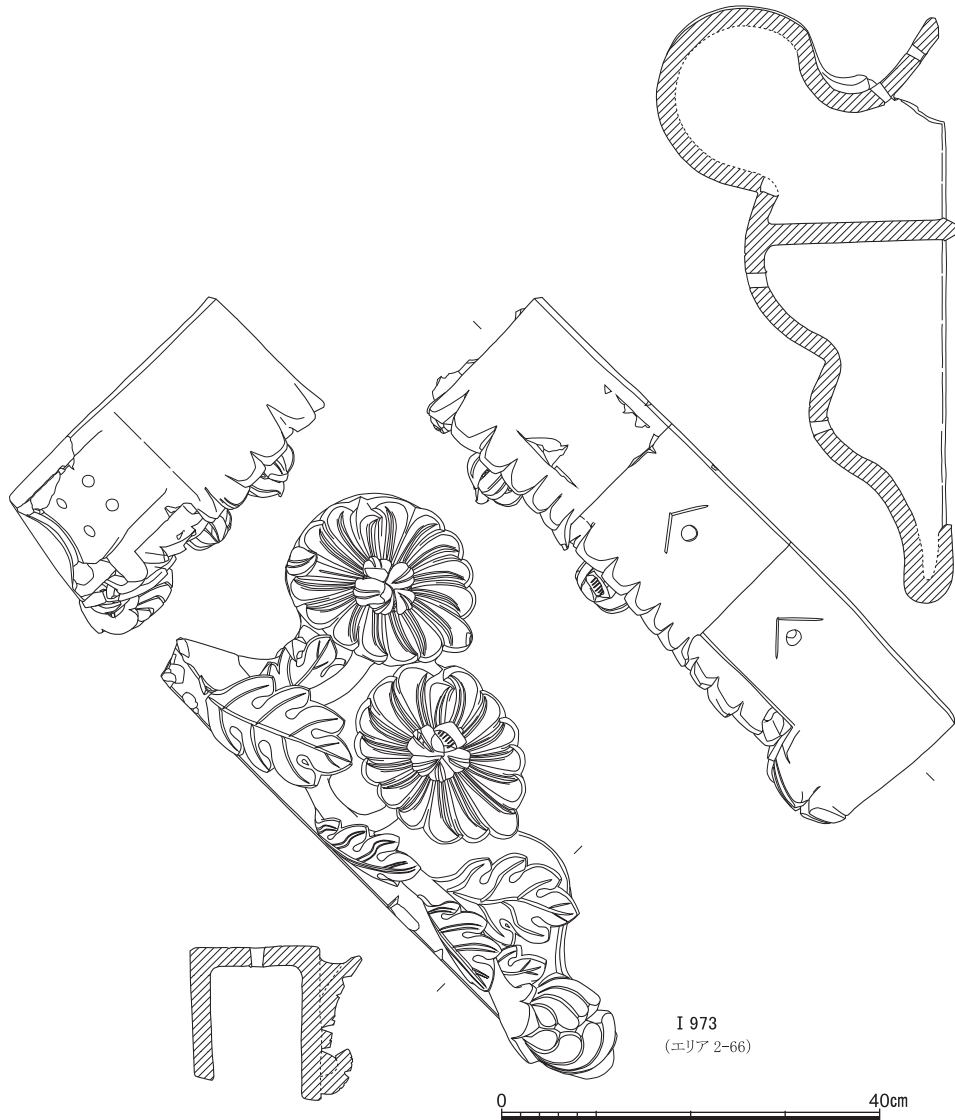


図96 S X 6 出土遺物(13) (I 973瓦) 縮尺1/8

い。エリア1の基底で出土した(図版2)。意匠や作りが同じI 973~I 975は、ほぼ完存するI 973・I 974が左足で、I 975は右足の上。棟の方向を示すと思われる上面の穿孔部(つり穴か)横の篋記号も同じなので(図版28・29)、同一建築に由来するのだろうか。この3点は、エリア1~2の基底で東から順に並んで出土した(図版2)。

I 976は、大棟に用いる二重箱冠瓦の箱縁部で、冠部と紐部が剥落している。I 977は、

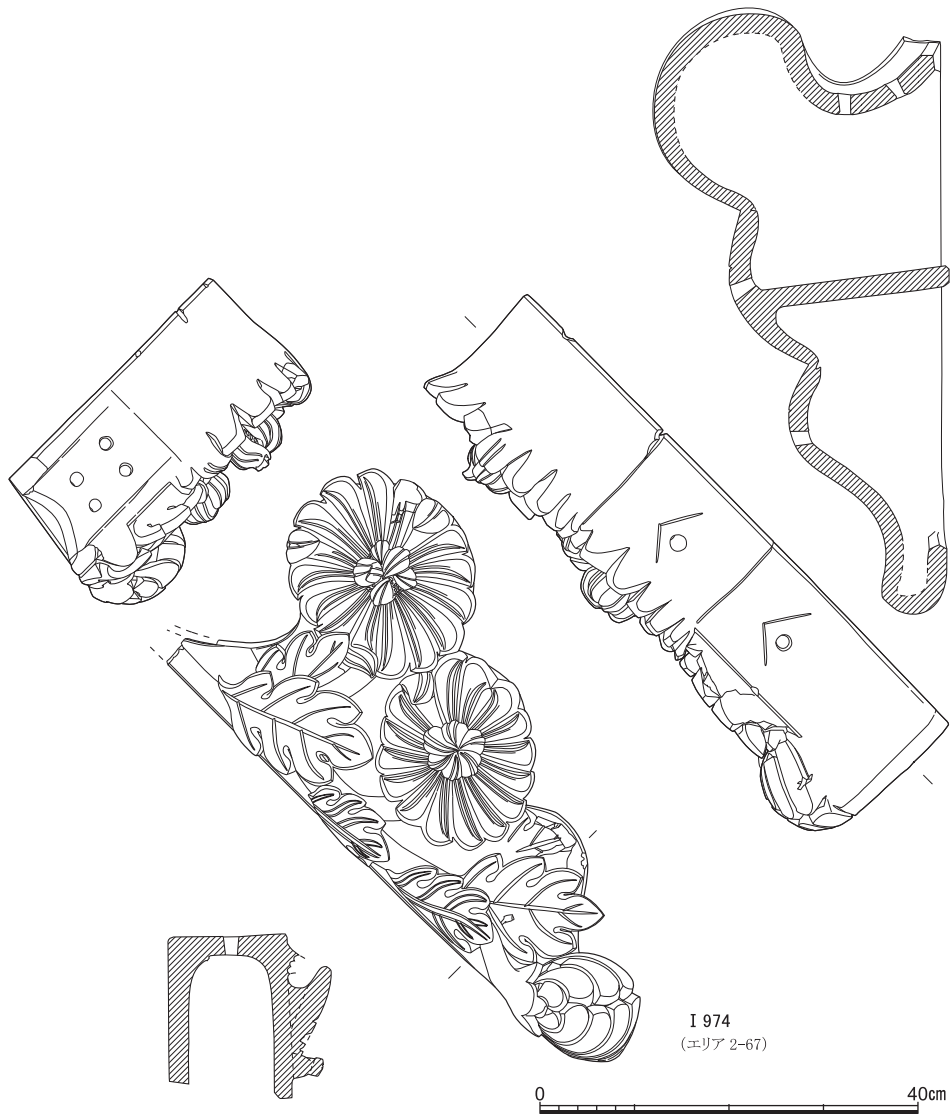


図97 S X 6 出土遺物(14) (I 974瓦) 縮尺1/8

大ぶりだが組棟に用いる松皮菱の棟込瓦と思われる。I 978は降棟を屋根の途中で終える際に末端に用いる半月巴。I 979は軒端と軒先側から見て右側の妻ないし破風とが交わる角に用いる角瓦。袖の先端に入った切り込みは、竹などを用いた雨樋の立ち上がりを受ける隙間だろう。I 980は寄棟の軒端の隅に用いる右切隅瓦で、隅から棟に向かう角度は45度なので、両側の屋根勾配が同じ真隅である。I 981は、I 979と同様の右側の角瓦だが、

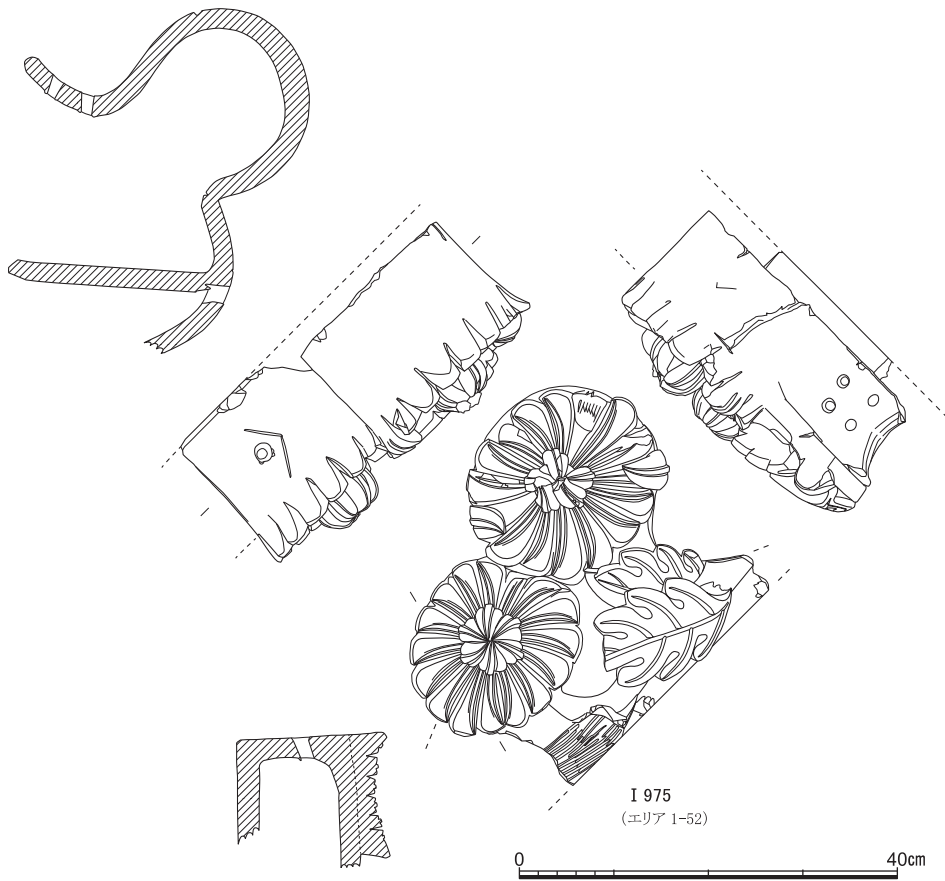


図98 S X 6 出土遺物(15) (I 975瓦) 縮尺1/8

瓦当を構成する垂れ（軒平部に相当）の部分の範の位置、凹面の左端寄りの浅い切り込み、左端寄りに穿たれる予定だったつり穴の位置などから、降棟の存在を想定できる。I 982は、平板で頭から尻までの長さが長いことから塀瓦と思われる、軒側に45度の角で出てきて、軒先は垂れが切り落とされているかのように付いていないことから、切落出隅瓦だろう。I 983は、右側の妻ないし破風に用いる袖瓦で、うでの部分に小巴（軒丸瓦に相当）が付く車袖瓦。I 984・I 985は、垂れや小巴が平坦無文の軒棧瓦で、前者は垂れの下端が一直線の一文字軒瓦、後者は小巴が扁平無文の石持軒瓦。

I 986～I 989は軒棧瓦で、幅は2種類だが長さは3種類あるかもしれない。I 986には小巴が付き、垂れは滴水瓦のような木瓜剣。棧瓦のI 990は上記の軒棧瓦よりも一回り大きい。I 991は軒平瓦。I 992～I 995は軒丸瓦。I 996～I 1000は丸瓦で、胴部長や頭の端

近世の遺跡

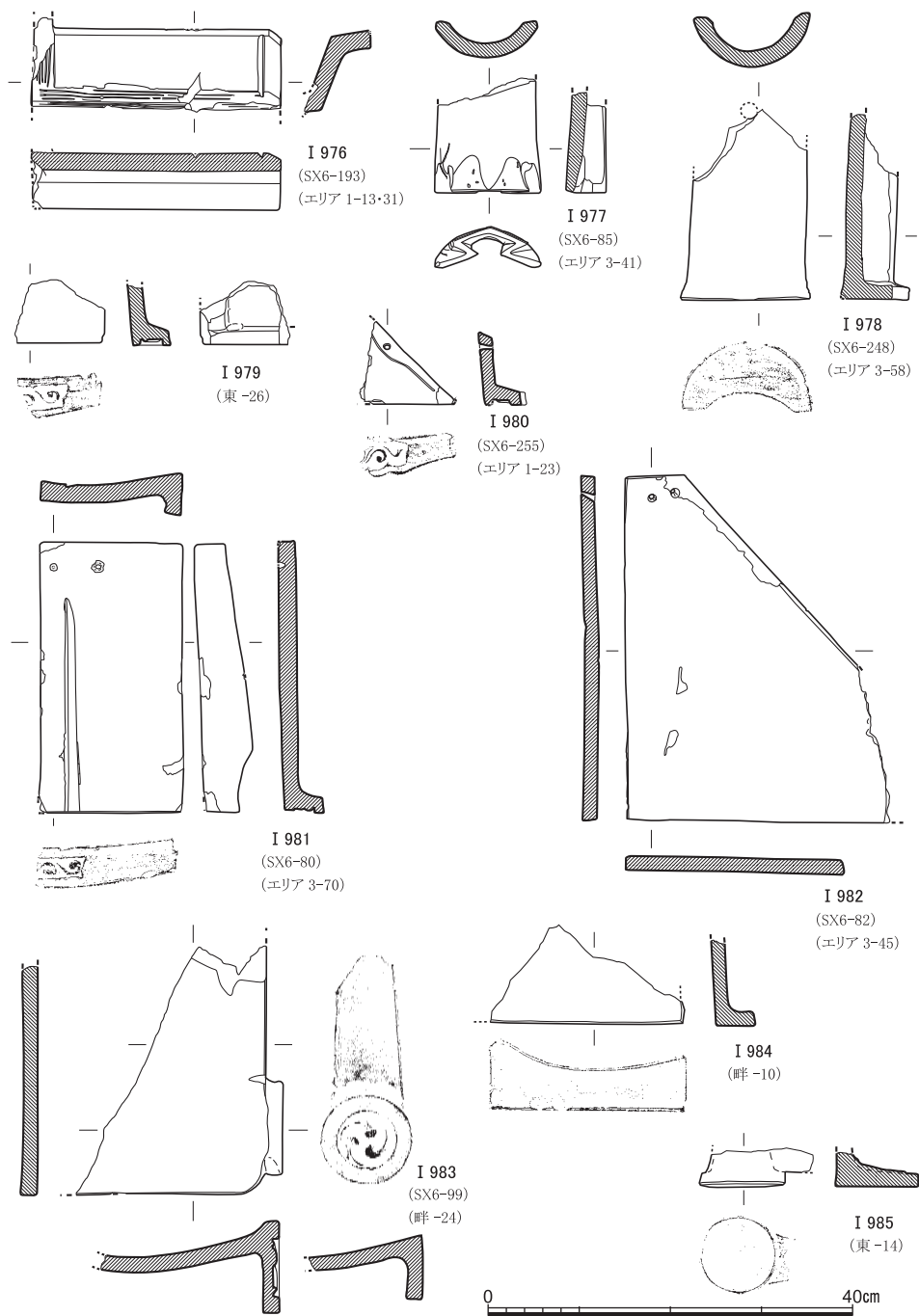


図99 SX6出土遺物(16) (I 976~I 985瓦) 縮尺1/8

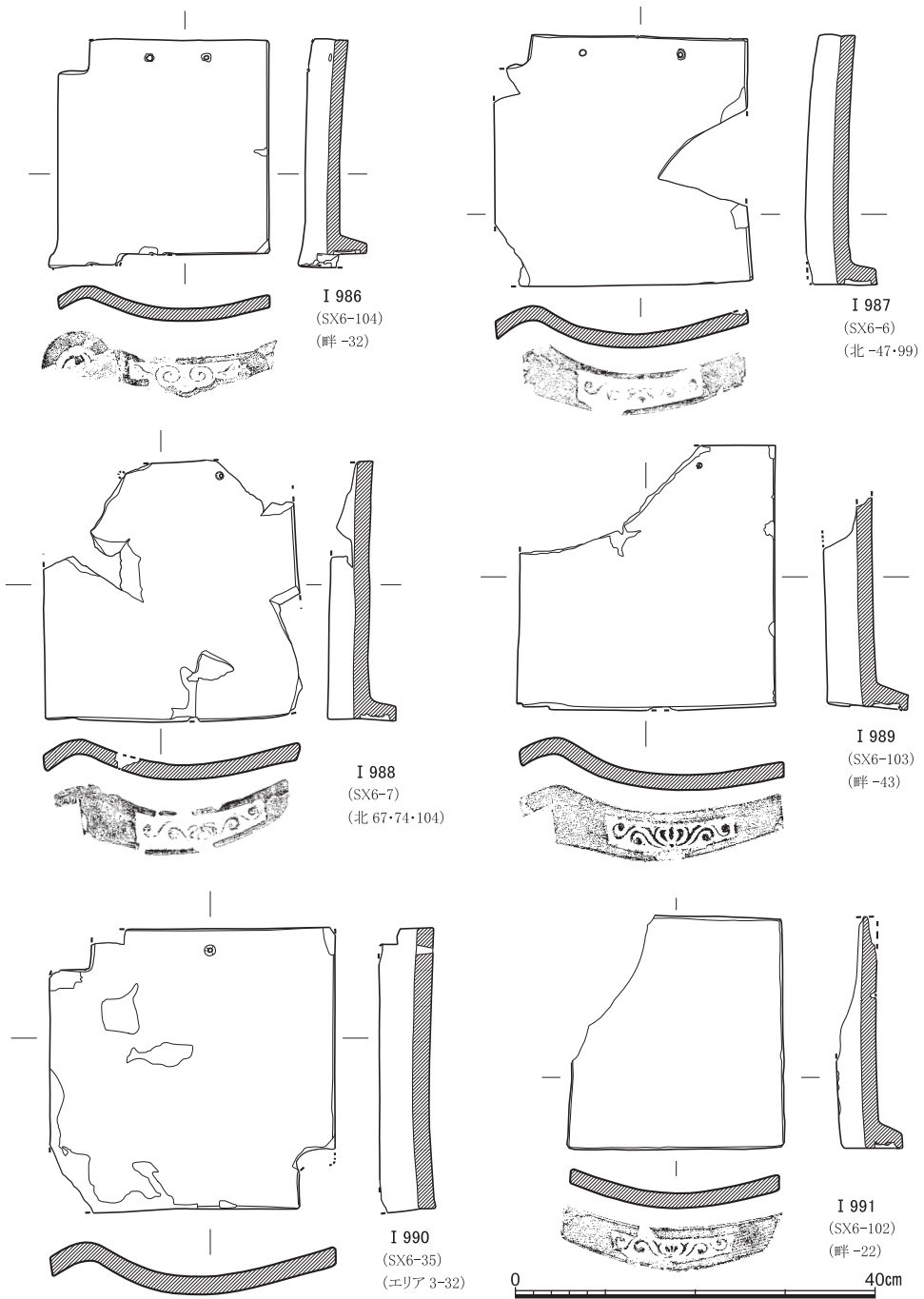


図100 S X 6 出土遺物(17) (I 986~ I 991瓦) 縮尺1/8

近世の遺跡

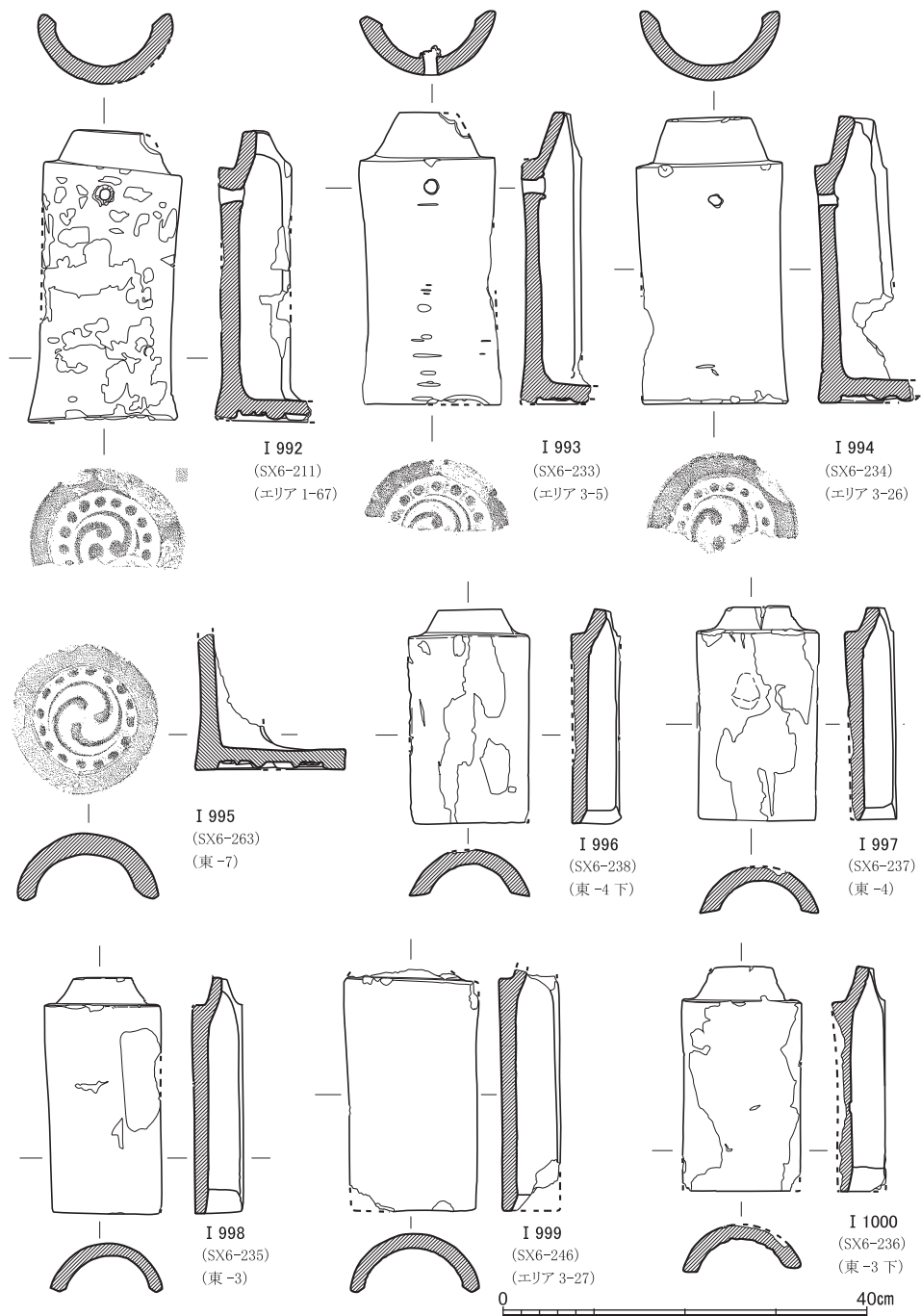


図101 SX 6 出土遺物(18) (I 992~ I 1000瓦) 縮尺1/8

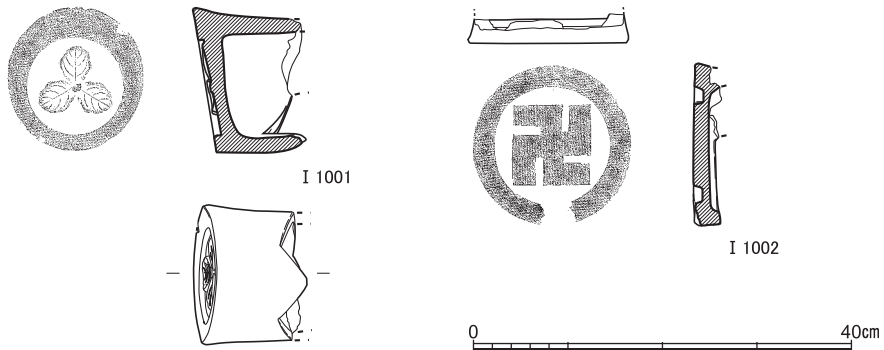


図102 S X 6 出土遺物(19) (I 1001・I 1002瓦) 縮尺1/8

部調整などに多様度が見られる。

I 1001・I 1002は家紋瓦で、エリア2の裏込め最上部で瓦当が上を向いて出土した(巻首図版)。土佐藩主の山内家の家紋に見られる三葉柏のI 1001は、隅棟の先端で軒端と軒端の交点に用いる隅巴。阿波藩主の蜂須賀家の家紋に見られる卍のI 1002は、丸瓦部の剥離した軒丸瓦である。

瓦積みを構成する瓦には、表1に見るように、図示した以外にも、通常の棧瓦や丸瓦とともに多種多様な道具瓦がある。例えば、降棟の丸瓦を意識して隅部の切られた片切平瓦や、妻や破風の際の降棟に用いる袖丸瓦、入隅に用いる谷口や谷筋違などの並谷瓦、棟に用いる伏間瓦などが含まれる。

S X 6からは、このほかに、泥面子や玩具、火打ち石や鉄器、青銅製品や銭貨なども出土している。S X 7と同様にS D 2の埋土中の遺構であるこのS X 6については、出土遺物の年代はS D 2埋土中の遺物とも整合的で、構築時期は幕末から明治初期である。

南北溝出土遺物 (I 1003～I 1118) I 1003～I 1008は土師器で、I 1003はひな皿、I 1004は塩壺の蓋、I 1005は花塩壺。I 1006は厚底の底部に焼成前の穿孔を3カ所確認できる。I 1007は焙烙。I 1008は五徳で、刻印が2つあり、一つは「フカクサ」、もう一方は丸囲みで「松本」と読むならば、寛政期の陶工の松本五三郎の銘である。

I 1009～I 1039は陶器。I 1009～I 1012は盃で、I 1012以外は完形。I 1010は呉須で外面に「加茂川筋／三樹ノ里」、見込みに「清輝楼」とある。御所の東に幕末にもあった料亭の名である。I 1011は京・信楽系でI 1012は京焼。I 1013・I 1014は京・信楽系の輪高台の椀。I 1015の皿の見込みに呉須で書かれた「華頂山」は知恩院の山号。I 1016は軟質施釉陶器の皿で見込みに宝珠文を描く。I 1017の皿とI 1018・I 1019の鉢は珉平焼。I

近世の遺跡



図103 南北溝出土遺物(1) (I 1003~ I 1008土師器, I 1009~ I 1022陶器)



図104 南北溝出土遺物(2) (I 1023~ I 1039陶器)

1020の徳利の底裏の墨書は、漢字か記号か不明。I 1021はイッチン描きで丸囲みに「玉」、I 1022もイッチン描きで、図面の反対側に四角囲みがあり、ともに酒屋の屋号を示すと思われる通徳利。丹波焼か。

I 1023は素焼きの小壺で、草花紋らしい模様が墨書で描かれる。I 1024・I 1025は鍋で、I 1025の内面には、口縁端部に呉須が巡る皿か鉢が融着している。I 1026はほぼ完形の土瓶で、白化粧に上絵をつけ、呉須で「大佛」と書く。I 1027は完形の土瓶の蓋で、呉須で書いた文字は「鞍馬」か。つまみは犬を模したと思われる。I 1028の鍋の蓋の文様は、鉄釉の釉剥ぎ部に飛び鉋で、最後にイッチン描き。I 1029～I 1033はいずれも京・信楽系の灯火具。I 1029・I 1030は完形でI 1032もほぼ完形。I 1034は京・信楽系の柄杓で、内面の体部中央に鉄釉の圏線が一筋めぐる。乳白色を呈し京・信楽系と思われるI 1035は火鉢だろうか。I 1036は瀬戸・美濃系の完形の一輪挿し。I 1037は黒釉流しの大甕の底部。I 1038は、頂部外面のみに透明釉がかかる京・信楽系の焼き物。瓶に詰める栓だろうか。I 1039は明るく赤みがかった焼締め陶器の鉢。

I 1040～1094は磁器。I 1040～I 1052は染付の盃でI 1040～I 1042・I 1051は完形。I 1040・I 1041は組物で、底部は巴高台で、外面裏側には唐代の高適が詠んだ漢詩の一節「世上漫相識 此翁殊不然」に続いて「山亦製」の計13字が書かれる。I 1042は、外面に「賣茶翁詩」として、江戸中期の煎茶の中興の祖が詠んだ七言律詩が書かれる。I 1043は五言律詩。I 1044はI 1045と組物で、外面裏側に「年々□々花相似」（□は延か）とある。唐代の劉希夷の漢詩の著名な一節「年々歳々花相似」とは異なるかもしれない。I 1046の底裏には清水七兵衛の銘がある。I 1048～I 1050は外面・底裏は無文。I 1050は提灯に「河…松」とある。I 1051は一回り小さい盃。口縁を欠くI 1052の盃は底裏に「清風」の銘がある。19世紀前葉以降の清風与平のものだが、何代目かはわからない。

I 1053は染付小杯。I 1054～I 1056は色絵の椀。I 1054の口縁は端反り気味。I 1057～I 1059は端反りの染付小杯でI 1058とI 1059は組物。I 1060も端反り小杯だが、I 1061と同じく上絵の色絵付けをしている。I 1062はたこ唐草文の小椀で、I 1063～1068は筒形などの小椀。I 1064とI 1065は組物で、呉須で、安芸広島藩の浅野家の家紋として知られる丸囲みに違の鷹の羽紋を、描き方を変えながら3単位に配する。竹を模したI 1068は白磁で、口縁上端に鉄釉がめぐる。

I 1069～I 1073は染付の椀。I 1073はI 1062と意匠を共有する。I 1074・I 1075は染付の鉢。I 1074は口縁端部に斜位の細い切り込みを密に入れてさざ波状にし、高台は畳付に

京都大学熊野構内Z Z18区の発掘調査



図105 南北溝出土遺物(3) (I 1040~ I 1068磁器)

近世の遺跡

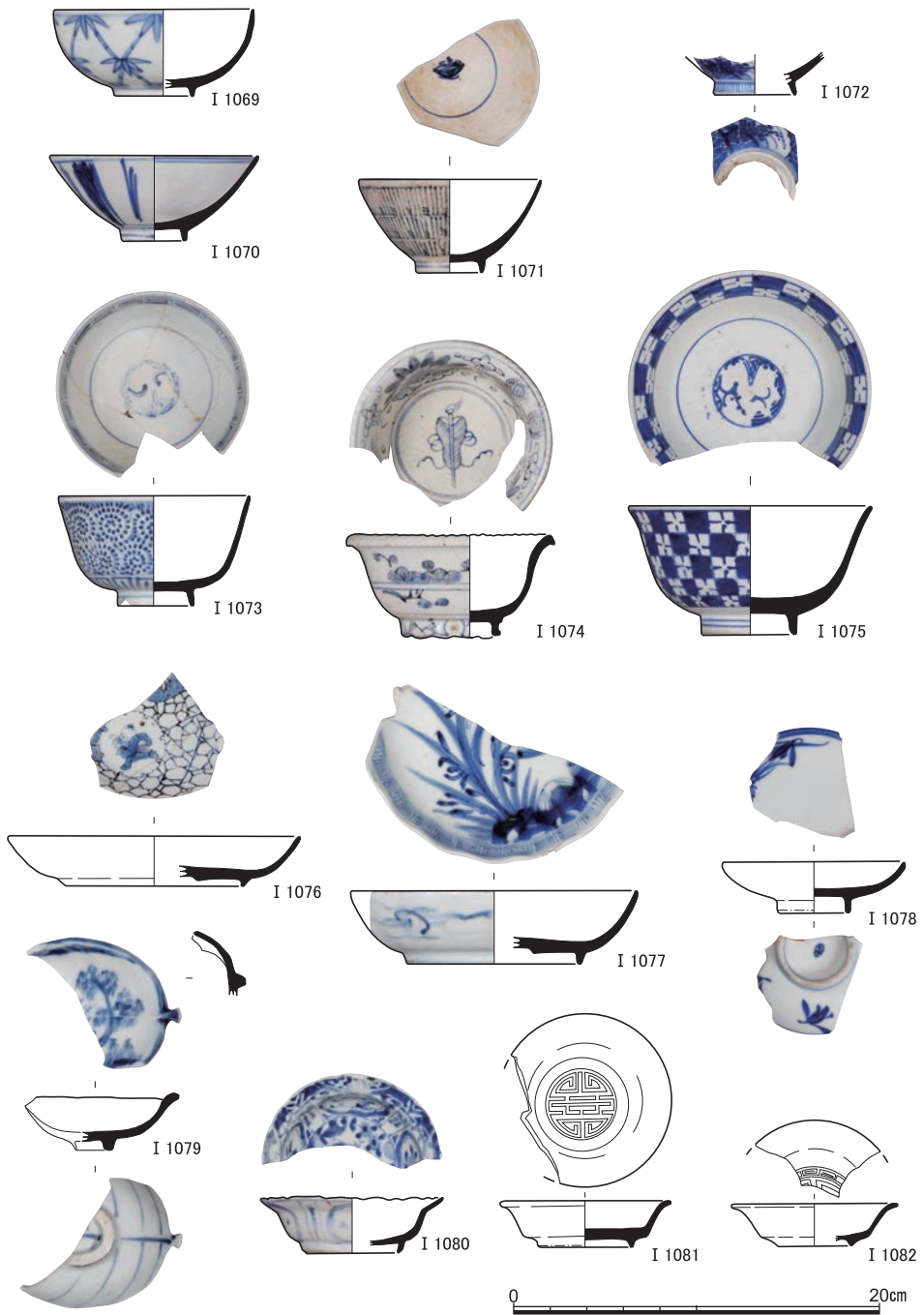


図106 南北溝出土遺物(4) (I 1069~ I 1082磁器)



図107 南北溝出土遺物(5) (I 1083～I 1094磁器, I 1095ガラス製品)

太く短い切り込みをめぐらせるとともに側面には4単位の凹点を付す。内面文様は向日葵や太陽などが南国風に描かれており、東南アジアからの輸入品かもしれない。I 1075はI 1067と意匠を共有する。

I 1076～I 1082は皿で、I 1076・I 1077は底部が蛇の目凹形高台。I 1079は木の葉形の手塩皿。型打ちのI 1081・I 1082は白磁。I 1083～I 1086は蓋。I 1083は雲間を駆ける龍を3単位の配する。I 1087・I 1088は鶴首瓶。I 1089・I 1090は段重。I 1091は小壺形容器で蓋受けがある。I 1092は合子の蓋。I 1093は器形がわからないが、庇状の口縁は120度ほどの角度をなすので、俯瞰が六角形になると思われる。大型の鉢だろうか。I 1094は青釉の一輪挿しで、京・信楽系の陶器一輪挿しに似る。

I 1095は青みがかった曇りガラスの瓶。I 1096～I 1113は玩具類で、I 1096～I 1102はミニチュア。I 1096・I 1097は土師質で、I 1097の焜炉形の底裏の刻印は山を冠にして「中」

近世の遺跡



図108 南北溝出土遺物(6) (I 1096・I 1097土師器, I 1098～I 1101軟質陶器, I 1102陶器, I 1103～I 1108伏見人形, I 1109～I 1112芥子面, I 1113玩具成形具, I 1114土製円盤, I 1115～I 1118窯道具か)

とある。I 1098～I 1101は軟質陶器で I 1100以外は施釉。I 1102は白化粧に色絵している急須形の陶器。I 1103～I 1108は伏見人形。I 1109～I 1112は芥子面。I 1113は伏見人形の僧侶の型。I 1114は土師質の円盤で、上面が5弁の蓮華文のような意匠で、中央の穿孔部には鉄の細棒が錆び固まっている。I 1115は焜炉に用いた目皿ないし窯道具。同様に多孔の土製品である I 1116～I 1118は、厚さが3～4 cmに達し被熱が顕著なので窯道具と思われる。

南北溝からはこれらを含め、陶磁器類や瓦が整理箱20杯分出土している。瓦の大半は棧瓦の破片で、褐色に近い色調を呈するものがかなり目立つ。燻されて黒みがかかる通常の棧瓦とは色調以外に異なる点が見られないことから、被熱して変色したと思われる。このように変色したと思われる瓦は、本調査区ではこの南北溝以外からはあまり出土せず、南北溝に切られる瓦溜 S X 3でも、出土した瓦は燻されたものばかりである。

瓦積み遺構にかかわる近世瓦の刻印 瓦積み遺構 S X 6に積まれていた近世の瓦の中には、刻印をもつものが多数確認された。それらを示したのが、図109と図110である。S X 6だけでなく、大溝 S D 2や S D 2内の瓦破片集中部 S X 7から出土したものもあるが、これらの遺構についても S X 6に関連するものとして扱うことができる。S D 2から出土したものは図109-6・7・9・12・23・図110-2であり、S X 7で出土したものは図109-15である。

刻印の位置については、基本的に棧瓦や平瓦の端部に捺されたものが多い。それ以外には、瓦の凸面（図109-2・8・17・21・23・図110-1・5・6・11）や丸瓦の玉縁部（図109-5）、軒平瓦の瓦当文脇（図109-16・18・19・図110-12）に捺されたものもある。なお、本調査区出土の近世瓦の刻印については、大学構内のほかの調査地点のものとあわせ前年度の年報で紹介し、周辺の遺跡や地域における類例も示したため、そちらも参照いただきたい〔内記2018 pp.108-12〕。

刻印は大きく5種類にわけられる。①花文様のもの、②1字を円形で囲ったもの、③1字を方形で囲ったもの、④2字を方形で囲ったもの、⑤5字以上の文字を方形で囲ったものである。

①には四弁のものと九弁のものがある。②には「へ」「ハ」「十」「弥」「元」「大」「極」「市」「長」などの、文字が読みとれるもののほかに、判読不明のものがある。なお、「ハ」の字として示したものは「へ」字である可能性がある。例外的に、「九」字を楕円で囲ったものもある。③には「治」「彦」と判読不明のものがある。基本的に刻印の文字は陰刻

されるが、陽刻されたものもある(図109-23)。④には「昆太」「□八」「大□」を縦書きで陰刻したものと、「甚私」を横書きで陽刻したものがある。なお、「昆太」は「日比太」の3字である可能性もあり、また、「□八」「大□」「甚私」は3字以上である可能性もある。⑤には「御用／京大佛瓦師／井上三右衛門」・「□□大佛住瓦師／西村彦右エ門尉」・「大佛瓦□(屋?)／江川喜兵衛」・「大ふつ／次郎」・「□(大)ふつ／□(又)左衛門」・「大ふつ／□(右?)□□」・「京深草瓦師／平岡作兵衛」・「深草瓦師／□□□□」・「ふかくさ／長左□□」がある。「大ふつ」の「つ」字であると思われる断片もみつまっている。「大仏」や「ふかくさ」の語は、京都産の瓦であることを明示する。



図109 瓦積み遺構にかかわる近世瓦の刻印(1) 縮尺1/1

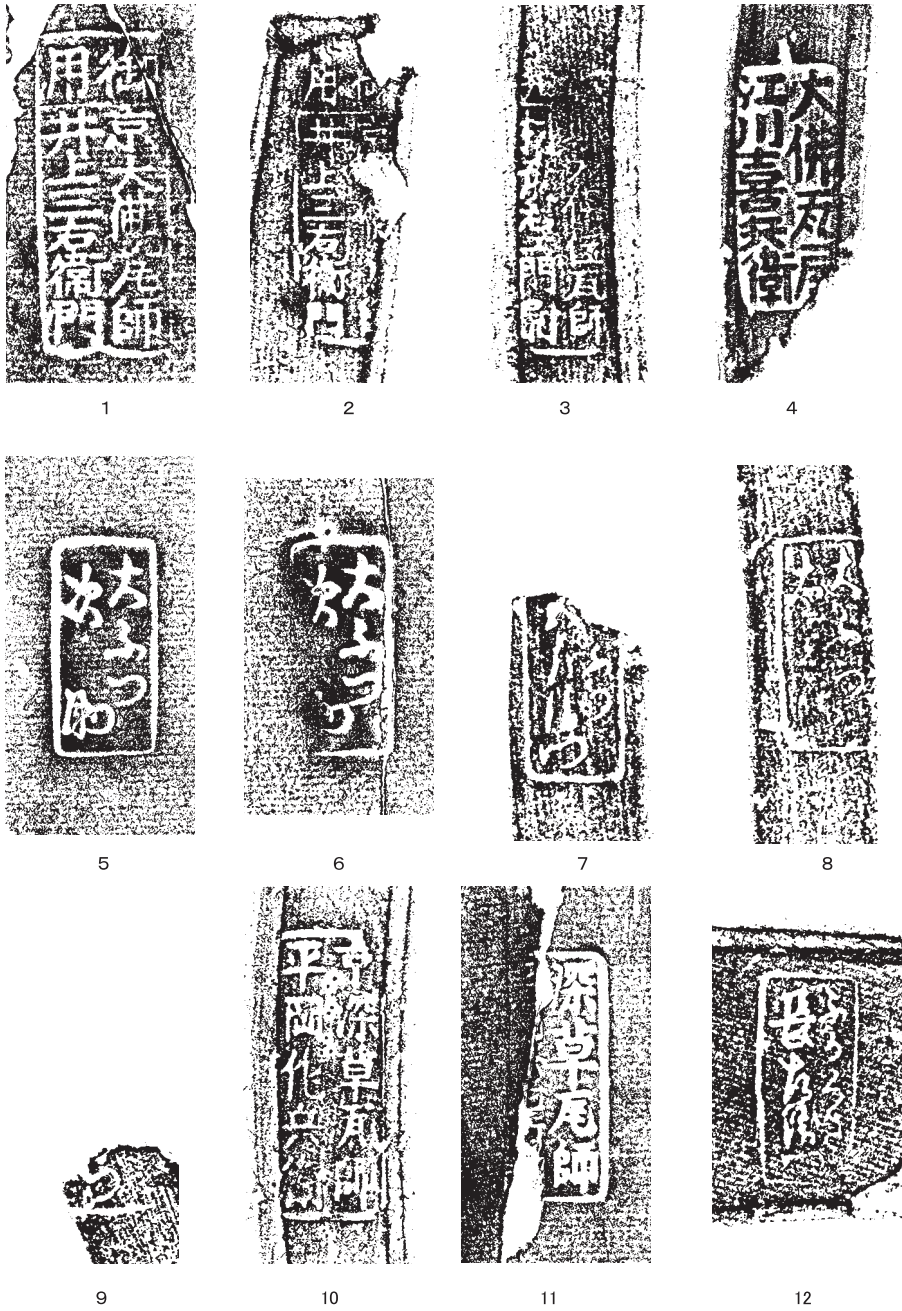


図110 瓦積み遺構にかかわる近世瓦の刻印(2) 縮尺1/1

7 小 結

(1) 近世までの堆積環境

花崗岩粒と堆積岩粒から成る第9層の下層砂礫層群は、下部の堆積からは遺物の出土がないので時期を推定できないが、調査区西壁では、上部の粗砂層の下位に堆積したシルト層（第9'層）の最下部で火山灰様の堆積物を確認した（図版5-6）。東方の岡崎遺跡では、旧石器時代に降灰した始良Tn火山灰（AT）の一次堆積層が確認されている〔池田・石田1972, 竜子2005など〕。京大構内遺跡では、AT降灰層は確認されていないが、本調査区の北東1.5km, 吉田本町遺跡北辺から北白川追分町遺跡南辺にかけて、土壌化層中にブロック状の堆積で縄文時代早期末のアカホヤ火山灰が認められる〔長戸ほか1997, 笹川ほか2015〕。これらのアカホヤは、本調査区で検出した火山灰と思われる堆積物と異なり、おもに淡橙色ないし黄褐色を呈するとともに、粒子もより細かく感じられる。京都盆地内では、現標高から2m程度の掘削深度で目視できるほどの堆積量になる火山灰は、ATとアカホヤ2種類に限られると言って良いだろうから、本調査区の西壁断面で確認された当該堆積物は、分析を経てはいないものの、アカホヤではなくATと考えたい。

この火山灰様の堆積物は、下層砂礫層下部（第9b層）との層理面近くで、斜面堆積のように緩い南下がりの状態で堆積しているが、第9'層と第9b層との層理面も、同程度に南下がりの傾斜となっている。また、第9'層の最下部は、火山灰と思われる堆積物の周辺も含めて有機質の分解が進んでいない紫灰色を呈する。こうしたことから、ATと想定されるこの堆積物は、低湿地状の環境下での降灰状態（一次的な堆積）を保っている可能性もある。なお、本調査区の北方500mの154地点では、標高約49m～51mに厚さ2mほどのシルト層の堆積があり、その上半部の堆積物の火山ガラス分析で、上部約20cmがアカホヤの降灰期ないしその直後頃に比定されるもののそれ以深にはアカホヤを含まずにATが確認されている〔竹村・壇原1988, 清水1991〕。154地点は、およそ29000年前とされるAT降灰以降、縄文前期ないしそれ以降まで滞水域だったと思われるが、本調査区は、AT降灰期には陸域に近い低湿性の堆積環境だったのだろう。

その後の堆積環境については、調査区東半では、第9層上部には縄文時代前期から弥生時代頃までのやや摩滅した先史時代の遺物が多く含まれ、それ以下でもシルトなどの細粒分の堆積は部分的に薄く見られる程度のようなので、先史時代は流路の一部だったと思われる。先史土器の主体を占めるのは縄文後期前半の北白川上層式である。北東300mあた

りには縄文後期の聖護院遺跡が位置し、それに西接する聖護院河原町遺跡には、278地点で、東から流れてきた白川系の流路の堆積物中にあまり磨滅していない多量の北白川上層式が包含されていたことから〔千葉ほか2007〕、本調査区の縄文土器の多くは聖護院遺跡での活動に由来する遺物の再堆積と考えられる。しかし、縄文土器が包含される砂層には堆積岩の比率が高いため、これらの土器は、白川系流路が本調査区の上流で高野川と合流した後にもたらされたことになる。

それ以前の前期末・中期後半・後期初頭の土器については、近辺には遺跡が知られていないが、聖護院遺跡から北東1.5～2.5km上流にはその時期の北白川小倉町遺跡や北白川追分町遺跡があるので、そこから高野川系流路を経て再堆積したと思われる。ただし、比較的大きな破片である後期初頭の中津式土器（I 26）は、茶褐色を呈し角閃石が目立つ胎土で搬入品の可能性があること、その時期には聖護院・吉田・北白川の地でもほとんど遺物が出土していないことから、賀茂川流域など別の水系の遺跡に由来するかもしれない。

古墳時代以降は、白河街区の営まれた平安時代後期より前までは、遺物は出土量がわずかだが、第9層ではなく中近世の包含層や遺構埋土から出土するので、それまでの流路は本調査区外へ移動したと思われる。平安後期のこの一帯は、白河街区に含まれており、南西100mあたり（図2のA・B地点）でその時期の基壇や溝も確認されているように〔上村1983、伊藤・網2011〕、安定的な陸域の一部だったろう。

もっとも、本調査区の西部では、第9層を削った粒径10mm前後の礫を多く含む第9a層の中位に、中世の播鉢破片が堆積していることから（図版5-4）、中世前半期には高野川系流路の強い流れが本調査区に及んだことを指摘できる。ただし、第9a・9層に掘り込まれた不整形土坑S X 17では、底面に近い標高44m前後でも1段撫でF類の15・16世紀の土師器が含まれ、埋積した第8層にはそうした土師器細片とともに平安後期から中世の多量の瓦が包含されていることから、高野川系流路の侵入は、この一帯をひろく覆い尽くし瓦葺き建物を壊滅させるほどではなかったろう。このS X 17には、16世紀頃までにも粒径数mm程度の碎屑物をもたらすたびたびの水流がおよんで部分的にその自然堆積をとどめており、湿地ないし池のような窪地として滞水域がひろがっていたことを物語る。

(2) 白河北殿と粟田宮

平安時代後期の京都を舞台とする軍記物語の『保元物語』は、大炊御門末の北、鴨川の東、春日末の南に、白河北殿が所在したことを伝える。また、保元の乱に際して北殿が焼失した後、その跡地には白河千鉢阿弥陀堂や粟田宮が造立されたとされる。今回の調査地

点の西隣にあたる一帯はまさに、これらの白河北殿や粟田宮などの跡地と推定されてきた〔川上1977 pp.11-13〕。

白河北殿は、元永元年(1118)3月に白河泉殿(南殿)の北に造営された。大治4年(1129)には改造の手が加えられたこともわかっている。天養元年(1144)5月に焼失したが、同年10月に再興された。最終的に白河北殿が焼亡したのは、保元の乱のさなか、保元元年(1156)7月11日のことであったとされる〔杉山1981 pp.124-25〕。

保元の乱後の平治元年(1159)には戦場跡に、平清盛の寄進により白河千躰阿弥陀堂が造営された。また、同地には寿永2年(1183)に崇徳院と宇治左府頼長の霊をしずめる目的で粟田宮がつくられた。宮は康元元年(1256)の焼失後に再建されたが、応仁の乱に際し、応仁2年(1468)に再び焼失し、その後は復興されなかった〔川上1977 pp.12-13〕。

これまでの、白河北殿や粟田宮にかかわる発掘調査をみておこう(図2参照)。1980年と1981年に、本調査区から西南西へ100mほどの、白河北殿の南端に位置すると思われるA・B地点で、京都市埋蔵文化財研究所による発掘調査がおこなわれた〔伊藤・網2011 pp.67-69, 上村1983 p.54〕。A地点の調査では東西方向にはしる基壇と、それに伴う東西方向・南北方向の溝、そして、集石遺構が検出された。基壇は平安時代後期につくられ、室町時代まで存在したことがわかっている。また、B地点の調査では、平安時代後期のものと考えられる建物の基壇がみつかった。

そして、本調査区から西北西へ200mほどのC地点においても1992年に発掘調査がおこなわれ、池の跡がみつかった。北殿内に築かれた園地の一部である可能性が指摘されている〔吉崎1995 p.45〕。2007年度の近隣での立合調査においても、平安時代後期の軒平瓦がみつまっている〔吉本2008 p.29〕。本調査区から北西へ300mほどの京都大学病院構内の19地点においておこなわれた1976年の調査では、池状の遺構の存在が確認され、また、室町時代後期以降の回廊様の遺構も検出された〔岡田1977 pp.45-52〕。本調査区から北西の一帯で、北殿にかかわると思われる池の痕跡が広範囲にわたってひろがっていたことや、中世に至るまで同地に大型の建造物が存在したことがわかる。

白河北殿比定地の東部では、すでに熊野構内の49地点で1978年に試掘調査がおこなわれた〔岡田1979 pp.43-46〕。平安時代後期の溝や瓦がみつかったことから、北殿のひろがりや寮の東側にまで及んでいた可能性は十分に考えられたが、本格的な発掘調査がおこなわれたのは今回がはじめてのことである。

ところが、今回の調査で平安時代の遺構と判断できるものはみつからなかった。そのた

め、同地が白河北殿の範囲内にあったという積極的な証拠を示すことはできない。ただし、調査区内からは平安時代後期の瓦を含めた古代の遺物がまとまった量出土した。これらの遺物はやはり、白河北殿に関連づけられる遺物の可能性が高い。

また、今回出土した古代から中世の瓦には、中央官衙系第Ⅲ期（12世紀前半）、第Ⅳ期（12世紀中葉）、第Ⅴ期（12世紀後半～13世紀初頭）、常磐仲ノ町集落遺跡S X-8の時期（13世紀前半）、「大覚寺御所跡」第Ⅱ期（13世紀中葉～14世紀初頭）のものと考えられるものが含まれていた〔上原1978, 1995〕。出土瓦すべてについての年代を考察することはできなかったものの、今回出土した瓦には、複数の時期に渡ってつくられたものが含まれているようである。上述のように、本調査区の近隣では古代の末期から中世にかけて白河北殿や千体阿弥陀堂、そして粟田宮などの建立や再建がおこなわれたと考えられている。今回、複数時期にわたる瓦が出土したことは、これらの動きに関係するかもしれない。

これらの瓦のうち、とくに注目すべきものとして、2点みつかった平安時代後期の鬼瓦があげられる。鬼瓦は、ほかの多数の瓦とともに調査区の西南部から出土した。15・16世紀頃まで使われたと考えられる不定形土坑S X17やその東を南北方向にはしる溝S D45、集石S X20などがその関連する遺構である。廃棄時期から考えると、これらの遺構の廃棄は応仁の乱による粟田宮の廃絶に関係する可能性がある。

鬼瓦は一般的に仏教寺院の屋根を飾る目的でつくられた。この時期のもので同地にかかわる仏教建築としては平清盛の造進による千鉢阿弥陀堂が知られるが、今回みつかった鬼瓦をはじめとする瓦類は、この阿弥陀堂を飾ったものである可能性はないだろうか。そうであるとしたら、阿弥陀堂が北殿の所在した範囲の中でも東寄りに建立されていた可能性を示すこととなろう。

なお、先に平安時代にさかのぼる遺構はみつからなかったとしたが、東北隅の近代の攪乱S K1からは平安時代後期にさかのぼる遺物がまとまった量みつまっている。この場所に古代にさかのぼる遺構が存在したのであろうか。その周辺でみつかった、13世紀前半頃まで使われたことがわかっている集石S X16や井戸S E8なども、古代から使われていたものかもしれない。

(3) 江戸時代の土地利用

調査区西南部の窪みは江戸時代後期までには埋まり、滞水域だったところも恒常的に乾地化したようで、S X17をはじめとする落ち込み地形は、南落ち・西落ちの段差をとともなう耕地に組み込まれる。基盤層はおよそ砂礫層であり、その直上の堆積も黒灰色土（第4

層)など粘質土ではないので、保水力が低かったはずで、緩く西に下がるこの地は、段々畑だったと推測できる。江戸前期の遺物がほとんどないことから、江戸後期の農耕地開発まではあまり利用されなかったかもしれないが、19世紀には、西段差の際が通路として機能するほどになる。黒灰色土が堆積し、19世紀中葉でもまだ段々畑だったようだ。このことは、富岡鉄斎がおそらく1850年代前半頃の少年期に聖護院村で過ごした時の記憶に基づいて描いた“略図”(図111-a)で、「丸太町」とある道を、今の丸太町通に重ねてみたときに(図2)、本調査区の北部あたりが「大根畠」とあることにも符合する。

こうした土地利用が転換したことが、東西方向の大溝SD2からうかがえる。砂地の第9層深くまで達し、規模が大きく急角度で立ち上がる溝で、埋土は、粘土質で細砂層を介する最下部と、粘土ブロックや礫とともに多量の遺物が入る上半・下半との2単位に分離できた。南北両側の壁際に杭列を設けていたことと、最下部の直上には腐朽した板状の有機質が出土していること、そして最下部の埋土の特徴から、当初は壁面の砂礫層の崩落を防ぐ土留め施設を備えた空堀として機能していたと推定できる。この大溝は、少なくとも東段差による旧来の区画を解消したに違なく、農耕用ではなく新たな土地区画用と判断すべきだろう。鉄斎の略図に反映されても良さそうな規模と性格を備えた遺構だが、その略図には見られないことから、掘削は1850年代以降と考えたい。

さらには、調査区南部と北部の土師器埋納遺構SP35・SX8は、ともに地鎮にとまなうと判断でき、同様に土地利用の変化を物語る。北部のSX8の南西で検出された、家の屋内ないし戸外に埋納されることが多い胞衣壺の埋納遺構SX9を、SX8と相関関係にあるとみなせば、調査区の北側に、男子の誕生を見た家が建っていたことになろう。また、大溝SD2では、その後、埋土中に構築された瓦積みSX6が北壁際の杭列の上に位置することに加え、当初の北壁は溝底から数十cmの高さで北側にひろげられていることから、空堀が、埋め立てられつつ瓦積みの構築に合わせて北壁は拡張されたと思われる。埋め立ては、埋土の状況から、短時間のことと推測できる。その時期は、包含遺物に照らせば、「子正月」・「料理」の墨書がある鉢が出土しているので(I781)、1850年以降の子(ねずみ)年ならば、嘉永5年(1852)か文久4年(1864)と考えられるものの、明治初年の作ともいわれる「青雲山」の刻印のある陶器〔加藤編1972〕も複数出土しているので(I878・I879・I883)、1864年以降と言える。このほか、調査区東南部で第4層の上位に堆積する、淘汰が悪く砂礫の間に空隙が目立つ砂礫層(第3層)も、自然堆積ではなく人為的な堆積と判断できるので、こうした一連の開発のなかで、持ち込まれたのだろう。

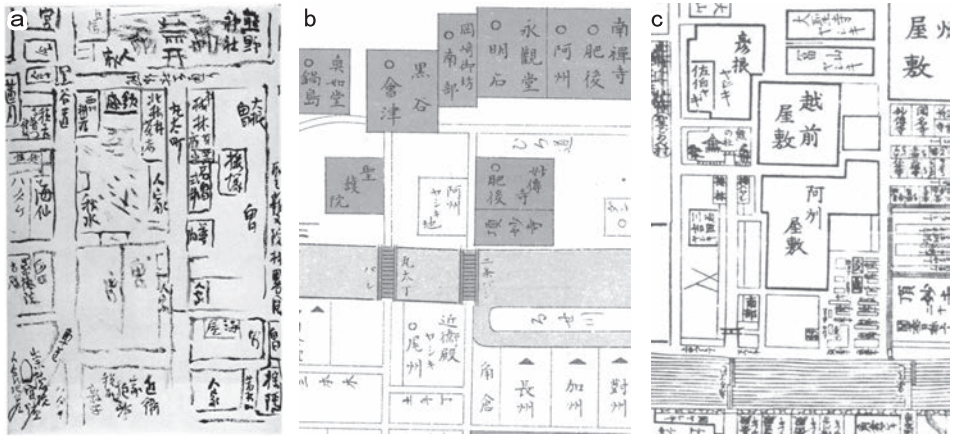


図111 幕末頃の本調査区周辺 左方北（a 聖護院村略図、b 御旅館御屋敷方角畧図、c 京町御絵図細見大成）

(4) 阿波徳島藩邸に関して

本調査区の一帯を含めた聖護院村では、『京都坊目誌』上巻之二十七によれば、文久2年（1862）に南部藩や阿波藩、越前藩や彦根藩が藩邸のための土地を得て、大建築も見られたが、明治に入って廃絶されて再び民有の耕地になった、とされる。そして、幕末の絵図によると、本調査区は、阿波徳島藩の京屋敷と重なる部分を有する可能性が高いことがうかがえる。ここで、鴨東の阿波藩邸について検討しよう。

幕末の京都には、諸大名が京屋敷を増設し、各地から多くの藩士がやってくるが、とくに文久3年3月に将軍家茂が上洛することもある。それに際して藩士の滞在場所を確保するべく、洛外に敷地を得た藩は少なくないようである。そうした中で、阿波徳島藩主の蜂須賀斉裕は、文久3年の4月に幕府から京都守衛を命じられる〔松本2008〕。斉裕は文久4年（1864）の正月を京都で迎えていたほどだが、徳島藩への京都守衛の御内勅は、半年先立つ文久2年閏8月にあった〔徳島市立徳島城博物館1997〕。その間に原版が発行されている「文久三年癸亥三月梓行御旅館御屋敷方角畧図」には（図111-b）、鴨川の東、聖護院の南南西の、南限は二条通に接し北限は丸太町通のやや南になる空間に「阿州ヤシキ地」とある。これは、本調査区と重なる部分がある可能性を有する。

この絵図には「○印御旅館 ▲印御屋敷」と凡例があるが、「阿州ヤシキ地」は、この“畧図”では例外的に、「ヤシキ」ではなく「ヤシキ地」と記されているとともに、○▲いずれの印も打たれていない。東方の南禅寺も阿波藩士の「旅館」となっていたくらいだから、

この「阿州ヤシキ地」は、阿波徳島藩の土地ではあっても建物がまだなかったのかもしれない。いずれにしても、京都守護の役職に就くために、御所の南西に所在している従来の阿波藩屋敷では収容しきれない数の藩士を、常駐させる土地が必要だったのだろう。同じく文久三年と記されている「文久三年御諸藩預場並御屯図」でも、聖護院の南西、熊野神社から丸太町通を挟んで南に「阿州」とある。

文久4年に改元があって元治となった元治元年（1864）の「大成京細見絵図」によれば将軍上洛後でも京屋敷を2箇所以上保有した藩は少なくないようだが〔鎌田1974〕、阿波藩も、洛中の屋敷だけでなく、鴨川の東に「阿波ヤシキ」とどめる。洛外の鴨東ではこのほかに、例えば土佐藩や尾張藩が屋敷を構えたことが、絵図だけでなく発掘調査でも確認されている〔浜崎ほか1995、伊藤・梶原2007〕。同じく元治元年の、七月十九日のいわゆる蛤御門の変による元治の大火の被災範囲を示した「元治大火図」でも、洛中の被災域に「アハ」と書かれた阿波藩の京屋敷が入っている一方で、鴨東にも「アハ」とあって、もう一つの京屋敷があったことがわかる。

その4年後の慶応4年（1968）の「京町御絵図細見大成」は（図111-c）、それまでの絵図と比べて鴨東の描画精度も向上しているが、この絵図では、洛中にあった阿波藩邸の地点に阿波を示す表記は見られない一方で、鴨東の徳島藩邸は「阿州屋敷」と書かれている。鴨東にある諸藩の藩邸の中では屈指の広さを持つようで、藩邸の形状も複雑化して描かれている。北縁を東西にはしる区画を見てみると、北の丸太町通までには富岡鉄斎の略図にもあった梅林を介している点は同様だが、東部だけわずかに北側に張り出していることもわかる。この「京町御絵図細見大成」でも、鉄斎の略図と同様に、かつての熊野神社は、丸太町通を参道とするかのように通りの東端に位置して、敷地は現在（図2）よりも南に広いが、その西南角の斜向かいが「阿州屋敷」の東北角となる。そして、この絵図に描かれた阿波藩京屋敷の周辺の地割りなどを現代のそれに照らすと、本調査区が屋敷の東北部分と重なる部分が大きいと思われる。

本調査区で検出した幕末期の遺構で阿波藩邸との関わりをうかがわせるのは、東北部の東西大溝SD2と、それを北限として東壁際を南にはしる南北溝である。掘り込み面が削平されていてSD2と南北溝との切り合いは不明だが、どちらの溝も、規模が大きく急角度で立ち上がり、水が常時流れたような痕跡はないことから、農耕用の水路ではなく土地区画用の堀と判断できる。両者は、埋め戻し土の方向、包含遺物の内容および下限年代、第3層との新旧関係、といった相違から、埋没時期では南北溝が新しいに違いないが、底

面の標高も同様なので、SD2が埋め立てられるまでには南北溝が掘削されていた可能性は否定できない。少なくとも、南北溝の北限の残存部がSD2の南肩とほぼ接するくらいで急激に立ち上がることから、南北溝は、SD2を意識して掘削されたとみなせよう。

出土遺物を見てみると、どちらの溝も幕末期の遺物を多量に含み、とくにSD2からは、大皿（I886）や大鉢（I895・I896）、組物となる大ぶりの鉢（I780・I781）など大所帯用と思われる陶器も出土している。その鉢には、文久4年（1864）と判断すべき年の正月の料理にかかわる旨の墨書があった（I781）。京都守衛を務める藩主の蜂須賀斉裕が京都で迎えた正月であり、多数の藩士が京都に来ていた可能性が高い。しかし、陶磁器でも瓦でも、徳島藩とのつながりが直接的に示される様相ではない。

SD2の埋土中に構築された瓦積み遺構SX6では、蜂須賀家の家紋瓦が瓦当面を上に向けて出土したが（I1002）、阿波藩との関わりを支持する瓦はこれ以外にない。むしろ、刻印をもつ瓦の多くは京都産を示すほか、家紋瓦には土佐藩と関わりを示すものもある（I1001）。陶磁器でも、徳島の城下町で特徴的に出土するしめなわ文をもつ陶器碗は、本調査区では確認できていない。大阪湾岸の遺跡からは甕などの大型品が出土する大谷焼も〔日下2002〕、出土していない。南北溝からは、珉平焼の皿・鉢が出土したが（I1017～I1019）、珉平焼は大谷焼の小物類と異なって京都でも散見できるので、この溝を阿波藩邸の堀と決定づけるほどの出土量ではない。むしろ、南北溝からは、安芸広島藩主の浅野家の家紋をもつ筒形碗が組物として出土したほどである（I1064・1065）。

鴨東に幕末に営まれた他藩の屋敷では、土佐藩邸でも尾張藩邸でも地元産の瓦を持ち込んでいることが出土品から判明していることに照らしても〔浜崎ほか1995、伊藤・梶原2007、内記2018〕、動産資料の産地という観点からは、本調査区が阿波藩邸に含まれていたことを積極的に支持できる状況ではない。それでも、不動産である遺構の、性格や年代、検出位置に照らせば、南北と東西の大溝が阿波徳島藩邸の区画ではなかったとすると、掘削された背景や効果を説明しがたい。また、溝に投棄された大皿や大鉢、大ぶりの組物の鉢が使用される環境は、農村である聖護院村の庶民生活からは理解しがたく、大きな屋敷を構える身分と居住者数に相応しいものである。以上のような遺構・遺物の状況に鑑み、SD2と南北溝を絵図を頼りにして解釈するならば、両者は阿波徳島藩邸の区画の堀だった、と考えたい。本調査区が阿波藩邸の東北部であれば、屋敷地は西および南にひろがるので、周辺での今後の発掘成果を注視する必要があるだろう。

(5) 瓦積み遺構 S X 6

空堀だった大溝 S D 2 の埋土中に築かれたこの特殊な遺構 S X 6 は、レンガをとまわらない一方、「青雲山」の刻印をもつ陶器が複数出土したので、構築時期は1860年代後半以降である。構成する瓦は、棧瓦片が多い一方で丸瓦の比率も低くなく、また、同種の瓦の中でも法量や部分形状に違いがあるので、一棟の建物のみから回収したはずはない。さらには、鬼瓦が多様なので、一つの屋敷地のみから回収されたとも考え難い。冠瓦や棟込瓦、大型の鱗瓦などは、社寺仏閣や裕福ないし高貴な身分の家の建造物に用いられたことを物語るから、洛中の社寺仏閣や家屋の取り壊しに際して、回収されたのかもしれない。

元の空堀の北壁際の杭列ラインを踏まえて構築された瓦積みは、上面が標高45.6mである。近くで同じ層準で検出された埋納遺構 S X 8・9 の底面標高よりも10cmほど低いので、旧地表からは20cmは低い位置になり、基底では70cmほど低くなる。基底は、S D 2 北壁の北側への拡幅時の底面と同程度の標高になることに加え、北面北側で瓦積み基底あたりのレベルから出土した大破片と上面出土破片との接合関係（表1：S X 6-145）から、拡幅は瓦積み作業用だったと思われる。瓦積みの隙間には乾いた泥土が堆積していることがあるのに対し、そうした泥土堆積は背後の裏込めにも前面の北壁との間の埋土にもほとんど見られなかったため、その作業空間は、瓦の積み上げ後には、水が溜まるような状況だったことになる。また、泥土に生じていたひび割れは、含水後の乾燥による収縮を物語るため、前面に溜まる雨水は都度々々に排水されたのだろう。瓦がやや北上がりに重ねられていたことも考慮すると、瓦積みは北側の往来を意識した作品と思われる。

この瓦積みは、瓦と瓦の間には、安定を図って小石などを噛ませるが空隙に意図的に粘土を詰めるようなことはしていないのに対して、南側の裏込めには、周囲に堆積が見られない粘土ブロックを瓦積みの東西よりも多く投入して、地盤強化を意図したようである。瓦積みの構築された大溝 S D 2 が徳島藩邸の堀ならば、そして瓦積みはまだ藩邸があった頃の所産ならば、敷地の境界にそうした造作を試みていることから、瓦積みのすぐ南側、東面の南端以南に、門のような入口を設けて、瓦積みをまたぐように通行していたのかもしれない。元治の大火で被災した洛中の屋敷の機能を引き継ぐべく、様変わりしたのだろうか。その一方で、棟端瓦が周到に配置されるなかで、鬼瓦は角を欠いた状態で瓦正面を土中に隠して据えている点に、瓦積みの製作者の特別な意図がうかがえる。この遺構は、屋敷地の東北部、鬼門に位置するが、「京町御絵図細見大成」では屋敷地の北のラインは東端が北側に不自然に張り出しているため、鬼門に関わる施設の一部とも考え得る。

明治初期の藩邸廃絶後に聖護院村の村民が周辺の藩邸跡の大建築から回収して構築した可能性も棄却はできないが、単に積み上げるだけならば、北壁を拡幅してまで当初の北壁ラインを踏襲せずに堀の中央付近に構築すればよい。いずれにせよ、この瓦積みは、含水で基盤が緩くなったことに因るのか、エリア3の鬼瓦（3-36）より東側の東北角では、鬼瓦の側面部の剥離や、北および東面での瓦の接合関係が示すように、下部が地盤沈下状に土砂流出し、瓦が割れながら崩壊していったと推測できる。その後は、水が溜まったことを示唆するような堆積は認められないので、埋め立てられたようである。

最後に、ほかの遺跡で検出された同種の遺構と比較しよう。瓦が累重する江戸時代の構造物として、近年に発掘調査された水戸城大手門や小田原城御用米曲輪で検出された、瓦が高密度で配される瓦（積）塀が知られる〔水戸市教育委員会2018, 小田原市2013〕。しかし、SX6は、地表下に瓦を隙間なく積み上げていることから、とくに機能面で異質である。あるいは、幕末の大坂や江戸には瓦積みの地下構造物の例がある〔大成1997〕。しかし、それらは一辺3mほどの方形ないし長方形の土坑の4壁面に平瓦を積み上げた穴蔵である。SX6は、多種多様な瓦を用いて屋外での往来を意識して積み上げており、とくに目的面で、それらとも性格が異なろう。この瓦積み遺構の目的や機能を深く理解するためには、構成遺物のさらなる情報抽出と遺構それ自体のさらなる分析が課題となる。

発掘および整理の調査では、長尾玲・西田陽子・柰佐和子が補佐し、新田宏子・河野葵・田中恒輝・大淵越亮・松本健宏の助力を得た。また、堆積について増田富士雄（本学名誉教授）、漆状有機質について桃井宏和（元興寺文化財研究所）、瓦について上原真人（本学名誉教授）・中原義史（福井県埋蔵文化財調査センター）、胞衣壺について赤松和佳（伊丹市教育委員会）・長佐古真也（東京都埋蔵文化財センター）、墨の保存に関して高妻洋成（奈良文化財研究所）、徳島の陶器について日下正剛（徳島県立徳島科学技術高等学校）・中村豊（徳島大学大学院社会産業理工学研究部）、I781の墨書の釈文について吉川真司（本学文学研究科）、瓦積み遺構について建石徹（奈良県地域振興部）・松尾信裕（大阪歴史博物館）・山岸常人（本学名誉教授）・山本雅和（京都市埋蔵文化財研究所）の各氏に、それぞれご教示をいただいた。記して御礼申し上げます。

本章の執筆は、第1・2章、第3章(1)、第6章(2)、第7章(1)・(3)~(5)を富井、第3章(2)、第4・5章、第6章(1)、第7章(2)を内記、第6章(3)を富井・内記が共同でおこない、全体を富井が調整した。